

源氏物語

御法

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）煩わづらって

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）始はじ終はつ一いつ煩わづらって

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」なほ春のましろき花と見ゆれどもとも

「#地から3字上げ」に死ぬまで悲しかりけり （晶子）

紫夫人はあの大病以後病身になって、どこということもなく始終一煩わづらっていた。たいした悪い容体になるのではなかったが、すぐれない、同じような不健康さが一年余りも続いた今では目に立って弱々しい姿になったことで、院は非常に心痛をしておいでになった。し

ばらくでもこの人の死んだあとのこの世にいるのは悲しいことであろうと知っておいでのになったし、夫人自身も人生の幸福には不足を感じるころとでもなく、気がかりな思いの残る子もない人なのであるから、こまやかに思い合つた過去を持っていて自分の先に欠けてしまうことは、院をどんなに不幸なお心持ちにすることであろうという点だけを心の中で物哀れに感じているのであつた。未来の世のためと思つて夫人は功德になることを多くしながらも、やはり出家して今後しばらくでも命のある間は仏勤めを十分にしたいということを始終院へお話しして、夫人は許しを得たがっているのであるが、院は御同意をあそばさなかつた。それは院御自身にも出家は希望していただけることなのであるが、夫人が熱心にそうしたいと言つている時に、御自身もいっしょにそれを断行しようかというお心もないではないものの、いったん仏道にはいった以上は、仮にもこの世を顧みることとはしたくないというお考えで、未来の世では一つの蓮華れんげの上に安住しようと約束しておいでのなる御夫婦であつても、この世での出家後の生活は全然区別を立てたものにせねばならぬという御本意から、こうして病弱な身体からだになつてしまつた夫人と、離れておしまいになることは気がかりで、悟道にはいつた新生活も内から破れていくことを院は恐れて躊躇ちゅうちよをしておいでのなるのである。結局は深い考えもなく簡単に出家してしまふ人よりも、道にはいることが遅れるわけである。院の同意されぬのを見ぬ顔にして尼になつてしまふことも見苦しいことであるし、自分の心にも満足のできぬことであろうからと思つて、この点で夫人は院をお恨めしく思つた。また自分自身も前生の罪の深いものであると不安がりもした。以前から自身の願果がんたしのために書かせてあつた千部の法華ほけ經の供

養を夫人はこの際することとした。自邸のような氣のする二条の院  
 でこの催しをすることにした。七僧の法服をはじめとして、以下の  
 僧へ等差をつけて纏頭てんとうにする僧服類をことに精撰して夫人は作らせ  
 てあつた。そのほかのすべてのことにも費用を惜しまぬ行き届いた  
 仏事の準備ができていたのである。内輪事うちわのように言っていたので、  
 院はみずから計画に参加あそばさなかつたが、女の催しでこれほど  
 手落ちなく事の運ばれることは珍しいほどに万事のとのつたのを  
 お知りになつて、仏道のほうにも深い理解のあることで夫人をうれ  
 しく思召した院は、御自身の手ではただ来賓を饗応きやうおうする座敷の装飾  
 その他のことだけをおさせになつた。音楽舞曲のほうのことは左大  
 将が好意で世話をした。宮中、東宮、院の后きさきの宮、中宮ちゅうぐうをはじめと  
 して、法事へ諸家からの誦經ずきやうの寄進、捧げ物なども大がかりなもの  
 が多いばかりでなく、この法会ほうえに志を現わしたいと願わない世人も  
 ない有様であつたから、華麗な仏会の式場が現出したわけである。  
 いつの間にもこの大部の経巻等を夫人が仕度したくしたかと参列者は皆驚い  
 た。長い年月を使った夫人の志に敬服したのである。花散里夫人はなちりみ、  
 明石夫人あかしなども来会した。南と東の戸をあけて夫人は聴聞の席にし  
 た。それは寝殿の西の内蔵うちくらであつた。北側の部屋へやに各夫人の席からを襖  
 子かみだけの隔てで設けてあつた。

三月の十日であつたから花の真盛りである。天気もうららかで暖  
 かい日なので、快くて御仏みほとけのおいになる世界に近い感じもするこ  
 とから、あさはかな人たちすらも思わず信仰にはいる機縁を得そう  
 であつた。薪たきぎこる（法華経ほけはいかにして得し薪たきぎこり菜摘み水一汲くみ  
 かくしてぞ得し）歌を同音に人々が唱える声の終わつて、今までと  
 反対に式場の静まりかえる気分は物哀れなものであるが、まして病

になつてゐる夫人の心は寂しくてならなかつた。明石夫人の所へ女王は三の宮にお持たせして次の歌を贈つた。

「#ここから2字下げ」

惜しからぬこの身ながらも限りとて薪尽きなんことの悲しさ

「#ここで字下げ終わり」

夫人の心細い気持ちに共鳴したふうのものを返しにしては、認識不足を人から譏られることであろうと思つて、明石はそれに触れなかつた。

「#ここから2字下げ」

薪こる思ひは今日を初めにてこの世に願ふ法ぞはるけき

「#ここで字下げ終わり」

経声も楽音も混じつておもしろく夜は明けていくのであつた。朝ぼらけの霧の間にはいろいろの花の木がなお女王の心を春に惹きとどめようと絢爛の美を競つていたし春の小鳥のさえずりも笛の声に劣らぬ気がして、身にしむこともおもしろさもきわまるかと思われるところに、「陵王」が舞われて、殿上の貴紳たちが舞い人へ肩から脱いで与える纏頭の衣服の色彩などもこの朝はただ美しくばかり思われた。親王がた、高官らも音楽に名のある人はみずからその芸を惜しまずこの場で見せて遊んだ。上から下まで来会者が歓楽に酔つてゐるのを見ても、余命の少ないことを知っている夫人の心だけは悲しかつた。

昨日は例外に終日起きていたせいか夫人は苦しがつて横になっていた。これまでこうしたおりごとに必ず集まって来て、音楽舞樂の何かの一役を勤める人たちの容貌ようぼうや風采ふうさいにも、その芸にも違あうことが今日で終わるのかというようなことばかりが思われる夫人であったから、平生は注意の払われない顔も目にとまって、少しのことも物哀れな気持ちあはれが誘われて来賓席を夫人は見渡しているのであった。まして四季の遊び事に競争心は必ずあっても、さすがに長くつちかわれた友情というもののあつた夫人たちに対しては、だれも永久に生き残る人はないであろうが、まず自分一人がこの中から消えていくのであると思われるのが女王の心に悲しかった。宴が終わつてそれぞれの夫人が帰つて行く時なども、生死の別れほど別れが惜しまれた。花散里夫人の所へ、

「#ここから2字下げ」

絶えぬべき御法みのりながらぞ頼まるる世々にと結ぶ中の契りを

「#ここで字下げ終わり」

と書いて紫の女王は送った。

「#ここから2字下げ」

結びおく契りは絶えじおほかたの残り少なき御法なりとも

「#ここで字下げ終わり」

これは返事である。供養に続いて不断の読経よききょう、懺法せんぽうなどもこの二条の院で院はおさせになるのであつた。祈祷きとうは常におさせになつて

いたが、たいした効果も見えないために、わざわざ遠い寺々などでさせることにもお計らいになった。

夏になると夫人は暑気のためにも死ぬようになることが多かった。病名も定まらぬ程度のものであるが、ただ衰弱がひどかった。堪えがたい苦しみをするというのでもない。女房たちの心にも、どうおなりになるのであろう、このまま危篤になっておしまいになるのではなからうかという不安が生じてきて、惜しく悲しくばかりそれらの人々も思つて歎いていた。こんなふうであつたから院は中宮を御所から二条の院へ退出おさせになった。当分東の対<sup>たい</sup>にお住みになるはずであつたから、いったんこの西の対へおはいりになることにより、お迎への儀式なども定例どおりに行なうながらも、この宮のまますお栄えになる未来の日までを見ずに終わるかというように夫人は悲しんだ。お供をして来た役人たちの姓名の披露<sup>ひろう</sup>される時にも、だれがいる、かれも来ていると、女王は深く耳にとまる気がした。高官たちも多数に来ていたのである。しばらくぶりに、実母子以上の愛情が相互にある二人の女性はしめやかに語り合つておいでになった。院がはいつておいでになったが、

「今夜は巢を追われた鳥のようでかわいそうな私はどこかで寝るところにしよう」

と言つて、他の室<sup>へ</sup>へ行つておしまいになった。起きていた夫人の姿を御覧になったことがおうれしそつであつたが、それはしいてよいように見てみずから慰めておいでになるのにすぎないのである。

「離れた所では、こちらからあちらへ歩いてお帰りになることがたいへんですし、私もまたあちらへ上がることはもうできなくなっていますから」

と夫人は言っていて、中宮はしばらくこの病室のあるほうの対におとどまりになることになった。明石夫人もこちらへ来てしんみりとした会話が日々かわされた。女王の心の中では頼みたく、言っておきたく思うことが幾つかあったが、賢そうに死後のことを今から言うように取られるのを恥じて、そうした問題には触れないのであった。ただ人生のはかなさをおおように、言葉少なに、しかも軽々しくはなしに話すのが、露骨に死期の近いことを言うよりもどんなに心細い気持ちでいるかを思わせた。女王は孫である宮たちを見ても、

「あなたがたがどうおなりになるだろうと、将来が見たいような気がしましたのも、私のようにつまらない者でいながら、知らず知らず命を惜しんでいたわけでしょうか」

こんなことを言って涙ぐむその顔が非常に美しかった。なぜそんなふうにはばかり感ぜられるのであるとお思いになって、中宮はお泣きになった。遺言のようにはせず話の中などで時々、

「長く私に仕えてくれました人たちの中で、たいした身寄りのないようなかわいそうなだれだれなどを、私がいなくなりましたあとで、あなたから気をつけてやってください」

などというほどにしか死後のことは言わないのである。

病室で読経の始められる日になってから中宮は東の対へお移りになった。三の宮は幾人もの宮様がたの中にことに愛らしいお姿でそばへ遊びにおいでになるのを、病苦の薄らいだ時などに女王は前へおすわらせて、女房たちの聞いていないのを見ると、

「私がいなくなりましたら、あなたは思い出してくださるでしょう

ね」

などと言うのであったが、宮は、

「恋しいでしょう。私は御所の陛下よりも中宮様よりもお祖母様が好きなんだ。いらっしやらなくなったら私は悲しいでしょうよ」

とお言いになつて、目をこすつて涙を紛らしておいでになる宮のお姿のおかわいたために、夫人は微笑をして見ているのであったが、目からは涙がこぼれた。

「あなたが大人におなりになつたら、ここへお住みになつて、この対の前の紅梅と桜とは花の時分に十分愛しておながめなさいね。時々はまだ仏様へもお供えになつてね」

と言うと、宮はおうなずきになりながら、夫人の顔を見守つておいでになつたが、涙が落ちそうになつたので、立つてお行きになつた。手もとでお育てしたために夫人はこの宮と姫君にお別れすることをことに悲しく思っていた。

ようやく秋が来て京の中も涼しくなると、紫夫人の病気も少し快くなつたようには見えるのであるが、どうかするとまたもとのような容体にかえるのであった。まだ身にしむほどの秋風が吹くのではないが、しめつぽく曇る心をばかり持つて夫人は日を送った。中宮は御所へおはいりにならず、もう少しここにおいでになるほうがよいことになるでしょうと女王はお言ひしたのであるが、死期を予感しているように賢がつて聞こえぬかと恥ずかしく思われもしたし、御所からの御催促の御使いのひつきりなしに来ることに御遠慮がされもして、おとどめすることも申さないでいるうちに、夫人がもう東の対へ出て来ることができないために、宮のほうからそちらへ行こうと中宮が仰せられた。

失礼であると思ひ心苦しく思ひながらも、お目にかからないでい

ることも悲しくて、西の対へ宮のお居間を設けさせて、夫人はなつかしい宮をお迎えしたのであった。夫人は非常に瘦やせてしまったが、かえってこれが上品で、最も艶えんな姿になったように思われた。これまであまりにはなやかであった盛りの際は、花などに比べて見られたものであるが、今は限りもない美の域に達して比較するものはもう地上になかった。その人が人生をはかなく、心細く思っている様子は、見るものの心をまでなんとなく悲しいものにさせた。

風がすごく吹く日の夕方に、前の庭をながめるために、夫人は起きて脇息きょじやくによりかかっているのを、おりからおいでになった院が御覧みになって、

「今日はそんなに起きていられるのですね。宮がおいでになる時だけに気分が晴れやかになるようですね」

とお言いになった。わずかに小康を得ているだけのことにも喜んでおいでになる院のお気持ち、夫人には心苦しくて、この命がいよいよ終わった時にはどれほどお悲しみになるであろうと思うと物哀れになって、

「#ここから2字下げ」

おくと見るほどぞはかなきともすれば風に乱るる萩はぎの上露

「#ここで字下げ終わり」

と言った。そのとおりに折れ返った萩の枝にとどまっているべくもない露にその命を比べたのであったし、時もまた秋風の立っている悲しい夕べであったから、

「#ここから2字下げ」

ややもせば消えを争ふ露の世に後れ先きだつ程へずもがな

「#ここで字下げ終わり」

とお言いになる院は、涙をお隠しになる余裕もないふうであり  
 になった。宮は、

「#ここから2字下げ」

秋風にしばし留まらぬ露の世をたれか草葉の上とのみ見ん

「#ここで字下げ終わり」

とお告げになるのであった。美貌の二女性が最も親しい家族として一堂に会することが快心のことであるにつけても、こうして千年を過ごす方法はないかと院はお思われになるのであったが、命は何の力でもとどめがたいものであるのは悲しい事実である。

「もうあちらへおいでなさいね。私は気分が悪くなってまいりました。病中と申してもあまり失礼ですから」

とって、女王は几帳を引き寄せて横になるのであったが、平生に超えて心細い様子であるために、どんな気持ちかとするのかと不安に思召して、宮は手をおとらえになって泣く泣く母君を見ておいでになったが、あの最後の歌の露が消えてゆくように終焉の迫ってきたことが明らかになったので、誦経の使いが寺々へ数も知らずつかわされ、院内は騒ぎ立った。以前も一度こんなふうになった夫人が蘇生した例のあることよって、物怪のすることかと院はお疑いになって、夜通しさまざまのことを試みさせられたが、かいもなくて

翌朝の未明にまったくこと切れてしまった。

宮もお居間にお帰りにならぬまままで臨終に立ち会えたことを、うれしくも悲しくも思召した。御良人も御娘も、これを人生の常としてだれも経験していることとお思いになれないで、言語に絶した悲しみ方をしておいでになるのである。二条の院の中は絶望して心を取り乱した人ばかりになった。院はお心の静めようもないふうで、大将を几帳のそばへお呼び寄せになって、

「もうだめになったことは確かなようだ。長く希望していた出家のことをこの際に遂げさせてやらないのは惨酷なように思われるが、加持に来ていた僧たちも読経の僧たちも皆することをやめて帰ったとしても、少しは残っているのもあるうから、この世の利益はもう必要がなくなつた今では冥土のお手引きに仏をお願いすることに、髪を切つて尼にすることをそのだれかにさせてくれ。相当な僧ではだれが残っているか」

こうお言いになる御様子にも、自制しておいでになるのであるうが、御血色もまったくないようで、涙がとまらず流れているお顔を、ごもつともなことであると大将は悲しく見た。

「物怪などが周囲の者を驚かすために、そうしたことをすることもあるのですが、絶望の御状態とはそうしたわけではないのでございましょうか。それでございましたら、ただ今承りましたことは結構なことでございますして、一日一夜でも道におはいりになつただけのことは報いられるでしょうが、しかもうまったくお亡くなりになつたのでございましたら、死後のお髪くの形を変えますだけのことがあの世の光にはならないでしょう。そして眼めで見る遺族たちの悲しみだけが増大することになるだけのことでございますから、私はい

かがかと存じます」

と大將は言つて、忌中をこの院でこもり続けようとする志のある僧たちの中から人選して念仏をさせることを命じたりすることなども皆この人がした。今日までだいそれた恋の心をいだくというのではなかつたが、どんな時にまたあの野分の夕べに隙見を遂げた程度にでも、また美しい継母が見られるのであるう、声すらも聞かれぬ運命で自分は終わるのであるうかというあこがれだけは念頭から去らなかつたものであるが、声だけは永遠に聞かせてもらえない宿命であつたとしても、遺憾になつた人にせよもう一度見る機会は今この時以外にあるわけもないと夕霧は思うと、声も立てて泣かれてしまふのであつた。

あるだけの女房は皆泣き騒いでいるのを、

「少し静かに、しばらく静かに」

と制するようにして、ものを言う間に几帳の垂れ絹を手で上げて見たが、まだほのぼのとしはじめたばかりの夜明けの光でよく見えないために、灯を近くへ寄せてうかがうと、麗人の女王は遺憾になつてなお美しくきれいで、その顔を大將がのぞいていても隠そうとする心はもう残つていなかった。院は、

「このとおりはまだなんら変わったところはないが、生きた人でないことだけはだれにもわかるではないか」

こうお言いになつて、袖で顔をおさえておいでになるのを見ては、大將もしきりに涙がこぼれて、目も見えないのを、しいて引きあけて、遺憾をながめることをしたがかえつて悲しみは増してくるばかりで、気も失うのではないかと夕霧はみずから思った。横にむぞうさになびけた髪が豊かで、清らかで、少しのもつれもなくつやつや

として美しい。明るい灯のもとに顔の色は白く光るようで、生きた佳人の、人から見られぬよう見られぬようと願う心の休みなく働いているのよりも、己おのれをあやぶむことも、他を疑うこともない純粹なふうで寝ている美女の魅力は大きかった。少々の欠点があつてもなお夕霧の心は恍惚こうつとしていたであろうが、見れば見るほど故人こじんの美貌うの完全であることが認識されるばかりであつたから、この自分を離れてしまふような気持ちのする心はそのままこの遺骸にとどまつてしまふのではないかというような奇妙なことも夕霧は思った。

長く仕えていた女房の中に意識の確かにあるような者はない状態であつたから、院は非常に悲しい気持ちをしいておしずめになつて、遺骸の始末などをあそばすのであつた。昔も愛人や妻の死におあいになつた経験はおありになつても、まだこんなことまでも手ずから世話あそばされたことはなかつたから、自身としては空前絶後の悲しみであると見ておいでになるのであつた。紫の女王の遺骸はその日のうちに納棺された。どれほど愛すればとて遺骸は遺骸として葬送せねばならぬのが人生の悲しい掟おきてであつた。

はるばると広い野にあいた場所がないほどにも葬送の人の集まつたいかめしい儀式であつたが、送られた人ははかない煙になつて間もなく立ち昇のぼつてしまつた。当然のことではあるがこれをも人々は悲しんだ。空を歩いているような気持ちで院は人によりかかつて足を運んでおいでになるのを見ては、あの高貴な御身分でと低級な頭のものさえも御同情して泣かない者はなかつた。遺骸の供をして来た女房たちはまして夢の中に彷徨ほうつしているような気持ちになつていて、車から転ころび落ちそうに見えるのを従者たちは扱あいかねていた。

昔、大将の母君あまいの葵夫人の葬送の夜明けのことを院は思い出してお

いでになつたが、その時はなお月の形が明瞭に見えた御記憶があつた。今は心も目も暗闇くらやみのうちのよつな気のおそばされる院でありなつた。女王は十四日に薨去こうきょしたのであつて、これは十五日の夜明けのことである。

はなやかな日が上つて、野原一面に置き渡した露がすみずみまできらめく所をお通りになりながら、院はいつそうこの時人生というものをおいとわしく悲しく思召して、残つた自分の命といつても、もう長くは保ちえられるものではないであらうから、こうした苦しみを見る時に、昔からの希望であつた出家も遂げたいとしきりにお思われになるのであつたが、気の弱さを史上に残すことが顧慮されて、当分はこのままで忍ぶほかはないと御決心はおそばされても、なお胸の悲しみはせき上がつてくるのであつた。

夕霧も、紫夫人の忌中を二条院にこもることにして、かりそめにも出かけるようなことはなく、明け暮れ院のおそばにいて、心苦ししい御一悲歎ひたんをもつともなことでであると御同情をして見ながら、いろいろと、お慰めの言葉を尽くしていた。

風が野分のわかふうに吹く夕方に、大將は昔のことを思い出して、ほのかにだけは見ることができた人だつたのにと、過ぎ去つた秋の夕べが恋しく思われるとともに、また麗人の終わりの姿を見て夢のようであつたことも人知れず忍んでいると非常に悲しくなるのを、人目に怪しまれまいとする紛らわしには、阿弥陀あみだぶつ仏、阿弥陀仏と唱えて数珠じゆずの緒を繰ることをした。涙の玉も混ぜてである。

「#ここから2字下げ」

いにしへの秋の夕べの恋しきに今はと見えし明け暗くれの夢

「#ここで字下げ終わり」

この夢の酔いごころは永遠の悲しみの瀬を大将の胸に残したようである。りっぱな僧たちを集めて忌籠りの念仏をさせることは普通であるが、なおそのほかに法華経をも院がお読ませになっているのも両様の悲哀を招く声のように聞こえた。

寝ても起きても涙のかわくまもなく目はいつも霧におおわれたお気持ちで院は日を送っておいでになった。一生を回顧してごらんになると、鏡に写る容貌をはじめとして恵まれた人物として世に登場したことは確かであるが、幼年時代からすでに人生の無常を悟らせられるようなことが次々周囲に起こって、これによって仏道へはいれと仏の促すのをして知らぬふう<sup>つが</sup>に世の中から離脱することのできなかつたために、過去にも未来にもこんなことがあるとは思われぬ大なる悲しみを体験させられることになった、これほど悲しみのしずめがたい心を持っている間は、仏の道にもはいることは不可能であろうとみずからおあやぶまれになる院は、この心持ちを少しゆるやかにされたいと阿弥陀仏を念じておいでになった。

忌中の院をお見舞いになるかたがたは宮中をはじめとして、皆形式的ではなくたびたびの使いをおつかわしになるのであった。仏道から言えばいっさいのことは院の御念頭から除けられてよいわけはあるが、さすがに悲しみにほけたふうには人から見られたくない、こうした一生の末になって妻を失った悲しみに堪えないで入道したという名の残ることだけははばかっておいでになるために、見えぬ拘束を受けて自由に出家のおできならぬこともこのごろの悲しみに添った一つの悲しみになった。

太政大臣は人が不幸であるおりに傍観していられぬ性質であったから、紫夫人というような不世出の佳人の突然に死んだことを惜しがり、院に御同情してたびたび見舞いの手紙をお送りした。昔大將の母君が亡なくなったのも秋のこのごろのことであつたと思ひ出して、大臣は当時の悲しみもまた心の中に湧わき出してくるのであつたが、その時に妹の死を惜しんだ人たちも多くすでに故人になつている、先立つということも、後おくれるということもたいした差のない時間のことではないかなどと考えて、ものしんみりと感ぜられる夕方に庭をながめていた。息子むすこの蔵人くらひん少將せうしやうを使いにして六条院へ手紙を持たせてあげた。人生の悲しみをいろいろと言つて、古い親友をお慰めする長い文章の書かれてある端のほうに、

「#ここから2字下げ」

古いにしへへの秋さへ今のこちして濡ぬれにし袖そでに露ぞ置き添そふ

「#ここで字下げ終わり」

という歌もあつた。ちょうど院も、過去になつたいろいろな場合を思ひ出しておいでになる時であつたから、大臣の言う昔の秋も、早く死別した妻のことも皆一つの恋しさになつて流れてくる涙の中で返事をお書きになるのであつた。

「#ここから2字下げ」

露けさは昔今とも思ほえずおほかた秋の世こそつらけれ

「#ここで字下げ終わり」

悲しいことだけを書いておいては、あまりに弱いことであると批難するであろう、大臣の性格を知っておいでになる院は御注意をみずからあそばして、たびたび厚意のある御慰問を受けているといって、悦びの言葉などもお書き加えになるのをお忘れにならなかった。

薄墨色を着ると葵夫人の死んだ時にお歌いになったその喪服よりも、今度は少し濃い色のを着て悲しみを示された。

どんな幸運に恵まれていても、理由のない世間の嫉妬を受けることがあるものであるし、またその人自身にも驕慢な心ができてそのために人の苦しめられる人もあるのであるが、紫の女王という人は不思議なほどの人気があつて、何につけても渴仰され、ほめられる唯一の瑕のない珠のような存在であり、善良な貴女であつたのであるから、たいした関係のない世間一般の人たちまでも今年の秋は虫の声にも、風の音にも、また得がたいこの世の宝を失つた悲しみに誘われて、涙を落とさない者はないのである。ましてほのかにでも女王を見たことのある人たちにとって、女王を失つた悲しみはどうてい忘られるものではなかった。女王が親しく手もとに使っていた女房たちで、たとい少しの間にもせよ夫人に後れて生き残っている命を恨めしいと思つて尼になる者もあつた。尼になつてまだ満足ができずに遠く世と離れた田舎へ住居を移そうとする者もあつた。

冷泉院の後の宮も御同情のこもるお手紙を始終お寄せになつた。

故人を忍ぶことをお書きになつた奥に、

「#ここから2字下げ」

枯れはつる野べをうしとや亡き人の秋に心をとどめざりけん

「#ここから1字下げ」

はじめてわかった気もいたします。

「#ここで字下げ終わり」

とお書きになったものを、院はお悲しみの中でも繰り返してお読みになって、いつまでもながめておいでになった。趣味の洗練された方として、思うことも書きかわしうる方はまだお一人この方があるとお思いになって、院は少しうれいの紛れる気持ちをお覚えになりながら涙の流れ続けるためにお筆が進まなかった。

「#ここから2字下げ」

昇りにし雲井ながらも振り返り見よわれ飽きはてぬ常ならぬ世に

「#ここで字下げ終わり」

お返事をお書き了えになったあとでもなお院は見えぬものに見入っておいでになった。

お気持ちを強くあそばすことができずに悲しみにぼけたところが  
あるようにみずからお認めになる院はもとの夫人の居間のほうにばかりおいでになった。仏像をお据えになった前に少数の女房だけを侍らせて、ゆるやかに仏勤めをあそばす院でおありになった。千年もごいっしょにいたく思召した最愛の夫人も死に奪われておしまいにならねばならなかったことがお気の毒である。もうこの世にはなんらの執着も残らぬことを自覚あそばされて、遁世の人とおなりになるお用意ばかりを院はしておいでになるのであるが、人聞きといふことでまた躊躇しておいでになるのはよくないことかもしれない。

夫人の法事についても順序立てて人へお命じになることは悲しみに疲れておできにならない院に代わって大將がすべて指図さしずをしていた。自分の命も今日が終わりになるのであろうとお考えられになる日も多かったが、結局四十九日の忌いみの明けけるのを御覧ごらんになることになったかと院は夢のように思召した。中宮ちゆうぐうなども紫夫人を忘れる時なく慕むっておいでのになった。

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：柳沢成雄

2003年10月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

まぼろし

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）御簾みすの

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）御一風采ふうさいの

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」大空の日の光さへつくる世のやうやく

「#地から3字上げ」近きこちこそすれ （晶子）

春の光を御覧になっても、六条院の暗いお気持ちみぢが改まるものでもないのに、表へは新年の賀を申し入れる人たちが続いて参入するのを院はお加減かへんが悪いようにお見せみせになって、御簾みすの中なかにばかりおいでいになった。兵部卿ひょうぶきやうの宮みやのおいでいになった時にだけはお居間いまのほ

うでお会いになろうという気持ちにおなりになって、まず歌をお取り次がせになった。

「#ここから2字下げ」

わが宿は花もてはやす人もなし何にか春の訪たづねきつらん

「#ここで字下げ終わり」

宮は涙ぐんでおしまいになって、

「#ここから2字下げ」

香をとめて来つるかひなくおほかたの花の便たよりと言ひやなすべき

「#ここで字下げ終わり」

と返しを申された。紅梅の木の下を通って対のほうへ歩いておいでになる宮の、御一風采ふうさいのなつかしいのを御覧になっても、今ではこの人以外に紅梅の美と並べてよい人も存在しなくなったのであると院はお思いになった。花はほのかに開いて美しい紅を見せていた。音楽の遊びをされるのでもなく、常の新春に変わったことばかりであった。

女房なども長く夫人に仕えた者はまだ喪服の濃い色を改めずにいさて、なお醒さましがたい悲しみにおぼれていた。他の夫人たちの所へお出かけになることがなくて、院が常にこちらでばかり暮らしておいでになることだけを皆慰めにしていた。これまで執心がおありになるのでもなく、時々情人らしくお扱いになった人たちに対しては、独居をあそばすようになってからはかえって冷淡におなりになって、

他の人たちへのごとく主従としてお親しみになるだけで、夜もだれかれと幾人も寢室へ侍ら<sup>はべ</sup>せて、御退屈さから夫人の在世中の話などをあそばしたりした。次第に恋愛から超越しておしまいになった院は、まだこうした純粋なお心になれなかった時代に、怨<sup>うら</sup>めしそうな様子がおりおり夫人に見えたことなどもお思い出しになって、なぜ戯れ事にせよ、また運命がしからしめたにせよ、そうした誘惑に自分が打ち勝ちえないで、あの人を苦しめたのであろう、聡明<sup>そうめい</sup>な人であつたから、十分の理解は持つていながらも、あくまで怨<sup>うら</sup>みきるということはなくて、どの人と交渉の生じた場合にも一度ずつはどうなることかと不安におびえたふうが見えたと院は回顧あそばされて、そうした煩悶<sup>はんもん</sup>を女王<sup>にょおう</sup>にさせたことを後悔される思いが胸からあふれ出るようにお感じになるのであつた。

そのころのことを見ていた人で、今も残っている女房は少しずつ当時の夫人の様子を話し出しもした。入道の宮が六条院へ入嫁になつた時には、なんら色に出すことをしなかつた夫人であつたが、事に触れて見えた味気ないという気持ちの哀れであつた中にも、雪の降つた夜明けに、戸のあけられるまでを待つ間、身内も冷え切るように思われ、はげしい荒れ模様の空も自分を悲しくしたのであつたが、はいつて行くと、なごやかな気分を見せて迎えながらも、袖<sup>そで</sup>がひどく涙でぬれていたのを、隠そつと努めた夫人の美質などを、院は夜通し思い続けておいでになつて、夢にでも十分にその姿を見ることができるとあろうか、どんな世にまためぐり合うことができるのであろうかとばかりあこがれておいでになつた。夜明けに部屋<sup>へや</sup>へさがつて行く女房なのであろうが、

「まあずいぶん降つた雪」

と縁側で言うのが聞こえた。その昔の時のままなようなお気持ち  
がされるのであったが、夫人は御横にいなかった。なんという寂し  
いことであろうと院は思召した。

「#ここから2字下げ」

うき世にはゆき消えなんと思ひつつ思ひのほかになほぞ程経る

「#ここで字下げ終わり」

こうした時を何かによつて紛らわしておいでになる院は、すぐに  
召し寄せて手水をお使いになった。女房たちは埋んでおいた火を起  
こし出して火鉢をおそばへおあげするのであった。中納言の君や中  
將の君はお居間に来てお話し相手を勤めた。

「独り寝がなんともいえないほど寂しく思われる夜だった。これ  
も安んじていられる自分なのに、つまらぬ関係をたくさんに作つて  
きたものだ」

とめいったふうには院は言っておいでになった。自分までもここを  
捨てて行ったなら、この人たちはどんなに憂鬱になるだろうなどと  
お思いになつて、居間の中がお見渡されになるのであった。目だた  
ぬように仏勤めをあそばして、経をお読みになる声を聞いていては、  
ただの場合でも涙の流れるものであるのに、まして院のお悲しみに  
深い同情を寄せている女房たちであつたから、痛切においたましく  
思われた。

「この世のことではあまり不足を感じなくともよいはずの身分に生  
まれていながら、だれよりも不幸であると思わなければならぬこと  
が絶えず周囲に起こってくる。これは自分に人生のはかなさを体験

すべく仏がお計らいになるのだと思われる。それをしいて知らぬ顔にしてきたものだから、こうして命の終わりも近い時になって、最も悲しい経験をすることになったのだ。これで負って来た業も果たせた気がして、安らかな境地が自分の心にできて、執着の残るものもない私だが、あなたたちと以前よりも、より親密にして数か月を暮らしてきたことで、あなたたちとの別れにもう一度心が乱れないかという不安が自分にできてきた。弱い私の心じゃないか」

とお言いになって、目をおおさえになるふうをしてお紛らしにしろうとするにもかかわらず、院のお涙のこぼれるのを見る女房たちは、ましてとめどもなく泣かれるのであった。そうしていよいよ院が見捨てておしまいになることの歎かわしさをだれも訴えたいのであるが、言い出しうる者もなかった。皆むせ返っていたからである。こんなふうに歎きに明かしておしまいになる朝、物思いに一日をお暮らしになった夕方などのしんみりとした時間には、愛人関係が以前あつた人たちを居間に集めて語り合うのを慰めにあそばす院でありになった。

中將の君というのはまだ小さい時から夫人に仕えてきた人であったが、院はいつとなく無関心でありえなくおなりになったか情人にしておしまいになったのを、彼女は夫人に対して自責の念に堪えないで、院の愛の手を避けるようにはかりしていたが、夫人の歿後は愛欲を離れて、だれよりもすぐれて故人の愛していた女房であつたとお思われになることによつて、形見と見てこの人に院は愛を持つておいでになった。性質も容貌も皆よくて、喪服姿がうない松に似た可憐な女である。親しくない女房には顔もあまりお見せにならないこのごろの院でありになった。お近しくした高官たちとか、御

兄弟の宮がたとかは始終お訪ねされるのであるがあまり御面会になることもない。人と違っている時だけはよく自制して醜態を見せまいとしても、長く悲しみに浸っていてぼけた自分がどんなあやまちを客の前でしてしまうかもしれぬ、そうしたことがのちに語り伝えられることはいやである、歎き疲れて人に逢うこともできないと言われるのも、恥ずかしいことは同じであるが、話だけで想像されることよりも實際人の目で見られたことの噂になるほうが迷惑になるとお思いになって、大将などにも御簾越しでしかお逢いにならなかった。こんなふうには悲歎に心が顛倒したように人が言うであろう間を静かに過ごしてから、と出家の日をお思いになって、まだ人間の中をお去りになることをされないのであった。

他の夫人たちの所へ稀においでになることがあっても、そこでその人々が紫の女王でないことから新しいお悲しみが心に湧いて涙ばかりが流れるのをみずからお恥じになってどちらへももう出かけられることがなくなっていた。中宮は御所へお入れになったのであるが、三の宮だけは寂しさのお慰めにここへとどめてお置きになった。

「お祖母様がおっしゃったから」

とお言いになって、宮は対の前の紅梅と桜を責任があるように見まわっておいでになるのを、院は哀れに思召した。

二月になると、花の木が盛りなもの、まだ早いのも、梢が皆一霞んで見える中に、女王の形見の紅梅に鶯が来てはなやかに啼くのを、院は縁へ出てながめておいでになった。

「#ここから2字下げ」

植ゑて見し花の主人もなき宿に知らず顔にて来居る鶯

「#ここで字下げ終わり」

春の空を仰いで吐息をおつかれになった。

春が深くなつていくにしたがつて庭の木立ちが昔の色を皆備えてお胸を痛くするばかりであつたから、この世でもないほどに遠くて、鳥の声もせぬ山奥へはいりたくばかり院はお思いになるのであつた。山吹の咲き誇つた盛りの花も涙のような露にぬれているところばかりがお目についた。よそでは一重桜が散り、八重の盛りが過ぎて樺桜が咲き、藤はそのあとで紫を伸べるのが春の順序であるが、この庭は花の遅速を巧みに利用して、散り過ぎた梢はあとの花が隠してしまうように女王がしてあつたために、いつまでも光る春がとどまっているようなのである。若宮が、

「私の桜がとうとう咲いた。いつまでも散らしたくないな。木のまわりに几帳を立てて、切れを垂れておいたら風も寄つて来ないだろうと思う」

たいした発明をされたようにこう言つておいでになる顔のお美しさに院も微笑をあそばした。

「覆うばかりの袖がほしいと歌つた人よりも宮の考えのほうが合理的だね」

などとお言いになつて、この宮だけを相手にして院は暮らしておいでになるのであつた。

「あなたと仲よくしていることも、もう長くはないのですよ。私の命はまだあつても、絶対にお逢いすることができなくなるのです」

とまた院は涙ぐんでお言いになるのを、宮は悲しくお思いになつ

て、

「お祖母様のおっしやったことと同じことをなぜおっしやるの、不吉ですよ、お祖父様」

と言つて、顔を下に伏せて御自身の袖などを手で引き出したりして涙を宮はお隠しになっていた。欄干の隅の所へ院はおよりかかりになつて、庭をも御簾の中をもながめておいでになつた。女房の中にはまだ喪服を着ているのがあつた。普通の服を着ているのも、皆一派手な色彩を避けていた。院御自身の直衣も色は普通のものであるが、わざとじみな無地なのを着けておいでになるのであつた。座敷の中の装飾なども簡素になつていて目に寂しい。

「#ここから2字下げ」

今はとて荒しやはてん亡き人の心とどめし春の垣根を

「#ここで字下げ終わり」

とお歌いになる院は真心からお悲しそうであつた。

徒然さに院は入道の宮の御殿へおいでになつた。若宮も人に抱かれて従つておいでになつて、こちらの若宮といつしよに走りまわつてお遊びになるのであつた。花の木をおいたわりになる責任もお忘れになるくらいにおふざけになつた。

尼宮は仏前で経を読んでおいでになつた。たいした信仰によつておはいりになつた道でもなかつたが、人生になんらの不安もお感じになるものもなくて、余裕のある御身分であるために、専心に仏勤めがおできになり、その他のことにいつさい無関心でおいでになる御様子に見えるのを院はうらやましく思召した。こうした浅い動機

で仏の御一弟子でしになられた方にも劣る自分であると残念にお思いになるのである。闕伽棚あかだなに置かれた花に夕日が照って美しいのを御覧になって、

「春の好きだった人の亡くなってからは、庭の花も情けなくばかり見えるのですが、こうした仏にお供えしてある花には好意が持たれますよ」

とお言いになった院は、また、

「対の前の山吹やまぶきはほかでは見られない山吹ですよ、花の房ふさなどがずいぶん大きいのですよ。品よく咲こうなどは思っていない花と見えますが、にぎやかな派手はでなほうではすぐれたものです。植えた人がいない春だとも知らずに例年よりもまたきれいに咲いているのが哀れに思われます」

と仰せられた。宮はお返辞に、

「谷には春も」（光なき谷には春もよそなれば咲きとく散るもの思もひもなし）

とお言いになるのであった。言うこともほかにありそうなものを自分の悲しみを嘲笑ちやうするにあたるようなことをお言いになるとはと院は心に思召おぼしめしながらも、紫の女王はこうした思いやりのないことを言い出すこともすることも最後まで絶対でない女性であったと、少女時代からの故夫人のことを追想してごらんになると、その時はこう、あの時はこうと、才氣と貴女らしい匂においの多かつた性格、容姿、言った言葉などばかりがお思われになって、涙のこぼれてきたのを院はお恥じになった。

夕方の霞かすみが物をおぼろに見せる美しい時間であったから、院はそこからすぐ明石夫人あかしの住居すまいをお訪ねたずになった。久しくおいでがなか

ったのであるから突然なことに夫人は驚いたのであったが、すぐに感じよく席を設けてお迎えするようなところに、この人のだれよりも<sup>れいり</sup>怜悯な性質は見えるものの、また故人はこうでもない高雅な上品さがあつたと思ひ比べられては、その幻ばかりが追われるようになりになって、悲しみがさらにまさってくるのを、院は御自身ながらどうすれば慰む心であろうと苦しく思召した。こちらでは落ち着いて昔の話などを院はしておいでになった。

「人をあまりに愛することは結果のよくないものだ、私は昔から知っていたし、またそのほかのことにも執着心がこの世に残らぬようにと心がけていて、一時逆境に置かれたころなどは、いろいろな理想もこの世に持ったと言つても、それは実現性のないことにきめて、どんな野山の果てで自分の命を果たしてしまつても惜しいものもないとだけは思えたものだが、年がいつて死期が近づくころになつて、いろいろな係累をふやすことになつたために、今まで出家も遂げることができないでいるのが自分で齒がゆくてならない」

などと院はお言いになつて、夫人と死別したばかりの悲しみでないうように言つておいでになるが、明石の心には院の御内心は何によつて苦しんでおいでになるかはよくわかつていて、道理なことであるとおいたわしく思つた。

「他人から見まして、この世に未練の残るわけもないような人も、その人自身には捨てられない<sup>ほだし</sup>絆が幾つもあるものなのでございますから、ましてあなた様などがどうしてそう楽々と<sup>とんせい</sup>遁世の道をおとりになることがおできになれましょう。深い考えもなく出家をいたす者はあとで見苦しいことも起こして、かえつてそうならねばよかつたように世間から申されることもあるものでございますから、道に

おはいりになりますことをお急ぎにならずにおいでになりますのが、あとでごりつぱな悟りをお得えになる過程になるかと存ぞぜられます。

昔の例を承りましても、突然心の傷つけられますような悲しみにありますとか、大きな失望をいたしましたとか申すような時に厭えんせい世的せいにいるではございませんか。もうしばらく御一発心ほつしんをお延のばしになりまして、宮様がたも大人におなりになり御不安なことなどはいっさいないころまで、このままで御家族に動揺をお与えあそばさないようにしていただけましたらうれしかろうと存ぞじます」

などとまじめに言っている明石に院は好感をお持ちになることができた。

「そんなになるまで待っていることが思慮深いのだつたら、それよりもあさはかなほうがましなようだね」

などとお言いになって、昔から悲しいことに多くあつておいでになった話もあそばされた。

「昔、中宮がお崩かくれになった春には、桜が咲いたのを見ても、『野への桜し心あらば』(深草の野への桜し心あらば今年ばかりは墨染めに咲け)と思われたものですよ。それはごりつぱな方であることが小さいころから心にしみ込んでいたために、お崩かくれになった時にも私がだれよりもすぐれて悲しかったのです。恋愛の深さ浅さと故人を惜しむ情とは別なものだと思ふ。長く同棲どうせいした妻に別れて、病的にまで悲しんで、その人が忘れられないのも恋愛の点ばかりでそのうなではありませんよ。少女時代から自分が育て上げてきた人といっしょに年をとってしまった今になって、一人だけが残されて一方が亡なくなってしまったということが、みずから憐あわれまれもし、故人

を悲しまれもして、その時あの時と、あの人の感情の美しさの現われた時とかあの人の芸術とか複雑にいろいろなことが思わせられるために、深い哀愁に落ちていくのです」

などと、夜がふけるまで、昔をも今をも話しておいでになって、このまま明石夫人のところまで泊まっていってもよい夜であるがとはお思ひになりながら院のお帰りになるのを見て、明石夫人は一抹いちまつの物足りなさを感じたに違いない。院も御自身のことではあるが、怪しく変わってしまった心であるとお思ひになった。

お帰りになるとまた仏勤めをあそばして夜中ごろに昼のお居間でかりぶし仮臥のようにしておやす寝みになった。

翌朝早く院は明石夫人あかしへ手紙をお書きになった。

「#ここから2字下げ」

泣く泣くも帰りにしかな飯の世はいづくもつひのとこよならぬに

「#ここで字下げ終わり」

という歌であった。昨夜ゆうべの院のお仕打ちは恨めしかったのであるが、こんなふうには別人であるように悲しみに疲れておいでになる御様子を思つては自身のことはさしおいて明石は涙ぐまれるのであつた。

「#ここから2字下げ」

かりがゐし苗代水の絶えしよりうつりし花の影をだに見ず

「#ここで字下げ終わり」

いつも変わらぬ明石の返歌の美しい字を御覧になっても、この人を無礼な闖入者ちんちゅうしゃのように初めは思っていた女王が、近年になって互いに友情を持ち合うようになり、自尊心を傷つけない程度の交わりをしていたのであるが、明石はそれとも気がつかなかったであろうなどとも院は来し方のことを思っておいでになった。お寂しくてならぬ時にだけは明石夫人のその場合のような簡単な訪問を夫人たちの所へあそばされる院でおありになった。妻妾さいしやくと夜を共にあそばすようなことはどこでもないのである。

夏の更衣こうちがえに花散里夫人はなぢりふじんからお召し物が奉られた。

「#ここから2字下げ」

夏ごろもたちかへてける今日ばかり古き思ひもすすみやはする

「#ここで字下げ終わり」

この歌が添えられてあった。お返事、

「#ここから2字下げ」

羽衣のうすきにかはる今日よりは空蝉うつせみの世ぞいとど悲しき

「#ここで字下げ終わり」

賀茂かも祭りの日につれづれで、

「今日は祭りの行列を見に出ようと思つて世間ではだれも興奮をしているだろう」

こんなことをお言いになって、賀茂の社前の光景を目に描いておいでになった。

「女房たちは皆寂しいだろう、実家のほうへ行つて、そこから見物に出ればいい」

などとも言つておいでになつた。中将の君が東の座敷でうたた寝しているそばへ院が寄つてお行きになると、美しい小柄な中将の君は起き上がった。赤くなっている顔を恥じて隠しているが、少し癢づいてふくれた髪髪の横に見えるのがはなやかに見えた。紅の黄がちな色の袴はかまをはき、単衣ひとえも萱草色かんぞうを着て、濃い鈍色にびに黒を重ねた喪服に、裳もや唐衣からぎぬも脱いでいたのを、中将はにわかにわかに上へ引き掛けたりしていた。葵あおいの横横に置かれてあつたのを院は手にお取りになつて、「何という草草だつたかね。名も忘れてしまったよ」とお言いになると、

「#ここから2字下げ」

さもこそは寄るべの水水に水草みくすゐあめ今日のかざしよ名さへ忘るる

「#ここで字下げ終わり」

と恥じらいながら中将は言った。そうであつたと哀れにお思いになつて、

「#ここから2字下げ」

おほかたは思ひ捨ててし世なれどもあふひはなほやつみおかすべき

「#ここで字下げ終わり」

こんなこともお言いになり、なおこの人にだけは聖ひじりの心持ちにもなれず、行爲もお見せになることはおできにならないのであつた。

五月雨の薄暗い世界の中では物思いを続けておいでになるばかり

の院は、寂しかったが十幾日かの月がふと雲間から現われた珍しい夜に大将が御前に来ていた。花一橋かひしほの木が月の光のもとにあざやかに立って薫かおりも風に付いておりおりはいつてきた。「千世をならせる」というこれと深い関係の杜鵑ほととぎすが啼なけばよいと待っているうちに、にわかには雲が湧わき出してきて、はげしく雨の降るのに添って吹き出した風のために、燈籠とうろうの灯ひも消えそうになって、空の暗さが深く思われる時に「蕭蕭暗雨打窓声へせうせうあんうまどをうつこゑ」などと、珍しい詩ではないが院のお歌いになる美声をお聞きすると、恋を解する女に聞かしむべきものであると惜しまれた。

「独身生活というものは、私一人が経験しているものでもないが、怪しいほど寂しいものだ。山へはいつてしまいう前にこうして習慣をつけておくことは非常によいことだと思う」

などと院はお言いになって、

「女房たち、ここへ菓子でも出すがよい。男たちに命じるほどのことでもないから」

などとも気をつけておいでになった。夕霧は空をおながめになる院の寂しい御表情を見ていて、こんなふうについてまでもいつまでも故人を悲しんでおいでになっては、出家をされても透徹した信仰におはいりになることはむずかしくはないかと思っていた。ほのかな隙見すきみをただけの面影すら忘れられないのであるからまして院が女王のためのお悲しみの深さは道理至極であると言わねばならぬと同情も申ししていた。

「昨日か今日のことのように思っておりますうちに御一周忌にももう近づいてまいります。御法事はどんなふうにあそばすおつもりで

「ございますか」

と大将が言うと、

「何も普通と違ったことをしようと思っていない。女王が作らせたままになっている極楽の曼陀羅まんだらをその節に供養すればいいことと思う。書いておいた経もたくさんあるはずなのだが、某僧都は故人からどうするかをよく聞いてあるようだから、それに加えてすることも皆僧都の意見によることにしようと思う」

と院は仰せられた。

「御自身の御法要についてのことまでもお仕度したくをあそばしておかれましたことは、お考え深いことでしたが、お二方の上で申しますと、この世での御縁は短かったのですから、せめて形見になる人をお残しくだすつたらと存じますと残念でございます」

「しかし子は早く死なずに現存している妻のほうにも少なかつたのだからね。私自身が子は少なくしか持てない宿命だったのだから。あなたによつて子孫を広げてもらえばいい」

などと院はお言いになるのであつて、何につけても忍びがたい悲しみの外へ誘い出されることをお恐れになり、故人のこともあまりお話しにならぬうちに、「いにしへのこと語らへば時鳥ときとらすいかに知りてか古声ふるこゑに啼なく」と言いたいような杜鵑ほととぎすが啼いた。待たれていた声なのであるが、

「#ここから2字下げ」

亡なき人を忍ぶる宵よひの村雨むらぬめに濡ぬれてや来つる山ほととぎす

「#ここで字下げ終わり」

前よりもいっそう悲しいまなざしで空を院はおながめになった。  
夕霧は、

「#ここから2字下げ」

郭公君ぼくとまきすにつてなん古さとの花一橋たちばなは今盛りぞと

「#ここで字下げ終わり」

と歌った。この時に女房たちもそれぞれ歌を詠よんだのであるがこ  
こには省はいておく。

大将はそのまま宿直とどすることにした。御独居生活の心苦しさに時々  
夕霧はこうしておそばで泊とまってゆくのであるが、紫の女王のいた  
ころにはたやすく近い所へも寄よることを院はお許ゆるしにならなかつた  
帳台のかたわらに寝ることによつても、大将は昔が今にならぬこと  
を悲かなしんだ。

暑いころに涼しい水亭すゐていに出て院がながめておいでになる池には、  
蓮はすの花が盛りに咲はいていた。恋しい人への追懐のためにこの花の前  
にもうつろな気持ちを覚えておいでになるうちに、日も暮れに近く  
なつた。はなやかに蝸ひぐらしの鳴く声を聞きながら、撫子なでしこが夕映ゆうばえの空の  
美しい光を受けている庭もただ一人見ておいでになることは味気な  
いことでおありになつた。

「#ここから2字下げ」

つれづれとわが泣き暮らす夏の日をかことがましき虫の声かな

「#ここで字下げ終わり」

蛩ほたるが多く飛びかうのにも、「夕せきでん殿に蛩飛んで思ひ悄然せうぜん」などと、お口に上る詩も楊妃ようひに別れた玄宗の悲しみをいうものであった。

「#ここから2字下げ」

夜を知る蛩を見ても悲しきは時ぞともなき思ひなりけり

「#ここで字下げ終わり」

七月七日も例年に変わったたなはた七夕で、音楽の遊びも行なわれずに、寂しい退屈さをただお感じになる日になった。星合いの空をながめに出る女房もなかった。

未明に一人一臥ぶしの床をお離れになって妻戸をお押しあけになると、前庭の草木の露の一面に光っているのが、渡殿わたせどののほうの入り口越しに見えた。縁の外へお出になつて、

「#ここから2字下げ」

七夕の逢あふ瀬は雲のよそに見て別れの庭の露ぞ置き添ふ

「#ここで字下げ終わり」

こう口ずさんでおいでになつた。

秋風らしい風の吹き始めるころからは法事の仕度したくのために、院のお悲しみも少し紛れていた。あれから一年たったかとお思いになると呆然ぼうぜんともおなりになるのである。命日である十四日には上から下まで六条院の中の人々は精進潔斎して、曼陀羅まんだらの供養に列するのであった。例の宵よいの仏前のお勤めのために手水ちよつずを差し上げる役にあたった中将の君の扇に、

「#ここから2字下げ」

君恋ふる涙ははてもなきものを今日をば何のはてといふらん

「#ここで字下げ終わり」

と書かれてあったのを、手に取ってお読みになってから、院がまたその横へ、

「#ここから2字下げ」

人恋ふるわが身も末になりゆけど残り多かる涙なりけり

「#ここで字下げ終わり」

とお書き添えになった。

九月になり被<sup>きせわた</sup>綿をした菊を御覧になって、

「#ここから2字下げ」

もろともにおきゐし菊の朝露もひとり袂<sup>たもと</sup>にかかる秋かな

「#ここで字下げ終わり」

と院はお歌いになった。

十月は時<sup>しぐれ</sup>雨がちな季節であつたからいつそう院のお心はお寂しそ  
うで、夕方の空の色なども言いようもなく心細く御覧になるのであ  
つて、「いつも時雨は降りしかど」（かく袖<sup>そで</sup>ひづるをりはなかりき）  
などと口ずさんでおいでになった。空を渡る雁<sup>かり</sup>が翼を並べて行くの  
もうらやましくお見守られになるのである。

「#ここから2字下げ」

大空を通ふまぼろし夢にだに見えこぬ魂の行く方尋ねよ

「#ここで字下げ終わり」

何によつても慰められぬ月日がたつていくにしたがい、院のお悲しみは深くばかりになった。

五節などといって、世の中がはなやかに明るくなるころ、大将の子息たちが殿上勤めにはじめて出たといつて、六条院へ来た。二人とも非常に美しい。母方の叔父である頭中将や蔵人少将などが青摺りの小忌衣のきれいな姿で少年たちに付き添つて来たのである。朗らかなふうのこうした若い人たちを御覧になる院は、御自身の青春の日もお振り返られになって昔のこの日の舞い姫に心をお惹かれになったことなどもさすがになつかしいこととお思い出しになった。

「#ここから2字下げ」

宮人は豊の明りにいそぐ今日日かげも知らで暮らしつるかな

「#ここで字下げ終わり」

今年をこんなふうに隠忍してお通しになった院は、もう次の春になれば出家を実現させてよいわけであるとその用意を少しずつ始めようとされるのであったが、物哀れなお気持ちばかりがされた。院内の人々にもそれぞれ等差をつけて物を与えておいでになるのであった。目だつほどに今日までの御生活に区切りをつけるようなことにはしてお見せにならないのであるが、近くお仕えする人たちには、

院が出家の実行を期しておいでになることがうかがえて、今年の終わってしまうことを非常に心細くだれも思った。人の目については不都合であるとお思いになった古い恋愛関係の手紙類をなお破るのは惜しい気があそばされたのか、だれのも少しずつ残してお置きのようになったのを、何かの時に御見つけになり破らせなどして、また改めて始末をしにおかきになったのであるが、須磨すまの幽居時代に方々から送られた手紙などもあるうちに、紫の女王にょおうのだけは別に一束になつていた。御自身がしてお置きになったのであるが、古い昔のことであつたと前の世のことのようにお思われになりながらも、中をあけてお読みになると、今書かれたもののように、夫人の墨の跡が生き生きとしていた。これは永久に形見として見るによいものであると思召おぼしめされたが、こんなものも見てならぬ身の上なるうとするのでないかと、気がおつきになつて、親しい女房二、三人をお招きになつて、居間の中でお破らせになつた。こんな場合でなくても、亡なくなつた人の手紙を目に見ることは悲しいものであるのに、小さいの感情を滅却させねばならぬ世界へ踏み入ろうとあそばす前の院のお心に女王の文字がどれほどはげしい悲しみをもたらしたかは御想像申し上げられることである。御気分はくらくらなつて涙は昔の墨の跡に添って流れるのが、女房たちの手前もきまり悪く恥ずかしくおなりになつて、古手紙を少し前方へ押しやつて、

「#ここから2字下げ」

死出の山越えにし人を慕ふとて跡を見つともなほまどふかな

「#ここで字下げ終わり」

と仰せられた。女房たちも御遠慮がされてくわしく読むことではきないのであったが、端々の文字の少しずつわかっていくだけさえも非常に悲しかった。同じ世にいて、近い所に別れ別れになっていく悲しみを、実感のままに書かれてある故人の文章が、その当時以上にお心を打つのは道理なことである。こんなにもめしく悲しんで自分は見苦しいとお思いになって、よくもお読みにならないで長く書かれた女王の手紙の横に、

「#ここから2字下げ」

かきつめて見るもかひなし藻塩草もしほぐさ同じ雲井の煙とをなれ

「#ここで字下げ終わり」

とお書きになって、それも皆焼かせておしまいになった。

仏名の僧を迎える行事も今年きりのことであるとお思いになると、僧の錫杖しゃくじょうの音も身に沁しんでお聞かれになった。院のために行く末長く寿命の保たれることを僧たちの祈り唱えるのも、院のお心には仏へ恥ずかしくお思われになった。雪が大降りになって厚く積もった。帰ろうとする導師を院は御前へお呼びになって、杯を賜わったりすることなども普通の仏名式の日以上の手厚いおねぎらであった。纏頭てんとうなども賜わった。長くこの院へお出入りし、御所の御用も勤めているお馴染み深い僧が、頭の色もようやく変わって老法師になった姿も院には哀れにお思われになるのであった。この日も例の宮がた、高官たちが多数に参入した。梅の花の少し花らしく顔を上げ出したのが、雪の中にきわだって美しく見える日であったから、音楽の遊びもあってしかるべきなのであるが、本年中はなお管絃かんげんもむせ

び泣きの声をたてるもののように思召されるお心から、そのことはなくて、詩歌を歌わせてお聞きになるくらいのこととどめられた。導師へ院が杯をおさしになった時のお歌は、

「#ここから2字下げ」

春までの命も知らず雪のうちに色づく梅を今日かざしてん

「#ここで字下げ終わり」

というのであって、お返し、

「#ここから2字下げ」

千代の春見るべきものと祈りおきてわが身ぞ雪とともにふりぬる

「#ここで字下げ終わり」

参会者の作も多かったが省いておく。院の御一美貌びぼうは昔の光源氏  
でおありになった時よりもさらに光彩が添ってお見えになるのを仰  
いで、この老いた僧はとめどなく涙を流した。

今年が終わることを心細く思召す院であったから、若宮が、  
「なやら難追ないをするのに、何を投げさせたらいちばん高い音がするだろ  
う」

などと言って、お走り歩きになるのを御覧になっても、このかわ  
いい人も見られぬ生活にはいるのであるとお思いになるのがお寂し  
かった。

「#ここから2字下げ」

物一思ふと過ぐる月日も知らぬまに年もわが世も今日や尽きぬる  
「#ここで字下げ終わり」

元日の参賀の客のためにことにはなやかな仕度を院はさせておい  
でになった。親王がた、大臣たちへのお贈り物、それ以下の人たち  
への纏頭の品などもきわめてりっぱなものを用意させておいでにな  
った。

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）  
で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2004年2月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

雲隠れ

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」かきくらす涙か雲かしらねどもひかり

「#地から3字上げ」見せねばかかぬ一章 （晶子）

「#「雲隠れ」の帖は冒頭の晶子詞のみで本文はありません。」

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

2002（平成14）年1月15日44版発行

入力：kompass

校正：多羅尾伴内

2004年2月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

匂宮

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）名残なごり

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）思おもって、皆みな一いっ蔭かげ

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」春の日の光の名残なごり花はなそのそのにに匂におひひ薫かると

「#地から3字上げ」思おもほほゆるゆるかな （晶子）

光君ひかるきみがおかくななにななったあとに、そのすぐれた美貌ひばうを継つぐと見え  
る人は多くの遺族の中にも求めることが困難であった。院の陛下は  
おそれおおくて数に引きたてまつるべきでない。今の帝みかどの第三の宮  
と、同じ六条院で成長した朱雀院すざくの女三にょさんの宮みやの若君わかみの二人ふたりがとりど

りに美貌の名を取っておいでになって、実際すぐれた貴公子であらりになったが、光源氏がそうであったようにまばゆいほどの美男と  
 いうのではないようである。ただ普通の人としてはまことにりっぱ  
 で艶な姿の備わっている方たちである上に、あらゆる条件のそろつ  
 た身分でありになることも、光源氏にやや過ぎていて、人々の尊  
 敬している心が実質以上に美なる人、すぐれた人にする傾向があつ  
 た。紫夫人が特に愛してお育てした方であつたから、三の宮は二条  
 の院に住んでおいでになるのである。むろん東宮は特別な方として  
 御大切にあそばすのであるが、帝もお后もこの三の宮を非常にお愛  
 しになって、御所の中へお住居の御殿も持たせておありになるが、  
 宮はそれよりも気楽な自邸の生活をお喜びになって、二条の院にお  
 おかたはおいでになるのであつた。御元服後は三の宮を兵部卿の宮  
 と申し上げるのであつた。女一の宮は六条院の南の町の東の対を、  
 昔のとおり部屋の様変えもあそばされずに住んでおいでになつ  
 て、明け暮れ昔の美しい養祖母の女王を恋しがつておいでになつた。  
 二の宮も同じ六条院の寝殿を時々行つてお休みになる所にあそばし  
 て、御所では梅壺をお住居に使つておいでになつたが、右大臣の二  
 女をお嫁りになつていた。次の太子に擬せられておいでになる方で、  
 臣下が御尊敬申していることも並み並みでなくて、その御人格も堅  
 実な方であつた。

源右大臣には何人もの令嬢があつて、長女は東宮に侍していて、  
 競争者もないよい位置を得ているのである。下の令嬢はまた順序ど  
 おりに三の宮がお嫁りになるのであるうと世間も見ているし、中宮  
 もそのお心でおありになるのであるが、兵部卿の宮にそのお心がな  
 いのである。恋愛結婚でなければいやであると思つておいでになる

ふうなのであった。夕霧の大臣も同じように娘たちを御兄弟の宮方に嫁とつがせることを世間へはばかっているのであったが、もし懇望されるなら同意をするのに躊躇ちゆうじゆはしないというふうを見せて、兵部卿の宮に十分の好意を見せていた。大臣の六女は現在における自信のある貴公子の憧憬どうけいの的になつていた。

六条院がおいでにならぬようになってから、夫人がたは皆泣く泣くそれぞれの家へ移つてしまつたのであつて、花散里はなちるりといわれた夫人は遺産として与えられた東の院へ行つたのであつた。中宮は大部たふ分宮中においでになつたから、院の中は寂しく人少なくなつたのを、夕霧の右大臣は、

「昔の人の上で見ても、生きている時に心をこめて作り上げた家が、死後に顧みる者もないような廃邸になつてゐることは、栄枯盛衰を露骨に形にして見せている気がしてよろしくないものだから、せめて私一代だけは六条院を荒らさないことにしたいと思う。近くの町が人通りも少なく、寂しくなるようなことはさせたくない」

と言つて、東北の町へあ的一条の宮をお移しして、三条の邸ぢと一夜置きに月十五日ずつ正しく分けて泊つていた。二条の院と言つて作りみがかれ、六条院の春の御殿と言つて地上の極楽のように言われた玉の台うてなもただ一人の女性の子孫のためになされたものであつたかと思へて、明石夫人あかしは幾人もあかしの宮様がたのお世話をして幸福に暮らしていた。夕霧はどの夫人に対しても院がお扱いになつたとおりに、皆母として奉仕しているのであるが、紫の女王がこんなふうあかしに院のおあとへ残つておいでになれば、どんなに自分は誠意をもつてお尽くしすることであるう、終わりまで特別な自分の好意というものを受けてもらえるというようなことはなかつたと思うと、今も大

臣は残念でならぬように思うのであった。

天下の人で六条院をお慕いせぬ者はなくて、何につけても火が消えたように思つて歎かぬおりはないのであった。まして院に親しくお仕えしていた人たち、夫人がた、宮がたが院にお別れした悲しみに流す涙というものはどれほどの量であるかしのれないのである。それとともに今も紫夫人を追慕する思いはだれにもあつて、人からその女王の思い出されていない時というものはないのである。春の花の盛りは短くても印象は深く残るものであるというべきであらう。

二品の宮の若君は院が御寄託あそばされたために、冷泉院の陛下がことにお愛しになつた。院の後の宮も皇子などをお持ちにならずお心細く思召したのであつたから、この人をお世話あそばして老後の力にしたいと望んでおいでになつた。元服の式も院の御所であげられた。十四の歳であつた。その二月に侍従になつて、秋にはもう右近衛の中將に昇進した。推薦権をお持ちになる位階の陞叙もこの人へお加えになつて、なぜそんなにお急ぎになるかと思うようにずんずんと上へお進ませになるのであつた。お住居の御殿に近い対をこの人の曹司におあてになつて、装飾などは院御自身の御意匠でおさせになり、若い女房から童女、下仕えの者までもすぐれた者をお選りとのえになつた。人が姫君をかしづく以上の華奢な生活をおさせになるようでもまばゆく見えた。院のおそばの女房の中からも、後の宮の女房の中からも容貌のすぐれた、感じのよい、品のある女は皆中將の曹司付きにあそばされ、院にいることがどこにいるよりも好きになるようにとお計らいになつたのであつて、うれしい玩具品のように思召すのであつた。亡くなつた太政大臣の女御の腹からただお一方の内親王がお生まれになつたのを、院が非常に珍重あそ

ばすのに変わらず中将をお扱いになるのである。それは一つは後の宮をお愛しになることが年月とともに増してゆくことによるものらしくて、それほどまでにはと話を聞いては人が信じないほど中将を院はお愛しになった。

現在の母宮は仏勤めをばかりしておいでになって、月ごとの念仏、年に二度の法華ほっけの八講、またそのほかのおりおりの仏事などを怠らずあそばすだけがお役目のようで、出入りする中将をかえって御自身のほうが子のように頼みにしておいでになったから、お気の毒でおそばにもいたかつたし、院からも、宮中からも始終お呼ばれはするし、東宮も御弟の宮がたも親友のように思召していっしょにお遊びになろうとされるしするために、暇がなく苦しい中将は一つの身を幾つかに分けて使うことができぬかとさえ歎息たんそくしていた。時々耳にはいって、子供心にも腑ふに落ちず思ったことは、今も不可解のままで心に残っているが、尋ねる人もなかった。宮にはそうした不審をいだいているとさえお思われすることのはばかられる問題であったから、ただ自身の心のうちでだけ絶え間なくそのことを考えて、「どういうことから自分が生まれるようになったのか、何の宿命でこんな煩悶はんもんを負って自分は人となったのか、善巧ぜんぎょう太子はみずから釈迦しやくかの子であることを悟ったというが、そうした知慧ちえがほしい」と独言ひとりごとをする時もあった。

「#ここから2字下げ」

おぼつかなたれに問はまし如何いかにして始めも果ても知らぬわが身ぞ

「#ここで字下げ終わり」

返事はだれもしてくれない。自身の健康などもこんなことでそこなつてゆくような気がして中將は歎かれるのであつた。宮がお年の若盛りに尼におなりになつたのも、いつたいどれほどの信仰がおありになつたために、にわかに入家を断行あそばされたのか、自分の生まれてくることが不祥なことであつたために、厭世的なお気持ちにもなられたのであろう、人がその秘密を悟らずにいるとは思われない、暗闇に置くべき問題であるから自分には人が告げないのであろうと中將は思った。朝暮仏勤めはしておいでになるようではあるが、確固とした信念がおありになるとは思えない女の悟りだけでは御仏の救いの手もおぼつかない、五つの戒めも完全に保つておゆきになれるかも疑問なのであるから、自分がその精神だけを補うことにして、後世だけでも御安樂にしてさしあげたく思った。この人はお崩れになつた院も、自分というもののために不快な思いにお悩まされになつたかもしれぬと思うと、次の世界でももう一度お逢いしたいという望みが起こり、元服して社会へ出ることを厭わしがつたのであるが、意志を通すこともできなくて、出仕する身になつた時から、八方のはなやかな勢いがこの人を飾ることになつても、これはうれしいとは思われないで、ただ静かな落ち着いた人になつていた。帝も母宮の御縁故でこの中將に深い愛をお持ちになつたし、中宮はもとより同じ院内で御自身の宮たちといつしよに生い立って、いつしよにお遊ばせになつたころのお扱いをお変えにならなかつた。

「末に生まれてかわいそうな子です。一人前になるまでを自分が見てやることもできない」

と、院が仰せられたことをお思いになつて、憐みを深くかけてお

いでになるのである。夕霧の右大臣も自身の公達きんだちよりもこの人を秘蔵がって丁寧ていねいに扱うのであった。昔の光源氏は帝王の無二の御愛子ではあったが、嫉妬しつとする反対派があつたり、母方の保護者がなかつたりして、聡明そうめいな資質から遠慮深く世の中に臨んでおいでになって、一世の騒乱さわらんになりかねぬようなことになった時も、いさぎよく自身で渦中かちゅうを去り、宗教を深く信じて冷静に百年の計をされたのである。この中將は若年ですであらゆる条件のそろつた恵まれた環境に置かれていた。そしてそれに相当した優秀な男子でもあるのである。仏が仮に人として出現されたかと思われるところがこの人にあつた。容貌ようぼうもどこが最も美しいというところはなくて、目を驚かすものもないが、ただ艶えんで貴人らしくて、賢明らしいところが万人に異なつていのである。この世のものとも思われぬ高尚こうしょうな香を身体からだに持っているのが最も特異な点である。遠くにいてさえこの人の追い風は人を驚かすのであった。これほどの身分の人が風采ふうさいをかまわずにありのまま中人へ出るわけはなく、少しでも人よりすぐれた印象を与えたいという用意はするはずであるが、怪しいほど放散するに思いに忍び歩きをするのも不自由なのをうるさがつて、あまり薫香たきものなどには用いない。それでもこの人の家に蔵しまわれた薫香が異なつた高雅な香の添うものになり、庭の花の木もこの人の袖そでが触れるために、春雨の降る日の枝の雫しずくも身にしむ香を放つことになった。秋の野のだれでもない藤袴ふじばかまはこの人が通ればもとの香が隠れてなつかしい香に変わるのであった。こんなに不思議な清香の備わつた人である点を兵部卿ひやうぶけいの宮は他のことよりもうらやましく思召おぼしめして、競争心を燃やしになることになった。宮のは人工的にすぐれた薫香をお召し物へお焚たきしめになるのを朝夕のお仕事にあそばし、御自邸の庭

にも春の花は梅を主にして、秋は人の愛する女郎花、小男鹿のつまにする萩の花などはお顧みにならずに、不老の菊、衰えてゆく藤袴、見ばえのせぬ吾木香などという香のあるものを霜枯れのころまでもお愛し続けになるような風流をしておいでになるのであった。昔の光源氏はこうしたかたよったことはされなかつたものである。

源中將は始終宮の二条の院へお伺いするのであつて、音楽の遊びの行なわれる時にも優越を誇るような笛の音を吹き立てる相手を、互いに好敵手と認める若いどうしであつた。世間も黙つてはいなかつた。匂う兵部卿、薫る中將とやかましく言つて、すぐれた娘を持つ貴族たちはこの貴公子たちを婿に擬して、好奇心の起こるようにしむける者もあるのを、宮は相手の女の価値を相当なものと考えられる人へは手紙を送つてごらんになつて、なお細かく相手を観察しようとなされるのであつた。しかも熱心にだれを得なければならぬとお思いになる女はなかつた。冷泉院の女一の宮と結婚ができたらしいであろうと匂宮がお思いになるのは、母君の女御も人格のりつばな尊敬すべき才女であつて、姫君もさもあるはずにすぐれた評判をとつておいでになる方だからである。遠くからの評判だけではなく匂宮は姫宮のおそばにいる女房から細かな御様子を聞いてもおいでになるのであつたから、忍びがたく恋のようにも今ではなつていた。

中將は人生を味気ないものと悟つているのであるから、寂しいからといつて、恋愛などをしては、かえつてこの世を捨てる際の妨げになるであろうということを知つていて、保護者との関係の煩瑣な女性に求婚するようなことははばかられるのであつた。自身では永久にこの冷静な態度が続けられるものと思つていたであろうが、そ

れはただ現在の薫中將が熱情をもつて愛する人がないからであろう  
 と思われる。親兄弟の同意せぬ恋愛結婚などはまして遂行すべくも  
 ない薫である。十九になつた歳としに三位の参議になつて、なお中將も  
 兼ねていた。帝も後も愛を傾けておいでになる人で、臣下としてこ  
 れ以上幸福な存在はないと見られる薫ではあるが、心の中には純粹  
 な六条院の御子と思われぬ不幸な認識がひそんでいて、樂天的には  
 なれない人で、貴公子に共通な放縱な生活をするようなことも好ま  
 なかった。静かに落ち着いたものの見方をする老成なふうの男であ  
 ると人からも見られていた。兵部卿の宮の恋が年とともに態度の加  
 わる院の一品いっほんの姫宮も、一つの院の中にいる薫には、ことに触れて  
 御様子がわかりもするのであつて、評判どおりに優秀な御素質の貴  
 女らしいことを知つては、こんな方を妻にできれば生きがいを感じ  
 ることであろうと思うのであるが、院が御実子同然な御待遇を薫に  
 与えておいでになるものの、姫宮との間だけは嚴重にお隔てになる  
 のを知つていては、しいて御交際を求めにゆく気にはなれないので  
 あつた。自分ながらも予期せぬ恋の初めみちの路に踏み入るようなこと  
 がもしあつては、宮のためにも、自身のためにもよろしくないと思  
 つて、親しもうとは心がけなかつた。

人に愛さるべく作られたような風采ふうさいのある薫かおるであつたから、かり  
 そめの戯れを言いかけたにすぎない女からも皆好意を持たれて、や  
 むなく情人関係になつたような、まじめには愛人と認めていない相  
 手も多くなつたが、女のためには秘密にするほうがよいと思つて、  
 皆一蔭かげのことにしておいて、無情だと思われぬ程度にだれの所へも  
 人目を紛らして通つて行くのを、女のほうではかえつて気が詰まる  
 ように苦しく思い、薫の誘うままに三条の母宮の所へ女房勤めに集

まつて来るのが多くなつた。冷淡な態度を始終見せられているのも苦痛ではあつたが、絶縁されるよりはと心細い恋人たちは思つて、女房勤めをする身分でない人々もこうして薫とはかない関係が続けることで慰んでいるのであつた。さすがになつかしい、目に見るだけでも情感を受けられる人であつたから、どの女もしいてみずからを欺くようにしてこの境遇に満足していた。

「宮様の御存命中は毎日お目にかかることを怠らないつもりだから」と薫中将は言っていた。こんなふうの人であつたから、夕霧の右大臣もおおぜいある娘の中の一人は匂宮へ、一人はこの人の妻にさせたいという希望は持つていても、言いだすことをはばかっていた。なんといつても内輪どうしのことであつて、世間の聞こえもおもしろくないとは大臣も知つているのであるが、この二人のすぐれた貴公子に準じて見るほどの人もない世の中ではしかたがないと考えられるのであつた。雲井くもいの雁夫人かりの生んだ娘たちよりも藤典侍とうてんじにできた六女はすぐれて美しく、性質も欠点のない令嬢なのであつた。劣つた母に生まれた子として世間が軽蔑けいべつして見ることを惜しく思つて、女二の宮が子供をお持ちになることができずに寂しい御様子であるために、六の君を大臣は典侍の所から迎えて宮の御養女に差し上げた。よい機会に二人の公子に姫君の気配けはいをそれとなく示したなら、必ず熱心な求婚者になしうるであろう、すぐれた女の価値を知ることは、すぐれた男でなければできぬはずであると大臣は思つて、六の君を後の候補者というような大形おおぎやうな扱いをせず、はなやかに、人目を引くような派手はでな扱いをして貴公子の心を多く惹ひくようにしていた。

御所の正月の弓の競技のあとで、左大将でもある夕霧の大臣の家で宴会の開かれるのを、大臣は六条院ですることにして匂宮にも御来会を願っていた。賭弓かけゆみの席には皇子がたの御元服あそばしたのは皆出ておいでになった。后腹おのちのへらの宮は皆一気けたか高くお美しい中にも、風流男やびおの名を取っておいでになる兵部卿の宮はやはりすぐれて御一風ふう采さいがりっぱにお見えになった。第四の皇子は常陸ひたちの大守でありになるが、この方は更衣腹こういばらで、思いなしかずつと見劣りがされた。例のことであるが勝負は左ばかりが勝ち続けた。例年よりも早く競技は終わって左右の大將は退出するのであったが、匂宮、常陸の宮、后腹の五の宮を大臣の大將は自身の車へいっしょにお乗せして帰ろうとした。薰は負け方の右中將で、そつと退出して行こうとしていた車を、大臣は、

「宮様がたがおいでになるお送りにおいでにならないか」

と言つてとどめさせて、子息の衛門督えもんのかみ、権中納言ごん、右大弁そのほかの高官をそれへ混ぜて乗せさせて六条院へ来た。

やや遠い路みちを来るうちに雪も少し降り出して艶えんな氣のする黄昏時たそがれどきであった。笛などもおもしろく吹き立ててはいつて行つた。六条院は、ここ以外にはどんな御仏みほとけの国でもこうした日の遊び場所に適した所はないであろうと思われた。寝殿の南の庇ひさしの間に定例どおり中將が南向いて席につき、北向きに主人の座に対して来会者の親王がた、高官たちの席が作つてあつた。酒杯が出て夜がおもしろくなつたところに「求子もとめこ」が舞われた。左の手で抑おさえ、右の手で抑えて幾度か袖そでを斜めにするこの時の風の動きに庭の梅の香がさつと家中へはいつてきて、源中將が身に持つにおいを誘うのも艶な趣のあることであつた。わずかな透き間からのぞく女房なども、

「闇はあやなし（梅の花色こそ見えね香やは隠るる）」という時間にもあの方のにおいだけはだれにだってわかります」

と言って薫をほめていた。大臣もそう思っていた。容貌も風采も平生以上にまたすぐれて見える薫が行儀正しく坐しているのを見て、

「右近衛の中将も声をお加えなさい。あまりに客らしくしているではありませんか」

と言うと、感じのよいほどの中音で、「神のます」など、求子の一ふしをうたった。

底本：「全訳源氏物語 下巻」角川文庫、角川書店

1972（昭和47）年2月25日改版初版発行

1995（平成7）年5月30日40版発行

このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>)

で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月10日44版を使用しました。

「一品」のルビは底本では「いっほん」となっていました。が、「句宮」以外の作品では「いっほん」で統一されていましたので直しました。

入力：上田英代

校正：高橋真也

2003年8月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

紅梅

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）亡<sup>な</sup>き

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）今一按察使大納言

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」うぐひすも問はば問へかし紅梅の花の

「#地から3字上げ」あるじはのどやかに待つ （晶子）

今一按察使大納言といわれている人は、故人になった太政大臣の次男であった。亡き柏木の衛門督のすぐの弟である。子供のころから頭角を現わしていて、朗らかで派手なところのある人だったため、月日とともに地位が進んで、今では自然に権力もできて世間の信望

を負っていた。夫人は二人あつたが、初めからの妻は亡なくなつて、現在の夫人は最近までいた太政大臣の長女で、真木柱まきはしらを離れて行くのに悲しんだ姫君を、式部卿しきぶきょうの宮家で、これもお亡なくなりになつた兵部卿ひょうぶきょうの宮と結婚をおさせになつた人なのである。宮がお薨かくれになつたあとで大納言が忍んで通うようになっていたが、年月のたつうちには夫婦として公然とうせいに同棲することにもなつた。子供は前の夫人から生まれた二人の娘だけであつたのを、寂しがつて神仏にも祈つて今の夫人との間に一人の男の子を設けた。夫人は兵部卿の宮の形見の姫君を一人持つていたのである。隔てを置かずに夫婦は母の違つた娘と、父のない娘を愛撫あいぶしているのであつたが、そちらこちらの姫君付きの女房などの間にうるさい争いなどの起こる時もあるのを、夫人はきわめて明るい快活な性質であつたから、継娘まむすめのほうの女房の罪をつまびらかにしようとはせず、自身の娘のために不利なこともそのまま荒だてずに済ますよう骨を折つたから、家庭はきわめて平和であつた。

姫君たちが皆同じほど大人おとなになつたから装着もぎの式などを大納言は行なつた。七間の寝殿を広く大きく造つて、南の座敷には大納言の長女、西のほうには二女、東の座敷には宮の姫君を住ませているのであつた。ちよつと思つとこの姫君は心細い身の上のようで気の毒だが、曾祖父そうそふの宮、祖父の太政大臣、父宮などの遺産の分配されたのが多くて、夫人は、高級の貴女の生活の様式をくずさず愛女をかしくくことができ、奥ゆかしい佳人の存在と人から認められていた。妙齡の娘のある家の常で、大納言家へは求婚者が続々現われてきたし、宮中や東宮からお話があるようにもなつたが、陛下のおそばには中宮ちゅうくわうがおいでになる、どんな人が出て行つてもその方と同じ

だけの御一寵愛ちようあいが得られるわけもない、そう言つて身を卑下して後宮の一員に備わつていているだけではつまらない、東宮には夕霧の左大臣の長女が侍していて、太子の寵を専らもっぱらにしているのであるから、競争することは困難であつても、そんなふうにはかり考えていては、人にまさつた幸福を得させたいと思う女の子に宮仕えをさせるのを断念しなければならぬことになつて、未来の楽しみがいもなかつたことになると大納言は思つて、長女を東宮へ奉ることにした。年はもう十七、八で美しいはなやかな氣のする姫君であつた。二女も近い年で、上品な澄みきつたような美は姉君にもまさつた人であつたから、普通の人と結婚させることは惜しく、兵部卿の宮が求婚されたとならばと、大納言はそんな望みを持つていた。大納言の一人一息むす子の若君を匂宮におうみやは御所などでお見つけになる時があると、そばへお呼びになつてよくおかわいがりになつた。聰明そうめいらしいよい額つきをした子である。

「弟だけを見ていて満足ができないと大納言に言つてくれ」  
 などとお言いになるのを、そのまま父に話すと、大納言は笑顔えがおを見せてうれしそうにした。

「人にけおされるような宮仕えよりは兵部卿の宮などにこそ自信のある娘は差し上げるのがいいと私は思う。一所懸命いそけいめいにおかしきすれば命も延びるような氣のする宮様だから」

と言いながらも大納言はまず長女を東宮の後宮へ入れる準備をして、春日かすがの神意どおりに藤原氏ふじわらの皇后を自分の代に出すことができ、父の大臣は院の女御にょごを后位の競争に失敗させ、苦い思いをしたままで亡なくなつたのであるから、靈の慰むようにもなればいいと心の中では祈つていた。その人は間もなく太子一宮ききゅうへはいつた。付き

添いの女房から御一寵愛があるという報告が大納言へあつた。後宮の生活に馴れないうちは親身の者が付いていなくてはと行って、真木柱夫人がいつしよに御所へ行つていた。優しいこの継母はよく世話をして周囲にも気を配ることを怠らないのであつた。

大納言家の内が急に寂しくなつた気がして、西の姫君などは始終いつしよに暮らした姉妹なのであるから、物足らぬ寂しい思いをしていた。東の姫君も大納言の実子の姉妹とは親しく睦み合つてきたのであつて、夜分などは皆一つの寢室で休むことにして、音楽の稽古をはじめ、遊戯ごとにもいつも東の姫君を師のようにして習つたものである。東の女王は非常な内気で、母の夫人にさえも顔を向けて話すことなどはなく、病氣と思われるほどに恥ずかしがるところはあるが、性質が明るくて愛嬌のある点はだれよりもすぐれていた。こんなふうには東宮へ長女を奉つたり、二女の将来の目算をしたりして、自身の娘にだけ力を入れて見るように見られぬかと大納言は恥じて、

「姫君にどういふふうな結婚をさせようという方針をきめて言つてください。二人の娘に変わらぬ尽力を私はするつもりなのだから」

と大納言は夫人に言つたのであるが、

「結婚などという人並みな空想をあの人に持つことはできませんほど弱い氣質なのでございます、それで普通の計らいをしましてはかえつて不幸を招くことになると思ひますから、運命に任せておくことにしまして、私の生きております間は手もとへ置くことにいたします。それから先は非常に心細く想像されますが、尼になるといふ道もあるのですし、その時にはもう自身の処置を誤らないだけになつていと思ひます」

などと夫人は泣きながら言つて、大納言の好意を謝していた。

東の姫君にも同じように父親らしくふるまっている大納言ではあったが、どんな容貌ようぼうなのかを見たく思つて、

「いつもお隠れになるのは困つたことだ」

と恨みながら、人知れず見る機会をうかがつていたが、絶対と言つてもよいほど、姫君は影すらも継父に見せないのであつた。

「お母様の留守の間は私が代理になつて、どんな用の時にも私はこちらへ来るつもりなのだが、まだ親と認めないお扱いを受けるのに悲観されます」

などと、御簾みすの前にすわつて言つている時、姫君はほのかに返辞くらいはしていた。声やら、気配けはいやらの品のよさに美しい容貌も想像される可憐かれんな人であつた。大納言は自分の娘たちをすぐれたものと見て慢心しているが、この人には劣っているかもしれぬ、だから世界の広いことは個人を安心させないことになる、類がないと思つていても、それ以上の価値の備わつたものが他にあることにもなるのであろうなどと思つて、いつそう好奇心が惹ひかれた。

「ここ数月の間はなんとなく家の中がざわついていました、あなたの琴の音を長く聞くこともありませんでしたよ。西にいる人は琵琶びわの稽古けいこを熱心けんしんにしていますよ。上達する自信があるのでしうか。

琵琶はまずく弾ひかれると我慢まんまんのならないものです。できますればよく教えてやつてください。この老人はどの芸げいといつて特に深く稽古をしたものといつてはないのですが、昔の黄金時代に行なわれた音楽の遊びに参加したただけの功德で、すべての音楽を通じて耳だけはよく発達しているのです。たくさんはお聞かせになりませんが、時々お聞きするあなたの琵琶の音にはよく昔のその時代を思い出させる

ものがありますよ。現在では六条院からお譲りになった芸で、左大臣だけが名手として残しておいでになります。が、薫中納言、匂宮の若いお二人はすべての点で昔の盛りの御代の人に劣らないと思われる天才的な人たちで、熱心におやりになる音楽のほうで言えば、宮様の撥音の少し弱い点は六条院に及ばぬところであると私は思っているのです。ところがあなたのは非常に院のお撥音に似ています。琵琶は絃のおさえ方の確かなのがよいということになっていますが、柱をさす間だけ撥音の変わる時の艶な響きは女の弾き手のみが現わしうるもので、かえって女の名手の琵琶のほうを私はおもしろく思えますよ。今からお弾きになりませんか。女房たち、お楽器を」と大納言は言った。女房らは大納言に対してあまり隠れようとはしないのであるが、若い高級の女房の一人で、顔を見せたがらないのが、じつとして動かないのを大納言は、

「お付きの人たちさえも私を他人扱いするのがくやしい」と腹をたてて見せたりもした。

若君が御所へ上がろうとして直衣姿で父の所へ来た。正装をしてみずら「#「みずら」に傍点」を結った形よりも美しく見える子を、大納言は非常にかわいく思うふうであった。夫人も行っている麗景殿へすることづてを大納言はするのであった。

「お任せしておいて、今夜も私は失礼するだろうと思う、と言うのだよ。気分が少し悪いからと申してくれ」

と言ったあとで、

「笛を少し吹け、何かというと御前の音楽の集まりにお呼ばれするではないか。困るね。幼稚な芸のものを」

微笑をしながらこう言って、双調を子に吹かせた。一人息子が

もしろく笛を吹き出すのを待っていて、

「悪くはなくなつてゆくのも、こちらのお姉様の所で、自然合わせていただくことになるからだろうね。ぜひただ今も掻き合せてやっってください」

と責められて、女王は困っているふうであつたが、爪弾きで琵琶をよく合うように少し鳴らした。大納言は口笛で上手な拍子をとるのだった。この座敷の東の側に沿つて、軒に近く立つた紅梅の美しく咲いたのを大納言は見て、

「こちらの梅はことによい。兵部卿の宮は宮中においてになるだろうから、一枝折らせてお持ちするがいい。『知る人ぞ知る』（色をも香をも）」

こう子供に言いながらまた、大納言は、

「光源氏がいわゆる盛りの大将でいられた時代に、子供でちょうどこの子のようにして始終お近づきしたことが今でも私には恋しくなりません。この宮がたを世間の人はお褒めするし、實際愛さるべく作られて来た人のような風采はお持ちになりますが、光源氏の片端の片端にもお当たりにならないように私の思うのは、すばらしいと子供心にお見上げしたころの深い印象によるものなのかもしれませぬ。われわれでさえ院をお思い出しするとお別れしたことは慰みようもない悲しみになるのですから、家族の方がたでお死に別れをしたあとに生き残らねばならなかった人たちは不幸な宿命を負っているのだという気がします」

こんなことを女王に語つて、大納言は深く身にしむふうでおれかえつてしまった。この気持ちか促しもして大納言は、梅の枝を折らせるとすぐに若君を御所へ上がらせることにした。

「しかたがない。阿難が身体から光を放った時に、釈迦がもう一度出現されたと解釈した生賢い僧があつたということだから、院を悲しむ心の慰めにはせめて匂宮へでも消息を奉ることだ」と言つて、

「#ここから2字下げ」

心ありて風の匂はす園の梅にまづ驚の訪はずやあるべき

「#ここで字下げ終わり」

この歌を紅の紙に、青年らしい書きようにしたためたのを、若君の懐紙の中へはさんで行かせるのを、少年は親しみたく思う宮であつたから、喜んで御所へ急いだ。

兵部卿の宮が中宮のお宿直座敷から御自身の曹司のほうへ行こうとしていられるところへ按察使大納言家の若君は来た。殿上役人がおおぜいあとからお供して来た中へ混じつて来た子供を、宮はお見つけになつて、

「昨日はなぜ早く退出したの、今日はいつごろから来ていた」  
などとお尋ねになつた。

「昨日はあまり早く退りましたのが残念だったものですから、まだ宮様が御所にいらつしやると人が言うものですから、急いで」  
子供らしくはあるが、若君は親しい調子で申し上げた。

「御所でなくても時々はもっと気楽な家のほうへも遊びに来るがいよ。若い人がどこからともなくたくさん集まつて来る所だよ」

と宮はお言いになる。この子一人を相手にお話をあそばされるので、他の人たちは遠慮をしてやや遠くへのいていたり、ほかへ行つ

てしまったりして、静かになつた時に、宮が、

「東宮様から少し暇がいただけただけだね、君をおかわいがりになつてお放しにならないようだったのに、私の所へ来ている間に御一寵愛を人に奪われては恥だろ」

とおからかいになると、

「あまりおまつわりになるので苦しくてなりません。あなた様は」

と子供は言いさして黙ってしまったのをまた宮は冗談にして、

「私を貧弱な無勢力なものだと思つて、嫌になつたつて、そうなの。もっともだけれど少しくちおしいね。昔の宮様のお嬢様で、東の姫君という方にね私を愛してくださらないかつて、そつとお話してくれないか」

こんなことをお言ひだしになつたのをきっかけにして、若君は紅梅の枝を差し上げた。

「私の意志を通じたあとでこれがもらえたのならよかつたろ」

とお言ひになつて、宮は珍重あそばすように、いつまでも花の枝を見ておいでになつた。枝ぶりもよく花卉の大きさもすぐれた美しい梅であつた。

「色はむろん紅梅がはなやかでよいが、香は白梅に劣るとされているのだが、これは両方とも備わっているね」

宮がことにお好みになる花であつたから、差し上げがいのあるほど大事にあそばすのであつた。

「今夜は御所に宿直をするのだろ。このまま私の所にいるがいいよ」

こうお言ひになつてお放しにならぬために、若君は東宮へ伺うこ

ともできずに兵部卿の宮のお曹司へ泊まることにした。

花も羞恥を感じるであろうと思われるにのいの高い宮のおそば近くに寝ていることを、若君は子供心に非常にうれしく思っていた。

「この花の持ち主の方はなぜ東宮へお上がりにならなかつたのかね」

「よく存じませんけれど、宮仕えよりも普通の結婚を父母は望んでいるのではございませんでしょうか」

などと若君はお答えしていた。大納言の希望は自身の娘のほうであることも宮は他から聞き込んでおいでになるのであるが、憧憬をお持ちになるのは東の女王のほうであったから、花の返事も明瞭にあそばしたくないお気持ちがあつて、翌朝若君の帰る時に、感激のないただ事のようにして、

「#ここから2字下げ」

花の香に誘はれぬべき身なりせば花のたよりを過ぐさましやは

「#ここで字下げ終わり」

こんな歌をおことづてになるのであつた。

「大人などには話さないで、そつと女王さんに私の言ったことを取り次ぐのだよ」

と返す返す宮は仰せられた。若君も東の姉君を他の姉よりも愛しているのであつて、かえつて他の姉たちは顔も見せるほどにして近づかせ、普通の家の兄弟と変わらないのであるが、重々しい上品さのある女王を、幸福の多い、はなやかな境遇に置いてみたいと常に

望んでいるのに、太子の後宮へはいった姉が両親からはなばなく扱われるのを見て、それも姉なのであるからよいわけであっても、不満足な気がするため、せめてこの宮を東の女王の良人おととにしてみたいと心がけている時に、うれしい花の使いをすることになったのである。

昨日は大納言から歌をお贈りしたのであるから、まず宮のお返事を若君は父に見せた。

「おじらしになる歌だね。あまりに多情な御生活をされることに感心しないでお聞きになって、左大臣や自分などに対しては慎しみ深くお見せになるのがおかしい。浮気男うわきにおなりになるのもやむをえないほどきれいに生まれておいでになる方が、まじめ顔をされてはかえってお価値ねうちも下がるだろうが」

などと陰口かげぐちをしながら、今日も御所へ出す若君にまた、

「#ここから2字下げ」

本もとつ香の匂におへる君が袖そでなれば花もえならぬ名をや散らさん

「#ここから1字下げ」

風流狂のようでございますがお許してください。

「#ここで字下げ終わり」

こんなふうな消息をあかずに書いて持たせてあげた。遊びの気分ではなくまじめに娘の所へ自分を誘おうとするのであろうかと、さすがに宮は興奮をお感じになった。

「#ここから2字下げ」

花の香を匂はす宿に尋め行かば色に愛づとや人の咎めん

「#ここで字下げ終わり」

と、まだ受け入れがたい気持ちを書いてお返しになったのを、大納言は飽き足らず思った。

真木柱夫人まきばしらが帰つて来て、御所であつた話をした時に、

「若君がいつかお上のお宿直をいたしましたして、翌朝東宮様へまいりました時に、よい香がついておりましたのを、だれもそんなことを気づかずにおりましたのに東宮様はすぐお悟りになりました、兵部卿の宮の所へ伺つていたのだらう、だから冷淡にして私の所へは来なかつたのだと冗談をおっしゃいまして、おかしゅうございました。宮様からお手紙でもまいつたのでございますか」

こんなことを良人に問うた。

「そう。梅の花がお好きな方だから、あちらの座敷の前の紅梅が盛りで、あまりきれいだつたから折つて差し上げたのです。宮のお移り香は実際一馥郁ふいくたるものだね。後宮の方たちだつてああも巧妙に焚たきしめることはできないらしいがね。源中納言のはそうした人工的の香ではなくて、自身の持つている芳香が高いのですよ。どんなすぐれた前生の因縁で生まれた人なのだらう。同じ花だがどんな根があつて高い香の花は咲くのかと思うと梅にも敬意を表したくなるからね。梅は匂宮におみやがお好みになる花にできていますね」

花の話からもまた兵部卿の宮のことを言う大納言であつた。

東の女王は細かい感情ももう皆備わる妙齡になつていのであるから、匂宮がお寄せになる好意を気づかないのではないが、結婚をして世間並みな生活することなどは断念していた。世間もまのあ

たり勢力のある父の子である方を好都合であるように思うのか、西の姫君のほうへは求婚者が次ぎ次ぎ現われてきて、はなやかな空気もそこでは作られるが、こちらは蔭かげの国のように引ひつ込んで暮らしている様子を、匂宮はお聞きになって、御自身の趣味にかなった相手とますますお思いになることになり、始終大納言家の若君をお呼び寄せになつては、そつと手紙をおことづてになるのを、大納言はこの宮を二女の婿に擬して、お申し込みさえあればと用意もしていることで夫人は心苦しく思つて、

「行き違ちがいになつて、そんな気持ちなどをまったく持つていない人のほうへいろいろと好意を寄せた手紙をくだすつてもむだなことなのに」

こんなことを言うことがあつた。少しのお返事すらも女王のせぬことでいよいよ宮はおいらだちになつて、負けたくないお気持ちも出て、より多く熱の加わつた手紙を書いてお送りになるのであつた。

良人おとこを失望させてもしかたがない、婿むこにしてみたい気のする輝かしい未来も予想される方であると思つて、夫人は時々どうしようかという気になることもあるのであるが、あまり多情で、恋人を多くお持ちになり、八の宮の姫君にも執心されてたびたび宇治にまでお出かけになることも噂うわさされるのであるから、女王のために頼もしい良人になつていただけるとは思われない、不幸な境遇の娘であるから、もし結婚をさせることになれば万全の縁でなければ人笑われになるばかりであると、だいたいの心はお断わりすることにきめてしまつて、御身分柄のもつたいなさに、母として夫人が時々お返事を出したりだけはしていた。

底本：「全訳源氏物語 下巻」角川文庫、角川書店

1972（昭和47）年2月25日改版初版発行

1995（平成7）年5月30日40版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には2002（平成14）年4月10日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：砂場清隆

2004年3月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

竹河

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）常少女とこをとめにて

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）秘蔵むすこ一息子らしく

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと

行数）

（例）「#「てへん+宛」、第3水準1-84-80」木

「#地から3字上げ」姫たちは常少女とこをとめにて春ごとに花あらしひ

「#地から3字上げ」をくり返せかし （晶子）

ここに書くのは源氏の君一族とも離れた、最近に亡なくなった関白太政大臣の家の話である。つまりらぬ女房の生き残ったのが語って聞

かせたのを書くのであるから、紫の筆の跡には遠いものになるであろう。またそうした女たちの一人が、光源氏の子孫と言われる人中に、正当の子孫と、そうでないのがあるように思われるのは、自分などよりももっと記憶の不確かな老人が語り伝えて来たこと、間違いがあるのではないかと不思議がって言ったこともあるのであるから、今書いていくことも皆真実のことではなかつたかもしれないのである。

たまがすぢ　ないしのかみ

玉鬘の尚侍の生んだ故人の関白の子は男三人と女二人であつたが、どの子の未来も幸福にさせたい、どんなふうにも、こんなふうにと空想を大臣は描いて、成長するのをもどかしいほどに思っているうちに、突然亡くなつたので、遺族は夢のような気がして、大臣の志していた姫君を宮中へ入れることもそのままに捨てておくよりしかたがなかつた。世間の人は目の前の勢いばかり寄つてゆくものであつたから、強大な権力をふるつていた関白のあとも、財産、領地などは少なくならないが、出入りする人が見る見る減つて、寂しく静かな家になつた。玉鬘夫人の兄弟たちは広く栄えているのであるが、貴族たちの肉親どうしの愛は一般人よりもかえつて薄いもので、大臣の生きている間さえもそう親密に往来をしなかつた上に、大臣が少し思いやりのない、むら気な性質で恨みを買うこともしたためにか、遺族の力にならうとする人も格別ないのであつた。六条院は初めと変わらず子の一人として尚侍を見ておいでになつて、御遺言状の遺産の分配をお書きになつたものにも、冷泉院れいせいの中宮の次へ尚侍をお加えになつたために、夕霧の右大臣などはかえつて兄弟の情をこの夫人に持つていて、何かの場合には援助することも忘れなかつた。男の子たちは元服などもして、それぞれ一人並みになつていた

から、父の勢力に引かれておれば思うようにゆくとところがゆかぬもどかしさはあるといつても、自然に放任しておいても年々に出世はできるはずであった。姫君たちをどうさせればよいことかと尚侍は煩悶はんもんしているのである。帝みかどにも宮仕えを深く希望することを大臣は申し上げてあったので、もう妙齡に達したはずである、年月をお数えになって入内しゅないの御催促が絶えずあるのであるが、中宮ちゅうぐうお一人にますます寵ちゆうが集まって、他の後宮たちのみじめである中へ、おくれが上がって行ってねたまれることも苦しいことであろうと思われるし、また存在のわからぬ哀れな後宮に娘のなっていることも親として見るに堪えられないことであるからと思つて、尚侍はお請けをするのに躊躇ちゆうちゆうされるのであった。冷泉院から御懇切ごこんせつに女御にょごとして院参をさせるようにとお望みになって、昔尚侍がお志を無視して大臣へ嫁とついでしまったことまでもまた恨めしげに仰せられて、

「#ここから1字下げ」

今ではいつそう年もとり、光の淡うすい身の上になつていて取柄とりえはないでしょうが、安心のできる親代わりとして私にください。

「#ここで字下げ終わり」

お手紙にはこんなふうなお言葉もあるのであったから、これはどうであろう、自分が前生の宿縁で結婚をしたあとでお目にかかったのを飽きたらず思召おぼしめしたことが、恥はずかしくもつたいたいなことだったのであるから、お詫わびに代えようかなども思つて、なお尚侍は迷っていた。美人であるという評判があつて恋をする人たちも多かった。右大臣家の蔵人くらうど少将とか言われている子息は、三条の夫人の子で、近い兄たちよりも先に役も進み大事がられている子で、性質も善良なできのよい人が熱心な求婚者になつていた。父母のどちら

から言っても近い間柄であったから、右大臣家の息子たちの遊びに来る時はあまり隔てのない取り扱いをこの家ではしているものであって、女房たちにも懇意な者ができ、意志を通じるのに便宜があるところから、夜昼この家に来ていて、うるさい気もしながら心苦しい求婚者とは尚侍も見ていた。母の雲井くもいの雁夫人かりからもそのことについての手紙も始終寄せられていた。

「#ここから1字下げ」

まだ軽い身分ですが、しかもお許しくださる御好意を、あるいはお持ちくださることかと思われます。

「#ここで字下げ終わり」

と夕霧の大臣からも言つてよこされた。玉鬘夫人たまかすらは上の姫君をただの男とは決して結婚させまいと思つていた。次の姫君はもう少し少将の官位が進んだのちなら与えてもさしつかえがないかもしれぬと思つていた。少将は許しがなければ盗み取るうとするまでに深い執着を持つていたのである。もつてのほかの縁と玉鬘夫人は思つているのではないが、女のほうで同意をせぬうちに暴力で結婚が遂行されることは、世間へ聞こえた時、こちらにも隙すきのあつたことになつてよろしくないと思つて、蔵人少将の取り次ぎをする女房に、  
「決して過失をあなたたちから起こしてはなりませんよ」  
といましめていたので、その女も恐れて手の出しようがないのである。

六条院が晩年に朱雀院すざくの姫宮にお生まれになつた若君で、冷泉院が御子のようになつたに、あそばす四位の侍従は、そのころ十四、五で、まだ小さく、幼いはずであるが、年齢よりも大人おとなびて感じのよい若公達きんだちになつていて、将来の有望なことが今から思われる風貌ふうぼうの備わ

った人であるのを、尚侍は婿にしてみたいように思っていた。この邸は女三の尼宮の三条のお邸に近かったから、源侍従は何かの時にはよくこの子息たちに誘われて遊びにも来るのであった。妙齡の女性のいる家であるから、出入りする若い男で、自身をよく見られたいと願わぬ人はないのであるが、容貌の美しいのは始終来る蔵人少将、感じのよい貴人らしい艶な姿のあることはこの四位の侍従に超えた人もなかった。六条院の御子という思いなしがしからしめるのか、源侍従はほかからも特別なすぐれた存在として扱われている人である。若い女房たちはことさら大騒ぎしてこの人をほめたたえるのであった。尚侍も、

「人が言うとおりだね、実際すばらしい公達ね」

などと言っていて、自身が出て親しく話などもするのであった。

「院の御親切を思うと、お別れしてしまったことが、ひどい損失のような気がして、悲しくばかりなる私が、お形見とってお顔を見ることができる方でも、右大臣はあまりにごりっぱな御身分で、何かの機会でもなければお逢いすることもできないのだから」

と言っていて、尚侍は源侍従を弟と違って親しみを持っているのであったから、その人も近い親戚の家としてここへ出てくるのである。若い人に共通した浮わついたことも言わず、落ち着いたふうを見せていることで、二人の姫君付きの女房は皆物足らぬように思っていて、いどみかかるふうな冗談もよく言いかけるのだった。

正月の元日に尚侍の弟の大納言、子供の時に父といっしょに来て、二条の院で高砂を歌った人であるその人、藤中納言、これは真木柱の君と同じ母から生まれた関白の長子、などが賀を述べに来た。右大臣も子息を六人ともつれて出てきた。容貌を初めとしてまた並ぶ

人なきりつばな大官と見えた。子息たちもそれぞれきれいで、年齢の割合からいって、皆官位が進んでいた。物思いなどは少しも知らずにいるであろうと見えた。いつものように蔵人少将はことに秘蔵一息子むすこらしくその中でも見えたが、氣の浮かぬふうが見え、恋をしている男らしく思われた。

大臣は几帳きちょうだけを隔てにして、尚侍と昔に変わらぬふうで語るのであつた。

「用のない時にも伺わなければならぬのを、失礼ばかりしています。年がいつてしまひまして、御所へまいる以外の外出がもういつさいおつくうに思われるものですから、昔の話を伺いたい気持ちになります時も、そのままに済ませてしまふようになるのを遺憾に思います。若い息子たちは何の御用にももお使いください。誠意を認めていただくようにするがいいと教えております」

「もうこの家などはだれの念頭にも置いていただけのないものになっておりますのに、お忘れになりませんで御親切にお訪たずねくさいましたのをうれしく存じますにつけましても、院の御厚志が私を今になつても幸福にしてくださいのだとかたじけなく思うのでございませす」

尚侍はこんなことを言つたついでに、冷泉院からあつた仰せについて大臣へ相談をかけた。

「しかとした後援者を持ちませんものが、そうした所へ出てまいつては、かえつて苦しみますばかりかとも思われますが」

「宮中からお話があるということですが、どちらへおきめになつていいことでしょうか。院は御位みくらいをお去りになりまして、盛りの御時代は過ぎたように、ちよつと考えては思うでしょうが、たぐいも

ない御一美貌びぼうでいらっしやるのですから、まだお若々しくて、りっぱに育った娘があれば、差し上げたいという気に私もなるのですが、すぐれた後宮がおありになるのですから、その中へはいらせてよいような娘は私になくて、いつも残念に思われるのです。いったい女にょ一の宮いちみやの女御は同意されているのですか。これまでもよく人がそちらへの御遠慮から院参を断念したりするのですでしたが」

と大臣は質ただした。

「女御さんから、つれづれで退屈な時間もあなたに代わってその人の世話をしあげることと紛らしたいなどとお勧めになるものですから、私も院参を問題として考えるようになったのでございます」と尚侍は言っていた。あとからも来た高官たちはここでいっしょになつて三条の宮へ参賀をするのであつた。朱雀院すざくの御恩顧を受けた人たちとか、六条院に近づいていた人たちとかは今も入道の宮へ時おりの敬意を表しにまいることを怠らないのであつた。この家の左近中将、右中弁、侍従なども大臣の供をして出て行つた。大臣の率いて行く人数にも勢力の強大さが思われた。

夕方になつて源侍従の薫かおるがこの家へ来た。昼間一玉鬘夫人たまかすらの前へ現われたこの人よりもやや年長の公達きんだちも、それぞれの特色が備わつていて悪いところもなく皆きれいであつたが、あとに来たこの人にはそれらを越えた美があつて、だれの目も引きつけられるのであつた。美しい物好きな若い女房たちなどは、

「やっぱり違つておいでになる」

などと言つた。

「こちらのお姫様にはこの方を並べてみないでは」

こんなことを聞きにくいまでに言つてほめる。そう騒がれるのに

たるほどの優雅な举止を源侍従は見せていて、身から放つ香も清かった。貴族の姫君といわれるような人でも頭のよい人はこの人をすぐれた人と言うのはもつともなことだとくらい認めるかと思われた。尚侍は念誦堂ねんずどうにいたのであったが、

「こちらへ」

と言わせるので、東の階きざしから上がって、妻戸の口の御簾みすの前へ薫はすわった。前になった庭の若木の梅が、まだ開かぬ蕾つぼみを並べていて、鶯うぐいすの初声はつねもとのわぬ背景を負ったこの人は、恋愛に關した戯れでも言わせたいような美しい男であつたから、女房たちはいろいろな話をしかけるのであるが、静かに言葉少なな応対だけより侍従がしないのをくやしがつて、宰相の君という高級の女房が歌を詠よみかけた。

「#ここから2字下げ」

折なりて見ばいとど匂におひもまさるやと少し色めけ梅の初花

「#ここで字下げ終わり」

速く歌のできたことを薫は感心しながら、

「#ここから1字下げ」

「よそにては「#「てへん+宛」、第3水準1-84-80」木ゆかりなりとや定むらん下に匂へる梅の初花

「#ここで字下げ終わり」

疑わしくお思いになるなら袖そでを触れてごらんさい」

などと言っていると、また女房は、

「ほんとう 眞実は色よりも香」

口々にこんなことを言つて、引き揺らんばかりに騒いでいるのを、奥のほうからいざつて出た玉鬘夫人が見て、

「困つた人、あなたたちは。きまじめな人をつかまえて恥ずかしい気もしないのかね」

とそつと言つていた。きまじめな人にしてしまわれた、あわれむべき名だと源侍従は思った。この家の侍従はまだ殿上の勤めもしていないので、参賀する所も少なくて早く家に帰つて来てここへ出て来た。せんこう 浅香の木の折敷おしき二つに菓子と杯を載せて御簾みすから出された。

「右大臣はお年がゆけばゆくほど院によくお似ましになるが、侍従はお似になつたところはお顔にないが、様子にしめやかなえん艶なところがあつて、院のお若盛りがそうでおありになつたであろうと想像されます」

などと薫の帰つたあとで尚侍は言つて、昔をなつかしくばかり追想していた。あたりに残つたかんばしい香までも女房たちはほめ合つていた。

源侍従はきまじめ男と言われたことを残念がつて、二十日過ぎの梅の盛りになつたころ、恋愛を解しない、一味の欠けた人のように言われる不名誉を清算させようと思つて、藤侍従を訪問に行つた。

中門をはいつて行くと、そこには自身と同じ直衣姿のうしの人が立っていた。隠れようとその人がするのを引きとめて見ると蔵人少将くらんとであった。寝殿の西座敷のほうで琵琶びわと十三げん絃の音がするのために、夢中になつて立ち聞きをしていたらしい。苦しそうだ、人が至当と認めぬ望みを持つことは仏の道から言つても罪作りなことになるである

うと薫は思った。琴の音がやんだので、

「さあ案内をしてください。私にはよく勝手がわかっていないから」

と言つて、蔵人少将とつれだつて西の渡殿わたどのの前の紅梅の木のあたりを歩きながら、催馬楽さいばらの「梅が枝」を歌つて行く時に、薫の侍従から放散する香は梅の花の香以上にさつと内へにおつてはいったために、家の人は妻戸を押しあけて和琴を歌に合わせて弾ひきだした。

呂りよの声の歌に対しては女の琴では合わせうるものでないのに、自信のある弾き手だと思つた薫は、少将といつしよにもう一度「梅が枝」を繰り返した。琵琶も非常にはなやかな音だつた。まったく芸術的な家であるとおもしろくなつた薫は、元日とは変わった打ち解けたふうになつて、冗談じょつたんなども今夜は言つた。

御簾みすの中から和琴を差し出されたが、二人の公達きんだちは譲り合つて手を触れないでいると、夫人は末の子の侍従を使いにして、

「あなたのは昔の太政大臣の爪音つまねによく以ているということですから、ぜひお聞きしたいと思つていゝのです。今夜は驚うつくに誘われたことにしてお弾きくださつてもいいでしょう」

と言わせた。恥はずかしがつて引つ込んでしまふほどのことでもないと思つて、たいして熱心にもならず薫の弾きだした琴の音は、音波の遠く広がつてゆくはなやかな気のされるものだつた。接近することの少なかつた親ではあるが、亡なくなつたと思つと心細くてならぬ尚侍ないしのかみが、和琴に追慕の心を誘われて身にしむ思いをしていた。

「この人は不思議なほど亡なくなつた大納言によく似ておいでになつて、琴の音などはそのままのような気がされました」

と言つて、尚侍の泣くのも年のいったせいかもしれぬ。少将も

よい声で「さき草」を歌った。批評家などがいないために、皆興に乗じていろいろな曲を次々に弾き、歌も多く歌われた。この家の侍従は父のほうに似たのか音楽などは不得意で、友人に杯をすすめる役ばかりしているのを、友から、

「君も勸杯の辞にだけでも何かをするものだよ」

と言われて、「竹河」をいつしよに歌ったが、まだ少年らしい声ではあるがおもしろく聞こえた。御簾の中からもまた杯が出された。

「あまり酔っては、平生心に抑制していることまでも言ってしまうということですよ。その時はどうなさいますか」

などと言って、薫の侍従は杯を容易に受けない。小袿を下に重ねた細長のなつかしい薫香のにおいの染んだのを、この場のにわかてんとうの纏頭に尚侍は出したのであるが、

「どうしたからいたかくのだからわからない」

と言って、薫はこの家の藤侍従の肩へそれを載せかけて帰ろうとした。引きとめて渡そうとしたのを、

「ちよっとおじやまするつもりでいておそくなりましたよ」

とだけ言って逃げて行った。

蔵人少将はこの源侍従が意味ありげに訪問した今夜のようなことが続けば、だれも皆好意をその人にばかり持つようになるであろう、自分はいよいよみじめなものになると悲観していて、御簾の中の人へ恨めしがるようなこともあとに残って言っていた。

「#ここから2字下げ」

人は皆花に心を移すらん一人ぞ惑ふ春の夜の闇

「#ここで字下げ終わり」

こう言つて、歎息たんそくしながら帰ろうとしている少将に、御簾みすだの中の人が、

「#ここから2字下げ」

折からや哀れも知らん梅の花ただかばかりに移りしもせじ

「#ここで字下げ終わり」

と返歌をした。

翌朝になつて源侍従から藤侍従の所へ、

「#ここから1字下げ」

昨夜は失礼をして帰りましたが皆さんのお気持ちを悪くしなかつたかと心配しています。

「#ここで字下げ終わり」

と、婦人たちにも見せてほしいらしく仮名がちに書いて、端に、

「#ここから2字下げ」

竹河たけかはのはしうちいでしひとふし一節ひとふしに深き心の底は知りきや

「#ここで字下げ終わり」

という歌もある手紙を送つて来た。すぐに寝殿へこの手紙を持って行かれて、侍従の母夫人や兄弟たちもいっしょに見た。

「字も上手だね。まあどうして今からこんなになんにもかもととのつた人なのだろう。小さいうちに院とお別れになつて、お母様の宮様が

甘やかすばかりにしてお育てになつた方だけれど、光つた将来が今から見える人になつていらつしやる」

などと尚侍は言つて、自分の息子たちの字の拙さをたしなめたりした。藤侍従の返事は實際幼稚な字で書かれた。

「#ここから1字下げ」

昨夜はあまり早くお帰りになつたことで皆何とか言つてました。

「#ここから2字下げ」

竹河によを更かさじと急ぎしもいかなる節を思ひおかまし

「#ここで字下げ終わり」

この時以来薫は藤侍従の部屋へよく来ることになつて、姫君への憧憬を常に伝えさせるのであつた。少将が想像したとおり、家の者は皆この人をひいきにすることになつた。まだ少年らしい弟の侍従も、この人を姉の婿にして、同じ家の中で睦み合いたいと願つていた。

三月になつて、咲く桜、散る桜が混じつて春の気分の高潮に達したころ、閑散な家では退屈さに婦人たちさえ端近く出て、庭の景色ばかりがながめまわされるのであつた。玉鬘夫人の姫君たちはちよつと十八、九くらいであつて、容貌にも性質にもとりどりな美しさがあつた。姫君のほうは鮮明に気高い美貌で、はなやかな感じのする人である。普通の人の妻にはふさわしくないと母君が高く評価しているのもつとも思われるのである。桜の色の細長に、山吹などという時節に合った色を幾つか下にして重なつた裾に至るまで、どこからも愛嬌がこぼれ落ちるように見えた。身のとりなしにも貴

女らしい品のよさが添っている。もう一人の姫君はまた薄紅梅の上着にうつりのよいたくさんな黒々とした髪を持っていた。柳の糸のように掛かっているのである。背が高く、艶えんに澄み切った清楚せいそな感じのする聡明そうめいらしい顔ではあるが、はなやかな美は全然姉君一人のもののように女房たちも認めていた。暮を打つために姉妹せいまいは今向き合っていた。髪かみの質のよさ、鬢びんの毛の顔への掛かりぐあいなど両姫君とも共通してみごとなものであった。侍従が審査役になって、姫君たちのそばについているのを兄たちがのぞいて、

「侍従はすばらしくなったね。暮の審査役にしていただけのだからね」

と、大人らしくからかいながら、几帳きちょうのすぐそばにすわってしまつと、女房たちは急に居ずまいを直したりした。上の兄の中將が、「公務で忙しくしているうちに、姫君の愛顧を侍従に独占されてしまったのはつまらないね」

と言うと、次の兄の右中弁が、  
「弁官はまた特別に御用が多いから、忠誠ぶりを見ていただけないからといっても、少しは斟酌しんしやくしていただかないでは」

と言う。兄たちの言う冗談じょうだんに困って暮を打ちさして恥じらっている姫君たちは美しかった。

「御所の中を歩いていても、お父様がおいでになつたらと思うことが多い」

などと言って、中將は涙ぐんで妹たちを見ていた。もう二十七、八であったから風采ふうさいもりっぱになつていて、妹たちを父の望んでいたようにはなやかな後宮の人として見たく思っているのである。庭の花の木の中でもことに美しい桜の枝を折らせて、姫君たちが、

「この花が一番いいのね」

などと言つて楽しんで見るのを見て、中将が、

「あなたがたが子供の時に、この桜の木を私のだ私のだと取り合いをした時に、お父様は姉さんのものだとおきめになつて、お母様は小さい人のだとおきめになつたから、泣く騒ぎまではしなかつたけれど、双方とも不満足な顔をしたことを覚えていますか」

こんなことを言いだして、また、

「この桜が古い木になつたことでも、過ぎ去つた歳月が数えられて、力になつていただけただの方にもどの方にも死に別れてしまつた不幸な自分のことが思われる」

とも言つて、泣きもし、笑いもしながら平生ほど時間のたつのを気にせず、中将は母の家に行った。他家の婿になつていて、こちらへ来て静かに暮らす余裕のある日などを持たないのであるが、今日は花に心が惹かれて落ち着いているのである。尚侍はまだこうした人々を子にして持っているほどの年になつているとは見えぬほど今日も若々しくて、盛りの美貌とさえ思われた。冷泉院の帝は姫君を御懇望になつてゐるが眞実はやはり昔の尚侍を恋しく思われになるのであつて、何かによつて交渉の起こる機会がないかとお考へになつた末、姫君のことを熱心にお申し入れになつたのである。院参の問題はこの子息たちが反対した。

「どうしても見ばえのせぬことをするように思われますよ。現在の勢力のある所へ人が寄つて行くのも、自然なことなのですからね。

院はごりつぱな御一風采で、あの方の後宮に侍することができれば女として幸福至極だろうとは思いますが、盛りの過ぎた方だと今の御位置からは思われますからね。音楽だつて、花だつて、鳥だつて

その時その時に適したものでなければ魅力はありません。東宮はどうですか」

などと中将が言う。

「それはどうかね。初めからりっぱな方が上がっておいでになって、御一寵愛をもつぱらにしておいでになるのだから、それだけでも資格のない人があとではいつて行つては、苦痛なことばかり多いだろうと思うからね。お父様がほんとうにいてくださったら、この人たちの遠い未来まではわからないとしても、さしあたっては何の引け目もなしにどこへでもお出しになつただろうがね」

と尚侍が言いだしたために、めいいた空気に満ちてきたのもぜひないことである。

中将などが立つて行つたあとで、姫君たちは打ちさしておいた碁をまた打ちにかかった。昔から争っていた桜の木を賭けにして、

「三度打つ中で、二度勝つた人の桜にしましょう」

などと戯れに言い合っていた。

暗くなつたので勝負を縁側に近い所へ出てしていた。御簾を巻き上げて、双方の女房も固唾をのんで碁盤の上を見守っている。ちょうどこの時にいつもの蔵人少将は侍従の所へ来たのであつたが、侍従は兄たちといつしよに外へ出たあとであつたから、人気も少なく静かな邸の中を少将は一人で歩いてしたが、廊の戸のあいた所が目について、静かにそこへ寄つて行つて、のぞいて見ると、向こうの座敷では姫君たちが碁の勝負をしていた。こんな所を見ることのできたことは、仏の出現される前へ来合わせたと同じほどな幸福感を少将に与えた。夕明りも霞んだ日のことでさやかに物は見せないのであるが、つくづくとながめているうちに、桜の色を着たほうの

人が恋しい姫君であることも見分けることができた。「散りなんのちの」という歌のように、のちの形見にも面影をしたいほど麗艶れいえんな顔であった。いよいよこの人をほかへやることが苦しく少将に思われた。若い女房たちの打ち解けた姿なども夕明りに皆美しく見えた。暮は右が勝った。

「高麗こまの乱声らんごう（競馬けいばの時に右が勝てば奏そうされる楽がく）がなぜ始まらないの」

と得意になって言う女房もある。

「右がひいきで西のお座敷のほうに寄っていた花を、今まで左方に貸してお置きあそばしたきまりがつかまりましたのですね」

などと愉快そうに右方の者ははやしたてる。少将には何があるのかもよくわからないのであるが、その中へ混じっていっしょに遊びたい気のするものの、だれも見ないと信じている人たちの所へ出て行くことは無作法であろうと思つてそのまま帰った。

もう一度だけああした機会にあえないであろうかと、少将はそののちも恋人の邸をうかがい歩いた。

姫君たちは毎日花争いに暮らしているのであったが、風の荒く吹き出した日の夕方に梢こぎえから乱れて散る落花を、惜しく残念に思つて、負け方の姫君は、

「#ここから2字下げ」

桜ゆる風さくらゆるかぜに心の騒さわぐかな思ひぐまなき花と見る見る

「#ここで字下げ終わり」

こんな歌を作った。そのほうにいる宰相の君が、

「#ここから2字下げ」

咲くと見てかつは散りぬる花なれば負くるを深き怨みともせず

「#ここで字下げ終わり」

と慰める。右の姫君、

「#ここから2字下げ」

風に散ることは世の常枝ながらうつろふ花をただにしも見じ

「#ここで字下げ終わり」

右の女房の大輔、

「#ここから2字下げ」

心ありて池の汀みぎはに落つる花一泡あわとなりてもわが方に寄れ

「#ここで字下げ終わり」

勝ったほうの童女が庭の花の下へ降りて行って、花をたくさん集めて持って来た。

「#ここから2字下げ」

大空の風に散れども桜花おのがものぞと掻き集めて見る

「#ここで字下げ終わり」

左の童女の馴君なれきがそれに答えて、

「#ここから1字下げ」

「桜花一句にほひあまたに散らさじとおほふばかりの袖そではありやは

「#ここで字下げ終わり」

気が狭いというものですね」

などと悪く言う。

そんなことをしているうちにずんずん月日のたつていくことも妙齡の娘たちを持っている尚侍を心細がらせて、一人で姫君たちの將來のことばかりを考えていた。

院からは毎日のように御催促の消息をお送りになった。女御むすめからも、

「#ここから1字下げ」

私を他人のようにお思いになるのですか。院は、私が中ではばんでいるように憎んでおいでになりますから、それはお戯れではあつても、私としてつらいことですから、できますならなるべく近いうちにそのことの実現されますように。

「#ここで字下げ終わり」

こんなふうに懇切に言つて来た。それが宿命であるために、こうまでお望みになるのであるうから、御辞退するのはもつたいたないと尚侍は考えるようになった。手道具類は父の大臣がすでに十分の準備をしておいたのであるから、新しく作らせる必要もなくて、ただ女房の装束類その他の簡単な物だけを、娘の院参のために玉鬘夫人は用意していた。姫君の運命が決せられたことを聞いて、蔵人少将は死ぬほど悲しんで、母の夫人にどうかしてほしいと責めた。夫人

は困って、

「#ここから1字下げ」

私の出てまいる問題でないことに私が触れますのも、盲目的な親の愛からでございます。この気持ちを御理解してくださいませならば、なんとか子供の心を慰むるようにお計らいくださいませんか。

「#ここで字下げ終わり」

などといったいたしく訴えて来たのを、尚侍は、

「気の毒で困ってしまうばかり」

と歎息たんそくをしながら、

「#ここから1字下げ」

どの道をとりますことが娘の幸福であるかもわからないのですが、院からの仰せがたびたびになるものですから、私は思い悩んでいます。御愛情をお持ちくださるなら、しばらくお忍びくださって、慰安の方法を私が講じますのを待ってもらいますことが、世間体もよろしいかと思われませぬ。

「#ここで字下げ終わり」

こんな返事を書いたのは、姉君の院参を済ませてから妹を与えたいという考えらしい。同時にそれをするのも世間へ見せびらかすようなことにもなるし、少将の官をも少し進ませてからにしたほうがいいからと、こんなふうたまかすらに玉鬘夫人は思っているのであったが、男はこの望みどおりに妹の姫君へ恋を移すのは不可能に思っているのである。ほのかに顔を見てからは面影に立つほど恋しくて、どんな日にこの人をまた見る事ができるであろうかとばかり歎なげいているのであったから、もう望みのないこととしてあきらめねばならぬことになったのを非常に悲しんだ。今さら何の**かい**もあることではな

くても、なお自分の気持ちだけは通じておきたいと思って、少将が侍従の部屋へ訪ねて行くと、その時侍従は源侍従から来た手紙を読んでいたものであって、隠してしまおうとするのを、少将は奪い取ってしまった。秘密があるように思われたくもないと思って、侍従はしいて取り返そうとはしなかった。それは表面にそのことは言わずに、ただなんとなく人生が暗くなったというようなことばかりの書かれた手紙であった。

「#ここから2字下げ」

つれなくて過ぐる月日を数へつつ物一怨めしき春の暮れかな

「#ここで字下げ終わり」

ともある。こんなふうに、余裕のある恨み方をするだけで足りている人もある。自分があまりに無我夢中になって恋にあせることが一つはこの家の人に好感を与えなかったのであると、少将はこんなことを思つてさえも胸の痛くなるのを覚えるために、あまり侍従とも話をせずに、親しくする女房の中将の君の部屋のほうへ歩いて行きながらも、これもむだなことに違いないと歎息ばかりをしていた。侍従が源侍従へ書く返事の相談をするために、母の所へ出て行くのを見て少将は腹がたつのであった。若い人であるから失恋の悲しみに落ちては救われようもなくなつたようにばかり思うのだつた。

見苦しいほどにも恨めしがり、悲しがって言い続ける少将の相手になつている中将の君は、いたましく思つて返辞もあまりできないのであった。暮の勝負のあつた夕方に隙見をしたことも少将は言い

だして、

「せめてあの瞬間の楽しさだけでも、もう一度経験したい。何を目的にして今後私は生きて行くのでしょうか。けれど先はもう短い気のある私ですよ。無情も情けであるというように、死んでしまえるならかえってこれがよかったかもしれませんね」

まじめにこんなことを言うのである。同情はしていても、何とも慰める言葉のないことではないかと中将の君は思うのであった。夫人が姉君に代えて二女を許そうとしていることが少しもうれいふうでないのは、あの桜の夕べにあげ放された座敷までことごとくこの人は見ることができただけのために、こうした病的なまでの恋を一人の姫君に寄せるようになったのであると思うと、道理にも思えた。

「姫君がお聞きになりましたら、いっそうけしからん考えを持っておいでになるとお思いになって、御同情が減るでしょう。私のお気の毒に思っておりました気持ちも、もうなくなりましたよ。むちゃなことばかりお言いになるから」

正面から中将が攻撃すると、

「そんなことはかまわない。人は死ぬ時になると何もこわいものもなくなりますよ。それにしても暮の勝負にお負けになったのは気の毒だった。私を寛大にお扱くださいって、あの時目くばせをしてそばへ呼んでくださったら、よい助言ができたのに、勝たせてあげたのに」

などと言って、また、

「#ここから2字下げ」

いでやなぞ数ならぬ身にかなはぬは人に負けじの心なりけり

「#ここで字下げ終わり」

とも歌った。中将の君が笑いながら、

「#ここから2字下げ」

わりなしや強きによらん勝ち負けを心一つにいかが任する

「#ここで字下げ終わり」

と言う態度までも、冷淡に思われる少将であった。

「#ここから2字下げ」

哀れとて手を許せかし生き死にを君に任するわが身とならば

「#ここで字下げ終わり」

冗談じょうだんを混まぜては笑いもし、また泣きもして少将は夜通し中将の君の局つぼねから去らなかつた。

翌日はもう四月になっていた。兄弟たちは季の変わり目で皆御所へまいるのであつたが、少将一人はめいりこんで物思いを続けているのを、母の夫人は涙ぐんで見ていた。大臣も、

「院の御感情を書してはならないし、自分がそうした問題に携わるのもいかがと思つたので、せつかく正月に逢あつていながら何も言いださなかつたのは間違まちがいだつた。私の口からぜひと懇望すれば同意の得られないことはなかつたらうにと思われるのに」

などと言つていた。この日もいつものように、少将からは、

「#ここから2字下げ」

花を見て春は暮らしつ今日けふよりや繁しげきなげきの下に惑はん

「#ここで字下げ終わり」

という歌が恋人へ送られた。姫君の居間で高級な女房たちだけで、失望した求婚者たちのいたましいことが言い並べられている時に、中將の君が、

「生き死にを君に任すとお言いになりました時には、それを言葉だけのことは思われなかつたのですから気の毒でございましたよ」

と言っているのを、尚侍は哀れに聞いていた。大臣やその夫人に対する義理と違って、なお娘を忘れぬ志があるなら、その時には誠意の見せ方があると、妹君をそれにあてて玉鬘たまかすら夫人は思っているのである。しかし院参を阻止しようとするような態度はきわめて不愉快であるとしていた。どれほどりっぱな人であっても、普通人には絶対に与えられぬと父である関白も思っていた娘なのであるから、院参をさせることすら未来の光明のない点ないしのかみで尚侍は寂しく思っていたところへ、少將のこの手紙が来て女房たちはあわれがっていた。

中將の君の返事、

「#ここから2字下げ」

今日ぞ知る空をながむるけしきにて花に心を移しけりとも

「#ここで字下げ終わり」

「まあお気の毒な、ただ言葉の遊戯にしてしまうことになるではありませんか」

などと横から言う人もあったが、中將の君はうるさがって書き変えなかった。

四月の九日に尚侍の長女は院の後宮へはいることになった。右大臣は車とか、前驅をする人たちとかを数多くつかわした。雲井くもいの雁かり夫人は姉の尚侍をうらめしくは思っているが、今まではそれほど親密に手紙も書きかわさなかったのに、あの問題があつて、たびたび書いて送ることになったのに、それきりまたうとくなくなってしまふのもよろしくないと思つて、纏頭てんとう用として女の衣裳いしやうを幾組みも贈つた。

「#ここから1字下げ」

気の抜けたようになっております人を介抱いたしますのにかかつておりまして、私はまだ何も知らなかったのですが、知らせてくださいませんかとは、うとうとしいあそばされ方だとお怨うらみいたします。

「#ここで字下げ終わり」

という手紙が添っていた。おおように言いながらも恨みのほめかせてあるのを尚侍は哀れに思った。大臣からも手紙が送られた。

「#ここから1字下げ」

私も上がるうと思つていたのですが、あやにく謹慎日にあたるものですから失礼いたします。息子たちはどんな御用にでもお心安くお使いください。

「#ここで字下げ終わり」

と言つて、源少將、兵衛佐ひょうえのすけなどをつかわした。

「御親切は十分ある方だ」

と言つて玉鬘たまかすら夫人は喜んでいた。弟の大納言の所からも女房用に

する車をよこした。この人の夫人は故関白の長女でもあったから、どちらからいっても親密でなければならぬのであるが、実際はそうでもなかった。藤中納言は自身で来て、異腹の弟の中将や弁の公<sup>さん</sup>達<sup>たち</sup>といっしょになり、今日の世話に立ち働いていた。父の関白がいたならばと、何につけてもこの人たちは思われるのであった。蔵人少将は例のように綿々と恨みを書いて、

「#ここから1字下げ」

もう生ききれなく見えます命のさすがに悲しい私を、哀れに思うとただ一言でも言ってくださいましたら、それが力になってしばらくはなお命を保つこともできるでしょう。

「#ここで字下げ終わり」

などとも言つてあるのを、中将の君が持つて行った時に、居間では二人の姫君が別れることを悲しんでめい<sup>い</sup>つたふうになっていた。

夜も昼もたいていいっしょにいた二人で、居間と居間の間に戸があつて西東になつてい<sup>い</sup>つたことをすら飽き足らぬことに思つて、双方どちらかが一人の居間へ行つていたような姉妹<sup>きょうだい</sup>が、別れ別れになるのを悲観しているのである。ことに美しく化粧がされ、晴れ着をつけさせられている姫君は非常に美しかった。父が天子の後宮の第一人にも擬していた自分であつたがと、そんなことを思い出して、寂しい気持ちに姫君がなつていた時であつたから、少将の手紙も手に取つて読んでみた。りっぱに父もあり母もそろつてい<sup>い</sup>る家の子でいて、なぜこうした感情の節制もない手紙を書くのであろうと姫君はいぶかりながらも、それかぎりであきらめようと書かれてあるのを、真実のことかとも思つて、少将の手紙の端のほうへ、

「#ここから2字下げ」

哀れてふ常ならぬ世の一言もいかなる人に掛くるものぞは

「#ここから1字下げ」

生死の問題についてだけほのかにその感じもいたします。

「#ここで字下げ終わり」

とだけ書いて、

「こう言っただげたらどう」

と姫君が言ったのを、中將の君はそのまま蔵人少將へ送ってやった。

珍しい獲物のようにこれが非常にうれしかったにつけても、今日が何の日であるかと思うと、また少將の涙はとめどもなく流れた。またすぐに、「恋ひ死なばたが名は立たん」などと恨めしそうなことを書いて、

「#ここから2字下げ」

生ける世の死には心に任せねば聞かややまん君が一言

「#ここから1字下げ」

塚つかの上にも哀れをかけてくださるあなただと思ふことができましたら、すぐにも死にたくなるでしょうが。

「#ここで字下げ終わり」

こんなことも二度めの手紙にあるのを読んで、姫君はせねばよい返事をしたのが残念だ、あのまま送ってやったらしいと苦しく思つて、もうものも言わなくなつた。

院へ従つて行く女房も童女もきれいな人ばかりが選ばれた。儀式は御所へ女御にょごの上がる時と変わらないものであった。尚侍はまず女御のほうへ行つて話などをした。新女御は夜が更ふけてからお宿直とのいに上がつて行つたのである。后きさきの宮も女御たちも、もう皆長く侍しておられる人たちばかりで、若い人といつてはない所へ、花のような美しい新女御が上がつたのであるから、院の御寵愛がこれに集まらぬわけはない。たいへんなお覚えであつた。上ない御位みくらひにおわしました当時とは違つて、唯人ただひとのようにしておいでになる院の御姿は、よりお美しく、より光る御顔と見えた。尚侍が当分娘に添つて院にとどまつていることであろうと、院は御期待あそばされたのであるが、早く帰つてしまつたのを残念に思召おほしめし、恨めしくも思召した。

院は源侍従を始終おそばへお置きになつて愛しておいでになるのであつて、昔の光源氏が帝みかどの御寵児であつたところと同じように幸福に見えた。院の中では後の宮のほうへも、女一にょいちの宮みやの御母女御のほうへもこの人は皆心安く出入りしているのである。新女御にも敬意を表しに行くことをしながら、心のうちでは、失敗した求婚者をどう見ているかと知りたく思つていた。

ある夕方のしめやかな氣のする時に、薫かあるの侍従は藤侍従とつれ立つて院のお庭を歩いていたが、新女御の住居すまいに近い所の五葉ごようの木に藤ふじが美しくかかつて咲いているのを、水のそばの石に、苔こけを敷き物に代えて二人は腰をかけてながめていた。露骨には言わないのであるが、失恋の気持ちをそれとなく薫は友にもらすのであつた。

「#ここから2字下げ」

手にかくるものにしあらば藤の花松よりまさる色を見ましや

「#ここで字下げ終わり」

と言つて、花を見上げた薫の様子が身に沁しんで気の毒に思われた藤侍従は、自身は無力で友のために尽くすことができなかつたといふことをほのめかして薫をなだめていた。

「#ここから2字下げ」

紫の色は通へど藤の花心にえこそ任せざりけれ

「#ここで字下げ終わり」

まじめな性質の人であつたから深く同情をしていた。薫は失恋にそれほど苦しきもしていなかつたが残念ではあつた。

蔵人少将はどうすればよいかも自身でわからぬほど失恋の苦に悩んで、自殺もしかねまじいけしき気色に見えた。求婚者けしきだつた人の中では目標を二女に移すのもあつた。蔵人少将を母夫人への義理で二女の婿にもと思ひ、かつて尚侍はほのめかしたこともあつたが、あの時以後もう少将はこの家を訪たずねることをしなくなつた。院へは右大臣家の子息たちが以前から親しくまいつているのであつたが、蔵人少将は新女御のまいつて以来あまり伺候することがなくて、まれまれに殿上の詰め所へ顔を出してもその人はすぐに逃げるようにして帰つた。

帝は、故人の関白の意志は姫君を入内させることであつて、院へ奉ることではなかつたのを、遺族のつた処置は腑ふに落ちぬことに思召おぼしめして、中将をお呼びになつてお尋ねがあつた。

「天機よろしくはありませんでした。ですから世間の人も心の中で

まずいことに思うことだと私が申し上げたのに、お母様は、信じる  
ところがありにでもなるように院参のほうへおきめになったもの  
ですから、私らが意見を異にしているようなことは言われなかった  
のです。ああしたお言葉をお上<sup>かみ</sup>からいただくようでは私の前途も悲  
観されます」

中将は不愉快げに母を責めるのだった。

「何も私がそうでなければならぬときめたことではなく、ずいぶん  
躊躇<sup>ちゆうちゆう</sup>をしたことなのだがね。お気の毒に存じ上げるほどぜひにと院  
の陛下が御懇望あそばすのだもの、後援者のない人は宮中にはいつ  
てからのみじめさを思つて、はげしい競争などはもうだれもなさら  
ないような院の後宮へ奉つたのですよ。だれも皆よくないことであ  
れば忠告をしてくれればいいのだけれど、その時は黙つていて、今  
になると右大臣さんなども私の処置が悪かつたように、それとなく  
おっしゃるのだから苦しくてなりませんよ。皆宿命なのですよ」

と穏やかに尚侍は言つていた。心も格別騒いではないのである。

「その前生の因縁というものは、目に見えないものですから、お上  
がああ仰せられる時に、あの妹は前生からの約束がありましてなど  
という弁解は申し上げられないではありませんか。中宮<sup>ちゆうぐう</sup>がいらつし  
やるからと御遠慮をなすつても、院の御所には叔母<sup>おば</sup>様の女御さんが  
おいでになつたではありませんか。世話をしてやろうとか、何とか、  
言つていらつしやつて御了解があるようでも、いつまでそれが続く  
ことですかね、私は見ていきましょう。御所には中宮がおいでになる  
からつて、後宮がほかにだれも侍していないでしょうか。君に仕え  
たてまつることでは義理とか遠慮とかをだれも超越してしまうこと

ができると言つて、宮仕えをおもしろいものに昔から言うのではありませんか。院の女御が感情を害されるようなことが起こつてきて、世間でいろんな噂うわさをされるようになれば、初めからこちらのしたことが間違まちがいだったとだれにも思われるでしょう」

などとも中將は言つた。兄弟がまたいっしょになつても非難するのを玉鬘夫人たまかすらは苦しく思つた。

その新女御を院が御一寵愛ちよらひあひこあそばすことは月日とともに深くなつた。七月からは妊娠をした。悪阻つわりに悩んでいる新女御の姿もまた美しい。世の中の男が騒いだのはもつともである、これほどの人を話だけでも無関心で聞いておられるわけではないのであると思われた。

御一愛姫あいぎを慰めようと思召して、音楽の遊びをその御殿でおさせになることが多くて、院は源侍従をも近くへお招きになるので、その人の琴の音ねなどを薫は聞くことができた。この侍従が正月に「梅が枝」を歌いながら訪ねて行つた時に、合わせて和琴を弾ひいた中將の君も常にそのお役を命ぜられていた。薫は弾き手のだれであるかを音に知つて、その夜の追想が引き出されもした。

翌年の正月には男踏歌おとこつづかがあつた。殿上の若い役人の中で音楽のたしなみのある人は多かつたが、その中でもすぐれた者としての選にはいつて薫の侍従は右の歌手の頭とうになつた。あの蔵人少將くらんしょうじょうは奏樂者の中にはいつていた。初春の十四日の明るい月夜に、踏歌の人たちは御所と冷泉院れいぜいへまいつた。叔母おばの女御も新女御も見物席を賜わつて見物した。親王がた、高官たちも同時に院へ伺候した。源右大臣と、その舅家きゅうけの太政大臣の二系統の人たち以外にはなやかなきれいな人はないように見える夜である。宮中で行なつた時よりも、院の御所の踏歌を晴れがましいことに思つて、人々は細かな用意を見せ

て舞った。また奏し合った中でも蔵人少将は、新女御が見ておられるであろうと思つて興奮をおさえることができないのである。美しい物でもないこの夜の綿の花も、挿頭かざす若一公きんたち達に引き立てられて見えた。姿も声も皆よかつた。「竹河」を歌つて階かたはしのもとへ歩み寄る時、少将の心にもまた去年の一月の夜の記憶がよみがえつてきたために、粗相も起こしかねないほどの衝動を受けて涙ぐんでいた。後の宮きよみやの御前で踏歌がさらにあるため、院もまたそちらへおいでになつて御覧になるのであつた。深更になるにしたがつて澄み渡つた月は昼より明るく照らすので、御簾みすの中からどう見られているかということに上気して、少将は院のお庭を歩くのでなく漂つて行く氣持ちでまいつた。杯を受けて飲むことが少ないと言つて、自身一人が責められることになるのも恥ずかしかつた。

踏歌の人たちは夜通しあちらこちらとまわつたために翌日は疲労して寝ていた。薫侍従に院からのお召があつた。

「苦しいことだ。しばらく休養したいのに」

と言いながら伺候した。御所で踏歌を御覧になつた様子などを院はお尋ねになるのであつた。

「歌頭かとうは今まで年長者がするものなのだが、それに選ばれるほど認められているのだと思つて満足した」

と仰せられてかわいく思召す御さまである。「万春楽ばんしゅんらく」(踏歌の地に弾ひく曲)の譜をお口にあそばしながら新女御の御殿へおいでになる院のお供を薫はした。前夜の見物に自邸のほうから来ていた人たちが多くて、平生よりも御簾の中のけはいがはなやかに感ぜられるのである。渡殿わたどのの口の所にしばらく薫はいて、声になじみのある女房らと話などをしていた。

「昨夜の月はあまりに明るくて困りましたよ。蔵人少将が輝くように見えましたね。御所のほうではそうでもありませんでしたが」  
などと言う薫の言葉を聞いて、心に哀れを覚えている女房もあつた。

「夜のことによくわかりませんでした、あなたがだれよりもごりっぱだったということは一致した評でございました」

などと口―上手じょうずなことも言つて、また中から、

「#ここから2字下げ」

竹河のその夜のことは思ひいづや忍ぶばかりの節ふしはなけれど

「#ここで字下げ終わり」

だれかの言ったこの歌に、薫は涙ぐまれたことで、自分の心にも深くしみついている恋であることがわかった。

「#ここから2字下げ」

流れての頼みむなしき竹河に世はつきものと思ひ知りにき

「#ここで字下げ終わり」

と答えて、物思いのふうの見えるのを女房たちはおかしがった。

その人たちも薫は蔵人少将などのように露骨あわれに恋は告げなかったが、心の中に思いを作っていたのであろうと憐あわれんではいたのである。

「少しよけいなことまでも言つたようですが、他言をなさいませんように」

と言つて、薫が立つて行こうとする時に、

「こちらへ来るように」

と、院の仰せが伝えられたので、晴れがましく思いながら新女御の座敷のほうへ薫はまいった。

「以前六条院で踏歌の翌朝に、婦人がたばかりの音楽の遊びがあったそうで、おもしろかったと右大臣が言っていた。何かから言っても六条院がその周囲へお集めになったほどのすぐれた人が今は少なくなつたようだ。音楽のよくできる婦人などもたくさん集まっていたのだからおもしろいことが多かつたであろう」

などと、その時代を御追想になる院は、楽器の用意をおさせになつて、新女御には十三一絃げん、薫には琵琶びわをお与えになつた。御自身は和琴をお弾ひきになりながら「この殿」などをお歌いあそばされた。新女御の琴は未熟らしい話もあつたのであるが、今では傷のない芸にお手ずからお仕込みになつたのである。はなやかできれいな音を出すことができ、歌もの、曲ものも上手うまいに弾いた。何にもすぐれた素質を持つていらしい、容貌ようぼうも必ず美しいであろうと薫は心の惹ひかれるのを覚えた。こんなことがよくあつて、新女御と薫の侍従は親しくなつていた。反感を引くようにまでは怨うらみかけたりはしなかつたが、何かのおりには失恋なげの歎なげきをかすめて言う薫を、女御のほうではどう思つたか知らない。

四月に院の第二皇女がお生まれになつた。きわめてはなやかなこととの現われてきたのではないが、院のお心持ちを尊重して、右大臣を初めとして産養うぶやしなひを奉る人が多かつた。尚侍はお抱きした手から離せぬようにお愛し申し上げていたが、院から早くまいるようにといふ御催促がしきりにあるので、五十日目ぐらいに、新女御は宮をおつれ申して院へまいった。院はただお一人の内親王のほかには御子

を持たせられなかったのであるから、珍しく美しい少皇女をお得になつたことで非常な御満足をあそばされた。

以前よりもいつそう御一寵愛がまさつて、院のこの御殿においてなることの多くなつたのを、叔母の女御付きの女房たちなどは、こんな目にあわないではならなかつたらうかなどと思つてねたんだ。叔母と姪との二人の女御の間には嫉妬も憎しみも見えないのであるが、双方の女房の中には争いを起こす者があつたりして、中將が母に言ったことは、兄の直覚で真実を予言したものであつたと思われた。尚侍も、こんな問題が続いて起こる果てはどうなることである。娘の立場が不利になつていくのは疑いないことである、院の御愛情は保てても、長く侍しておられる人たちから、不快な存在のように新女御が見られることになつては見苦しいと思つていた。

帝も院へ姫君を奉つたことで御不快がっておいになり、たびたびその仰せがあるということ告げる人があつたために、尚侍は申しわけなく思つて、二女を公式の女官にして宮中へ差し上げることきめて、自身の尚侍の職を譲つた。尚侍の辞任と新任命は官で重大なこととして取り扱われるのであつたから、ずっと以前から玉鬘には辞意があつたのに許されなかつたところへ、娘へ譲りたいと申し出たのを、帝は御一伯父であつた大臣の功勞を思召す御心から、古い昔に例のあつたことをお思いになつて、大臣の未亡人の願いをお納れになり、故太政大臣の女は新尚侍に任命された。これはこの人に定められてあつた運命で、母の夫人の単独に辞職を申し出た時にはお許しがなかつたのであろうと思われた。眞実は後宮であつて、尚侍の動かない地位だけは得ているのであるから、競争者の中に立つようなこともなくて、氣樂に宮中におられることとして玉鬘夫人

は安心したのであるが、少將のことを雲井くもいの雁夫人かりから再度申し込んで来た以前のことに対して、自分はそれに代える優遇法を考えていると言ったのであったがどう思っているであろうと、そのことだけを気の済まぬことに思った。二男の弁を使いにして玉鬘夫人は右大臣へ隔てのない相談をすることにした。宮中からこういう仰せがあるということを書いて、

「娘を宮仕えにばかり出したがると世間で言われるようなことがないかと、そんなことを私は心配しております」

と伝えさせると、

「お上かみが不愉快に思召すのがお道理であるように私も承っております。それに公職におつきになったのですから、その点でも宮中に仕出しないのは間違いです。早くお上げになるほうがいいと思います」

という言葉で大臣は答えて来た。院の女御の場合のように、中宮の御了解を得ることに努めてから、玉鬘は二女を御所へ奉った。良おっ人の大臣が生きておれば、わが子は肩身狭くかくしてまでの宮仕えはせずともよかつたはずであると夫人は物哀れな気持ちをもた得たのであった。姉君は有名な美人であることを帝もお知りあそばされていたのであったが、その人でない妹のまいったことで御満足はあそばされないようであったが、この人も洗練された貴女のふうのある人であった。前尚侍はこれが終わってのち尼になる考えを持っていたが、

「あちらもこちらもお世話をなさらなければならぬことが多いのですから、今日ではまだ仏勤めをなさいますのに十分の時間がなくて、尼におなりになったかいもなくなるでしょう。もうしばらく

の間そのまま、どちらの姫君のことも、これで安心というところまで見きわめになってから、専念に道をお求めになるほうがいい」と子息たちが言うので、そのことも停滞した形であった。

御所の娘のほうへは時々夫人が出かけて行って、二、三日とどま<sup>つ</sup>って世話をやいてもするのであったが、昔をお忘れきりにならぬお心に見える院の御所のほうへは、まいらねばならぬことがあつても夫人は行かないのであつた。迷惑しながら、もつたいなく心苦し<sup>く</sup>く存じ上げた昔があるために、だれの反対をも無視して長女を院へ差し上げたが、自分の上<sup>に</sup>まで仮にもせよ浮いた名の伝えられることになつては、これほど恥ずかしいことはないのであるからと夫人は思つていても、そのことは新女御に言われぬことであつたから、自分を昔から父は特別なもののように愛してくれて、母は桜の争いの時を初めとして、何によらず妹の肩を持つほうであつたから、こんなふう<sup>に</sup>に愛の厚薄をお見せになるのであると長女は恨めしがつていた。昔にかかわるお恨めしさのほう<sup>が</sup>深い院も、女御に御同情あそばして、母夫人を冷淡であると言つておいでになつた。

「過去の人間の所へよこされたあなたが軽蔑<sup>けいべつ</sup>されるのももつともだ」などと仰せになつて、そんなことによつてもますますこの人をお愛しになつた。

次の年にはまた新女御が院の皇子をお生みした。院の多くの後宮の人たちにそうしたことは絶えてなかつたのであるから、この宿命の現われに世人も驚かされた。院はまして限りもなく珍しく思召<sup>おしめ</sup>してこの若宮をお愛しになつた。在位の時であつたなら、どれほどの宮の地位を光彩あるものになしえたかもしれぬ、もう今では過去

へ退いた自分から生まれた一親王にこの宮はすぎないのが残念であるとも院は思召した。女一の宮を唯一の御子としてお愛しになった院が、こんなふうに新しい皇子、皇女の父におなりあそばされたことも、かねて思いがけぬことであつた中にも、はじめてお得になつた男宮をことさら院の御珍重あそばすようになったことで、女一の宮の母女御も、こんなにまで専寵の人をおつくりにならないでもいはずであると、院をお恨み申し上げるようになり、新女御をねたむようにもなつた。そうなつてから新女御の立場はますます苦しくなり、双方の女房の間に苦い空気がかもされてゆけば、自然二人の女御の交情も隔たつてゆく。世間のこととしても、人の新しい愛人に対するよりも、古い妻に同情は多く寄るものであるから、院に奉仕する上下の役人たちも、貴い御地位にあらせられる後の宮、女一の宮の女御のほうに正しい道理のあるように見て、新女御のことは反感を持って何かと言ひ歩くというような状態になつたのを、兄の公達らも、夫人に、

「だから私たちの申したことは間違つていなかつたでしょう」

と言つて責めた。夫人もまた世間の噂と院の御所の空気に苦勞ばかりがされて、

「かわいそうな女御さんほどに苦しまないでも幸福をやすやすと得ている人は世間に多いのだからね。条件のそろつた幸運に恵まれている人でなければ宮仕えを考えてはならないことだよ」

と歎息していた。以前の求婚者で、順当に出世ができ、婿君であつても恥ずかしく思われない人が幾人もあつた。その中でも源侍従と言われた最も若かつた公子は参議中将になつていて、今では「匂いの人」「薫る人」と世間で騒ぐ一人になつていた。重々しく落ち

着いた人格で、尊い親王がた、大臣家から令嬢との縁談を申し込まれても承知しないという取り沙汰ざたを聞いても、

「以前はまだたよりない若い方だったが、りっぱになってゆかれるらしい」

玉鬘夫人たまかすらは寂しそうに言っていた。

蔵人くらんどの少将だった人も三位の中將とか言われて、もう相当な勢いを持っていた。

「あの方は風采ふうさいだっておよろしかったではありませんか」  
などと言つて、少し蓮葉はすはな性質の女房らは、

「今のうるさい御境遇よりはそのほうがよかったですね」

とささやいたりしていた。しかし今も玉鬘夫人の長女に好意を持つ者があつた。この三位中將は初恋を忘れることができず、悲しくも、恨めしくも思つて、左大臣家の令嬢と結婚をしたのであるが、妻に対する愛情が起こらないで「道のはてなる常陸帯ひたち」（かことばかりも逢あはんとぞ思ふ）などと、もう翌日はむだ書きに書いていたのは、まだ何を空想しているのかわからない。院の新女御は人事関係の面倒さに自邸へ下がっていることが多くなつた。母の夫人は娘のために描いた夢が破れてしまったことを残念がつていた。御所へ上がったほうの姫君はかえつてはなやかに幸福な日を送つていて、世間からも聡明そうめいで趣味の高い後宮の人と認められていた。

左大臣が薨なくなつたので、右が左に移つて、按察使大納言あせちで左大將にもなつていた玉鬘夫人の弟が右大臣に上つた。それ以下の高官たちにも異動が及んで、薫中將は中納言になり、三位の中將は参議になつた。幸運な人は前にも言つた二つの系統のほかに見られない時代と思われた。源中納言は礼まわりに前尚侍の所へ来て、庭で拝

礼をした。夫人は客を前に迎えて、

「こんなあばら家やになつていきます家を、お通り過ぎにならず、お寄りくださいます御好意を拝見いたしましたしても、六条院の皆御恩だと昔が思われてなりません」

などと言っている声に愛嬌あいぎょうがあつて、はなやかに美しい顔も想像されるのであつた。こんなふうでいられるから、院の陛下は今もこの人がお忘れになれないのであるとそのうち一つの事件をお引き起こしになる可能性もあることを薰は感じた。

「陞任しやうじんをたいした喜びとは思つておりませんが、この場合の御一揆あい捌さつにはどこよりも先にと思つて上がったのです。通り過ぎるなどというお言葉は平生の怠慢をおしかりになつておっしゃることですか」

新中納言はこう言うのであつた。

「今日のようなおめでたい日に老人の繰り言などはお聞かせすべきでないとお慮おぼはされますが、ただの日に訪ねたずなくださるお暇はありにならないのですし、手紙に書いてあげますほどの筋道のあることではないのですから、聞いてくださいませ。院に侍しております人がね、苦しい立場に置かれまして煩悶はんもんをばかりしておりますね。はじめは女一の宮の女御さんを力のように思つていましたし、後の宮様も六条院の御関係で御寛大に御覧ごらんくださるだろうと考えていたことですが、今日はどちらも無礼な闖入者ちやうしやとしてお憎みあそばすようですね。困りましてね。宮様がただけは院へお置き申して、存在を皆様にきらわれる人だけを、せめて家で気楽きらくに暮らすようにと思ひまして帰らせたのですが、それがまた悪評の種まを蒔くことになつたらしゅうございます。院も御一機嫌きげんを悪くあそばしたような

お手紙をくださいますのですよ。機会がありましたら、あなたからこちらの気待ちをほのめかしてお取りなしくくださいませ。離れようのない関係を双方にお持ちしているのですから、お上げしました初めは、どちらからも御好意を持っていただけるものと頼みにしたものです。結果はこれでございますもの、私の考えが幼稚であったことばかりを後悔いたしております」

玉鬘夫人は歎息たんそくをしていた。

「そんなにまで御心配をなさることではないと思います。昔から後宮の人というものは皆そうしたものになっていくのですからね、ただ今では御位みくらいをお去りになって無事閑散な御境遇でも、後宮にだけは平和の来ることはないのですから、第三者が見れば君寵くんちゆうに変わりはないと見えることもその人自身にとっては些細せさいな差が生じるだけでも恨めしくなるものらしいですよ。つまりぬことに感情を動かすのが女御后にょみごの通弊つうへいですよ。それくらいの故障もないとお思いになって宮廷へお上げになったのですか。御認識不足だったのですね。ものを気におかけにならないで冷静にながめていらっしゃればいいのです。男が出て奏上するような問題ではありませんよ」

と遠慮なく薫が言うと、

「お逢あいしたら聞いていただこうと思つて、あなたをお待ちばかりしていましたが、私をおたしなめにばかりなるそのあなたの理窟りくつも、私は表面しか御覧にならない理窟だと思ひますよ」

こう言つて玉鬘夫人は笑つていた。人の母らしく子のために気をもむらしい様子ではあるが、態度はいたつて若々しく娘らしかった。新女御もこんな人なのであろう、宇治の姫君に心の惹ひかれるのも、こうした感じよさをその人も持つているからであると源中納言は思

っていた。

若い尚侍もこのごろは御所から帰って来ていた。そちらもあちらも姫君時代よりも全体の様子の重々しくなった、若い閑暇の多い婦人の居所になつてゐることが思われ、御簾の中の目を晴れがましく覚えながらも、静かな落ち着きを見せている薫を、夫人は婿にしておいたならと思つて見ていた。

新右大臣の家はすぐ東隣であつた。大臣の任官一披露の大一饗宴に招かれた公達などがそこにはおおぜい集まつていた。兵部卿の宮は左大臣家の賭弓の二次会、相撲の時の宴会などには出席されたことを思つて、第一の貴賓として右大臣は御招待申し上げたのであつたが、おいでにならなかつた。大臣は秘蔵にしている二女のためにこの宮を婿に擬してゐるらしいのであるが、どうしたことが宮は御冷淡であつた。来賓の中で源中納言の以前よりもいつそうりつぱな青年高官と見える欠点のない容姿に右大臣もその夫人も目をとめた。

饗宴の張られる隣のにぎやかな物の気配、行きちがう車の音、先払いの声々にも昔のことが思い出されて、故太政大臣家の人たちは物哀れな気持ちになつていた。

「兵部卿の宮がお薨れになつて間もなく、今度の右大臣が通い始めたのを、軽佻なことのようには人は非難したものだけれど、愛情が長く変わらず夫婦にまでなつたのは、一面から見ても感心な人たちと言つていい。だから世の中のこととは何を最上の幸福の道とはきめて言えないのだね」

などと玉鬘夫人は言つていた。

左大臣の息子の参議中将が隣に大饗のあつた翌日の夕方ごろにこ

の家へ訪ねて来た。院の女御が家に帰っていることでいっそう美しく見える身の作りもして来たのである。

「よい役人にしていただきましたことなどは何とも思われませんか。心に願ったことのかなわなない悲しみは月がたてばたつほど積っていつてどうしようもありません」

と言いながら涙をぬぐう様子でややわざとらしい。二十七、八で、盛りの美貌を持つはなやかな人である。

帰ったあとで、

「困った公達だね。何でも思いのままになるものと見ていて、官位の問題などは念頭に置いていないようだね。こちらの大臣がお薨れにならなければ、ここの若い人たちもあの人ら並みに、恋愛の遊戯を夢中になってしただらうにね」

と言って、玉鬘夫人は歎息をしていた。右兵衛督、右大弁で参議にならないため太政官の政務に携わらないのを夫人は愁わしがつていた。侍従と言われていた末子は頭中將になっていた。年齢からいつてだれも官等の陞進がおそいほうではないのであるが、人におけるると言って歎いている。参議の職はいかにも若い高官らしく、ぐあいがいいのだけれど。

底本：「全訳源氏物語 下巻」角川文庫、角川書店

1972（昭和47）年2月25日改版初版発行

1995（平成7）年5月30日40版発行

このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>)

で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月10日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2004年3月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

橋姫

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）濡れぬ

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）巢一守り

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」しめやかにこころの濡れぬ川霧の立ち

「#地から3字上げ」まふ家はあはれなるかな （晶子）

そのころ世間から存在を無視されておいでになる古い親王がおいでになった。母方なども高い貴族で、帝の御継嗣みかじにおなりになってもよい御資格の備わった方であったが、時代が移って、反対側へ政権の行ってしまふことになった変動のあとでは、まったく無勢力な

方におなりになつて、外戚がいせきの人たちも輝かしい未来の希望を失つたことに皆悲観をして、だれもいろいろな形でこの世から逃避をしてしまい、公にも私にもたよりのない孤立の宮でおありになるのである。夫人も昔の大臣の娘であつたが、心細い逆境に置かれて、結婚の初めに親たちの描いていた夢を思い出してみると、あまりな距離のある今日の境遇が悲しみになることもあるが、唯一の妻として愛されていることに慰められていて、互いに信頼を持つ相愛の御夫妻ではあつた。年月がたつても子をお持ちになることがなかつたために、寂しい退屈をまぎらすような美しい子供がほしいと宮は時々お言いになるのであつたが、思いがけぬころに一人の美しい女王じやうおうが生まれた。これを非常に愛してお育てになるうちに、また続いて夫人が妊娠した時に、今度は男であればよいとお望みになつたにかかわらずまた姫君が生まれた。安産だったのであるが、産後に病をして夫人は死んだ。この悲しい事実の前に宮は歎なげきに溺おほれておいでになつた。世の中にいればいるほど冷遇されて、堪たえがたいことは多くても、捨すてがたい優しい妻が自分の心を遁世とんせいの道へおもむかしめなほい絆はだしになつて、今日までは僧にもならなかつたのである、一人生き残つて男やもめになつたことは堪たえがたいことではないが、小さい子供たちを男手で育ててゆくことも親王の体面としてよろしくないことであるから、この際に入道しようとも宮は思召おしほしたのであるが、保護者もない二人の幼い姫君をお捨てになることを悲しく思召して、そのまま実行を延ばしておいでになるうちに年月がたち、それぞれ成長していく女王たちの美しい顔を御覧になるのを、毎日お慰めにして暮らしておいでになつた。あとで生まれたほうの女王を侍女たちも、

「この方のお産があつて奥様がお亡くなりになつたと思つと残念な気がして」

こんなことを言つて熱心に世話もしないのであつたが、宮は終焉の床で、夫人がもう意識も朦朧になつていながら、生まれた姫君を気がかりに思つふうで、

「私はもう生きられませんから、この子だけを形見だとお思ひになつて愛してやつてください」

と一言だけ言い置いたことをお思ひになつて、夫人の命の亡ぶ際にこの世へ出た子に対しては、その宿命が恨めしくお思ひになるはずであるが、仏の思召してこうなつたのであろう、命の終わりにまでこの子をかわいく思い、自分に頼んで行つたのであるからとことさらこの女王を愛しておいでになつた。端麗な容貌で、普通の美に超えた姫君であつた。姉君は静かな貴女らしいところが見えて、容貌にも身のとりなしにもすぐれた品のよさのある女王であつた。宮がこの姫君をたいせつにあそばすお気持ちにはまた格別なものがあつて、どちらも劣りまさりなくおかしきになつていたが、お心になかなわぬことが多く、年月に添えて宮家の御財政は窮迫していった。女房たちも心細がつて辛抱ができずに一人一人とお邸から出て行つた。夫人の死んだ際で、妹君の乳母などにも適当な人間をお選びになる余裕もなかつたため、身分の低い乳母には低い節操よりなくて、まだ姫君の小さいうちにお邸を出てしまつた。それ以後は宮がお手ずから幼い女王の世話をあそばされた。

さすがにお邸は広くてみごとなものであつたが、池や山の形にだけ以前の面影を残して荒廃する庭を、つれづれな御生活の宮はよくながめておいでになつた。家司などにも気のきいた者などはなくて、

修繕を少しずつ加えるような方法もとらないから、雑草が高く伸び、軒の忍草しのぶが得意に青をひろげていた。その季節季節の草木も、同じ趣味のある夫人といっしょにおながめになることで昔はお心の慰めになったのであるが、孤独の今の宮のお目はそうした自然の色もただ寂しく親しめないものに見られて、持仏の装飾だけを特にごりつばにおさせになり、毎日仏勤めばかりをしてお暮らしになった。子という絆きずなに引かれて出家のできぬことすら不幸な運命であると残念がられる宮でおありになったから、まして普通の人ができるような再婚などを今さらしようとは思わぬ、とこういう気持ちは年月と共に加わり、それだけ世の中から遠のいておゆきになる宮であつて、お心だけは僧と同じになつておいでになり、夫人の歿後ぼつしは異性を求めになるようなお心は戯れにもお持ちになることはなかった。

「そんなにいつまでも夫人のことばかりを思つておいでにならないでもいいではないか。妻に死別した直後にはこれほど悲しいことはないと思うのが普通だろうが、時がたてばたつたように心境の変化がなくてはならない。世間のだれもがするようにあとの夫人を選定されて、結婚をなすつたら、宮家の心細い御経済も緩和されると思うが」

「こんなお陰口かげぐちも言いながら似合わしい第二の夫人のお取り持ちをしようとする人たちも相当多いのであるが、宮は耳をお傾けにならなかった。

念誦ねんじゆをあそばすひまひまは姫君たちの相手におなりになつて、もうだいぶ大きくなつた二女王に琴けいこの稽古をおさせになったり、碁を打たせたり、詩の中の漢字の偏を付け比べる遊戯をおさせになつたりしてごらんになるのであるが、第一女王は品よく奥深さのある容よう

貌を備え、第二の姫君はおおようで、可憐な姿をして、そして内氣に恥ずかしがるふうのあるもとどりどりの美しさであった。春のうららかな日のもとで池の水鳥が羽を並べて游泳をしながらそれぞれにさえずる声なども、常は無関心に見もし、聞きもしておいでになる心に、ふと番いの離れぬうらやましさをお感じさせる庭をながめながら、女王たちに宮は琴を教えておいでになった。小さい美しい恰好でそれぞれの楽器を熱心に鳴らす音もおもしろく聞かれるために、宮は涙を目にお浮かべになりながら、

「#ここから1字下げ」

「打ち捨ててつがひ去りにし水鳥のかりのこの世に立ち後れけん

「#ここで字下げ終わり」

悲しい運命を負っているものだ」

とお言いになり、その涙をおぬぐいになった。御容貌のお美しい親王である。長い精進の御生活にやせきつておいでになるが、そのためにまたいつそう艶なお姿にもお見えになった。姫君たちとおいでになる時は礼儀をおくずしにならずに、古くなった直衣を着ておいでになる御様子も貴人らしかった。大姫君が硯を静かに自身のほうへ引き寄せて、手習いのように硯石の上へ字を書いているのを、宮は御覧になって、

「これにお書きなさい。硯へ字を書くものでありませんよ」  
と、紙をお渡しになると、女王は恥ずかしそうに書く。

「#ここから2字下げ」

いかでかく巢立ちけるぞと思ふにもうき水鳥の契りをぞ知る

「#ここで字下げ終わり」

よい歌ではないがその時は身に沁しみんで思われた。未来のあるいい字ではあるがまだよく続けては書けないのである。

「若君もお書きなさい」

とお言いになると、これはもう少し幼い字で、長くかかって書いた。

「#ここから2字下げ」

泣く泣くも羽うち被きする君なくばわれぞ巢一守もりになるべかりける

「#ここで字下げ終わり」

もう着ふるした衣服を着ていて、この場に女房たちの侍しているものもない、可憐かれんな美しい姉妹きょうだいを寂しい家の中に御覧になる父宮が心苦しく思召さないわけもない。経巻を片手にお持ちになって御覧になり、宮は琴に合わせて歌をうたっておいでになった。

大姫君には琵琶びわ、中姫君（三女のなき時も次女は中姫と呼ぶ）には十三一絃げんの琴をそれに合わせながら始終教えておいでになるために、おもしろく弾くようになっていた。父帝にも母女御にも早くお死に別れになって、はかばかしい保護者をお持ちにならなれたために、宮は学問などを深くあそばす時がなかった。まして処世法などは知っておいでになるわけもない貴人と申してもまた驚くばかり上品で、おおような女のような弱い性質を備えておいでになって、父帝からお譲りになった御遺産とか、外戚がいせきの祖父である大臣の遺産と

か、永久に減るものと思われぬ多くのものが、どこへだれが盗んで行ったか、なくなつたかもしれぬことになつてしまつて、ただ室内の道具などにだけ華奢な品々が多く残つていた。伺候する者もなく、お力になつて差し上げようとする人たちもない。御徒然なために雅楽寮の音楽専門家のうちのすぐれたのを呼び寄せになり、芸事ばかりを熱心にお習いになつて大人におなりになつた方であるから、音楽にはひいでておいでになるのである。光源氏の弟宮の八の宮と呼ばれた方で、冷泉院が東宮でおありになつた時代に、朱雀院の御母后が廢太子のことを計画されて、この八の宮をそれにお代えしようとなされ、その方の派の人たちに利用をおされになつたことがあるため、光源氏の派からは冷ややかに扱われになり、それに續いてこの世は光源氏派だけの栄える世になつて今日に及んでいるのであるから、八の宮は世の中と絶縁したふうにおなりになり、その上に不幸のために僧と同じような暮らしをあそばして、現世の夢は皆捨てておしまいになつたのである。

そのうちに八の宮のお邸は火事で焼亡してしまつた。この災難のために京の中でほかにお住みになるほどの所も、適当な邸もおありにならなかつたので、宇治によい山莊を持つておいでになつたから、そこへ行つて住まれることになつた。世の中に執着はお持ちにならぬが、いよいよ京を離れておしまいになることは宮のお心に悲しかつた。網代の漁をする場所に近い川のそばで、静かな山里の住居をお求めになることには適せぬところもあるがしかたのない御事であつた。町の中でなく山や水の景には恵まれた里であつたから、それらをながめては寂しい物思いを多くお作りになる宮であつた。こうした都に遠い田舎へお移りになつても、妻がいたならばという歎き

をあそばさない時とはなかった。

「#ここから2字下げ」

見し人も宿も煙となりにしをなどてわが身の消え残りけん

「#ここで字下げ終わり」

これではお生きがいもあるまいと思われるほど故人にこがれておいでになるのであった。京にお住いになった時すら来訪がなかったのであるから、山の重なった中へはるばるお訪ねする人などはない。朝立った霧が終日山を這っている日のような暗い気持ちで宮は暮らしておいでになったが、この宇治に聖僧として尊敬してよい阿闍梨あじやじが一人いた。仏道の学問の深くあることを世間からも認められていながら、宮廷の御用の時などにもなるべく出るのを避けて、宇治の自坊にばかりこもっているのであったが、八の宮が宇治の山荘へ移っておいでになって、孤独な生活をお始めになり、仏道を研究されようとして、宗教の書物を読んでおいでになるのを知って、ありがたいことに思い時々御訪問に来るのであった。今まで独学的に読んでおいでになった書物に書かれたことの、深い意味と理解のしかたをお授けするようなことも阿闍梨はできた。この世はただかりそめのものであること、味気ない所であることをさらにこの僧からお教えられになって、

「もう心だけは仏の御弟子みでしに変わらないのですが、私には御承知のように年のゆかぬ子供がいることで、この世との縁を切りえずに僧にもなれない」

などと、お思いになることも隔てなく阿闍梨へ宮はお語りになる

のだった。この阿闍梨は冷泉院へもお出入りして、院へ経などをお教え申し上げる人であった。ある時京へ出たついでに宇治の阿闍梨は院の御所へまいったが、院は例のような仏書をお出しになつて質問などをあそばした。その日に阿闍梨が、

「八の宮様は御一聰明そつめいで、宗教の学問はよほど深くおできになつております。仏様に何かのお考えがあつてこの世へお出しになつた方ではございますまいか。悟りきつておいでになる御心境はりっぱな高僧のようにもお見えになります」

こんなお話をした。

「まだ出家はされていないのか。『俗聖そくせい』などと若い者たちが名をつけているが、お気の毒な人だ」

と院は言つておいでになつた。薫かおるの中将もこの時御前にいて、自分も人生をいとわしく思いながらまだ仏勤めもたいしてようせずに、怠りがちなのは遺憾であると思ひ、俗ながら高僧の精神で生きるのにはどんな心得があるのであるかと、八の宮のお噂うわさに耳をとめていた。

「出家のお志は十分にお持ちになるのでございますが、最初は奥様へのお思いやりで躡躑しつしつなされましたし、今日になつてはまた哀れな女王にょおうがたを残しておかれることで決断がつかないと御自身で仰せになります」

阿闍梨はこう院へ申し立てた。優美なふうはないが、音楽だけは好きな阿闍梨が、

「八の宮の姫君がたが合奏をなさいます琴や琵琶の音が私の寺へ、宇治川の波音といつしよに聞こえてまいりますのが、非常にけつこうで、極楽の遊びが思われます」

こんな昔風なほめ方をするのに、院の帝は微笑をお見せになって、

「そんな聖の家で育てられていては、そうした芸術的な趣味には欠けているかと想像もされるのに珍しいことだね。宮が気がかりに思いになる人を、順序から言って私のほうがしばらくでも長くこの世におられるとすれば、私へ託してお置きにならないだろうか」

とも仰せられた。院の帝は十の宮でおありになった。朱雀院が晩年に六条院へお託しになった姫宮の例をお思いになって、その姫君たちを得たい、つれづれをあるいは慰められるかもしれないと思召すのである。年の若い薫中將はかえって姫君たちの話に好奇心などは動かされずに、八の宮の悟り澄ましておいでになる御心境ばかりが羨望されて、お目にかかりたいと深く思うのであった。

阿闍梨が帰って行く時にも、

「必ず宇治へ伺わせていただいて、宮のお教えを受けようと私は思いますから、あなたからまず内々思召しを伺っておいてください」

と薫は頼んだ。院の帝はお言葉で、

「寂しいお住居の御様子を人づてで聞くことができました」

とも宮へお伝えさせになった。また、

「#ここから2字下げ」

世をいとふ心は山に通へども八重立つ雲を君や隔つる

「#ここで字下げ終わり」

という御歌もお託しになった。

阿闍梨は八の宮をお喜ばせするこのお役の誇りを先立てて山荘へ

まいった。普通の人から立てられる使いもまれな山蔭へ、院のお便たよりを持って阿闍梨が来たのであったから、宮は非常にうれしく思召して山里らしい酒肴しゅこもお出しになっておねぎらいになった。お返事、

「#ここから2字下げ」

跡たえて心すむとはなけれども世を宇治山に宿をこそ借れ

「#ここで字下げ終わり」

宗教のことは卑下してお言いにならず、寂しい人間としての御近況をお報じになったために、院は宮がまだ不平をこの世に持つておいでになるものとして御同情をあそばされた。

阿闍梨は薰中將が宗教的な人物であることなどをお話しして、

「仏道の学問を深くしたい望みを少年時代から持つているのでございますが、専念にそのほうを勉強いたしますことは、私ごとき頭腦のよろしくないものが、優越者か何かのようにこの世を見下すまちがった態度のように思われますのを、それ自体がまちがったことでしょうか、恐れておりまして、目だたせずしようといいたしますために、怠ることに成り、ほかのことに紛れるようになりいたしました。今日までまいったのですが、けっこうな御境地に達しておられますあなた様のことを承ったものですから、ぜひお教えを得たいと望まれてなりませんなどと丁寧なお言づてを受けてまいりました」

などと語った。宮は、

「人生をかりそめと悟り、いとわしく思う心の起り始めるのも、その人自身に不幸のあった時とか、社会から冷遇されたとか、そんな

動機によることですが、年がまだ若くて、思うことが何によらずできる身の上で、不満足などこの世になさそうな人が、そんなにまた後世のことを念頭に置いて研究して行こうとされるのは珍しいことですね。私などはどうした宿命だったのでしょうか、これでもこの世がいやにならぬか、これでも濁世せくせを離れる気にならぬかと、仏がおためしになるような不幸を幾つも見たとで、ようやく仏教の精神がわかってきたが、わかった時にはもう修行をする命が少なくなっていて、道の深奥を究めることは不可能とあきらめているのだから、年だけは若くても私の及ばない法の友かと思われぬ」

とお言いになって、その後双方から手紙の書きかわされることになり、薫中將が自身でお訪たずねして行くようになった。

阿闍梨から話に聞いて想像したよりも目に見ては寂しい八の宮の山荘であつた。仮の庵いおりという体裁で簡単にできているのである。山荘といつても風流な趣を尽くした贅沢ぜいたくなものもあるが、ここは荒い水音、波の響きの強さに、思っていることも心から消される気もされて、夜などは夢を見るだけの睡眠が続けられそうもない。素朴そぼくといえは素朴、すごいといえはすごい山荘である。僧のごとく悟つておいでになる宮のためにはこんな家においでになることは、人生を捨てやすくなることであろうが姫君たちはどんな気持ちで暮らしておいでになるであろう、世間の女に見るような柔らかな感じなどは失つておいでになるであろうとこんな観察も薫はされるのであつた。

仏間になつている所とは襖子からかみ一重隔てた座敷に女王たちは住んでいるらしく思われた。異性に興味を持つ男であれば、交際をし始めて、どんな性質の人たちかとまず試みたいという気は起こすことで

ありうと思われる空気も山荘にはあった。しかしそうした異性に心の動かされぬ人たるべく遠くに師とする方を尋ねて来ながら、普通の男らしく山荘の若い女性に誘惑を試みる言行があつてはならないと薫は思い返して、宮のお気の毒な御生活を懇切に御補助することを心がけることにして、たびたび伺つては、かねて願つたように俗体で深く信仰の道にはいるその方法とか、あるいは経文の解釈とかを宮から伺おうとした。学問的ばかりでなく、柔らかに比喻をお用いになつたりなどして、宮が説明あそばすことはよく薫の心にはいつた。高僧と言われる人とか、学才のある僧とかは世間に多いがあまりに人間と離れ過ぎた感じがして、きつい気のする有名な僧都とか、僧正とかいうような人は、また一方では多忙でもあるがために、無愛想なふうを見せて、質問したいことも躊躇されるものであるし、また人格は低くてただ僧になつていふ点にだけ敬意も持てるような人で、下品な、言葉づかいも卑しいのが、玄人らしく馴れた調子で経文の説明を聞かせたりするのは反感が起こることもあつて、昼間は公務のために暇がない薫のような人は、静かな宵などに、寢室の近くへ招いて話し相手をさせる気になれないものであるが、気高い、優美な御一風采の八の宮の、お言いになるのは同じ道の教えに引用される例なども、平生の生活によき感化をお与えになる親しみの多いものを混ぜたりあそばされることで効果が多いのである。最も深い悟りに達しておられるというのではないが、貴人は直覚でものを見るのが穎敏であるから、学問のある僧の知らぬことも体得しておいでになつて、次第になじみの深くなるにしたがい、薫の思慕の情は加わるばかりで、始終お逢いしたくばかり思われ、公務の忙しいために長く山荘をお訪ねできない時などは恋しく宮をお思

いした。

薫がこんなふうには八の宮を尊敬するがために冷泉院からもよく御消息があつて、長い間そうしたお使いの来ることもなく寂しくばかり見えた山荘に、京の人の影を見ることのあるようになった。そして院から御補助の金品を年に何度か御寄贈もされることになった。薫も何かの機会を見ては、風流な物をも、実用的な品をも贈ることを怠らなかつた。こんなふうでもう三年ほどもたつた。

秋の末であつたが、四季に分けて宮があそばす念仏の催しも、この時節は河に近い山荘では網代に当たる波の音も騒がしくやかましいからとお言いになつて、阿闍梨の寺へおいでになり、念仏のため御堂に七日間おこもりになることになった。姫君たちは平生よりもなお寂しく山荘で暮らさねばならなかつた。ちようどそのころ薫中将は、長く宇治へ伺わないことを思つて、その晩の有明月の上り出した時刻から微行で、従者たちをも簡単な人数にして八の宮をお訪ねしようとした。河の北の岸に山荘はあつたから船などは要しないのである。薫は馬で来たのだった。宇治へ近くなるにしたがい霧が濃く道をふさいで行く手も見えない林の中を分けて行くと、荒々しい風が立ち、ほろほろと散りかかる木の葉の露がつめたかつた。ひどく薫は濡れてしまった。こうした山里の夜の路などを歩くことをあまり経験せぬ人であつたから、身にしむようにも思い、またおもしろいように思われた。

「#ここから2字下げ」

山おろしに堪へぬ木の葉の露よりもあやなく脆きわが涙かな

「#ここで字下げ終わり」

村の者を驚かせないために隨身に人払いの声も立てさせないのである。左右が柴垣しばがきになつてゐる小路こみちを通り、浅い流れも踏み越えて行く馬の足音なども忍ばせてゐるのであるが、薫の身についた芳香を風が吹き散らすために、覚えもない香を寝ざめの窓の内に嗅かいで驚く人々もあつた。

宮の山荘にもう間もない所まで来ると、何の楽器の音とも聞き分けられぬほどの音楽の聲がかすかにすぐ聞こえてきた。山荘の姉あね妹いもうとの女王にやおうはよく何かを合奏してゐるという話は聞いたが、機会もなくて、宮の有名な琴の御音も自分はまだお聞きすることができないのである、ちようどよい時であると思つて山荘の門をはいつて行く、その声は琵琶びわであつた。所がらでそう思われるのか、平凡な楽音とは聞かれなかつた。掻かき返す音もきれいでおもしろかつた。十三さんじ一いつ絃げんの艶えんな音も絶え絶えに混じつて聞こえる。しばらくこのまま聞いていたく薫は思つのであつたが、音はたてずにも、薫のにおいに驚いて宿直とくのいの侍風の武骨らしい男などが外へ出て来た。こうで宮が寺へこもつておいでになるとその男は言つて、

「すぐお寺へおしらせ申し上げましょう」  
とも言うのだった。

「その必要はない。日数をきめて行つておられる時に、おじやまをするのはいけないからね。こんなにも途中で濡ぬれて来て、またこのまま帰らねばならぬ私に御同情をしてくださるようには姫君がたへお願いして、なんとか仰せがあれば、それだけで私は満足だよ」

と薫が言つと、醜えみい顔に笑を見せて、  
「さように申し上げましょう」

と言って、あちらへ行こうとするのを、

「ちよつと」

と、もう一度薫はそばへ呼んで、

「長い間、人の話にだけ聞いていて、ぜひ伺わせていただきたく願っていた姫君がたの御合奏が始まっているのだから、こんないい機会はない、しばらく物蔭ものかげに隠れてお聞きしていただいたいと思うが、そんな場所はあるだろうか。ずうずうしくこのままお座敷のそばへ行つては皆やめておしまいになるだろうか」

と言う薫の美しい風采ふうさいはこうした男をさえ感動させた。

「だれも聞く人のおいでにならない時にはいつもこんなふうにしてお二方で弾ひいておいでになるのでございますが、下人げにんでも京のほうからまいった者のございます時は少しの音もおさせになりません。宮様は姫君がたのおいでになることをお隠おほしになる思召おほしめしでそうさせておいでになるらしゅうございます」

丁寧な恰好かっこうでこう言うと、薫は笑って、

「それはむだなお骨折りと申すべきだ。そんなにお隠おほしになつても人は皆知しっていて、りっぱな姫君の例にお引きするのだからね」

と言つてから、

「案内を頼む。私は好色漢では決してないから安心するがよい。そうしてお二人で音楽を楽しんでおいでになるところがただ拝見したくてならぬだけなのだよ」

親しげに頼むと、

「それはとてもたいへんなことでございます。あとになりまして私  
がどんなに悪く言われることかしれません」

と言いながらも、その座敷とこちらの庭の間に透垣すいがきがしてあるこ

とを言つて、その垣へ寄つて見ることを教えた。薫の供に來た人たちは西の廊わたどのの一室へ皆通してこの侍が接待をするのだった。

月が美しい程度に霧をきいている空をながめるために、簾すだれを短く巻き上げて人々はいた。薄着で寒そうな姿をした童女が一人と、それと同じような恰好かっこうをした女房とが見える。座敷の中の一人は柱を少し楯たてのようにしてすわっているが、琵琶を前へ置き、撥はちを手でもてあそんでいた。この人は雲間から出てにわかにもるい月の光のさし込んで來た時に、

「扇でなくて、これでも月は招いてもいいのですね」

と言つて空をのぞいた顔は、非常に可憐かれんで美しいものらしかった。横になつていたほうの人は、上半身を琴の上へ傾けて、

「入り日と呼ぶ撥はあつても、月をそれでお招きになるうなどは、だれも思わないお考えですわね」

と言つて笑つた。この人のほうに貴女きじよらしい美は多いようであつた。

「でも、これだつて月には縁があるのですもの」

こんな冗談じょうだんを言い合つている二人の姫君は、薫がほかで想像していたのとは違つて非常に感じのよい柔らかかみの多い麗人であつた。女房などの愛読あいどくしている昔の小説には必ずこうした佳人のことが出てくるのを、いつも不自然な作り事であると反感を持ったものであるが、事実として意外な所に意外なすぐれた女性の存在することを知つたと思つたのであつた。

若い人は動揺せずにあられようはずもない。霧が深いために女王たちの顔を細かに見ることができないのを、もう一度また雲間を破つて月が出てくれればいと薫の願つているうちに、座敷の奥のほ

うから来客のあることを報じた者があつたのか、御簾をおろして、縁側に出ていた人たちも中へはいってしまった。あわてたふうなどは見せずに、静かに奥へ皆が引つこんだ気配には聞こえてこようはずの衣擦れの音も、新しい絹の気がないのか添わなないで寂しいが優雅で薫の心に深い印象を残した。

薫は隙見した場所を静かにはなれて、京へ車を呼ばせる使いを立てたりした。宮家の先刻の侍に、  
 「宮様のお留守にあやにく伺つたのですが、あなたの好意で私は屈託を少し忘れることもできましたよ。私の伺つたことをお奥へ申し上げてください。山路の夜霧に濡れながら伺つた奇特さを認めていただくつもりです」

と薫が言うと、侍はすぐに奥へ行つた。薫が隙見をしたことなどは知らずに、弾いて遊んでいた琵琶や琴の音のあるいは聞かれたかもしれないということに姫君たちは恥ずかしく思った。よい香の混じつた風の吹き通つたことも確かな事実であつたが、思いがけぬ時刻であつたために、薫中将の来訪とは気のつかかなかつたのは、何たる神経の鈍いことであつたらうと二女王は羞恥に堪えられなく思うのであつた。取り次ぎ役の侍の気のきかぬことがもどかしくなつて、薫は無遠慮にあたるかもしれぬが、山荘住まいの現在の女王がたとがめもされまいと思ひ、まだ霧の深い時間であつたから、さっきのぞいたほうの座敷の縁へ歩いて行き、御簾の前へすわつたのであつた。田舎風の染んだ若い女房などは客と応答する言葉もわからず、敷き物を出すことすら不馴れであつた。

「このお座敷の御簾の前にしか座が頂戴できないのでしょうか。あさはかな心だけでは決して訪ねてまいれるものでないと、何里の夜

路をまいって自身でも認めうるのですから、御待遇を改めていただきたいものですね。たびたびこうしてこちらへ上がっており、誠意だけはわかっていただいているものと頼もしくは思っております」

まじめに薫はこう言った。若い女房にはこの応対にあたりうる者もなく、皆きまり悪く上気している者ばかりであったから、部屋へ下がって寝ているある一人を、起こしにやっている間の不体裁が苦しくて、大姫君は、

「何もわからぬ者ばかりがいるのですから、わかった顔をいたしましてお返辞を申し上げることなどはできないのでございます」

と、品のよい、消えるような声で言った。

「人生の憂さがわかりながら私の知らず顔をしていますのも、世の中のならわしに従っているだけなのです。宮様はすでに私の気持ちをお知りになっておられますのに、あなた様だけが俗世界の一人としか私をお認めくだらないのは残念です。世間を超越された宮様のこの御生活の中においでになりますあなた様がお心の境地は澄みきったものでしょうから、こうした男の志の深さ浅さも御明察くだすつたらうれいことだろうと私は思います。世間並みの一時的な感情で御交際を求める男と同じように私を御覧になるのではありませんか。私がどんな誘惑にも打ち勝って来ている男であることは、すでに今までにお耳へはいつていることかとも思われます。独身生活を続けております私が求める友情をお許しください、私もまた寂しいあなた様のお心を慰める友になりえて親密なおつきあいができましたらどんなにうれいかわかれます」

などと薫の多く言うのに対して、大姫君は返辞がしにくくなって

困っているところへ、起こしにやった老女が来たために、応答をそれに譲った。その女は出すすぎた物言いをするのであった。

「まあもつたいたい、失礼なお席でございますこと。なぜ御簾の中へお席を設けませんでしたでしょう。若い人たちというものは人様の見分けができませんでねえ」

などと老人らしい声で言っていることにも女王たちはきまり悪さを覚えていた。

「この世においでになる人の数にもおあたりになりませんようなお暮らしをあそばして、当然おいでにならない方であればならぬ方でさえも段々遠々しくばかりなっておしまいになりますのに、あなた様の御好意のかたじけなさは、私ども風情のつまらぬ者さえも驚きの目をみはるばかりでございます。でございますから、お若い女王様ごとも常に感激はしておいでになりながらも、そのとおりにお話しあそばすことはおできにならないのでございましょう」

控えめにせず物なれたふうに言い続けることに反感は起こりながらも、この人の田舎風でなく上流の女房生活をしたらしい品のよい声づかいに薫は感心して、

「取りつきようもない皆さんばかりでしたのに、あなたが出て来てくださいますして、私の誠心誠意をくんでいてくださる方を得ましたことは、私の大きい幸福です」

こう御簾に身を寄せて言っている薫を、几帳の間からのぞいて見ると、曙の光でようやく物の色がわかる時間であったから、簡単な服装をわざわざして来たらしい狩衣姿の、夜露に濡れたのもわかつたし、またこの世界のものでないような芳香もそこには漂っていることにも気づかれた。この老女はどうしたのか泣きだした。

「あまり出すすぎたことをしてお気持ちを悪くしましてはと存じまして、私は自分をおさえておりましたが、悲しい昔の話をどうかして機会を作りまして、少しでもお話しさせていただき、あなた様の御承知あそばさなかったことを、お知らせもしたいということをお私に長い間仏様の念誦ねんずをいたしますにも混ぜて願っておりましてその効験で、こうしたおりが得られたのでしようが、お話よりも先に涙におぼれてしまいました、申し上げることができません」

身体からだを慄ふるわせて言う老女の様子に真剣味が見えて、老人はだれもよく泣くものであると知っている薫かおるであつたが、こんなにまで悲しがるのが不思議に思われて、

「この御山荘へ伺うことになりましたからずいぶん年月はたちますが、こちらのほうにも一人もおなじみがなくて寂しくばかり思われていたのです。昔のことを知っておいでのなるといふあなたにお逢あいすることができて、私はにわかになんか心強くなったのですから、この機会に何でもお話しく下さい」

と言った。

「ほんとうにこんなよいおりはございません。またあるといたしましても、私は老人でございますから、それまでにどうなるかもしれたものではありませんので、ただこうした老女がいると申すことを覚えておいていただくためにお話しいたします。三条の宮にお仕えしておりました小侍従が亡なくなりましたことはほのかに聞いて承知しておりました。昔親しくいたしました同じ年ごろの人がたいてい亡くなりましたあとで、この五、六年こちらの宮家へ私は御奉公いたしております。ご存じではございますまい、ただいま藤大納言と申し上げます方のお兄様で、衛門督えもんのかみでお亡かくれになりました方のこと

を何かの話の中でもお聞きになったことがございますでしょうか。私どもにとりましては、お亡れになりましたのがまだ昨日きのうのようにはばかり思われまして、その時の悲しみが忘れられないのでございますが、数えてみますと、あなた様がこんな大人おとなにまでなっておいでのなるだけの年月がたっているのです。でございますから、夢のようですよ。私はつまらない女でございましたが、人に知らせてならぬことで、しかもお心でお思いになりますことを私には時々お話ししてくだすったのでございました。御病気がお悪くて、もう頼みのない時になりました、私をお呼びになって、少し御遺言をあそばしたことがあるのでございます。それはあなた様に御関係のあるお話なのでございましたから、これだけお話を申し上げましたあとを、まだお聞きになりたく思召すのでございましたら、また別な時間をお作りくださいまし。若い女房たちは私が出てまいって、あまりに話し込んでおりますことで、出すぎた真似まねをするように、反感を持ちまして何か言っておりますのももつともなことでございますから」

さすがにこれだけにとめて老女はあとを言おうとしなかつた。怪しい夢のような話である。巫女みこなどが問わず語りをするようなものであると、薫は信を置きがたく思いながらも、始終心の隅すみから消すことのできない疑いに関したことであつたから、なお話の核心に触れたくは思ったが、今もこの人が言ったように、女房たちが見ている所であつて、老女と二人向き合つて昔話に夜を明してしまうことも優雅なことではないと気がついて、

「私には何の心あたりもないことですが、昔のお話であると思うと身にしみます。ですからぜひ今の話のあとをそのうちお聞かせください。霧が晴れて現わになつては恥ずかしい姿になつていて、私の

心よりも劣った形を姫君がたのお目にかけることになるのは苦痛ですから失礼します」

と薫が言つて、立つた時に宮の行つておいでになる寺の鐘がかすかに聞こえてきた。霧はますます濃くなつていて、宮のおいでになる場所と山荘の隔たりが物哀れに感ぜられた。薫は姫君たちの心持ちを思いやつて同情の念がしきりに動くのだった。二人とも引つ込みがちに内気なふうになるのも道理であるなどと思われた。

「#ここから1字下げ」

「朝ぼらけ家路も見えず尋ねこし横まきの尾山は霧こめてけり

「#ここで字下げ終わり」

心細いことです」

と言つて、またもとの席に帰つて、川霧をながめている薫は、優雅な姿として都人の中にも定評のある人なのであるから、まして山荘の人たちの目はどれほど驚かされたかもしれない。

だれも皆恥じて取り次ぐことのできないふうであるのを見て、大姫君がまたつつましいふうで自身で言つた。

「#ここから2字下げ」

雲のゐる峰のかけぢを秋霧のいとど隔こゑつる頃にもあるかな

「#ここで字下げ終わり」

そのあとで歎息たんそくするらしい息づかいの聞こえるのも非常に哀れであつた。若い男の感情を刺激するような美しいものなどは何も無い

山荘ではあるが、こうした心苦しきから辞し去ることが躊躇ちゅうちゆされる薫であった。しかも明るくなっていくことは恐ろしくて、

「お近づきしてかえってまた飽き足りません感を与えられましたが、もう少しおなじみになりましたからお恨みも申し上げることにしましょう。お恨みというのは形式どおりなお取り扱いを受けましたことで、誠意がわかっていただけなかったことです」

こんな言葉を残したままあちらへ行つた。そして宿直とくのちの侍が用意してあつた西向きの座敷のほうで休息した。

「網代あじろに人がたくさん寄っているようだが、しかも氷魚ひおは寄らないようじゃないか、だれの顔も寂しそうだ」

などと、たびたび供に来てこの辺のことがよくわかるようになってくる薫の供の者は庭先で言っている。貧弱な船に刈しつた柴を積んで川のあちらこちらを行く者もあつた。だれも世を渡る仕事の樂たのしみでなさが水の上にさえ見えて哀れである。自分だけは不安なく玉たまの台たいに永住することのできるようにきめてしまうことは不可能な人生であるなどと薫は考えるのであつた。薫は硯すずりを借りて奥へ消息を書いた。

「#ここから2字下げ」

橋姫の心を汲くみて高瀬さす棹さかの零しじくに袖そでぞ濡ぬれぬる

「#ここから1字下げ」

寂しいながめばかりをしておいでになるのでしょうか。

「#ここで字下げ終わり」

そしてこれを侍に持たせてやった。その男は寒そうに鳥肌とりはだになつ

た顔で、女王の居間のほうへ客の手紙を届けに来た。返事を書く紙は香の焚きこめたものでなければと思ひながら、それよりもまず早くせねばと、

「#ここから2字下げ」

さしかへる宇治の川長朝夕かはきさの雫や袖をくたしはつらん

「#ここから1字下げ」

身も浮かぶほどの涙でございます。

「#ここで字下げ終わり」

大姫君は美しい字でこう書いた。こんなことも皆ととのつた人であると思ひ、心が多く残るのであつたが、

「お車が京からまいりました」

と言つて、供の者が促し立てるので、薫は侍を呼んで、

「宮様がお帰りになりますところにまた必ずまいります」

などと言つていた。濡れた衣服は皆この侍に与えてしまつた。そして取り寄せた直衣のうしに薫は着がえたのであつた。

薫は帰つてからも宇治の老女のした話が氣にかかつた。また姫君たちの想像した以上におおよくな、柔らかい感じのする美しい人であつた面影が目に残つて、捨て去ることは容易でない人生であることが心弱く思われもした。薫は消息を宇治の姫君へ書くことにした。それは恋の手紙というふうでもなかつた。白い厚い色紙に、筆を撰えらんで美しく書いた。

「#ここから1字下げ」

突然に伺つた者が多く語り過ぎると思召おほしめさないと心かひけまして、

何分の一もお話ができませんで帰りましたのは苦しいことでした。ちよつと申し上げましたように、今後はお居間の御簾の前へ御安心くだすつて私の座をお与えください。お山ごもりがいつで終わりますかを承りたく思います。そのころ上がりまして、宮様にお目にかかれませんでした心を慰めたく存じております。

「#ここで字下げ終わり」

などとまじめに言つてあるのを、使いに出す左近将監さこんのじょうである人に渡して、あの老女に逢つて届けるようにと薫は命じた。宿直の侍が寒そうな姿であちこちと用に歩きまわつたのを哀れに思い出して、大きな重詰めの料理などを幾つも作らせて贈るのであつた。そのまた宮のおこもりになつた寺のほうへも薫は贈り物を差し上げた。山ごもりの僧たちも寒さに向かう時節であるから心細かろうと思ひやうつて、宮からその人々へ布施としてお出しになるようにと絹とか、綿とかも多く贈つた。

お籠こもりを済ませて寺からお帰りになろうとされる日であつたから、ごいっしよにこもつた法師たちへ、綿、絹、袈裟けさ、衣服などをだれにも一つずつは分かたれるようにして、全体へ宮からお下賜になつた。

宿直とのいの侍は薫の脱いで行つた艶えんな狩衣かりぎぬ、高級品の白綾しらあやの衣服などの、なよなよとして美しい香のするのを着たが、自身だけは作り変えることができないのであるから似合わしくない香が放散するのを、だれからも怪しまれるので迷惑をしていた。着物のために不行儀もできず、人の驚異とする高いにおいをなくしたいと思つたが、すぐことのできないのに苦しんでいるのも滑稽こっけいであつた。

薫は姫君の返事を感じよく若々しく書かれたのを見てうれしく思

った。

宇治では寺からお帰りになった宮へ、女房たちが薫から手紙の送られたことを申し上げてそれをお目にかけた。

「これは求婚者扱いに冷淡になどする性質の相手ではないよ。そんなふうを見せてはかえってこちらの恥になるよ。普通の若者とは違ったすぐれた人格者だから、自分がいなくなったらと、こんなことをただ一言でも言っておけば遺族のために必ず尽くしてくれる心だと私は見ている」

などと宮はお言いになった。

宮から山寺の客に過ぎた見舞いの品々の贈られた好意を感謝するというお手紙をいただいたので、また宇治へ御訪問をしようと思つた薫は、匂宮におつみやがああしたような、人に忘られた所にいる佳人を発見するのはおもしろいことであろう、予期以上に接近して心の惹かれひる恋がしてみたいと、そんな空想をしておいでになることを思い、宇治の女王にょおうたちの話を、やや誇張も加えてお告げすることによつて、宮のお心を煽動してみようと思ひ、閑暇ひまな日の夕方に兵部卿ひょうぶせいの宮をお訪たずねしに行った。例のとおりにいるいるな話をしたあとで、薫は宇治の宮のことを語り出した。霧の夜明けすきみに隙見すきみしたことをくわしく説明するのには宮も興味を覚えておいでになった。理想的な姫君だったと、薫はおおげさに技巧を用いて宇治の女王の美を語り続けるのであった。

「その女王のお返事を、なぜ私に見せてくれなかったのですか。私だったら親友には見せるがね」

と宮はお恨みになった。

「そうですね。あなたはたくさんのお手もとへまいる手紙の片端す

らお見せになりません。あちらの女王がたのことは私のような欠陥のある人間などの対象にしておくべきではありませんから、ぜひあなたのお目にかきたい方々だと思つてはいるのですが、どんなふうにすれば御接近ができるでしょう。身分のない者は恋愛がしたければ自由に恋愛もできるのですから、皆それ相当におもしろい恋愛生活はしているようですがね。男の興味を惹くひような女が物思いをしながら、世間の目から隠れて住んでいるようなことも郊外とか田舎いなかとかにはあるのですね。その話の女性たちも人間離れのした信心くさい、堅い感じのする人たちであろうと、私は長く軽蔑けいべつして考えていまして、少しも興味が持てなかつたものです。ほのかな月の光で見た目が誤つておりませんでしたら、確かに欠点のない美人です。様子といい、身のとりなしといい、それだけの人は美の極致としてよいことになるかと思ひます」

と薫は言うのである。しまいには宮は真心から、普通の人などに心の惹かれることのない人がこれほど熱心にたたえるのはすぐれた美貌びぼうの主ぬしに違いないとお信じになるようになり、非常な興味を宇治の女王たちにお持ちになることになった。

「今後もよくさぐつて来て私に知らせてください」

宮はこうお言いになつて、御自身の自由の欠けた尊貴さをいとわしくお思いになるふうまでもお見せになるのを、薫はおかしく思つた。

「しかし、そうした危険なことはしないほうがいいですね。この世へ執着を作るべきでないという信念を持っております私が、そうした中へはいつて行つて、自分ながら抑制できませんようなことになつては、すべての理想がこわれてしまふでしょうから」

「たいそうだね、例のとおりの方様くさいことを言っている君のその態度がいつまで続くか見たいものだ」

宮はお笑いになった。

薫の心は宇治の宮で老女がほのめかした話からまた古い疑問が擡頭とうとうしていて、人生が悲しく見えてならないこのごろであったから、美しい感じを受けたことにも、ほかから耳にはいつてくるすぐれた女性の噂うわさなどにも自身は興味をそう持てないのであった。

十月になって五、六日ごろに薫は宇治へ出かけた。

「季節ですから網代の漁あじろをさせてごらんになるとおもしろうござい  
ます」

と進言する従者もあつたが、

「そんなことはいやだ。こちら氷魚ひよとか蜉蝣ひよむしとかに変わらないはかない人間だからね」

としりぞけて、多数の人はつれずに身軽に網代車に乗り、作らせたあつた平絹の直衣指貫のうし さしぬきをわざわざ身につけて行った。宮は非常にお喜びになり、この土地特有な料理などを作らせておもてなしになった。日が暮れてからは灯ひを近くへお置きになり、薫といっしょに研究しておいでになった経文の解釈などについて阿闍梨あじやりをも寺からお迎えになって意見をお言わせになったりもした。主客ともに睡ねむることなしに夜通し宗教を談じているのであるが、荒く吹く河風かわかぜ、木の葉の散る音、水の響きなどは、身にしむという程度にはとどまらずに恐怖をさえも与える心細い山荘であった。もう明け方に近いと思われる時刻になって、薫は前の月の霧の夜明けが思い出されるから、話を音楽に移して言った。

「先日霧の濃く降っておりました明け方に、珍しい楽音を、ただ一

声と申すほど伺いまして、それきりおやめになつて聞かせていただけませんでしたことが残念に思われてなりません」

「色も香も思わない人に私がつてからは音楽のことなどにもうとくなるばかりで皆忘れていきますよ」

宮はこうお言いになりながらも、侍に命じて琴をお取り寄せに言った。

「こんなことをするのが不似合いになりましたよ。導いてくださるものがあると、それにひかれて忘れたものも思い出すでしょうから」

と言つて、琵琶をも薫のためにお出させになつた。薫はちよつと手に取つて、調べてみたが、

「ほのかに承つた時のこれが楽器とは思われません。特別な琵琶であるように思いましたのは、やはり弾き手がお違いになるからでございました」

と言つて、熱心に弾こうとはしなかつた。

「とんでもない誤解ですよ。あなたの耳にとまるような芸がどこからここへ伝わってくるものですか、誤解ですよ」

宮はこうお言いになりながら琴をお弾きになるのであつたが、それは身にしむ音で、すごい感じがした。庭の松風の伴奏がしからしめるのかもしれない。忘れたというふうにあそばしながら一つの曲の一節だけを弾いて宮はおやめになつた。

「私の家では時々鳴ることのある十三絃はちよつとおもしろい手筋のように思われることもあります。私が熱心に見てやらなくなつてもう長くなりますからね。現在家の者の弾いているものは皆前の川の波音を標準にして稽古けいこをしているだけの我流の芸にすぎません。

むろん普通の拍子には合わないものになっているのですよ」

そのあとで、

「箏の琴をお弾きなさい」

と姫君の居間のほうへ言っておやりになったが、

「何も知らずに弾いていたのを、聞かれただけでも恥ずかしいのに、公然とまずいものをお聞かせできるものでない」

女王は二人とも弾くのを肯じない。父宮はたびたび勧めにおやりになったが、何かと口実を作つて断わり、弾こうと姫君たちのしないのを薫は残念に思った。宮は片親でお育てになった姫君たちが素直にお言葉どおりのことをしないのを恥ずかしく思召すふうであつた。

「女の子供のいることをなるべく人に知らせたくないと思つてね、私はだれも頼まずに自分の手だけで教育もしてきたのですが、もういっとうなるかもしれない命になつてみると、さすがにまだ若い者は将来どんなふうにおちぶれてしまうことかと、その気がかりだけがこの世を辞して行く際の道の障りになる気がするのです」

とお言いになるのに、薫は心苦しいことであると同情された。

「表だちました責任者になりませんが、私の力でお尽くしのできますことだけは私がいたしますから、御信用くださつていいと存じております。しばらくでもあなた様よりあとに残つて生きているといたしますれば、こうしたお言葉をいただきました以上、決してたがえることはいたしません」

薫がこう申し上げると、

「非常にうれしいことです」

と宮はお言いになった。

明け方のお勤めを仏前で宮のあそばされる間に、薫は先夜の老女に面会を求めた。これは姫君方のお世話役を宮がおさせておいでになる女で、弁の君という名であった。年は六十に少し足らぬほどであるが、優雅なふうのある女で、品よく昔の話をしだした。柏木かしわぎが日夜一煩悶はんもんを続けた果てに病を得て、死に至ったことを言って非常に弁は泣いた。他人であつても同情の念の禁じられないことであると思われる昔話を、まして長年月の間、真実のことが知りたくて、自分が生まれてくるに至った初めを、仏を念じる時にも、まずこの真実を明らかに知らせたまえと祈った効験でか、こうして夢のように、偶然のめぐり合わせで肉身のことが聞かれたと思つている薫には涙がとめどもなく流れるのであつた。

「それにしてもその昔の秘密を知っている人が残つておいでになつて、驚くべく恥ずかしい話を私に聞かせてくださるのですが、ほかにもまだこのことを知つている人があるでしょうか。今日まで私はその秘密の片端すらも聞くことはありませんでしたが」

と薫は言つた。

「小侍従と私のほかは決して知つてゐる者はございません。また一言でも私から他人に話したこともございません。こんなつまらぬ女でございますが、夜昼おそばにお付きしていたものですから、殿様の御様子に腑ふに落ちぬところがありました、私が真実のことをお悟りすることになりましたからは、お苦しみのお心に余りますような時々には、私から小侍従へ、小侍従から私と云うことにしまして、たまさかのお手紙をお取りかわしになりました。失礼になつてはなりませんからくわしいことは申し上げません。殿様の御容体が危篤になりましたから、私へほんの少しの御遺言があつたのでございま

すが、私一風情ふぜいではどうしてそれをあなた様にお伝え申し上げてよろしいか方法もつきませんで、仏に念誦ねんずをいたします時にも、そのことを心に持ってしておりましたために、あなた様にこのお話ができることになりました。お目にかかる物もあるのでございます。お渡しいたすことができせん以上はもう焼いてしまおうかとも存じました。危うい命の老人が持つていまして、歿後ぼつごに落ち散ることになってはならぬと気がかりにいたしながら、この宮へ時々あなた様が御訪問においでになることがあるようになりましてからは、これはよい機会が与えられるかもしれぬと頼もしくなりまして、今日きょうのようなおりの早く現われてまいりますようにと、念じておりました力はえらいものでございませぬ。人間がなしたとことこれは思われませぬ」

弁は泣く泣く薫の生まれた時のこともよく覚えていて話して聞かせた。

「大納言様がお亡かくれになりました悲しみで私の母も病氣になりました、その後しばらくして亡なくなりましたものですから、二つの喪服を重ねて着ねばならぬ私だったのでございます。そのうち長く私のことをかれこれと思つていた者がございまして、だましてつれ出されました果ては西海の端までもつれて行きましたね、京のことはいっさいわからない境遇に置かれていますうちに、その人もそこで亡くなりましてから、十年めほどの、違つた世界の気がいたしますよ。うな京へ上つてまいつたのでございますが、こちらの宮様は私の父方の縁故で童女時代に上がつていたことがあるものですから、もうはなやかな所へお勤めもできない姿になっております私は、冷泉院れいぜいの女御様にょごなどの所へ、大納言様の続きでまいつてもよろしかったの

でございますが、それも恥ずかしくてできませんで、こうして山中の朽ち木になっております。小侍従はいつごろ亡くなったのでございましょう。若盛りの人として記憶にございます人があらかた故人になっております世の中に、寂しい思いをいたしながら、さすがにまだ死なねずに私はおりました」

弁が長話をしている間に、この前のように夜が明けはなれてしまった。

「この昔話はいくら聞いても聞き足りないほど聞いていたく思うことですが、だれも聞かない所でまたよく話し合ひましょう。侍従といたた人は、ほのかな記憶によると、私の五、六歳の時ににわか胸を苦しがりだして死んだと聞いたようですよ。あなたに逢うことができなかつたら、私は肉親を肉親とも知らない罪の深い人間で一生を終わることでした」

などと薫は言った。小さく巻き合わせた手紙の反古ほしの黴臭かびいのを袋に縫い入れたものを弁は薫に渡した。

「あなた様のお手で御処分くださいませ。もう自分は生きられなくなつたと大納言様は仰せになりまして、このお手紙を集めて私へくださいましたから、私は小侍従に逢いました節に、そちら様へ届きますように、確かに手渡しをいたそうと思つておりましたのに、そのまま小侍従に逢われなりましたこと、私情だけでなく、大納言のお心の通らなかつたことになりまして私は悲しんでおりました」

弁はこう言うのであつた。薫はなにげなくその包を袖そでの中へしまつた。こうした老人は問はず語りに、不思議な事件として自分の出生の初めを人にもらすことはなかつたであろうかと、薫は苦しい気

持ちも覚えるのであったが、かえすがえす秘密を厳守したことを言っているのであるから、それが真実であるかもしれぬと慰められな  
いでもなかつた。

山荘の朝の食事に粥、強飯こわめしなどが出された。昨日は休暇が得られたのであるが、今日は陛下の御謹慎日も終わって、平常どおりに宮中の事務を執らねばならないことであろうし、また冷泉院の女にょいち一の宮の御病気もお見舞い申し上げねばならぬことで、かたがた京へ帰らねばならぬ、近いうちにもう一度一紅葉もみじの散らぬ先にお訪ねするということを、薫は宮へ取り次ぎをもつて申し上げさせた。

「こんなふうにたびたびお訪ねくださる光栄を得て、山蔭やまかげの家も明るくなってきた気がします」

と宮からの御一挨拶あいさつも伝えられた。

薫は自邸に帰って、弁から得た袋をまず取り出してみるのであった。支那しなの浮き織りの綾あやでできた袋で、上という字が書かれてあった。細い組み紐ひもで口を結んだ端を紙で封じてあるのへ、大納言の名が書かれてある。薫はあけるのも恐ろしい気がした。いろいろな紙に書かれて、たまさか来た女三の宮のお手紙が五、六通あった。そのほかには柏木かしわざきの手で、病はいよいよ重くなり、忍んでお違あいすることとも困難になったこの時に、さらに見たい心の惹ひかれる珍しいことがそちらには添っている、あなたが尼におなりになったということともまた悲しく承っているというようなことを檀紙だんし五、六枚に一字ずつ鳥の足跡のように書きつけてあって、

「#ここから2字下げ」

目の前にこの世をそむく君よりもよそに別る魂たまぞ悲しき

「#ここで字下げ終わり」

という歌もある。また奥に、

「#ここから1字下げ」

珍しく承った芽ばえの二葉を、私一風情ふせいが関心を持つとは申されませんが、

「#ここから2字下げ」

命あらばそれとも見まし人知れず岩根にとめし松の生おひ末

「#ここで字下げ終わり」

よく書き終えることもできなかつたような乱れた文字でなつた手紙であつて、上には侍従の君へと書いてあつた。蠹しの巢しのようになっていて、古い黴臭かびい香もしながら字は明瞭めいりょうに残つて、今書かれたとも思われる文章のこまごまと確かな筋の通つているのを読んで、実際これが散逸していたなら自分としては恥ずかしいことであるし、故人のためにも気の毒なことになるのであつた、こんな苦しい思いを経験するものは自分以外にないであろうと思つと薫の心は限りもなく憂鬱ゆううつになつて、宮中へ出ようとしていた考えも実行がものうくなつた。母宮のお居間のほうへ行つてみると、無邪気な若々しい御様子で経を読んでおいでになつたが、恥ずかしそうに経巻を隠しておしまいになつた。今さら自分が秘密を知つたとはお知らせする必要もないことであると思つて、薫は心一つにそのことを納めておくことにした。

底本：「全訳源氏物語 下巻」角川文庫、角川書店

1972（昭和47）年2月25日改版初版発行

1995（平成7）年5月30日40版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月10日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：鈴木厚司

2004年3月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

椎が本

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）御寺<sup>みでら</sup>

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）初瀬<sup>もつ</sup>一詣<sup>もつ</sup>で

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」朝の月涙のごとくましろけれ御寺<sup>みでら</sup>の鐘

「#地から3字上げ」の水渡る時 （晶子）

二月の二十日<sup>はつか</sup>過ぎに兵部卿<sup>ひょうぶぎょう</sup>の宮は大和の初瀬寺<sup>はせ</sup>へ参詣<sup>さんけい</sup>をあそばされることになった。古い御宿願には相違ないが、中に宇治という土地があることからこれが今度実現するに及んだものらしい。宇治は憂<sup>う</sup>き里であると名をさえ悲しんだ古人もあるのに、またこのように

心をおひかれになるというのも、八の宮の姫君たちがおいでになるからである。高官も多くお供をした。殿上役人はむろんのことで、この行に漏れた人は少数にすぎない。

六条院の御遺産として右大臣の有ゆうになつてゐる土地は河かわの向こうにずっと続いていて、ながめのよい別荘もあつた。そこに往復とも中宿りの接待が設けられてあり、大臣もお歸りの時は宇治まで出迎えることになつていたが、謹慎日おんようじがにわかにもめぐり合わせて来て、しかも重く慎まねばならぬことを陰陽師おんようしから告げられたために、自身で伺えないことのお詫あいさつびの挨拶あいさつを持つて代理が京から来た。宮は苦手にがてとしておいでになる右大臣が来ずにお親しみの深い薫かおるの宰相中將が京から来たのをかえつてお喜びになり、八の宮邸との交渉がこの人さえおれば都合よく運ぶであろうと満足しておいでになつた。右大臣という人物にはいつも気づまりさを匂宮におうみやはお覚えになるらしい。右大臣の息子むすこの右大弁、侍従宰相、権中將、蔵人兵衛佐くらんべいゑさけなどは初めからお随つきしてゐた。帝みかども后きさきの宮もすぐれてお愛しになる宮であつたから、世間の尊敬することも大きかつた。まして六条院一統の人たちは末の末まで私の主君のようにこの宮にかしづくのであつた。別荘には山里らしい風流な設備しつぷいがしてあつて、碁すい、双六すいろうく、彈碁たまの盤なども出されてあるので、お供の人たちは皆好きな遊びをしてこの日を楽しんでいた。宮は旅なれぬお身体からだであつたから疲労をお覚えになつたし、この土地にしばらく休養していたいという思召おほしめしも十分にあつて、横たわつておいでになつたが、夕方になつて楽器をお出させになり、音楽の遊びにおかかりになつた。こうした大きい河のほとりというものは水音が横から楽音を助けてことさらおもしろく聞かれた。

聖人の宮のお住居すまいはここから船ですぐに渡って行けるような場所に位置していたから、追い風に混じる琴笛の音を聞いておいでになりながら昔のことがお心に浮かんできて、

「笛を非常におもしろく吹く。だれだろう。昔の六条院の吹かれたのは愛嬌あいぎょうのある美しい味のものだった。今聞こえるのは音が澄みのぼって重厚なところがあるのは、以前の太政大臣の一統の笛に似ているようだ」

など独言ひとりごとを言っておいでになった。

「ずいぶん長い年月が私をああした遊びから離していた。人間の愉楽とするものと遠ざかった寂しい生活を今日までどれだけしているかというようなことをむだにも数えられる」

こんなことをお言いになりながらも、姫君たちの人並みを超こえたりつばさがお思われになって、宝玉を埋めているような遺憾もお覚えにならぬではなく、源宰相中將という人を、できるなら婿としてみたいが、かれにはそうした心がないらしい、しかも自分はその人以外の浮薄な男へ女王にょおうたちは与える気になれないのであるとお思いになって、物思いを八の宮がしておいでになる対岸では、春の夜といえども長くばかりお思われになるのであるが、右大臣の別荘のほうの客たちはおもしろい旅の夜の酔いごちに夜のあっけなく明けるのを歎なげいていた。

匂宮はこの日に宇治を立って帰京されるのが物足らぬこととばかりお思われになった。遠くはるばると霞かすんだ空を負って、散る桜もあり、今開いてゆく桜もあるのが見渡される奥には、晴れやかに起き伏しする河添い柳も続いて、宇治の流れはそれを倒影にしていた。都人の林泉にはないこうした広い風景を見捨てて帰りがたく思召さ

れるのである。薫はこの機会もはずさず八の宮邸へまいりたく思うのであったが、多数の人の見る前で、自分だけが船を出してそちらへ行くのは軽率に見られはせぬかと躊躇ちゆうじゆしている時に八の宮からお使いが来た。お手紙は薫へあつたのである。

「#ここから2字下げ」

山風に霞かすみ吹き解く声はあれど隔てて見ゆる遠をちの白波

「#ここで字下げ終わり」

漢字のくずし字が美しく書かれてあつた。兵部卿の宮は、少なからぬ関心を持っておいでになる所からのおたよりとお知りになり、うれしく思召して、

「このお返事は私から出そう」

とお言いになって、次の歌をお書きになった。

「#ここから2字下げ」

遠近をちこちの汀みぎはの波は隔つともなほ吹き通へ宇治の川風

「#ここで字下げ終わり」

薫は自身でまいることにした。音楽好きな公達きんだちを誘って同船して行ったのであつた。船の上では「酣醉楽かんすいらく」が奏された。

河に臨んだ廊の縁から流れの水面に向かつてかかっている橋の形などはきわめて風雅で、宮の洗練された御趣味もうかがわれるものであつた。右大臣の別荘も田舎いなからしくはしてあつたが、宮のお邸やしきはそれ以上に素朴そぼくな土地の色が取り入れられてあつて、網代屏風あじろびょうぶなど

というものも立っていた。寂の味の豊かにある室内の飾りもおもしろく、あるいは兵部卿の宮の初瀬一詣での御帰途に立ち寄る客があるかもしれぬとして、よく清掃されてもあつた。すぐれた名品の楽器なども、わざとらしくなく宮はお取り出しになつて、参入者たちへ提供され、一越調で「桜人」の歌われるのをお聞きになつた。名手の誉れをとつておいでになる八の宮の御琴の音をこの機会にお聞きしたい望みをだれも持っていたのであるが、十三絃を合い間合ひ間にほかのものに合わせてだけお弾きになるにとどまつた。平生お聞きし慣れないせいか、奥深いよい音として若い人々は承つた。山里らしい御一饗応が綺麗な形式であつて、皆人がほかで想像していたに似ず王族の端である公達が数人、王の四位の年輩者というような人らが、常に八の宮へ御同情申していたのか、縁故の多少でもあつたのはお手つだいに來ていた。酒瓶を持って勧める人も皆さつぱりとしたふうをしていた。一種古風な親王家らしいよさのある御接待の席と見えた。船で來た人たちには女王の様子も想像して好奇心の惹かれる氣のしたのもあるはずである。

兵部卿の宮はまして美しいと薫から聞いておいでになつた姉妹の姫君に興味をいだいておいでになつて、自由な行動のおできにならぬことを、今までから憾みに思つておいでになつたのであるから、この機会になりとも女王への初めの消息を送りたいとお思ひになり、そのお心持ちがしまいに抑えきれずに、美しい桜の枝をお折らせになつて、お供に來ていた殿上の侍童のきれいな少年をお使いにされお手紙をお送りになつた。

「#ここから2字下げ」

山桜にほふあたりに尋ね来て同じ挿頭かざしを折りてけるかな

「#ここから1字下げ」

野を睦むつまじみ（ひと夜寝にける）

「#ここで字下げ終わり」

というような御消息である。お返事はむずかしい、自分には二人の女王は譲り合っていたが、こんな場合はただ風流な交際として軽く相手をしておくべきで、あとまで引くことのないように、大事をとり過ぎた態度に出るのはかえって感じのよくないものであるというようなことを、古い女房などが申したために、宮は中姫君に返事をお書かせになった。

「#ここから2字下げ」

挿頭かざし折る花のたよりに山賤やまがつの垣根かきねを過ぎぬ春の旅人

「#ここから1字下げ」

野を分きてしも

「#ここで字下げ終わり」

これが美しい貴女きじよらしい手跡で書かれてあった。河風かわかせも当代の親王、古親王の隔てを見せず吹き通うのであったから、南の岸の楽音は古宮家の人の耳を喜ばせた。

迎えの勅使として藤大納言とうが来たほかにまた無数にまいったお迎えの人々をしたがえて兵部卿の宮は宇治をお立ちになった。若い人たちは心の残るふうに河のほうをいつまでも顧みして行った。宮はまたよい機会をとらえて再遊することを期しておいになるのである

る。一行の人々の山と水の風景を題にした作が詩にも歌にも多くで  
きたのであるが細かには筆者も知らない。

周囲に御遠慮があつて宇治の姫君へ再三の消息のおできにならな  
かつたことを匂宮は飽き足らぬように思召して、それから薫の手  
をわずらわさずに、直接のお文ふみがしばしば八の宮へ行くことになつ  
た。父君の宮も、

「初めどおりにお返事を出すがい。求婚者風にこちらでは扱わな  
いでおこう。交友として無聊ぶりょうを慰める相手にはなるだろう。風流男  
でいられる方が若い女王のいることをお聞きになつての軽い遊びの  
心持ちだろうから」

こんなふうにお勧めになる時などには中姫君が書いた。大姫君は  
遊びとしてさえ恋愛を取り扱うことなどはいとわしがるような高潔  
な自重心のある女性であつた。

いつでも心細い山荘住まいのうちにも、春の日永ひながの退屈さから催  
される物思いは二人の女王から離れなかつた。いよいよ完成された  
美は父宮のお心にかえつて悲哀をもたらした。欠点でもあるのであ  
れば惜しい存在であると歎かれることは少なからうがなどほんもんと煩悶を  
あそばされるのであつた。大姫君は二十五、中姫君は二十三になつ  
ていた。

宮のために今年は重く謹慎をあそばされねばならぬ年と占われて  
いた。心細い気をお覚えになつて、仏勤めを平生以上にゆるみなく  
あそばす八の宮であつた。この世に何の愛着をも今はお持ちになら  
ぬお心であつたから、未来の世のためにいっさいを捨ててぶつてし仏弟子の  
生活にもおはいりになりたいのであつたが、ただ二女王をこのまま  
にしておく点に御不安があつて、深い信仰はおありになつても、こ

のことになすべからぬ煩悶はんもんをするようになるのは遺憾であると思召すらしいのを、奉仕する女房たちはお察ししていたが、そのことについて宮は、必ずしも理想どおりではなくとも、世間体もよく、親として、それくらいであれば譲歩してもよいと思われる男が求婚して来たなら、立ち入って婿としての世話はやかないままで結婚を許そう、一人だけがそうした生活にはいれば、それに大体のことは頼みうることにもなつて安心は得られるであろうが、それほどにまで誠意を見せて婿を求め人もない。まれまれにはちよつとした機会と仲介人を得て、そうした話もあるが、皆まだ若々しい人たちが一時的に好奇心を動かして、初瀬はせ、春日かすがへの中休みの宇治での遊び心のような恋文こいぶみを送つて来る程度にとどまり、こうした閑居をあそばすだけの宮として、女王にはたいした敬意も持たず礼のない軽蔑けいべつ的な交渉をして来るのなどには、その場だけの返事をすら女王にお書かせにならない。兵部卿しやうぶせいの宮だけではどうしてもこの恋を遂げたいという熱意を持つておいでになる。これも前生の約束事であつたのかもしれぬ。

源宰相中將はその秋中納言になつた。いよいよはなやかな高官になつたわけであるが、心には物思いが絶えずあつた。自身の出生した初めの因縁に疑いを持つていたころよりも、真相を知つた時に始まつた過去の肉親に対する愛と同情とともに、かの世でしているであろう罪についての苦闘を思いやるのが重苦しい負担に覚えられ、その父の罪の軽くなるほどにも自身で仏勤めがしたいと願われるのであつた。あの話をした老女に好意を持ち、人目を紛らすだけの用意をして常に物質の保護を怠らぬようになった。

中納言はしばらく宇治の宮をお訪ねたずせず<sup>たず</sup>にいたことを急に思い出

して出かけた。街まちの中にはまだはいって来ぬ秋であつたが、音羽山が近くなつたところから風の音も冷ややかに吹くようになり、槇まきの尾山の木の葉も少し色づいたのに気がついた。進むにしたがつて景色けしきの美しくなるのを薫かおるは感じつつ行つた。

中納言をお迎えになつた宮は平生にも増して喜びをお見せになり、心細く思召すことを何かと多くこの人へお話しになるのであつた。お亡くなりになつたあとでは女王たちを時々一訪たずねて来てやつてほしいと思召すこと、親戚しんせきの端の者として心にとめておいてほしいと思召すことを、正面からはお言いにならぬのではあるが、御希望として仰せられることで、薫は、

「一言でも承つておきます以上、決して私はなすべきを怠る者ではございません。この世に欲望を持つことのないようにと心がけまして、世の中に対して人よりは冷淡な態度をとつておりますから、立身をいたすことも望まれません、私の生きておりますかぎりは、ただ今と変わりのない志を御家族にお見せ申したいと考えております」

とお答えしたのを、八の宮はうれしく思召し御満足をあそばされた。おそく昇のぼるころの月が出て山の姿が静かに現われた深夜に、宮は念誦ねんずをあそばしながら薫へ昔の話をお聞かせになつた。

「近ごろの世の中というものはどうなつていいのか私には少しもわからない。御所などでこうした秋の月夜に音楽の演奏されるのに私も侍して、その当時感じたことですが、名人ばかりが集まつて、とりどりの技術を發揮させる御前の合奏よりも、上手じょうずだという名のある女御にょご、更衣こういのいる局々くわくわで心の内では競争心を持ち、表面は風流に交際している人たちの曹司そうしの夜ふけになつて物音の静まつた時刻

に、何ということのない悩ましさを心に持って、ほのかに弾き出される琴の音などにすぐれたものがたくさんありましたよ。何事にも女は人の慰めになることで能事が終わるほどのものですが、それがまた人を動かす力は少くないのですね。だから女は罪が深いとされていられるでしょう。親として子の案ぜられる点でも、男の子はさまで親を懊惱おつらさせはしないだろうが、女はどうせ女で、親が何と思つても宿命に従わせるほかはないのでしょうか、それでも愍然みびんに思われて、親のためには大きな羈絆きはんになりますよ」

と抽象論としてお言いになる言葉を聞いてもお道理至極である、どんなに女王にょおうがたを御心配になつておられるかということが薫にわかるのであつた。

「あなた様のお教えのとおりに、私も苦しい羈絆を持つまいと決心してまいりましたせいですが、自身にはそうした苦しい親心というものを経験いたしません、ただ一つ私には音楽という愛着の覚えられるものがございまして、それによつて遁世とんせいもできずにあります。賢明な迦葉かしょうもやはりそんな心があつて舞をしたりしたものでしょうか」

などと言つて、いつぞや少し聞いた琴と琵琶の調べを今一度聞きたいと熱心に宮へお願いする薫であつた。

家族と薫を親しくさせる第一歩にそれをさせようと思召すのか、宮は御自身で女王たちの室むろへお行きになつて、ぜひにと弹奏をお勧めになつた。十三一絃げんの琴がほのかにかき鳴らされてやんだ。人けの少ない宮の内に、身にしむ初秋の夜のわざとらしからぬ琴の音のするのは感じのよいものであつたが、女王たちにすれば、よい氣になつて合奏などはできぬと思うのが道理だと思われた。

「こんなにして御交際する初めを作ったのですから、若い子らにしばらく客人をまかせておくことにしよう」

それから宮は仏間へおはいりになるのだったが、

「#ここから1字下げ」

「われなくて草の庵いほは荒れぬともこの一ことは枯れじとぞ思ふ

「#ここで字下げ終わり」

こうしてお話のできるのもこれが最終になるような心細い感情を私はおさえることができずに、親心のたあいもないこともたくさん言ったでしょう。すまないことです」

と言ってお泣きになった。薫は、

「#ここから1字下げ」

「いかならん世にか枯れせん長き世の契り結べる草の庵は

「#ここで字下げ終わり」

御所の相撲すもうなどということも済みまして、時間のできますのを待ちましてまた伺いましょう」

などと言っていた。別室で薫はあの昔語りを聞かせてくれた老女を呼び出して、悲しくもなつかしくも思われる話の続きをさせて聞いた。落ちよつとする月は明るく座敷の中を照らして、薫の透すき影は艶えんに御簾みすのあちらから見えた。

隣の室へやには奥へ寄って女王たちがすわっていた。普通の求婚者の言葉ではなく、優雅な話題をこしらえてその人たちにも薫は話して

いたが、言うべき時には姫君も返辞をした。兵部卿の宮が非常に興味を持っておいでになる女性たちであるということも思つて、自分ながらもこんなに接近していながら一步を進めようとする事をしてないのは、これを普通の男と違つた点とすべきである。自然に自分への愛を相手が覚えてくれるのを急ぐこととも思われないと考えているのが薫の本心であつた。しかも恋愛の成立を希望してないわけではないのである。こうした交際でありふしの風物について書きかわす相手としては満足を与える女性であつたから、宿縁のために他と結婚するようなことが女王にあつては遺憾を覚えるであろう、自分の存在している以上は断じてそれはさせたくないというふうに思つていた。まだ夜の明けきらぬ時刻に薫は歸つて行つた。

心細い御様子でみずから余命の少ないふうに観じておいでになつた八の宮の御事が始終心にかかつて、忙しい時が過ぎたならまた宇治をお訪ねしようと思召していた。兵部卿の宮も秋季のうちに紅葉見として行きたいと思召してよい機会をうかがつておいでになつた。お手紙はしばしば行く。女のほうでは真心からの恋とは認めていないのであるから、うるさがるふうは見せずに、微温的に扱つた返事だけは時々出してた。

秋がふけてゆくにしたがつて八の宮は健康でなくおなりになつて、いつもおいでになる山の寺へ行つて、念仏だけでも専念にしたいと思召しになり、女王たちにも現在の感想と、知りがたい明日についての注意などをお話しになるのであつた。

「人生のそれが常で、皆死んで行かねばならないのだが、その際にも家族の上のことで、何か安心が見いだせれば、それを慰めにして悲しみに勝つこともできるものらしいが、私の場合は、このあとを

だれが引き受けて行つてくれるという人もないあなたがたを残して行くのだから非常に悲しい。けれどもこんなことに妨げられて純一な信仰を得ることができなくなれば、すべてがだめなことになって、永久の闇に迷つていなければなりません。あなたがたを眼前に置きながらも死んで行く日は別れねばならないのだから、死後のことにまで干渉をするのではないが、私だけでなく、あなたがたの祖父母の方がたの不名誉になるような軽率な結婚などはしてならない。根底もない一時的な人の誘惑に引かれてこの山荘を出て行くようなことはしないようになさい。ただ自分は普通の人の運命と違つた運命を持っている人間であると自分を思つて、生涯をここで果たす氣になつていけるがいい。その堅い信念さえ持つておれば、長いと思う人生もいつか済んでゆくものなのだ。ことに女であるあなたたちは、世間並みの幸福を願わずに堪え忍んでいることであるといふ人から批難をされるようなこともなく一生を過ごす方がいいでしょう」

お聞きしている姫君らは、どう自分たちがなつて行くかというよ  
うな不安さよりも、父君がお亡れになつては人生に片時も生きてい  
られるものでないという平生からの心持ちが、こんなふうな孤児に  
なつての将来のことなどをお言ひになることによつて、言ひようも  
ない悲しみになつて、宮は心の中でこそ娘への愛情から離れようと  
努力はしておいでになつたであろうが、明け暮れそばにいてあなた  
かい手で育んでおいでになつたのであるから、にわかになつた意  
見をお言ひだしになつたのは、冷酷なのではないが、女王たちにと  
つてうらめしく思われるのはもつともと見えた。

明日は寺へおはいりになるうとする日、平生のようでなくそちら

こちら家の中を宮はながめまわっておいでになった。一時的に仮り住居となされたまま年月をお過ごしになった、あまりにも簡単な建物についても、自分の亡くなつたあとでこんな家に若い女王たちがなお辛抱を続けて住んでいられるであろうかとお思いになり、宮は涙ぐみながら念誦をあそばされる御容姿にも、清楚な美があつた。年をとつた女房らをお呼び出しになって、

「私がどんな所においても安心していられるように女王たちへ仕えてくれ。何事があつても初めから人目を惹かぬ家であつたなら、その娘がのちに墮落しようとも問題にする者もない。自分らの家では、それはしかしもう世間の人の眼中にはないであろうがね。ともかくもふがない墮落をしていつては御先祖にすまないのだからね。貧しい簡素な生活よりできないのはほかにもあることだから、それはいいのだ。貴族の娘は貴族らしく品位を落とさないで他の軽侮を受けない身の持ち方で終始するのが世間へ対しても、それら自身にも潔いことだろうと思う。世間並みな幸福を得させようとしてするとも、そのとおりにならないではかえつて悲惨だから、決して軽率な考えでおまえがたが女王らに過失をさせるような計らいをしてはならない」

などとお言い聞かせになった。

いよいよその朝早くお出かけになろうとする時にも、宮は女王たちの居間へおいでになって、

「私の留守の間を心細く思わずにお暮らしなさい。機嫌よく音楽でももてあそんでいるがよい。何事も思うままにならぬ人生なのだから悲観ばかりはせずになさい」

ともお言いになり、顧みがちに寺へおいでになったのであつた。

たださえ寂しい境遇の女王たちはいつそう心細さを感じて、物思いはかりがされ、明け暮れ二人はいつしよにいて話し合いながら、  
 「どちらか一人がいなくなったらどうして暮らされるでしょう。でも明日のことはわかりませんからね。もし二人が別れてしまうことになったらどうしましょう」

などとも言い、泣きも笑いもするのであった。遊戯に属したことも、勉強事もいつしよにして慰め合っていた。御寺みでらで行なっておいでになる三昧さんまいの日数が今日で終わるはずであるといつて、女王たちは父宮のお帰りになるのを待っていた日の夕方に山の寺から宮のお使いが来た。

「今朝けさから身体からだのぐあいが悪くて家のほうへ帰られぬ。風邪かぜかと思うのでその手当てなどを今日きょうはしています。平生以上にあなたがたと逢あいたく思う時なのにあやくなことです」

というお言葉が伝えられた。姫君たちは驚きに胸が一時にふさがれた気もしながら、綿の厚い宮のお衣服を作らせてお送りなどした。それに続いて二、三日もまだ宮は山をお出になることができない。

御容体を聞きに出荘から手紙の使いを出すと、

「大病にかかったとは思われない。ただどこもなく苦しいだけであるから、少しでもよろしくなれば帰ろうと思う。今はつとめて心身を安静にしようとしている」

と言葉でのお返事があった。

阿闍梨あじやりはずっと付き添って御看護をしていた。

「たいした御病患とは思われませんが、あるいはこれが御寿命の終わりになるのかもしれない。姫君がたのことを何も心配あそばすには及びません。人にはそれぞれ独立した宿命というものがあるの

でございますから、あなた様は決して気がかりとあそばされること  
はないのでございます」

こう阿闍梨は言い、いよいよ恩愛の情をお捨てになることをお教  
え申し上げて、

「今になりました、ここからお出になるようなことはなさらぬがよ  
ろしゅうございます」

といさめるのであった。これは八月の二十日ごろのことであつた。  
深くものが身にしむ時節でもあつて、姫君がたの心には朝霧夕霧の  
晴れ間もなく歎なげきが続いた。有り明けの月が派手はでに光を放つて、宇  
治川の水の鮮明に澄んで見えるころ、そちらに向いて揚げ戸を上げ  
させて、二人は外の景色けしきにながめ入っていると、鐘の声がかすかに  
響いてきた。夜が明けたのであると思つているところへ、寺から人  
が来て、

「宮様はこの夜中ごろにお薨かくれになりました」

と泣く泣く伝えた。その一つの報しらせが次の瞬間にはあるのでな  
いかと、気にしない間もなかつたのであつたが、いよいよそれを聞  
く身になった姫君たちは失心したようになった。あまりに悲しい時  
は涙がどこかへ行くものらしい。二人の女王にょおうは何も言わずに俯伏うつぶし  
になっていた。父君の死というものも日々一枕頭ちんとうにいて看護してき  
たあとに至つたことであれば、世の習いとしてあきらめようもある  
のであろうが、病中にお逢いもできなかつたままでこうなつたこと  
を姫君らの歎なげくのももつともである。しばらくでも父君に別れたあ  
とに生きているのを肯定しない心を二人とも持つていて、自分も死  
なねばならぬと泣き沈んでいるが、命は失つた人にも、失おうとす  
る人にも、左右する自由はないものであるからしかたがない。阿闍あじや

梨にはずっと以前から御遺言があったことであるから、葬送のこともお約束の言葉どおりにこの僧が扱ってした。御遺骸になっておいでになる父君でも、もう一度見たいと姫君たちは望んだのであるが、「今さらそんなことをなさるべきではありません。御病中にも私は姫君がたにもお逢いにならぬがよろしいと申し上げていたのですから、こうなりましたから、互いに無益な執着を作ることになり、あなたがたの将来のためにもなりません」

阿闍梨は許そうとしなかった。御臨終までの御様子を話されることによつても、阿闍梨のあまりな出世間ぶりを姫君たちは恨めしく憎くさえ思つた。

出家のお志は昔から深かつた宮でおありになつたが、まつたくの孤児になる姫君を置いておおきになるのが心がかかりで、生きている間はせめてかたわらを離れず守る父になつておいでになること、また一方のやる瀬ない人の世の寂しさも紛らしておいでになつたのである。それも永久のことにはならなくて、生死の線に隔てられておしまいになつたことは、亡き宮のためにも、お慕いする女王がたのためにも悲しいことであつた。

薫も宇治の八の宮の訃<sup>ふ</sup>を承つた。あまりにはかない人の命が悲しまれ、尊い人格の御方が惜しまれて、もう一度ゆっくりお話のしかつたことが多く残っているように思われて、人生の悲哀がしみじみ痛感されて泣いた。これが最終の会見であるかもしれぬとお言ひになつたが、いつの時にも人生のはかなさ脆<sup>もろ</sup>さをお感じになつておられる方のお言葉であつたから、特別なお気持ちで仰せられるとも聞かず、このように早くその悲しい期が至るとも思わなかつたと考

えると、かえすがえすも悲しかった。阿闍梨あじやりの所へも、山荘のほうへも弔問の品々を多く薫は贈った。こんな好意を見せる人はほかになかつたのであるから、悲しみに沈んでいながらも二人の女王は昔からもこうした好意のある補助は絶えずしてくれる薫であることを思わざるをえなかつた。

普通の家の親の死でも、その場合にはこれほどの悲しいことはないように思われるのであるから、ましてただお一人を頼みにして今日まで来た姫君たちはどれほど深い悲しみをしていることであろうと薫は宇治の山荘を想像して、仏事のための費用などを多く阿闍梨に寄せた。邸やしきのほうへも老いた弁の君の所へというようにして金品を贈り、誦經すきやうの用にすべき物などさえも送った。

いつも夜のままのような暗い月日もたつて九月になった。野山の色はまして人に涙を催させることが多く、争つて落ちる木の葉の音、宇治川の響き、滝なす涙も皆一つのものようになって、この女王たちをますます深い悲しみの谷へ追つた。こんなふうでは、命は前生からきまつたものとは言え、そのしばらくの間さえ堪えて生きがたいことにならぬかと女房たちは姫君らを思い、心細がつているいろに慰めようとするのであつた。

この山荘にも念仏をする僧が来ていて、宮のお住みになつた座敷は安置された仏像をお形見と見ねばならぬ今となつては、そこに時々伺候した人たちが忌籠きこもりをして仏勤めをしていた。

兵部卿ひょうぶぎやうの宮からもたびたび慰問のお手紙が来た。このおりからそつした性質のお文ふみには返事を書くこととする気にもならず打ち捨ててあつたから、中納言にはこんな態度をとらないはずであるのに、自分だけはいつまでもよそよそしく扱われると女王を恨めしがつてお

いでになった。紅葉もみじの季節に詩会を宇治でしようと匂宮におみやはしておいでになったのであるが、恋しい人の所が喪の家になっている今はそのかいもないとおやめになったが、残念に思召した。

八の宮の四十九日の忌も済んだ。時間は悲しみを緩和するはずであると言は思召して、長い消息を宇治へお書きになった。時雨しぐれが時をおいて通って行くような日の夕方であった。

「#ここから2字下げ」

牡鹿をしか鳴く秋の山里いかならん小萩こはぎが露のかかる夕暮れ

「#ここから1字下げ」

こうした空模様の日、恋する人はどんなに寂しい気持ちになっているかを思いやってくださらないのは冷淡にすぎます。枯れてゆく野の景色けしきも平気でながめておられぬ私です。

「#ここで字下げ終わり」

などという文字である。

「このお言葉のように、あまりに尊貴な方を無視する態度を取り続けてきたのですからね、何かあなたからお返事をお出しなさい」

と、大姫君は例のように中の君に勧めて書かせようとした。中の君は今日まで生きていて硯すずりなどを引き寄せてものを書くことがあるうなどとはあの際に思われなかったのである、情けなく、時というものがあったってしまったではないかなどと思うと、また急に涙がわいて目がくらみ、何も見えなくなったので、硯は横へ押しやって、「やっぱり私は書けません。こんなふうにごろは起きてすわったりできるようになりましたことでも、悲しみの日も限りがあるとい

うのはほんとうなのだろうかと思うと、自分がいやになるのですもの」

と可憐な様子で言って、泣きしおれているのも、姉君の身には心苦しく思われることであつた。夕方に来た使いが、

「もう十時がだいぶ過ぎてまいりました。今夜のうちに帰れるでしょうか」

と言っていると聞いて、今夜は泊まってゆくようにと言わせたが、「いえ、どうしても今晚のうちにお返事をお渡し申し上げませんでは」

と急ぐのがかわいそうで、大姫君は自分は悲しみから超越しているというふうを見せるためでなく、ただ中の君が書きかねているのに同情して、

「#ここから2字下げ」

涙のみきりふさがれる山里は籬まがきに鹿しかぞもろ声に鳴く

「#ここで字下げ終わり」

という返事を、黒い紙の上の夜の墨の跡はよくも見分けられないのであるが、それを骨折ろうともせず、筆まかせに書いて包むとすぐに女房へ渡した。

お使いの男は木幡山こはたを通るのに、雨氣の空でことに暗く恐ろしい道を、臆病じやくびょうでない者が選ばれて来たのか、気味の悪い篠原道せいはらを馬もとめずに早打ちに走らせて一時間ほどで二条の院へ帰り着いた。御前へ召されて出た時もひどく服の濡ぬれていたのを宮は御覧になって

物を賜わった。

これまで書いて来た人の手でない字で、それよりは少し年上らしいところがあり、才識のある人らしい書きぶりなどを宮は御覧になつて、しかしどちらが姉の女王か、中姫君なのかと熱心にながめ入つておいでになり、寢室へおはいりにならないで起きたままでいらせられる、この時間の長さに、どれほどお心にしむお手紙なのであろうなどと女房たちはささやいて反感も持った。眠たかつたからであらう。

兵部卿の宮はまだ朝霧の濃く残っている刻にお起きになつて、また宇治への消息をお書きになつた。

「#ここから2字下げ」

朝霧に友惑はせる鹿の音を大方にやは哀れとも聞く

「#ここから1字下げ」

私の心から発するものは二つの鹿の声にも劣らぬ哀音です。

「#ここで字下げ終わり」

というのである。

風流遊びに身を入れ過ぎるのも余所見よそみがよろしくない、父宮がついておいでになるといふのを力にして、今まではそうした戯れに答えたりすることも安心してできたのであるが、孤児の境遇になつて思わぬ過失を引き起こすようなことがあつては、ああして気がかりなふうにならぬに仰せられた自分たちのために、この世においでにならぬ御名にさえ疵きずをおつけすることになつてはならぬと、何事にも控え目になつている女王はどちらからも返事をしなかつた。この兵部卿の

宮などは軽薄な求婚者と同じには女王たちも見ていなかった。ちょっとした走り書きの消息の文章にもお墨の跡にも美しい艶えんな趣の見えるのを、たくさんはそうした意味を扱った手紙を見てはいなかったが、これこそすぐれた男の文ふみというものであるうとは思いつながらも、そうした尊貴な風流男につきあうことも、今の自分らに相應せぬことであるから、感情を傷つけることがあっても、世外の人のようにして超然としていようと姫君たちは思っていた。薫かおるからの手紙だけはあちらからもまじめに親切なことを多く書かれてくるのであったから、こちらからも冷淡なふうは見せず常に返事が出された。

忌中が過ぎてから薫が訪たずねて来た。東の縁に沿った座敷を、父宮の服喪のために一段低くした所にこのごろはいる姫君たちの所へ来て、まず老いた弁を薫は呼び出した。悲しみに暗い日を送っている女王にょおうらに近く、まばゆい感じのするほどの芳香を放つ人が来たのであったから、きまり悪く姫君たちは思つて、言いかげられることにも返辞ができないでいると、

「こんなふうな隔てがましい扱いはなさらなくて、昔の宮様が私を御待遇くださいましたように心安くさせていただけはお見舞いにまいるがいもあるというものです。柔らかいふうに氣どつた若い人たちのするようなことは経験しないものですから、お取り次ぎを中にしてでは言葉も次々に出てまいりません」

と薫は言った。

「どうしてそれで生きていたかと思われような私たちで、生きてはおりましてもまだ悲しい夢に彷徨ほうつしているばかりでございます。

知らず知らず空の光を見るようになりますことも遠慮がされまして、外に近い所までは出られないのでございます」

という姫君の挨拶あいさつが伝えられてきた。

「それを申せば限りもない御孝心を持たれますこととは深く存じております。日月の光のもとへ晴れ晴れしく御自身からお出ましになることこそはばかりがおありになるでしょうが、私としましてはまた宮様をお失いたしましての悲しみをほかのだれに告げようもないことですし、あなた様がたのお歎きの慰みにもなることも申し上げたいものですから、しいて近くへお出ましを願っているわけです」

こう薫が言うと、それを取り次いだ女房が、

「あちらで仰せになりますとおりに、お悲しみにお沈みあそばすのをお慰めになりたいと思召す御好意をおくみになりませんでは」

などと言葉を添えて姫君を動かそうとする。ああは言いながらも大姫君の心にもようやくやく悲しみの静まって来たこのごろになって、

宮の御葬送以来薫の尽くしてくれたいろいな親切がわかつているのであるから、亡なき父宮への厚情からこんな辺鄙へんびな土地へまで遺族を訪たずねてくれる志はうれしく思われて、少しいざって出た。薫は大

姫君に持っている愛を語り、また宮が最後に御委託の言葉のあったのなどをこまごまとなつかしい調子で語っていて、荒く強いふうなどはない人であるからうとましい気などはしないのであるが、親兄弟でない人にこうして声を聞かせ、力にしてたよるように思われるふうになるのも、父君の御在世の時にはせずとよいことであつたと思うと、大姫君はさすがに苦しい気がして恥ずかしく思われるのであつたが、ほのかに一言くらいの返辞を時々する様子にも、悲しみに茫然ぼうぜんとなつているらしいことが思われるのに薫は同情していた。

御簾みすの向こうの黒い几帳きちようの透すき影が悲しく、その人の姿はまして寂

しい喪の色に包まれていることであろうと思ひ、あの隙見すきみをした夜明けのことと思ひ比べられた。

「#ここから2字下げ」

色変はる浅茅あさぢを見ても墨染めにやつるる袖そでを思ひこそやれ

「#ここで字下げ終わり」

これを独言ひとりごとのように言う薫であった。

「#ここから2字下げ」

色変はる袖をば露の宿りにてわが身ぞさらに置き所なき

「#ここで字下げ終わり」

はずるる糸は（侘わび人の涙の玉の緒とぞなりぬる）とだけ、あとの声は消えたまま非常に悲しくなつたふうで奥へはいったことが感じられた。それをひきとめて話し続けうるほどの親しみは見せがたい薫は、身にしむ思ひばかりをしていた。老いた弁が極端に変わった代理役に出て来て、古い昔のこと、最近に昔となつた宮のことを混ぜていずれも悲しい思ひを薫に与える話ばかりをした。自身にかわる夢のような古い秘密に携わつた女であつたから、醜く衰えた女と毛ぎらいもせず薫は親しく向き合っているのであつた。

「私は幼年時代に院とお別れした不幸な者で、悲しいものは人生だとその当時から身にしみ渡るほど思ひ続けているのですから、大人おとなになつていくにしたがつて進んでいく官位や、世間から望みをかけられてることなどはうれしいこととも思われなのです。私の願

うのはこうした静かな場所に閑居のできることでしたから、八の宮の御生活がじっくり私の理想に合ったように思つて近づきたてまつたのですが、こんなふう悲しく一生をお終わりになつたので、また人生をいとわしいものに思うことが深くなつたのです。しかしあとの御遺族のことなどを申し上げるのは失礼ですが、自分が生きていくのに努力してでも御遺言をまちがいになく遂行したい心に今はなっています。なぜ私が努力を要するかと言いますと、思いも寄らぬ昔話をあなたが聞かせになつたものですから、いつそうこの世に跡を残さない身になりたい欲求が大きくなつたのです」

と、薫の泣きながら言うのを聞いている弁はまして大泣きに泣いて、言葉も出せないふうであつた。薫の容姿には柏木かしわぎの再来かと思われる点があつたから、年月のたつうちに思い紛れていた故主のことがまた新しい悲しみになつてきて、弁は涙におぼれていた。この女は柏木の大納言の乳母めのとの子であつて、父はこの女王たちの母夫人の母方の叔父おじの左中弁で、亡くなつた人だったのである。長い間一田舎いながに行つていて、宮の夫人もお亡くなりになつたのち、昔の太政大臣家とは縁が薄くなつてしまい、八の宮が夫人の縁でお呼び寄せになつた人なのである。身分もたいした者でなく、奉公ずれにしたところもあるが、賢い女であるのを宮はお認めになつて、姫君たちのお世話役にしてお置きになつたのである。柏木の大納言と女三さんの宮みやに關したことは、長い月日になじんで何の隠し事もたいていは持たぬ姫君たちにも今まで秘密を打ち明けて言つてはなかつたのであるが、薫は、老人は問はず語りをするものになつていたのであるから、普通の世間話のような誇張は混ぜて言わなかつたまでも、あの貴女きじよらしい貴女の二人は知っているのであるかもしれぬと想像

されるのが残念でもあり、また気の毒な者に自分を思わせていることがすまぬようにも思われたりもした。こんなことによっても女王の一人を自分は得ておかないではならぬという心を薫に持たせることになるかもしれない。

女ばかりの家族の所へ泊まって行くこともやましい気がして、帰ろうとしながらも薫は、これが最終の会見になるかもしれないと八の宮がお言いになった時、近い日のうちにそんなことになるはずもないという誤った自信を持って、それきりお訪ねすることなしに宮をお失いした、それも秋の初めで、今もまだ秋ではないか、多くの日もたたぬうちに、どこの世界へお行きになったかもわからぬことになるとははかないことではないかと歎かれた。

別段普通の貴人めいた装飾がしてあるのでもなく簡素にお住まいをしておいでになったが、いつもきよ浄く掃除そうじの行き届いた山荘であったのに、荒法師たちが多く出入りして、ちよつとした隔ての物を立てて臨時の詰め所をあちこちに作っているような家に今はなっていた。念誦ねんずの室へやの飾りつけなどはもとのままであるが、仏像は向かいの山の寺のほうへ近日移されるはずであるということ聞いた薫は、こんな僧たちまでもいなくなったあとに残る女王たちの心は寂しいことであろうと思うと、胸さえも痛くなって、その人たちがあわ憐れまれてならない。

「もう非常に暗い時刻になりました」  
と従者が告げて来たために、外をながめていた所から立ち上がった時に雁かりが啼ないて通った。

「#ここから2字下げ」

秋霧の晴れぬ雲井にいとどしくこの世をかりと言ひ知らすらん

「#ここで字下げ終わり」

薫の歌である。

兵部卿の宮に薫がお逢いする時にはいつも宇治の姫君たちが話題の中心になった。反対されるかもしれないぬ父君の親王もおいでにならなくなつて、結婚はただ女王の自由意志で決まるだけであると見ておいでになつて、宮は引き続き誠意を書き送つておいでになつた。女のほうではこの相手に対しては短いお返事も書きにくいように思つていた。好色な風流男というお名が拡まつていて、好奇心からいよいよにばかり想像をしておいでになる方へ、はなやかな世間とは没交渉のような侘び居をするものが、出す返事などはどんなに時代おくれなものと見られるかしれぬと歎じていたのであった。

いつとなくたつてしまふのは月日でないか、人生のはかなさ脆さを知りながらも、自分らに悲しい日の近づいているものとも知らずに、ただ一般的に頼みがたいものは人生であるとしていて、親子三人が別々な時に死ぬるものともせず、滅ぶのはいつしよであるような妄想を持ち、それをまた慰めにもしていた過去を思つてみても幸福な世を自分らは持つていたのではないが、父君がおいでになるということによつて、何とない安心が得られ、他から威す者もない、他を恐れることもないとして生きていた、それが今日では風さえ荒い音をして吹けば心がおびえるし、平生見かけない人たちが幾人も門をはいつて来て案内を求める声を聞けばはつと思わせられもするし、恐ろしく情けないことの多くなつたのは堪えられぬことであると、涙の中で姉妹が語り合つていっているうちにその年も暮れるのであつ

た。

雪や霰あられの多いころはどこでもはげしくなる風の音も、今はじめて寂しい恐ろしい山住みをする身になったかのごとく思つて宇治の姫君たちは聞いていた。女房らが話の中で、

「いよいよ年が変わりますよ。心細い悲しい生活が改まるような春の来ることが待たれますよ」

などと言っているのが聞こえる。何かに希望をつないでいるらしい。そんな春は絶対にはずであると思つていた。宮が時々念仏におこりになつたために、向かいの山寺に人の出はいりすることもあつたのであるが、阿闍梨あじやりも音問おとずれの使いはおりおり送つても、宮のおいでにならぬ山荘へ彼自身は来てもかいないこととして顔を見せない。時のたつにつれて山荘の人の目にはいる人影は少なくなるばかりであつた。気にとまらなかつた村民などさえもたまさかに訪ねてくれる時はうれしく思うようになった。寒い日向かうことであるから燃料の枝とか、木の実とかを拾い集めてささげる山の男もあつた。阿闍梨の寺から炭などを贈つて来た時に、

「#ここから1字下げ」

年々のことになっておりますのが、ただ今になりました中絶させますのは寂しいことですから。

「#ここで字下げ終わり」

という挨拶あいさつがあつた。冬季の僧たちのために、必ず毎年綿入れの衣服類を宮が寺へ納められたのを思い出して、女王もそれらの品々を使い託した。荷を運んで来た僧や子供侍が向かいの山の寺へ上がつて行く姿が見え隠れに山荘から数えられた。雪の深く積もつた日であつた。泣く泣く姫君は縁側の近くへ出て見送つていたのであ

る。宮はたとい出家をあそばされても、生きてさえおいでになればこんなふうに使いが常に往来ゆきすることによって自分らは慰められたであろう、どんなに心細い日を送っても、また父君にお逢あいのできる日はあつたはずであるなどと二人は語り合つて、大姫君、

「#ここから2字下げ」

君なくて岩のかけ道絶えしより松の雪をも何とかは見る

「#ここで字下げ終わり」

中の君、

「#ここから2字下げ」

奥山の松葉に積もる雪とだに消えにし人を思はましかば

「#ここで字下げ終わり」

消えた人でない雪はまたまた降りそつて積もつていく、うらやましいまでに。

薫かおるは新年になれば事が多くて、行こうとしても急には宇治へ出かけられまいと思つて山荘の姫君がたを訪たずねてきた。雪の深く降り積もつた日には、まして人並みなものの影すら見がたい家に、美しい風采ふうさいの若い高官が身軽に来てくれたことは貴女たちをさえ感激させたのであろう、平生よりも心を配つて客の座の設けなどについて大姫君は女房らへ指図さしずを下していた。喪の黒漆でない火鉢ひばちを、しまいこんだ所から取り出して塵ちりを払いなどしながらも、女房は亡き宮がこの客をどのように喜んでお迎えになつたかというようなことを姫

君に申ししているのであった。みずから出て話すことはなお晴れがましいこととして姫君は躊躇ちゅうちゆしていたが、あまりに思いやりのないように薫のほうでは思うふうであったから、しかたなしに物越して相手の言葉を聞くことになった。打ち解けたとまではいわれぬが、前の時分よりは少し長く続けた言葉で応答をする様子に、不完全なところのない貴女らしさが見えた。こうした性質の交際だけでは満足ができぬと薫は思い、これはやや突然な心の動き方である、人は変わるものである、本来の自分はそうした方面へ進むはずではないのであるが、どうなっていくことかなどと自己を批判していた。

「兵部卿の宮が、私に御自身への同情心が欠けていると恨んでおられることがあるのです。故人の宮様が、姫君がたについて私への最後のお言葉などを、何かのついでに申し上げたのかもしれない。

また女性に興味をお持ちになるお心から想像をたくましくあそばし、この恋であるかもしれませぬ。私が女王にょおうがたにこの御縁談を取りなして成功させるだけの好意を示すべきであるのに、こちらでは御冷淡な態度をおとり続けになりますので、私がかえって妨げをしているのではないかというふうにたびたび仰せられるものですから、そうしましたことは私のしたいと思うことではありませんが、また御紹介しておつれ申し上げるくらいを断然お断わりするというふうにもまいらないのです。どうしてお手紙などをそう御冷淡にお扱いになるのでしょうか。好色な方のように世間では言うようですが、普通に恋を漁あさる方ではありません。女に対して一つの見識を立てておいでになる方ですよ。遊戯的に手紙をおやりになる相手があさはかで、たやすく受け入れようとするのなどは軽蔑けいべつして接近されるようなこともないという話です。何事の上にも自意識が薄くてなるにまかせ

ている人は他から勧められるままに結婚もして、欠点が目について  
 気に入らぬところはあつても、これが運命なのであるう、今さらし  
 かたがないと我慢して済ますでしょうから、かえつてほかから見て  
 まじめな移り気のない男に見えもするでしょう。しかしそうでない  
 場合もあつて、男はそのために身を持ちくずし、一方は捨てられた  
 妻で終わるといふ悲惨なことにもなるのです。お心を惹く点の多い  
 女性にお逢あひになつて、その女性が宮をお愛しするかぎりは軽々し  
 く初めに変わった態度をおとりになるような恐れのない方だと私は  
 思つています。だれもよく観察申し上げないようなことも私だけは  
 細かくお知り申し上げている宮です。もし似合あわしい御縁だと思召  
 すようでしたら、私はこちらの者としてできるだけのことを御新婦  
 のためにいたしましょう。ただ道が遠い所ですから奔走する私の足  
 が痛くなることでしょう」

忠実に話し続ける薫の言葉を聞いていて、これを自分の問題であ  
 るとは思わぬ大姫君は、姉として年長者らしい、母代わりのよい挨あ  
 拶さつがしたいと思うのであつたが、その言葉が見つからないままに、  
 「何とも申し上げることはございません。一つのことをあまり熱心  
 にお話しなさいますものですから、私は戸惑あいをして」

と笑つてしまったのもおおようで、美しい感じを相手に受け取ら  
 せた。

「あなたの問題として御判断を願つてのことではございません。  
 そちらは雪の中を分けてまいりました志だけをお認めになつていた  
 だけばよろしいのです。先ほどの話は姉君としてお考えおきくださ  
 い。宮の対象にあそばされる方はまた別の方のようです。御手跡の  
 主の不分明な点についてのお話も少し承つたことがあるのですが、

あちらへのお返事はどちらの女王様がなさっていらっしやいますか」

と薫は尋ねていた。よくも自分が戯れにもお相手になってそののちの手紙を書くことをしなかった、それはたいしたことではないが、こんなことを言われた際に、どれほど恥ずかしいかもしれぬからと大姫君は思っていて、返辞はできないで、

「#ここから2字下げ」

雪深き山の棧道かけはし君ならでまたふみ通ふ跡を見ぬかな

「#ここで字下げ終わり」

こう書いて出すと、

「釈明のお言葉を承りますことはかえって私としては不安です」と薫は言って、

「#ここから1字下げ」

「つららとぢ駒踏こまみしだく山河やまかはを導しるべしがてらまづや渡らん

「#ここで字下げ終わり」

それが許されましたなら影さえ見ゆる（浅香山影さへ見ゆる山の井の浅くは人をわれ思もはなくに）の歌の深い真心に報いられるというものです」

といどむふうを見せた。思わぬ方向に話の転じてきたことから大姫君はやや不快になって返辞らしい返辞もしない。俗界から離れた聖人のふうには見えぬが、現代の若い人たちのように気どったとこ

るはなく、落ち着いた気安さのある人らしいと大姫君は薫を見ていた。若い男はそうあるべきであると思うとおりの人のようであった。言葉の引っかかりのできる時々、ややもすれば薫は自身の恋を語るうとするのであるが、気づかないふうばかりを相手を作るために気恥ずかしくて、それから八の宮の御在世になったころの話をはじめにするようになった。

日が暮れたならば雪は空も見えぬまでに高くなるであろうと思う従者たちは、主人の注意を促す咳せき払いなどをしだしたために、帰ろうとして薫は、

「何たる寂しいお住居すまいでしょう。全然山荘のような静かな家を私は別に一つ持っておりまして、うるさく人などは来ない所ですが、そこへ移ってみようかとだけでも思ってくださいましたらどんなにうれいでしょう」

こんなことを女王に言っていた。けっこうなお話であると、片耳に聞いて笑顔えがおを見せる女房のあるのを、醜い考え方をする人たちである、そんな結果がどうして現われてこようと、姫君は見もし聞きもしていた。

菓子などが品よく客に供えられ、従者たちへは体裁のいい酒肴しゅこうが出された。いつぞや薫からもらった衣服の芳香を持ちあぐんだ宿直とくのちの侍も鬢かすらひげといわれる見栄みえのよくない顔をして客の取り持ちに出ていた。こんな男だけが守護役を勤めているのかと薫は見て、前へ呼んだ。

「どうだね。宮がおいでにならなくなって心細いだろうが、よく勤めをしていてくれるね」

と優しく慰めてやった。悲しそうな顔になって鬢男ひげおとこは泣き出した。

「何の身寄りも助け手も持たない私でございます。ただお一方のお情けでこの宮に三十幾年お世話になっております。若い時でさえそれでございますから、今日になりましたはましてどこを頼みにして行く所がございましょう」

こんな話をするので、ますますみじめに見える髭男であった。

宮のお居間だったお座敷の戸を薫があげてみると、床には塵が厚く積もっていたが、仏だけは花に飾られておわしました。姫君たちが看経したあとと思われる。畳などは皆取り払われてあるのであった。御自分に出家の遂げられる日があつたならと、それに薫が追隨して行くことをお許しになつたことなどを思い出して、

「#ここから2字下げ」

立ち寄らん蔭と頼みし椎が本むなしき床になりけるかな

「#ここで字下げ終わり」

と歌い、柱によりかかっている薫を、若い女房などはのぞき見をしてほめたたえていた。

この近くの薫の領地の用を扱っている幾つかの所へ馬の秣などを取りにやると、主人は顔も知らぬような田舎男がおおぜい隊をなさんばかりにして山荘にいる薫へ敬意を表しに来た。見苦しいことである。薫は思ったのであるが、髭男を取り次ぎにして命じることだけを伝えさせた。この邸のために今夜も用を勤めるようにと荘園の者へ言い置かせて薫は山荘を出た。

一月にはもう空もうららかに春光を見せ、川べりの氷が日ごとに

解けていくのを見ても、山荘の女王たちはよくも今まで生きていたものであるというような気がされて、なおも父宮の御事が俣ばれた。あの阿闍梨あじやりの所から、雪解ゆきげの水の中から摘んだと行って、芹せりや蕨わらびを贈つて来た。齋きよめの置き台の上に載せられてあるのを見て、山ではこうした植物の新鮮な色を見ることで時の移り変わりのわかるのがおもしろいと女房たちが言っているのを、姫君たちは何がおもしろいのかわからぬと聞いていた。

「#ここから2字下げ」

君が折る峰のわらびと見ましかば知られやせまし春のしるしも  
雪深ゆきふかき汀つばの小芹こせり誰たがために摘みかはやさん親無しにして

「#ここで字下げ終わり」

二人はこんなことを言い合うことだけを慰めにして日を送っていた。薫からも匂宮におみやからも春が来れば来るで、おりを過ぐさぬ手紙が送られる。例のようにたいしたことことも書かれていないのであるから、話を伝えた人も、それらの内容は省いて語らなかつた。

兵部卿ひなべの宮は春の花盛りのころに、去年の春の挿頭かざしの花の歌の贈答くたがお思い出されになるのであつたが、その時のお供をした公達きんたちなどの河かわを渡つてお訪たずねした八の宮の風雅な山荘を、宮が薨去しゆきになつてあれきり見られぬことになつたのは残念であると口々に話し合つていた時にも、宮のお心は動かずにいるはずもなかつた。

「#ここから2字下げ」

つてに見し宿の桜をこの春に霞隔かすみてず折りて挿頭かざさん

「#ここで字下げ終わり」

積極的なこんなお歌が宮から贈られた時に、思いも寄らぬことを言っておいでのなると思つたが、つれづれな時でもあつたから、美しい文字で書かれたものに対し、表面の意にだけむくいる好意をお示しして、

「#ここから2字下げ」

いづくとか尋ねて折らん墨染めに霞こめたる宿の桜を

「#ここで字下げ終わり」

とお返しをした。中姫君である。いつもこんなふう<sup>ふう</sup>に遠い所に立つものの態度を変えないのを宮は飽き足らずに思つておいでになつた。こうしたお気持ちのつ<sup>つ</sup>のつている時にはいつも中納言をいろいろに言つて責めも恨みもされるのである。おかしく思いながらも、ひとかどの後見人顔をして、

「浮気<sup>うわき</sup>な御行跡が私の目につく時もございますからね。そうした方であつてはと将来が不安でなくなるのでございましょう」

などと申すと、

「気に入つた人が発見できない過渡時代だからですよ」

宮はこんな言いわけをあそばされる。

右大臣は末女<sup>すえむすめ</sup>の六の君に何の関心もお持ちにならぬ宮を少し怨めしがつていた。宮は親戚<sup>しんせき</sup>の中でのそれはありきたりの役まわりをするにすぎないことで、世間体もおもしろくないことである上に、大臣からたいそうな婿扱いを受けることもうるさく、蔭<sup>かげ</sup>でしているこ

とにも目をつけてかれこれと言われるのもめんどうだから結婚を承諾する気にはなれないのであるとひそかに言っておいでになって、以前から予定されているようでありながら実現する可能性に乏しかった。

その年に三条の宮は火事で焼けて、入道の宮も仮に六条院へお移りになることがあつたりして、薫は繁忙なために宇治へも久しく行くことができなかった。まじめな男の心というものは、匂宮などの風流男とは違っていて、気長に考えて、いずれはその人をこそ一生の妻とする女性であるが、あちらに愛情の生まれるまでは力ずくがましい結婚はしたくないと思い、故人の宮への情誼を重く考える点で女王の心が動いてくるようにと願っているのであつた。

その夏は平生よりも暑いのをだれもわびしがっている年で、薫も宇治川に近い家は涼しいはずであると思ひ出して、にわかには山荘へ来ることになつた。朝涼のころに出かけて来たのであつたが、ここではもうまぶしい日があやにくにも正面からさしてきていたので、西向きの座敷のほうに席をして髻侍を呼んで話をさせていた。

その時に隣の中央の室の仏前に女王たちはいたのであるが、客に近いのを避けて居間のほうへ行こうとしているかすかな音は、立てまいとしているが薫の所へは聞こえてきた。このままでいるよりも見ることができると見たいものであると願つて、こことの間の襖子の掛け金の所にある小さい穴を以前から薫は見えておいたのであつたから、こちら側の屏風は横へ寄せてのぞいて見た。ちょうどその前に几帳が立てられてあるのを知つて、残念に思ひながら引き返さうとする時に、風が隣室とその前の室との間の御簾を吹き上げさうになつたため、

「お客様のいらつしやる時にいけませんわね、そのお几帳をここに立てて、十分に下を張らせたらいいでしよう」

と言い出した女房がある。愚かしいことだとみずから思いながらもうれしさに心をおどらせて、またのぞくと、高いのも低いのも几帳は皆その御簾ぎわへ持つて行かれて、あけてある東側の襖子から居間へはいろいろと姫君たちはするものらしかった。その二人の中の一方が庭に向いた側の御簾から庇の室越しに、薫の従者たちの庭をあちらこちら歩いて涼をとろうとするのをのぞこうとした。濃い鈍色の単衣に、萱草色の喪の袴の鮮明な色をしたのを着けているのが、派手な趣のあるものであると感じられたのも着ている人によつてのことには違いない。帯は仮なように結び、袖口に引き入れて見せない用意をしながら数珠を手へ掛けていた。すらりとした姿で、髪は袿の端に少し足らぬだけの長さで見え、裾のほうまで少しのたるみもなくつやつやと多く美しく下がっている。正面から見るのではないが、きわめて可憐で、はなやかで、柔らかかみがあつておおような様子は、名高い女一の宮の美貌もこんなのであろうと、ほのかにお姿を見た昔の記憶がまたたどられた。いざつて出て、

「あちらの襖子は少しあらわになつていて心配なようね」

と言い、こちらを見上げた今一人にはきわめて奥ゆかしい貴女らしさがあつた。頭の形、髪のはえぎわなどは前の人よりもいっそう上品で、艶なところもすぐれていた。

「あちらのお座敷には屏風も引いてございます。何もこの瞬間にのぞいて御覧になることもございますまい」

と安心してゐるふうに言う若い女房もあつた。

「でも何だか気が置かれる。ひよつとそんなことがあればたいへん

ね」

なお気がかりそうに言つて、東の室へいざつてはいる人に気高い心憎さが添つて見えた。着ているのは黒い袴の――襲で、初めの人と同じような姿であつたが、この人には人を惹きつけるような柔らかさ、艶なところが多くあつた。また弱々しい感じも持っていた。髪も多かったのがさわやいだ程度に減つたらしく裾のほうが見えた。その色は翡翠がかり、糸を縊り掛けたように見えるのであつた。紫の紙に書いた経巻を片手に持っていたが、その手は前の人よりも細く瘦せているようであつた。立っていたほうの姫君が襖子の口の所へまで行つてから、こちらを向いて何であつたか笑つたのが非常に愛嬌のある顔に見えた。

底本：「全訳源氏物語 下巻」角川文庫、角川書店

1972（昭和47）年2月25日改版初版発行

1995（平成7）年5月30日40版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月10日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2004年3月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www>

.aозora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

源氏物語

総角

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）河風かわかせの音

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）長い年月一馴なれた

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」心をば火の思ひもて焼かましと願ひき

「#地から3字上げ」身をば煙にぞする （晶子）

長い年月一馴なれた河風かわかせの音も、今年の秋は耳騒がしく、悲しみを加重するものとはかり宇治の姫君たちは聞きながら、父宮の御一周忌の仏事の用意をしていた。大体の仕度したくは源中納言と山の御寺みでらの阿闍梨じゃりの手でなされてあって、女王にょおうたちはただ僧たちへ出す法服のこ

と、経巻の装幀そうていそのほかのこまごまとしたものを、何がなければ不都合であるとか、何を必要とするとかいうようなことを周囲の女たちが注意するままに手もとで作らせることしかできないのであったから、薫かおるのような後援者がついておればこそ、これまでに事も運ぶのであるがと思われた。

薫は自身でも出かけて来て、除服後の姫君たちの衣服その他を周到にそろえた贈り物をした。その時に阿闍梨も寺から出て来た。二人の姫君は名香なけいの飾りの糸を組んでいる時で、「かくてもへぬる」（身をうしと思ふに消えぬものなればかくてもへぬるものにぞありける）などと言い尽くせぬ悲しみを語っていたのであるため、結び上げた総角あげまき（組み紐の結んだ塊かたまり）の房ふさが御簾みすの端から、几帳きちょうのほころびをとおして見えたので、薫はそれとうなずいた。

「自身の涙を玉に貫さそうと言いました伊勢いせもあなたがたと同じような気持ちだったのでしょうかね」

こうした文学的なことを薫が言っても、それに応じたようなことで答えをするのも恥ずかしくて、心のうちでは貫つら之朝臣あそんが「系よに縫よるものならなくに別れ路ぢは心細くも思ほゆるかな」と言い、生きての別れをさえ寂しがつたのではなかったかななどと考えていた。御仏みほとけへの願文を文章博士もんじょうはかせに作らせる下書きをした硯すずりのついでに、薫は、

「#ここから2字下げ」

あげまきに長き契りを結びこめ同じところに縫よりも合はなん

「#ここで字下げ終わり」

と書いて大姫君に見せた。またとうるさく女王は思いながらも、

「#ここから2字下げ」

貫きもあへずもろき涙の玉の緒に長き契りをいかが結ばん

「#ここで字下げ終わり」

と返しを書いて出した。「逢はずは何を」(片糸をこなたかなたに縊りかけて合はずは何を玉の緒にせん)と薫は歎かれるのであるが、自身のことを正面から言うことはできずに、洩らす溜息に代える程度により口へ出しえないのは、姫君のあまりに高貴な気に打たれてしまうことが多いからであった。それで兵部卿の宮と中の君の縁組みのことを熱心なふうに言い出した。

「それほど深くお思いになるのではなく好奇心をお働かせになることが多くて、お申し込みになったのを、冷淡にお扱われになるために、負けぬ気を出しておいでになるだけではないかと、私は考えもしまして、いろいろにして御様子を見ていますが、どうも誠心誠意でお始めになった恋愛としか思われません。それをどうしてただ今のようなふうにはかりこちらではお扱いになるのでしょうか。ものの判断がおできにならぬほどの少女ではおられない聡明なあなたの御意見をよく伺いたいと私は思っているのですが、いつまでも御相談相手にしてくださいませんのは、私の純粋な信頼をおくみいただけない、恨めしいことだと思っております。可否だけでも言ってくださいませんか」

薫はまじめであった。

「あなたの御親切に感謝しておりますればこそ、こんなにまで世間に例のごさいませんほどにもお親しくおつきあい申し上げているの

でございます。それがおわかりになりませんのは、あなたのほうに不純な点がありになるのではないかと疑われます。少女でもないとおっしゃいますが、実際こんな寄るべない身の上になっていましては、ありとあらゆることを普通の人であれば考え尽くしていなければなりませんのに、どんなことにも幼稚で、ことに今のお話のよくなことは、宮が生きておいでになりましたところにも、こんな話があればとかそうであればとか将来の問題としてほかの話の中でもおっしゃらなかったことでしたから、やはり宮様のお心は、私たちはただこのままで、他の方のような結婚の幸福というようなことは念頭に置かず的一生を過ごすようにとお考えになったに違いないとそう思っているものですから、兵部卿の宮様のことにつきましても可否の言葉の出しようがないのでございます。けれど妹は若くて、こうした山陰やまかげに永久に朽ちさせてしまうのがあまりに心苦しゅうございましてね、なにも私と同じ道を取らずともよいはずであるとも考えられまして、ほかのほうのこととも空想いたしますが、どんな運命が前途にありますことか」

と言つて、物思わしそうに大姫君の歎息をするのが哀れであつた。中の君の結婚談にもせよはつきりと年長者らしく、若い貴女は縁組みの話の賛否を言い切りうるはずはないのである、と同情した薫は、別の所で例の老女の弁を呼び出して、

「以前は宮様を仏道の導きとしてお訪ねたずしていたものですが、お心細くお見えになるようになった御一薨去前こうきょまへになつて、お二方の将来のことを私の計らいに任せるといふような仰せがあつたのですよ。ところが宮様の御希望あそばしたようになるうとは姫君がたはお思いにならないで、限りなくささげる尊敬と熱情を無視されるのです

から、何か別に対象とあそばされる人があるのではないかという疑いでもいうようなものが私の心に起こってきましたよ。あなたは世間で言っていることも聞いておいでになるでしょう、変わった性情から私は人間並みに結婚をしようというような考えは全然捨てていたものでした。それが宿命というものなのでしょうが、こちらの姫君に心をお惹かれすることになって、今ではもう世間の噂にも上っているだろうと思われるまでになっているのですから、できることなら宮様の御遺志にもかかなう結果を生じさせたいと私の思うのは、勝手なことかはしませんが、だれからも批難をされないでいいことかと思う。例のあることだしね」

と薫は話し続け、また、

「兵部卿の宮様のことも、私がお勧めしている以上は安心して御承諾くだすっていいものを、そうでないのはお二方の女王様にそれぞれ別なお望みがあるのではないのですか。あなたからでもよく聞きたいものですよ。ねえ、どんなお望みがあるのだろう」

とも、物思わしそうにして言うのであった。こんな時によくない女房であれば、姫君がたを批難したり、自身の立場を有利にしようとしたり試みるものであるが、弁はそんな女ではなかった。心の中では二人の女王の上にこの縁がそれぞれ成立すればどんなにいいであろうとは思っているのであるが、

「初めからそんなふうにし少し変わった御性格なのでございますからね。どうして、どうしてほかの方を対象にお考えなどなさるものでございますか。女房なども宮様のおいになりました当時と申しても何の頼もしいところのある親王家ではなかったのですから、わが身を犠牲にしますのを喜びません人たちは、それぞれに相当な行く

先を作ってお暇をとってまいるのでございましてね。昔のいろいろな関係で切るにも切られぬ主従の御縁のある人でも、こんなにだれもが出て行ってしましますのを見ておりましては、しばらくでも残っているのがいやでならぬふうを見せましてね、そしてまたその人たちは姫君がたに、『宮様の御在世中はお相手によって尊貴なお家を傷つけるかと御遠慮もあそばしたでしょうが、お心細いお二人きりにおなりになったのですもの、どんな結婚でもなすつたらいいはずです、それをとやかくと言う人はものわからぬ人間だとかえつて軽蔑あそばしたらいいのです、どうしてこんなふうにはばかりしておいでになることができませんか、松の葉を食べて行をするという坊様たちでさえ、生きんがために都合のよい一派一派を開いていくものでございしますから』などと、こんないやなことを申しましてね、若い姫君がたのお心を苦しめまして利己的に媒介者になろうといたしますが、女王様はそんな浮薄な言葉にお動きになるような方がたではございません。お妹様だけには人並みな幸福を得させたいとお考えになつていらっしゃるようでございます。こうした路みちのたいへんな所へ御訪問をお欠かしあそばさないあなた様の御好意は長い年月の間によくおわかりになつていらつしやることでもございますし、ただ今になりましてはことさらあなた様のあたたかい御一庇護ひごのもとにいらつしやるわけでございしますからね。大姫君は中の君様をお望みになればとそう希ねがつていらつしやるらしゅうございます。兵部卿の宮様からお手紙は始終おいただきになるのですが、それは誠意のある求婚者だとも認めておられないようでございます」

弁は姫君の意志を伝えようとしただけである。

「宮様の御遺言を身に沁しんで承つた私は、生きているかぎりこちら

のお世話を申し上げる義務があると思うのですから、両女王のどなたでもお許しくださいれば結婚してもいいわけですが、同じことのように、しかも姫君が中姫君のために私を撰えらんでくださいましたことはうれしいことですが、ともかくも私が捨てたい世にただ一つ深く心の惹かれる感じを味わい、また死後までもこの思いは残ろうと思つた方から、ほかの方へ愛を移すことはできるものでありませんよ。改めて心をそう持とうとしても無理なことです。私の望むところは世間並みの恋の成立ではありません。ただ今のようなふうになんか隔てたままでも、何事に限らず話し合う相手にいつまでもなつていていただきたいだけです。私には姉妹きょうだいなどでそうした間柄になりうるような人もなくて寂しいのですよ。人生の身にしむ点も、おもしろいことも、困ることも、その時その時ただ一人で感じているだけであるのが物足りないのです。中宮ちゅうぐうはあまりに御身分が高過ぎて、なれなれしく私の思うとおりのことを何から何まで申し上げられなしいし、三条の宮様は母とも思われぬ若々しいお気持ちの方ではありません、子こは子の分があつて、どんな話も申し上げるといふわけにはゆきません。そのほかの女性というものはすべて皆私には遠い所にいるとしか考えられませんで、私にいつも孤独の感を覚えています。心細いのですよ。その場かぎりの戯れ事でも恋愛に関したことはまぶしい気がして、人から見れば見苦しい頑固がんこな男になつているのです。まして深く恋しく思う方にはそれをお話することも困難なことに思われます。恨めしく思つたり、悲しんだりしている恋もたの悶もたえもお知らせすることができなくて、われながら変わった生まれつきが憎まれます。兵部卿ひょうぶせいの宮みやのことことも私がお受け合あいする以上は不安もなかるうと思つて任せてくださつてよさそうなもので

すがね」

こんなことを薫かあるは言っていた。老いた弁もまたこの心細い身の上の姫君たちに上もない二つの縁が成立するようには切に願うところであつたが、二一女王にょおうともに天性の気品の高さに、自身の思うことのすべてが言われなかつた。

薫は今夜を泊まることにして姫君とのどかに話がしたいと思う心から、その日を何するとなく山川をながめ暮らした。この人の態度が不鮮明になり、何かにつけて怨みうらみがましくものを言う近ごろの様子に、煩わしさを覚え出した姫君は、親しく語り合うことがいよいよ苦しいのであつたが、その他の点では世にもまれな誠意をこの一家のために見せる薫であつたから、冷ややかには扱いかねて、その夜も話の相手をする承諾はしたのであつた。

仏間と客室の間の戸をあけさせ、奥のほうの仏前には灯を明るくともし、隣との仕切りには御簾みすへ屏風びょうぶを添えて姫君は出ていた。客の座にも灯の台は運ばれたのであるが、

「少し疲れていて失礼な恰好かっこうをしていますから」

と言い、それをやめさせて薫は身を横たえていた。菓子などが客の夕餐ゆっげに代えて供えられてあつた。従者にも食事が出してあつた。

廊の座敷にあたるような部屋へやにその人たちは集められていて、こちらを静かにさせておき、客は女王と話をかわしていた。打ち解けた様子はないながらになつかしく愛嬌あいぎょうの添ったふうでものを言う女王があくまでも恋しくてあせり立つ心を薫はみずから感じていた。この何でもないものを越えがたい障害物のように見なして恋人に接近なしえない心弱さは愚かしくさえ自分を見せているのではないかと、こんなことを心中では思うのであるが、素知らぬふうを作つて、世

間にあつたことについて、身にしむ話も、おもしろく聞かされることもいろいろと語り続ける中納言であつた。女王は女房たちに近い所を離れずいるように命じておいたのであるが、今夜の客は交渉をどう進ませようと思つてゐるか計られないところがあるように思う心から、姫君をさまで護ろうとはしてゐず、遠くへ退いていて、御<sup>みほ</sup>仏の灯<sup>とけ</sup>もかかげに出る者はなかつた。姫君は恐ろしい気がしてそつと女房を呼んだがだれも出て来る様子がない。

「何ですか気分がよろしくなくなつて困りますから、少し休みまして、夜明け方にまたお話を承りましょう」

と、今や奥へはいろいろとする様子が姫君に見えた。

「遠く山路<sup>やまみち</sup>を来ました者はあなた以上に身体<sup>からだ</sup>が悩ましいのですが、話を聞いていただくことができ、また承ることの喜びに慰んでこうしておりますのに、私だけをお置きになつてあちらへおいでになつては心細いではありませんか」

薫はこう言つて屏風<sup>びょうぶ</sup>を押しあけてこちらの室<sup>へや</sup>へ身体<sup>からだ</sup>をすべり入らせた。恐ろしくて向こうの室へもう半分の身を行かせていたのを、薫に引きとめられたのが非常に残念で、

「隔てなくいたしますといふのはこんなことを申すのでしうか。奇怪なことではございませんか」

と批難の言葉を発するのがいよいよ魅力を薫に覚えしめた。

「隔てないというお気持ち少しも見えないあなたに、よくわかつていただこうと思うからです。奇怪であるとは、私が無礼なことでもすると思ひになるのではありませんか。仏のお前でどんな誓言でも私は立てます。決してあなたのお気持ちを破るような行為には出まいと初めから私は思つてゐるのですから、お恐れになることは

ありませんよ。私がこんなに正直におとなしくしておそばにいることはだれも想像しないことでしょうが、私はこれだけで満足して夜を明かします」

こう言つて、薫は感じのいいほどな灯のあかりで姫君のこぼれかかった黒髪を手で払つてやりながら見た顔は、想像していたように艶麗であつた。何の嚴重な締まりもないこの山荘へ、自分のような自己を抑制する意志のない男が闖入したとすれば、このままで置くはずもなく、たやすくそうした人の妻にこの人はなり終わるところであつた、どうして今までそれを不安とせず結婚を急ごうとはしなかつたかとみずからを批難する気にもなつてゐる薫であつたが、言いようもなく情けながつて泣いてゐる女王が可憐で、これ以上の何の行為もできない。こんなふうの接近のしかたでなく、自然に許される日もあるであろうとのちの日を思い、男性の力で恋を得ようとはせず、初めの心は隠して相手を上手になだめていた。

「こんな心を突然お起こしになる方とも知らず、並みに過ぎて親しく今までおつきあいをしておりました。喪の姿などをあらわに御覧になろうとなさいましたあなたのお心の思いやりなさもわかりましたし、また私の抵抗の役だたなさも思われまして悲しくてなりません」

と恨みを言つて、姫君は他人に見られる用意の何一つなかつた自身の喪服姿を灯影で見られるのが非常にきまり悪く思うふうで泣いていた。

「そんなにもお悲しみになるのは、私がお氣に入らないからだと恥じられて、なんともお慰めのいたしようがありません。喪服を召していらっしゃる場合ということで私をお叱りなさいますのはごもつ

ともですが、私がおなたをお慕い申し上げるようになりましてからの年月の長さを思っていたら、今始めたことのように、それにかかわっていないともよいわけではなからうかと思えます。あなたが私の近づくのを拒否される理由としてお言いになったことは、かえって私の長い間持ち続けてきた熱情を回顧させる結果しか見せませんよ」

薫はそれに続いてあの琵琶と琴の合奏されていた夜の有明月に隙見をした時のことを言い、それからのちのいろいろな場合に恋しい心のおさえがたいものになっていったことなどを多くの言葉で語った。姫君は聞きながら、そんなことがあったかと昔の秋の夜明けのことに堪えられぬ羞恥を覚え、そうした心を下に秘めて長い年月の間一表面をあくまでも冷静に作っていたのであるかと、身にしみ入る気もするのであった。薫はその横にあった短い几帳で御仏のほうとの隔てを作って、仮に隣へ寄り添って寝ていた。名香が高くにおい、櫛の香も室に満ちている所であったから、だれよりも求道心の深い薫にとっては不浄な思ひは現わすべくもなく、また墨染めの喪服姿の恋人にしいてほしいままな力を加えることはのちに世の中へ聞こえて浅薄な男と見られることになり、自分の至上とするこの恋を踏みにじることになるであろうから、服喪の期が過ぎるのを待とう。そうしてまたこの人の心も少し自分のほうへなびく形になった時にと、しいて心をゆるやかにすることを努めた。秋の夜というものは、こうした山の家でなくても身にしむものが多いものであるのに、まして峰の嵐も、庭に鳴く虫の声も絶え間なくてここは心細さを覚えさせるものに満ちていた。人生のはかなさを話題にして語る薫の言葉に時々答えて言う姫君の言葉は皆美しく感じのよいもので

あつた。

宵を早くから眠っていた女房たちは、この話し声から悪い想像を描いて皆一部屋のほうへ行つてしまった。召使は信じがたいものであると父宮の言つてお置きになつたことも女王は思い出し、親の保護がなくなれば女も男も自分らを軽侮して、すでにもう今夜のような目にあつていないかと悲しみ、宇治の河音とともに多くの涙が流れるのであつた。そして明け方になつた。薫の従者はもう起き出して、主人に帰りを促すらしい作り咳の音を立て、幾つの馬のいななきの声の聞こえるのを、薫は人の話に聞いている旅宿の朝に思い比べて興を覚えていた。

薫は明りのさしてくるのが見えたほうの襖子をあけて、身にしむ秋の空を二人でながめようとした。女王も少しいざつて出た。軒も狭い山荘作りの家であつたから、忍ぶ草の葉の露も次第に多く光つていく。室の中もそれに準じて白んでいくのである。二人とも艶な容姿の男女であつた。

「同じほどの友情を持ち合つて、こんなふうにいづまでも月花に慰められながら、はかない人生を送りたいのですよ」

薫がなつかしいふうになんかことをささやくのを聞いていて、女王はようやく恐怖から放たれた気もするのであつた。

「こんなにあからさまにしてお目にかかるのではなく、何かを隔ててお話をし合うのでしたら、私はもう少しも隔てなどを残しておかない心であります」

と女は言った。外は明るくなりきつて、幾種類もの川べの鳥が目を見させて飛び立つ羽音も近くです。黎明の鐘の音がかすかに響いてきた、この時刻ですらこうしてあらわな所に出ているのが女は

恥ずかしいものであるのにと女王は苦しく思うふうであった。

「私が恋の成功者のように朝早くは出かけられないではありませんか。かえってまた他人はそんなことからよけいな想像をするだろうと思われますよ。ただこれまでどおり普通に私をお扱いくださるのがいいですよ。そして世間のは内容の違った夫婦とお思いくだすつて、今後もこの程度の接近を許しておいてください。あなたに礼を失うような真似は決してする男でないと私を信じていてください。これほどに譲歩してもなおこの恋を護ろうとする男に同情のないあなたが恨めしくなるではありませんか」

こんなことを言っていて、薫はなおすぐに出て行こうとはしない。それは非常に見苦しいことだと姫君はしていて、

「これからは今あなたがお言いになったとおりにもいたしましょう。今朝だけは私の申すことをお聞き入れになってくださいませ」

と言う。いかにも心を苦しめているのが見える。

「私も苦しんでいるのですよ。朝の別れというものをまだ経験しない私は、昔の歌のように帰り路に頭がぼうとしてしまう気がするのですよ」

薫が幾度も歎息をもらしている時に、鶏もどちらかのほうで遠声ではあるが幾度も鳴いた。京のような気がふと薫にした。

「#ここから2字下げ」

山里の哀れ知らるる声々にとりあつめたる朝ぼらけかな

「#ここで字下げ終わり」

姫君はそれに答えて、

「#ここから2字下げ」

鳥の音も聞こえぬ山と思ひしをよにうきことはたづねきにけり

「#ここで字下げ終わり」

と言った。姫君の居間の襖子の口まで送って行った。そして中間を昨夜はいった戸口から客室のほうへ出て薫は横になったが、もとより眠りは得られない。別れて来た人が恋しくて、こんなにも思われるなら今まで気長な態度がとれなかったはずであるとも歎かれて、京へ帰る気もしないのであった。

姫君は人がどんな想像をしているかと思うのが恥ずかしくて、すくにも枕へつくことはできなかった。いろいろな思いが女王の胸にわく。親のない娘の心細さにつけこむような女房の取り次いでくる幾件かの縁談、その青年たちが今一步思いやりのないことを進めた時に、自分はどうなるであろうと、心にもなく、人の妻になつてしまふ運命が自分を待っているであろうと、いろいろにも考え合わせしてみれば、薫は良人として飽き足らぬところはなく、父宮も先方にその希望があればと、そんなことを時々お洩らしになつたようであつた。けれども自分はやはり独身で通そう、自分よりも若く、盛りの美貌を持っていて、この境遇に似合わしくなく、いたましく見える中の君に薫を譲って、人並みな結婚をさせることができればうれしいことであろう、自分のことでなくなれば力の及ぶかぎりの世話を結婚する中の君のためにすることができよう、自分が結婚するのではだれがそうした役を勤めてくれよう、親もない、姉もない。薫が今少し平凡な男であれば、長く持ち続けられた好意に対してむ

くいるために、妻になる気が起きたかもしれぬ。けれどあの人はそうでない、あまりにすぐれた男である、気品が高く近づきにくいふうもあるではないか、自分には不似合いに思われてならぬ、自分は今までどおりの寂しい運命のまま一人でいようと、思い続けて朝まで泣いていたあとの身体からだのぐあいがよろしくなくて、中姫君の寝ている帳台の奥のほうへはいつて横になった。

昨夜は平常とは変わっておそくまで話し声がするのを怪しく思いながら、中の君は寝入ったのであったから、大姫君のこうして来たのがうれしくて、夜着を姉の上へ掛けようとした時に、高いにおいがくゆりかかるように立つのを知った。あの宿直との侍が衣服をもらって、困りきった薫のにおいであることが思い合わされて、男の熱情と力に姉君が負けたというようなこともあったであろうかと気の毒で、それからまたよく眠りに入ったようにして何も言わなかった。

薫は朝になってからまた老女の弁あに逢いたいと呼び出して、昨日も話した自身の気持ちをごまごまとまた語って行き、そして姫君へは礼儀的な挨拶あいさつを言い入れて帰った。

昨日は総角あけまきを言葉のくさびにして歌を贈答したりしていたが、催馬楽歌ばらうたの「尋ひろばかり隔ひらてて寝たれどかよりあひにけり」というようなあやまちをその人としてしまったように妹も思うことであろうと恥ずかしくて、気分が悪いということにして大姫君はずっと床を離れずにいた。女房たちは、

「もう御仏事までに日がいくらもなくなりましたのに、そのほかには小さいことはかばかしくできる人もない時のあやにくな姫君の御病気ですね」

などと言っていた。組紐が皆出来そろつてから、中の君が来て、「飾りの房は私にどうしてよいかわからないのですよ」

と訴えるのを聞いて、もうその時にあたりも暗くなっていたのに紛らして、姫君は起きていっしょに紐結びを作りなどした。

源中納言からの手紙の来た時、

「今朝から身体を悪くしておりますから」

と取り次ぎに言わせて、返事を出さなかつたのを、あまりに苦々しい態度だと譏る女たちもあつた。

喪の期が過ぎて除服をするにつけても、片時も父君のあとには生き残る命と思わなかつたものが、こうまで月日を重ねてきたかと、これさえ薄命の中に数えて二人の女王の泣いているのも気の毒であつた。一か年一真黒な服を着ていた麗人たちの薄鈍色に変わったのも艶に見えた。姉君の思っているように、中の君は美しい盛りの姿と見えて、喪の間にまたひとときわ立ちまさつたようにも思われる。

髪を洗わせなどした中の君の姿を大姫君はながめているだけで人生の悲しみも皆忘れてしまう気がするほどな麗容だつた。姫君はすべて思うとおりな気がして、結婚して良人に幻滅を覚えさせることはよもあるまいと頼もしくうれしくて、自身のほかには保護者のない妹君を親心になつて大事がる姉女王であつた。

薫はいくぶんの遠慮がされた恋人の喪服ももう脱がれた時と思つて、結婚の初めには不吉として人のきらう九月ではあつたが、待ちきれぬ心でまた宇治へ行つた。これまでのようにして話し合いたいと取り次ぎの女は薫の意を伝えて来るのであつたが、

「不注意からまた病をしまして苦しんでいる際ですから」

というような返事ばかりを言わせて大姫君は会おうとしなかつた。

「#ここから1字下げ」

存外にあなたは人情味に欠けた方です。女房たちが私をどう見ていることでしょうか。

「#ここで字下げ終わり」

と今度は文ふみに書いて薫がよこした。

「#ここから1字下げ」

父の喪服を脱ぎました際の悲しみがずっと続きまして、かえって今のほうが深い暗さの中に沈んでおります私ですから、お話を承ることができません。

「#ここで字下げ終わり」

返事はこう書いて出された。しかたのない気のする薫は、例のように弁を呼び出して、この人の力を借ろうと相談した。心細いこの山荘にいて源中納言だけを唯一の庇護者ひごしゃと信じてたよる心のある女房たちは、弁からの話を聞いて、この結婚を成立させることほどよいことはないと言われあわせ、どんなにしても姫君の寝室へ薫を導こうと手はずを決めていた。

姫君は女房たちがどんなことを計画しているかを深くは知らないのであるが、弁を特別な者にしてなつけている薫であるから、自分として油断のできぬ考えをしているかもしれぬ、昔の小説の中の姫君なども、自身の意志から恋の過失をしてしまうのは少ないのである、他の女房と質は違っても、弁には弁の利己心が働くはずであるからと、なんとなく今日の家の中の空気のただならぬのによって思い寄るところがあった。薫がしいて近づいて来た時には妹を自分の代わりに与えよう、目的としたものに劣っていたところで、そうし

て縁の結ばれた以上は軽率に捨ててしまふような性格の薰ではないのだから、ましてほのかにでも顔を見れば多大な慰めを感じるに価する妹ではないか、こんなことは話として持ち出しても、眼前に目的を変えて見せる人があるはずはない、この間から弁に言わせてもいるが、初めの志に違ふなどと言って聞き入れるふうがないというのは、自分に対して今まで言っていたことが、こんなに根底の浅いものであつたかと思わせることを避けているにすぎまい、とこう考えを決める姫君であつたが、少しそのことを中の君に知らせておかないでその計らいをするのは仏法の罪を作ることではあるまいかと、先夜の闖入者に苦しんだ経験から妹の女王がかわいそうになり、ほかの話をした続きに、

「お亡なくなりになつたお父様のお言葉は、たとえこうした心細い生活でも、それを続けて行かねばならぬとして、浮薄な恋愛を、感情の動くままにして、世間の物笑いになるなということでしたね。一生お父様の信仰生活へおはいりになるお助けをしてきたその罪だけでもたいへんなのだから、せめて終わりの御訓戒にそむきたくない」と私は思つて、独身でいるのを心細いなどと考えないのですがね、女房たちまでむやみに気の強い女のように言つて悪く見ているのは困つたものですわね。まあそう変わった人間に思われていてもいいとして、私のあなたと暮らしている月日があなたの青春をむだにしないでしまふのではないかと、私はそれが始終惜しく思われてならないのですよ。気の毒でかわいそうでね。だからあなただけは普通の女らしく結婚をして、あなたの幸福を見ることで私も慰められるようになりたい気がします」

と言うと、どんな考えがあつて姉君はこんなことを言いだしたの

であろうと急に情けなく中の君はなつて、

「あなたお一人だけにお残しになった御訓戒だったのでしようか。あなたほど聡明そうめいでない私のほうをことに気がかりにお父様は思召してのお言葉かと私は思っています。心細さはこうしていつもごいっしょにいることだけで慰めるほかに何があるでしょう」

少し恨めしがるふうに中の君の言うのが道理に思われて姫君はかわいそうに見た。

「いいえね、女房たちが私らを頑固がんこ過ぎる女だと言いまし、思いもしているらしいから、いろいろとほかの道のこと考えたのですよ」

あとはこんなふうにだけより言わなかった。日は暮れていくが京の客は帰ろうとしない。姫君は困ったことであると思っていた。弁が来て薫の言葉を伝えてから、あの人の恨むのが道理であると言葉を尽くして言うのに対して、答えもせず、歎息をしている姫君は、どうすればよい自分なのであるう、父宮さえおいでになれば、何となるにもせよ、だれの妻になるにもせよ、娘として取り扱われて、宿命というものがある人生であつてみれば、自身の意志でなくとも人の妻になることもあるうし、結婚生活が不幸なことになつても、親に選ばれた良人おとこであるからと、そう恥を思わずにも済むであろう、周囲にいる女房は皆年を取つていて、賢げな顔をしては自身の頼まれた男との縁組みだけが最上のごとのように言つて勧めに来るが、そんなことがどうしてよかろう、彼女らの見る世界は狭く、その判断力は信じられないと思つている姫君は、その人たちが力で引き動かそうとせんばかりにして言うことも、いやなこととより聞かれず心の動くことはないのである。どんなことも話し合う妹の女王はこ

うした結婚とか恋愛とかいうことについては姫君よりもいっそう關心を持たぬようであつたから、圧迫を感じる近ごろの話をして、そう深く苦しい心境に立ち入っては来てくれないのであつたから、姫君は一人で歎くほかはなかつた。室の奥のほうに向こうを向いてすわっている女王の後ろでは薄鈍うすにびでない他のお召し物に姫君をお着かえさせるようにとか女房らが言っていて、だれもが今夜で結婚が成立するもののようにして、こそこそその用意をするらしいのを、姫君はあさましく思っていた。皆が心を合わせてすれば、狭い山荘の内で隠れている所もないのである。

薫はこんなふうにだれもが騒ぎ立てることを願ってはず、そうした者を介在させずにいつから始まつたことともなく恋の成立していくのを以前から望んでいたのであつて、姫君の心が自分へ傾くことのない間はこのままの関係でよいとも思っているのであるが、老女の弁が自身だけでは足らぬように思つて、他の女たちに助力を求めたために、あらわにだれもが私語することになつたのである。多少洗練されたところはあつても、もともとあさはかな女であるにすぎぬ弁が、その上老いて頭の働きの鈍くなっているせいでもある。

不快に思つていた姫君は、弁の出て来た時に、

「お亡かくれになりました宮様も、珍しい同情をお寄せくださる方だと始終喜んでばかりおいでになりましたし、今になつては何でも皆御親切におすがりするほかもない私たちで、例もないようなお親しみをもつて御交際をしまいいりましたが、意外なお望みがまじつていまして、あなた様はお恨みになり、私は失望をいたすことになりました。人間としてはなやかな幸福を得たいと願う身でございましたら、あなた様の御好意に決しておそむきなどはいたされません。し

かし、私は昔から現世のことに執着を持たぬ女だものですから、お言いくださいますことはただ苦しいばかりにしか承れないのでございます。それで思いますのは妹のことでございます。むなくその人に青春を過ぎさせてしまうのが私として忍ばれないことに思われます。この山荘の生活も、あなた様の御好意だけで続けていかれる現状なのですから、父を御追慕してくださいませお志がございましたら、妹を私に代えてお愛しくくださいませ。身は身として、心は皆妹のために与えていくつもりでございますとね。この意味をもっとあなたが敷衍ふえんして申し上げたらいいでしょう」

と、恥じながらも要領よく姫君は言った。弁は同情を禁じがたく思った。

「あなた様のそういう思召おぼしめしは私にもわかつているものでございませから、骨を折りました、そうなりますようにと申し上げるのですが、どうしても自分の心をほかへ移すことはできない、中姫君と自分が結婚をすれば兵部卿ひょうぶけいの宮様みやさまのお恨みも負うことになる、そちらの御縁組が成り立てばまた自分は中姫君に十分のお世話を申し上げますつもりだとおっしゃるのでございます。それもけっこうなお話なのでございますから、お二方ともそうした良縁をお得になりました、まれな御誠意をもって奥様がたをあの貴公子様がたが御大切にあそばす時のごりっぱさは世間に類のないものになりますでございます。よう。失礼な言葉ですが、こんなふうになお暮らしをあそばすのを拝見しておりますと、どうおなりになるのかと、私どもは不安で、悲しくてなりませんのにお一方様のお心持ちはまだ私はわかっておりますのでございますが、ともかくも最も高いお身分の方でいらっしやいます。宮様の御遺言どおりにしたいと思召すのはごも

っともですが、それは似合わしからぬ人が求婚者として現われてま  
 いらぬかと、その場合を御心配あそばして仰せになりましたことで、  
 中納言様にどちらかの女王様にょおうをお娶りめとになるお心があつたなら、そ  
 のお一人の縁故で今一人の女王様のことも安心ができてどんなにう  
 れしいだろうと、おりおり私どもへお話しあそばしたことがあるの  
 でございますよ。どんな貴い御身分の方でも親御様にお死に別れに  
 なつたあとでは、思いも寄らぬつまらぬ人と夫婦になつておしまい  
 になるというような結果を見ますのさえたくさんに例のあることで  
 ございました、それはしかたのないこととして、だれも噂はなにかけは  
 いたしません。ましてこんな理想的と申しましようか、作り事ほど  
 に何もかものおそろいになつた方で、そして御愛情が深くて、誠心  
 誠意御結婚を望んでおいでになる方がおありになりますのに、しい  
 てそれを冷ややかにお扱いになりました、御遺言だからと申して、  
 仏の道へおはいりになるようなことをなさいましても、仙人せんじんのよう  
 に雲や霞かすみを召し上がつて生きて行くことはできません。ございませう  
 か」

とも能弁に言い続ける老女を憎いように思い、姫君はうつぶしに  
 なつて泣いていた。中の君もわけはわからぬながら姉君の様子を気  
 の毒に思つてながめていた。そしていつしよに常の夜のように寢室  
 へはいつた。

薫が客となつて泊まっている今夜であることを姫君は思うと気が  
 かりで、どういう処置を取ろうかと考えられるのであつたが、特に  
 四方の戸をしめきつてこもつておられるような所もない山荘なので  
 あるから、中の君の上に柔らかな地質の美しい夜着を被かけ、まだ暑  
 さもまつたく去つていくという時候でもないのであるから、少し自

身は離れて寝についた。

弁は姫君の言ったことを薫に伝えた。どうしてそんなに結婚がいとわしくばかり思われるのであるう、聖僧のようでおありになった父宮の感化がしからしめるのかと、人生の無常さを深く悟っている心は、自分の内にも共通なものが見いだせる薫には、それが感じ悪くは思われない。

「ではもう物越しでお話をし合うことも今夜はしたくないという気におなりになったのだね。最後のこととして今夜だけでいいから御寢室へ私をそつと導いて行ってください」

と中納言は言った。老女はその頼み事をよく運ばせようとして、他の女房たちを皆早く寝させてしまい、計画を知らせてある人たちとともに油断なく時の来るのを待っていた。荒い風が吹き出して簡単なしとみど部戸などはひしひしと折れそうな音をたてているのに紛れて人が忍び寄る音などは姫君の気づくところとなるまいと女房らは思い、静かに薫を導いて行った。二人の女王の同じ帳台に寝ている点を不安に思ったのであるが、これが毎夜の習慣であつたから、今夜だけを別室に一人一人では初めから姫君に言いかねたのである。二人のどちらがどれとは薫にわかっているはずであるからと弁は思っていた。

物思いに眠りえない姫君はこのかすかな足音の聞こえて来た時、静かに起きて帳台を出た。それは非常に迅速に行なわれたことであつた。無心によく眠入ねっていた中の君を思うと、胸が鳴って、なんという残酷なことをしようとする自分であろう、起こしていっしょに隠れようかともいったんは躊躇ちゅうちゆしたが、思いながらもそれは実行できずに、慄ふるえながら帳台のほうを見ると、ほのかに灯ひの光を浴び

ながら、袿姿つちかたで、さも来一馴なれた所だというようにして、帳とばりの垂たれ布を引き上げて薫ははいって行った。非常に妹がかわいそうで、さめて妹はどんな気がすることであろうと悲しみながら、ちよつと壁の面に添ひよつて屏風びよぶの立てられてあつた後ろへ姫君ははいってしまつた。ただ抽象的な話として言つてみた時でさえ、自分の考え方を恨めしいふうと言つた人であるから、ましてこんなことを謀はかつた自分はうとましい姉だと思われ、憎くさえ思われることであろうと、思い続けるにつけても、だれも頼みになる身内の者を持たない不幸が、この悲しみをさせるのであろうと思われ、あの最後に山の御寺みでらへおいでになつた時、父宮をお見送りしたのが今のように思われて、堪えられぬまで父君を恋しく思う姫君であつた。

薫は帳台の中に寝ていたのは一人であつたことを知つて、これは弁の計つておいたことと見てうれしく、心はときめいてくるのであつたが、そのうちその人でないことがわかつた。よく似てはいたが、美しく可憐かれんな点はこの人がまさつているかと見えた。驚いている顔を見て、この人は何も知らずにいたのであろうと思われるのが哀れであつたし、また思つてみれば隠れてしまつた恋人も情けなく恨めしかつたから、これもまた他の人に渡しがたい愛着は覚えながらも、やはり最初の恋をもり立ててゆく障害になることは行ないたくない。そのようにたやすく相手の変えられる恋であつたかとあの人に思われたくない、この人のことはそうなるべき宿命であれば、またその時というものがあろう、その時になれば自分も初めの恋人と違つた人とこの人を思わず同じだけに愛することができようという分別のできた薫は、例のように美しくなつかしい話ぶり、ただ可憐な人と相手を見るだけで語り明かした。

老いた女房はただの話し声だけのする帳台の様子に失敗したことを思い、また一人はすつと出て行ったらしい音も聞いたので、中の君はどこへおいでになったのであろうか、わけのわからぬことであるといろいろな想像をしていた。

「でも何か思いも寄らぬことがあるのでしょうかね」  
とも言っていた。

「私たちがお顔を拝見すると、こちらの顔の皺しわまでも伸び、若がえりさえできると思うようなりっぱな御一風采ごふうさいの中納言様をなぜお避けになるのでしょうか。私の思うのには、これは世間でいう魔が姫君に憑ついているのですよ」

齒の落ちこぼれた女が無愛嬌ぶあいぎょうな表情でこう言いもする。

「魔ですつて、まあいやな、そんなものにどうして憑かれておいでになるものですか。ただあまりに人間離れのした環境に置かれておいでになりましたから、夫婦の道というようなことも上手うまいに説明してあげる人もないし、殿方が近づいておいでになるとむしように恐ろしくおなりになるのですよ。そのうち馴なれておしまいになれば、お愛しになることもできますよ」

こんなことを言う者もあつてしまいいには皆いい気になり、どうか都合よくいけばいいと言いいいだれも寝入ってしまった。軒いびきまでもかきだした不行儀な女もあつた。恋人のために秋の夜さえも早く明ける気がしたと故人の歌ったような間柄になつている女性といたわけではないが、夜はあつけなく明けた気がして、薫かあるは女王にょおうのいずれもが劣らぬ妍麗けんれいさの備わつたその一人と平淡な話ばかりしたままで別れて行くのを飽き足らぬこちもしたのであつた。

「あなたも私を愛してください。冷酷な女王さんをお見習いになつ

てはいけませんよ」

など、またまた機会のあるうことを暗示して出て行った。自分のことでありながら限らない淡泊な行動をとったと、夢のような気も薫はするのであるが、それでもなお無情な人の真の心持ちをもう一度見きわめた上で、次の問題に移るべきであると、不満足な心をなだめながら帰って来た例の客室で横たわっていた。

弁が帳台の所へ来て、

「お見えになりませんが、中姫君はどちらにおいでになるのでございましょう」

と言うのを聞いて、突然なことの身边に起こって、昨夜の幾時間かを親兄弟でもない男と共にいたという羞恥心しゅうちから、中の君は黙つてはいたが、どんな事情があつた始末をもたらしただのであるうと考えるのであつた。昨日語られたことを思い出してみると中の君の恨めしく思われるのは姉君であつた。今一人の壁の中の蟋蟀せむしは暁の光に誘われて出て来た。中の君がどう思っているだろうと気の毒で互いにものが言われぬ。ひどい仕向けである。今からのちもまたどんなことがしいられるかもしれぬ、姉をさえ信じることできぬのがこの世であるかと中姫君は思いもだえていた。

弁は客室へ行つて薫から、姫君が冷酷にも閨ねへ身代わりを置いて隠れてしまった話をされ、そんなだれも同情を惜しむほどな強い拒みようを姫君はされたのであるかと驚きにほんやりとなっていた。

「今までのつめたいお扱いは、それでもまだ私に希望を捨てさせないものがあつて、私には慰められるところもありましたがね、今日という今日はほんとうに恥ずかしくなつてしまつて、宇治川へ身も投げたい気になりましたよ。私のどんな行為の犠牲にしてもよいと

いうように御寝所へ捨ててお置きになった女王さんのお気の毒だったことを思うと、私は今死んでしまうこともならない気がされます。妻になつていただきたいなどということはどちらの女王さんにも私はもう望まないことにしますよ。中姫君を強制的に妻にしては一生恨みの残ることになりますからね。りっぱな兵部卿の宮様からの申し込みを受けておいでになる方だから、御自身でこうと決めておいでになることもあるだろうと私は知っていますから、あの方に近づいて行くことは思われなし、こうした恥ずかしい立場に置かれた私が、またまいつて女王がたにお逢あいするのははばかられます。あなたにお頼みしておくが、愚かな恋をしていた私の話をせめて女房たちにだけでも知られないように黙っていてください」

こう恨みを告げたあとで、平生よりも早く薫は帰ってしまった。中姫君のためにも中納言のためにも気の毒な結果を作ったと弁は昨夜の仲間の人たちとささやき合った。大姫君も事情はよくわかっていないのであったから、妹の女王に薫が深い愛を覚えなかつたのではあるまいかと、早く帰ったことについて胸を騒がせた、妹が哀れでもあった。すべての女房たちの仕業しわざの悪かつたことに基因しているのであると思つた。さまざまに大姫君が煩悶はんもんをしている時に源中納言からの手紙が来た。平生よりもこの使いがうれしく感ぜられたのも不思議であつた。

秋を感じないように片枝は青く、半ばは濃く色づいた紅葉もみぢの枝に、

「#ここから2字下げ」

おなじ枝えを分きて染めける山姫にいづれか深き色と問はばや

「#ここで字下げ終わり」

あれほど恨めしがっていたことも多く言わず、簡単にこの歌にしたのが手紙の内容であるのを見て、愛が確かにあるようでもなく、ただこんなふうにだけ取り扱って別れてしまう心なのであるうかと思ふことで姫君が苦痛を感じている時に、だれもだれもが返事を早くと促すのを聞いて、あなたからと今日は中の君に言うのも恥じられ、自分でするのも書きにくく思い乱れていた。

「#ここから2字下げ」

山姫の染むる心はわかねども移らふかたや深きなるらん

「#ここで字下げ終わり」

事実に触れるでもなく書かれてある総角あけまきの姫君の字の美しさに、やはり自分はこの人を忘れ果てることはできないであろうと薫は思った。自分の半身のような妹であるからと中の君を薦めるすすふうはたびたび見せられたのであるのに、自分がそれに従わないために謀はかつたものに違いない、その苦心をむだにした今になって、ただ恨めしさから冷淡を装っていれば初めからの願いはいよいよ実現難になるであろう、中に今まで立たせておいた老女にさえ、自分の愛の深さを見失わせることになり、浮いた恋だったとされてしまうのが残念である。何にもせよ一人の人にこれほどまでも心の惹ひかれることになった初めがくやしい、ただはかないこの世を捨ててしまいたいと願っている精神にも矛盾する身になっていてではないかと自分でさえ恥ずかしく思われることである、いわんや世間の浮気者うわきのように、

その恋人の妹にまた恋をし始めるということはできないことであると薫かあるは思い明かした。

次の朝の有明月夜ありあけに薫は兵部卿ひょうぶけいの宮の御殿へまいった。三条の宮が火事で焼けてから母宮とともに薫は仮に六条院へ来て住んでいるのであったから、同じ院内にもおいでになる兵部卿の宮の所へは始終伺うのである。宮もこの人が近く来て住み、朝夕に往来のできることで満足をしておいでになった。整然としたお住居すまいは前庭の草木のなびく姿も、咲く花も他の所と異なり、流れに影を置く月も絵のように見えた。薫が想像したとおりに宮はもう起きておいでになった。風が運んでくるにおいてこの特殊な人をお感じになって、お驚きになった宮は、すぐに直衣しよくを召し、姿を正して縁へ出ておいでになった。階きはしを上がりきらぬ所に薫がすわると、宮はもつと上にともお言いにならず、御自身も欄干らんかんによりかかって話をおかわしになるのであった。世間話のうちに宇治のこともお言いだしになり、薫の仲介者としての熱意のなさをお恨みになったが、無理である、自分の恋をさえ遂げえないものと薫は思っている。宇治へ行つて恋人に逢いたいというふうの宮にお見えになるのを知り、平生よりもくわしく山荘の事情、妹の女王のことなどを薫はお話し申した。夜明け前のまたちよつと暗くなる時間であつて、霧が立ち、空の色が冷ややかに見え、月は霧にさえぎられて木立ちの下も暗く艶えんな趣のあつた。宮が、

「今度あなたが行く時に必ず誘つてください。うちやつて行ってはいけませんよ」

とお言いになつても、薫の迷惑そうにしているのを御覧になつて、

「#ここから2字下げ」

女郎花をみなへし咲ける大野をふせぎつつ心せばくやしめを結ゆふらん

「#ここで字下げ終わり」

とお言いになった、冗談じょうだんのように。

「#ここから1字下げ」

「霧深きあしたの原の女郎花心をよせて見る人ぞ見る

「#ここで字下げ終わり」

だれでも見られるわけではありませんから」

などと薫も言った。

「うるさいことを言うね」

腹をたててもお見せになる宮様であった。今までから宮のこの御希望はしばしばお聞きしていたのであるが、中の君をよくは知らず、交際をせぬ薫であったから、不安さがあったて、容貌うぶつひは御想像どおりであつても、性情などに近づいて物足りなさをお感じになることはあるまいかとあやぶんで、お聞き入れ申し上げなかつたのである。思いもよらずその人に近づいたことによつて、今は不安も心からぬぐわれた薫は、大姫君がわざわざ謀つて身代わりにさせようとした気持ちを無視することも思いやりのないことではあるが、そのようにたやすく恋は改めうるものとは思われぬ心から、まずその人は宮にお任せしよう、そして女の恨みも宮のお恨みも受けぬことにしたいとこう思い決めたともお知りにならず、自分がはばんでいるよ

うにお言いになるのがおかしかった。

「あなたには多情な癖がおりになるのですからね、結局物思いをさせるだけだと考えられますからです」

女がたの後見者と見せて薫がこう言う。

「まあ見ていたまえ、私にはまだこんなに心の惹かれた相手はなかったのだからね」

宮はまじめにこう仰せられた。

「女王がたにはまだあなたさまを婿君にお迎えする心がなさそうなものですから、私の役は苦心を要するのでございますよ」

と言つて、薫は山荘へ御案内して行つてからのことをこまごまと御注意申し上げていた。

二十六日の彼岸の終わりの日が結婚の吉日になつていたので、薫はいろいろと考えを組み立てて、だれの目にもつかぬように一人で計らい、兵部卿の宮を宇治へお伴いして出かけた。御母一中宮のお耳にはいつては、こうした恋の御微行などはきびしくお制しになり、おさせにならぬはずであつたから、自分の立場が困ることになるとは思つのであるが、匂宮の切にお望みになることであつたから、すべてを秘密にして扱つのも苦しかった。

対岸のしかるべき場所へ御休息させておくことも船の渡しなどがめんどろであつたから、山荘に近い自身の荘園の中の人の家へひとまず宮をお降ろしして、自身だけで女王たちの山荘へはいつた。宮がおいでになつたところで見とがめるような人たちもなく、宿直をする一人の侍だけが時々見まわりに外へ出るだけのことであつたが、それにも気どらすまいとしての計らいであつた。中納言がおいでになつたと山荘の女房たちは皆緊張していた。女王らは困る気がせず

におられるのではないが、総角の姫君は、自分はもうあとへ退いて代わりの人を推薦しておいたのであるからと思っていた。中の君は薫の対象にしているのは自分でないことが明らかなのであるから、今度はああした驚きをせずに済むことであろうと思いつながらも、情けなく思われたあの夜からは、姉君をも以前ほどに信賴せず、油断をせぬ覚悟はしていた。取り次ぎをもつての話がいつまでもかわされていることで、今夜もどうなることかと女房らは苦しがつた。

薫は使いを出して兵部卿の宮を山荘へお迎え申してから、弁を呼んで、

「姫君にもう一言だけお話しすることが残っているのです。あの方が私の恋に全然取り合ってくださいさらないのはもうわかってしまいました。それで恥ずかしいことですが、この間の方の所へもうしばらくのちに私を、あの時のようにして案内して行ってくださいませんか」

真実らしく薫がこう言うと、どちらでも結局は同じことであるからと弁は心を決めて、そして大姫君の所へ行き、そのとおりに告げると、自分の思ったとおりにあの人は妹に恋を移したとうれしく、安心ができ、寢室へ行く通り路にはならぬ縁近い座敷の襖子をよく閉めた上で、その向こうへしばらく語るはずの薫を招じた。

「ただ一言申し上げたいのですが、人に聞こえますほどの大声を出すこともどうかと思われまますから、少しお開けくださいませんか。これではだめなのです」

「それでもよくわかるのですよ」

と言って姫君は応じない。愛人を新しくする際に虚心平気でそれをするのでないことをこの人は言おうとするのであろうか、今まで

からこんなふうにしては話し合った間柄なのだから、あまり冷ややかにものを言わぬようにして、そして夜をふかさせずに立ち去らしめようと思い、この席を姫君は与えたのであったが、襖子の間から女の袖をそでとらえて引き寄せた薫は、心に積もる恨みを告げた。困ったことである、話すことをなぜ許したのであるかと後悔がされ、恐ろしくさえ思うのであるが、上手にじょうずここを去らせようとする心から、妹は自分と同じなのであるからということ、それとなく言っている心持ちなどを男は哀れに思った。

兵部卿の宮は薫がお教えしたとおりに、あの夜の戸口によって扇をお鳴らしになると、弁が来て導いた。今一人の女王のほうへこうして薫を導きな馴れた女であろうと宮はおもしろくお思いになりながら、ついておいでになり、寢室へおはいりになったのも知らずに、大姫君は上手じょうずに中の君のほうへ薫を行かせようということを考えていた。おかしくも思い、また気の毒にも思われて、事実を知らせずにおいていつまでも恨まれるのは苦しいことであろうと薫は告白をすることにした。

「兵部卿の宮様がいつしよに來たいとお望みになりましたから、お断わりをしかねて御同伴申し上げたのですが、物音もおさせにならずどこかへおはいりになりました。この賢ぶった男を上手におだましになったのかもしれませんが。どちらつかずの哀れな見苦しい私になるでしょう」

聞く姫君はまったく意外なことであつたから、ものもわからなくなるほどに残念な気がして、この人が憎く、

「いろいろ奇怪なことをあそばすあなたとは存じ上げずに、私どもは幼稚な心であなたを御信用申していましたのが、あなたにはこっけい滑稽

に見えて侮辱をお与えになったのでございますね」

総角あけまきの女王は極度に口惜くちおしがっていた。

「もう時があるべきことをあらせたのです。私がどんなに道理を申し上げても足りなくお思いになるのでしたなら、私を打擲うちうちやくでも何でもしてください。あの女王様の心は私よりも高い身分の方にあつたのです。それに宿命というものがあつて、それは人間の力で左右できませんから、あの女王さんには私をお愛しくくださることがなかつたのです。その御様子が見えてお気の毒でしたし、愛されえない自分が恥ずかしくて、あの方のお心から退却するほかはなかつたのです。もうしかたがないとあきらめてくださつて私の妻になつてくださればいいではありませんか。どんなに堅く襖し子は閉めてお置きになりましても、あなたと私の間柄を精神的の交際以上に進んでいなかつたとはだれも想像いたしません。御案内して差し上げた方のお心にも、私がこうして苦しい悶もたえをしながら夜を明かすとはおわかりになつていますまい」

と言う薫は襖し子をさえ破りかねぬ興奮を見せていたのであつたら、うとましくは思いながら、言いなだめようと姫君はして、なお話の相手はし続けた。

「あなたがお言いになります宿命というものは目に見えないものですから、私どもにはただ事実に対して涙ばかりが胸をふさぐのを感じます。何というなされ方だろうとあさましいのでございます。こんなことが言い伝えに残りましたら、昔の荒唐無稽じつじつむげいな、誇張の多い小説の筋と同じように思われることでしょう。どうしてそんなことをお考え出しになつたのかとばかり思われまして、私たち姉妹あなごへの御好意とはそれがどうして考えられましょう。こんなにいろいろに

して私をお苦しめにならないでくださいまし。惜しくございません命でも、もしもまだ続いていくようでしたら、私もまた落ち着いてお話のできることがあるうと思ひます。ただ今のことを伺ひましたら、急に真暗まつくらな気持ちになりました、身体からだも苦しくてなりません。私はここで休みますからお許しくださいませ」

絶望的な力のない声ではあるが、理窟りくつを立てて言われたのが、薫には気恥きぢずかしく思われ、またその人が可憐かれんにも思われて、  
 「あなた、私のお愛しする方、どんなにもあなたの御意志に従いたいというのが私の願ひなのですから、こんなにまで一徹なところもお目につけたのです。言いようもなく憎いとうましい人間と私を見ていらつしやるのですから、申すことも何も申されません。いよいよ私は人生の外へ踏み出さなければならぬ気がします」

と言つて薫は歎息たんそくをもらしたが、また、  
 「ではこの隔てを置いたままで話させていただきましょう。まったく顧みをなさらぬようなことはしないでください」

こうも言いながら袖そでから手を離した。姫君は身を後ろへ引いたが、あちらへ行つてもしまわぬのを哀れに思ふ薫であつた。

「こうしてお隣にいることだけを慰めに思つて今夜は明かしましう。決して決してこれ以上のことを求めません」

と言ひ、襖子ふすまこを中にしてこちらの室むろで眠ろうとしたが、ここは川の音のはげしい山荘である、目を閉じてもすぐにさめる。夜の風の声も強い。峰を隔てた山鳥の妹背いもせのような気がして苦しかった。いつものように夜が白しらみ始めると御寺みでらの鐘が山から聞こえてきた。兵部卿うつぎきょうの宮を氣にして咳せき払いを薫かおるは作つた。實際妙な役をすることに  
 なつたものである。

「#ここから1字下げ」

「しるべせしわれやかへりて惑ふべき心もゆかぬ明けぐれの道

「#ここで字下げ終わり」

こんな例が世間にもあるでしょうか」

と薫が言うと、

「#ここから2字下げ」

かたがたにくらす心を思ひやれ人やりならぬ道にまどはば

「#ここで字下げ終わり」

ほのかに姫君の答える歌も、よく聞き取れぬもどかしさと飽き足りなさに、

「たいへんに遠いではありませんか。あまりに御同情のないあなたですね」

恨みを告げているころ、ほのぼのと夜の明けるのにうながされて兵部卿の宮は昨夜の戸口から外へおいでになった。柔らかなその御動作に従って立つ香はことさら用意して燻きしめておいでになった匂宮らしかった。

老いた女房たちはそこここから薫の帰って行くことに不審をいだいたが、これも中納言の計ったことであれば安心してよいと考えていた。

暗い間に着こうと京の人は道を急がせた。帰りはことに遠くお思われになる宮であった。たやすく常に行かれぬことを今から思召す

からである。しかも「夜をや隔てん」（若草の新手枕をまきそめて夜をや隔てん憎からなくに）とお思われになるからであろう。まだ人の多く出入りせぬころに車は六条院に着けられ、廊のほうで降りて、女乗りの車と見せ隠れるようにしてはいつて来たあとで顔を見合わせて笑った。

「あなたの忠実な御奉仕を受けたと感謝しますよ」

宮はこう冗談を仰せられた。自身の愚かしさの人のよさがみずから嘲笑されるのであるが、薫は昨夜の始末を何も申し上げなかった。すぐ宮は文を書いて宇治へお送りになった。

山荘の女王はどちらも夢を見たあのような気がして思い乱れていた。あの手この手と計画をしながら、気ぶりも初めにお見せにならなかったと中の君は恨んでいて、姉の女王と目を見合わせようと思わない。自身がまったく局外の人であったことを明らかに話すこともできぬ姫君は、中の君を遠く気の毒にながめていた。女房たちも、

「昨夜は中姫君のほうにどうしたことがありましたのでございませう」

などと、大姫君から事実をそれとなく探ろうとして言うのであったが、ただぼんやりとしたふうで保護者の君はいるだけであつたら、不思議なことであると皆思っていた。宮のお手紙も解いて姫君は中の君に見せるのであつたが、その人は起き上がろうともしない。時間のたつことを言っただけで使いが催促をしてくる。

「#ここから2字下げ」

よのつねに思ひやすらん露深き路のささ原分けて来つるも

「#ここで字下げ終わり」

書き馴れたみごとな字で、ことさら今日は艶な筆の跡であったが、ただ鑑賞して見ていた時と違った気持ちでそれに対しては気のめいる悩ましさを覚えさせられる姫君が、保護者らしく返事を代わってすることも恥ずかしく思われて、いろいろに言って中の君に書かせた。薄紫の細長一領に、三重一襲の袴を添えて纏頭に出したのを使いが固辞して受けぬために、物へ包んで供の人へ渡した。結婚の後朝の使いとして特別な人を宮はお選びになつたのではなく、これまで宇治へ文使いの役をしていた侍童だつたのである。これはわざとだれにも知られまいとの宮のお計らいだつたのであるから、纏頭のことをお聞きになつた時、あの気のきいたふうを見せた老女の仕業であろうとやや不快にお思ひになつた。

この夜も薫をお誘ひになつたのであるが、冷泉院のほうに必ず自分がまいらねばならぬ御用があつたからと申して応じなかつた。ともすればそうであつてはならぬ場合に悟りすました冷静さを見せる友であると宮は憎いようにお思ひになつた。宇治の大姫君を薫は情人にしていると信じておいでになるからである。

もうしかたがない、こちらの望んだ結果でなかつたと言つてもおろそかにはできない婿君であると弱くなつた心から総角の姫君は思つて、儀式の装飾の品なども十分にそろっているわけではないが、風流な好みを見せた飾りつけをして第二の夜のお宮をお待ちした。遠い路を急いで宮のお着きになつた時は、姫君の心に喜びがわいた。自分にもこうした感情の起こるのは予期しなかつたことに違いない。新婦の女王は化粧をされ、服をかえさせられながらも、明るい色の

袖の上が涙でどこまでも、濡れていくのを見ると、姉君も泣いて、  
 「私はこの世に長く生きていようと、それを楽しいことに思おう  
 ともしない人ですから、ただ毎日願っていることは、あなただけが  
 幸せしあわになってほしいということだったのですよ。それに女房たちも  
 これを良縁だとするさいまでに言うのですからね、なんといつても、  
 私たちと違って年をとっているいろいろな経験を持っている人たちには、  
 こうした問題についての判断がよくできるものだろう、私一人の意  
 志を立てて、いつまでも二人の独身女であってはなるまいと考える  
 ようになったことはあっても、突然な今度のようなことでああなたの  
 心を乱させようなどとは少しも思わなかったのですよ。でもね、こ  
 れが人の言う逃げようもない宿命だったのでしょね。私の心も苦  
 しんでいますよ、すこしあなたの気分の晴れてきたころに、私が今  
 度のことに関係していなかったことの弁明もして聞いてもらいます  
 よ。知らぬ私をあまりに恨んではあなたが罪を作ることになります」

と姫君が中の君の髪を繕いながら言ったのに対して、中の君は何  
 とも返辞はしなかったが、さすがに、こうまで自分を愛して言う姉  
 君であるから、危険な道へ進めようとしたわけではあるまい、そう  
 であるにもかかわらず、薄い愛より与えぬ人の妻になって、自分の  
 ために姉君へまた新しい物思いをさせることが悲しいと、今後の日  
 を思つて歎いていた。

闖入者ちんにゅうに驚きあきれていた夜の顔さえ美しい人であったのにまし  
 て、今夜は美しい服を着け、化粧の施されている女王を宮は御覽に  
 なつて、いつそうこまやかに御愛情の深まつていくにつけても、た  
 やすく通いがたい長い路みちが中を隔てているのを、胸の痛くなるほど

にも苦しく思召おぼしめされて、真心から変わらぬ将来の誓いをされるのだ  
 ったが、姫君はまだ自身の愛のわいてくるのを覚えなかつた。わか  
 らないのであつた。非常に大事にかしずかれた高貴な姫君といつて  
 も、世間というものと今少し多く交渉を持っていて、親とか兄弟と  
 かの所へ出入りする異性があつたなら、羞恥心しゅうちなどもこれほどにな  
 くて済むであろうと思われる。召使いどもにあがめられる生活はし  
 ていないが、山里であつたから世間に遠くて、人に馴なれていない中  
 の君は、地からわいたような良人おとこがただ恥ずかしい人により思われ  
 ないのであつて、自分の言うことなどは田舎風いなかに聞こえることばか  
 りであろうと思つて、ちよつとした宮へのお返辞もできかねた。し  
 かしながら二女王を比べて言えば、貴女らしい才の美しいひらめき  
 などはこの人のほうに多いのである。

三日にあたる夜は餅もちを新夫婦に供するものであると女房たちが言  
 うため、そうした祝いもすることかと総角の姫君は思い、自身の居  
 間でそれを作らせているのであつたが、勝手がよくわからなかつた。  
 自分が年長者らしくこんなことを扱うのも、人が何と思つて見るこ  
 とかとはばかられる心から、赤らめている顔が非常に美しかった。  
 姉心あねごころというのか、おおように気高けだかい性格でいて、妹の女王のために  
 は何かと優しいこまごまとした世話もする姫君であつた。源中納言  
 から、

「#ここから1字下げ」

今夜はまいって、雑用のお手つだいもいたしたく思うのですが、先  
 夜の宿直とくのいにお貸しくございました所が所ですから、少し身体からだをそこ  
 ねまして、まだ癒なおらない私は、どうしても出かけられませぬ。

「#ここで字下げ終わり」

と、二枚の檀紙に続けて書いた手紙を添え、今夜の祝儀の酒肴類、それからまた縫わせる間のなかつた衣服地のいろいろを巻いたままで入れ、幾つもの懸子へ分けて納めた箱を弁の所へ持たせてよこした。女房たち用にということであつた。母宮のお住居にいた時であつて、思うままにも取りまとめる間がなかつたものらしい。普通の絹や綾も下のほうには詰め敷かれてあつて、女王がたにと思つたらしい二一襲の特に美しく作られた物の、その一つのほうの単衣の袖に、次の歌が書かれてあつた、少し昔風なことであるが。

「#ここから2字下げ」

さよ衣着てなれきとは言はずとも恨言ばかりはかけずしもあらじ

「#ここで字下げ終わり」

これは戯れに威嚇して見せたのである。中の君に対して言われているのであろうが、いずれにもせよ羞恥を感じずにはいられないことであつたから、返事の書きようもなく姫君の困っている間に、纏頭を辞する意味で使いのおもだつた人は帰ってしまった。下の侍の一人を呼びとめて姫君の歌が渡された。

「#ここから2字下げ」

隔てなき心ばかりは通ふとも馴れし袖とはかけじとぞ思ふ

「#ここで字下げ終わり」

心のかき乱されていたあの夜の名残で、思つただけの平凡な歌よ  
り詠まれなかつたのであろうと受け取つた薫は哀れに思つた。

兵部卿の宮はその夜宮中へおいでになつたのであるが、新婦の宇治へ行くことが非常な難事にお思われになつて、人知れず心を苦しめておいでになる時に、中宮が、

「どんなに言つてもあなたはいつまでも一人でおいでになるものだから、このごろは私の耳にもあなたの浮いた話が少しずつはいってくるようになりましたよ。それはよくないことですよ。風流好きとか、何々趣味の人とか人に違つた評判は立てられないほうがいいのですよ。お上もあなたのことを御心配しておいでになります」

と仰せになつて、私邸に行つておいでがちな点で御忠告をあそばしたために、兵部卿の宮は時が時であつたから苦しくお思ひになつて、桐壺の宿直所へおいでになり、手紙を書いて宇治へお送りになつたあとも、心が落ち着かず吐息をついておいでになるところへ源中納言が来た。宇治がたの人とお思ひになるとうれしくて、

「どうしたらいいだろう。こんなに暗くなつてしまつたのに、出られないので煩悶をしているのですよ」

こうお言ひになり、歎かわしそうなふうをお見せになつたが、なおよく宮の新婦に対する真心の深さをきわめたく思つた薫は、

「しばらくぶりで御所へおいでになりましたあなた様が、今夜一宿直をあそばさないですぐお出かけになつては、中宮様はよろしくなく思召すでしょう。先ほど私は、台盤所のほうで中宮様のお言葉を聞いておりました、私がよろしくないお手引きをいたしましたことでお叱りを受けるのでないかと顔色の変わるのを覚えまして」

と申して見た。

「私がひどく悪いようにおっしゃるではないか。たいていのことは人がいいかげんなことを申し上げているからなのだろう。世間から

非難をされるようなことは何もしていないではないか。何にせよ窮窟な身の上であることがいけないね。こんな身分でなければと思う」

心の底からそう思召すふうで仰せられるのを見て、お気の毒になつた薫は、

「どうせ同じことでございますから、今晚のあなた様の罪は私が被ること<sup>き</sup>にいたしましたし、どんな犠牲もいといません。木幡<sup>こはた</sup>の山に馬はいかがでございましょう（山城の木幡の里に馬はあれど徒歩<sup>かち</sup>よりぞ行く君を思ひかね）いっそうお噂<sup>うわさ</sup>は立つことになりましたも」

こう申し上げた。夜はますます暗くなつていくばかりであつたら、忍びかねて宮は馬でお出かけになることになつた。

「お供にはかえつて私のまいらぬほうがよろしゅうございましょう。私は宿直<sup>とくのち</sup>することにいたしました、あなた様のために何かと都合よくお計<sup>か</sup>らいいたしましたし、」

と言つて、薫は残ることにした。

薫が中宮の御殿へまいると、

「兵部卿の宮さんはお出かけになつたらしい。困つた御行跡ね。お上<sup>かみ</sup>がお聞きになれば必ず私がよく忠告をしてあげないからだと思ひになつてお小言をあそばすだらうから困るのよ」

こうお后<sup>きさき</sup>は仰せになつた。多くの宮様が皆<sup>おとな</sup>一人になつておいでになるのであるが、御母宮はいよいよ若々しいお美しさが増してお見えになるのであつた。女<sup>にょこ</sup>一の宮<sup>みや</sup>もこんなのでおありになるのである、どんな機会によつて自分はこれほど一の宮へ接近することができるであらう、お声だけでも聞きうることでできようと、幼い日からのあこがれが今またこの人の心を哀れにさせた。好色な人が思

うまじき人を思うことになるのも、こうした間柄で、さすがにある程度まで近づくことが許されていて、しかもきびしい隔てがその中に立てられているというような時に、苦しみもし、悶えもするのであろう、自分のように異性への関心の淡いものはないのであるが、それでさえもなお動き始めた心はおさえがたいものなのであるから、などと薫は思っていた。侍女たちは容貌も性情も皆すぐれていて、欠点のある者は少なく、どれにもよいところが備わり、また中には特に目だつほどの人もあるが、恋のあやまちはすまいと決めているから、薫は中宮の御殿に来ていてもまじめにばかりしていた。わざとこの人の目につくようにふるまう人でもないのではない。気品を傷つけないようにと上下とも慎み深く暮らす女房たちにも、個性はそれぞれ違ったものであるから、美しい薫への好奇心が、おさえられつつも外へ現われて見える人などに、薫は憐れみも感じ、心の惹かれそうになることがあつても、何事も無常の人世なのであるからと冷静に考えては見ぬふりを続けた。

宇治では薫から大形おおぎような使いなどもよこされてあるのに、深更まで宮はお見えにならず、お手紙の使いだけの来たために、これであるから頼もしい方とは思われなかつたのであると、姉女王が煩悶はんもんしていたうちに、夜中近くなつて、荒い風の吹き立つ中に、兵部卿の宮は艶えんなおいを携えて、美しいお姿をお見せになつたのであつたら、喜びを覚えないうけもない。新夫人の中の君も前に似ぬ好意をお持ちしたことと思われる。中の君は非常に美しい盛りの容貌うけうを、まして今夜は周囲の人たちによつてきれいに粧よそおわれていたのであつたから、また類たぐいもない麗人と思われた。多くの美女を知つておいでになる宮の御目にも欠点をお見いだしになることはなくて、姿も心

も接近してますますすぐれたことの明らかになつた恋人であると思召すばかりであつたから、山荘の老いた女房などは満足したか自身の表情がどんなに醜いかも知らずに、ゆがんだ笑顔えがおをしながら中の君を見て、これほどにもりっぱな方が凡人の妻におなりになつたとしたらどんなに残念に思われるであろう、御運よく理想的な良人おとこをお持ちになることができてよかつたと言ひ合ひ、大姫君が薫の熱心な求婚に応じようとしなひのをひそかに非難してゐた。こうした中年になつた人たちが薫から贈られた美しいいろいろな絹で衣装を縫つて、それぞれ似合ひもせぬ盛装をしている中に一人でも感じのよいと思われる女房はなかつた。総角おげまきの姫君がこれを見て、自分も盛りの過ぎた女である、このごろ鏡を見ると顔は瘦やせてばかりゆく、この人たちでも自身では皆相当にきれいであるという自信を持つていて、醜いと認める者はないはずである、頭の後ろの形がどうなつてゐるかも思わずに額髪ひたいがみだけを深く顔に引っかけて化粧をした顔を恥ずかしいとは思わぬらしい。自分はまだあれほどにはなつていず、目も鼻も正しい形をしてゐると思つのは、わがことであつて身勝手な思ひなしによるものなのであると氣恥ずかしいような思ひをしながら茫ぼんと外をながめつつ寝てゐた。すべての整つたりっぱな青年である源中納言の妻になることはいよいよ似合わしからぬことと自分と思われる、もう一、二年すれば衰え方がもつと急速度になることであろう、もともと貧弱な体質の自分なのであるからと、大姫君はほつそりとした手首を袖の外に出しながら人生の悲しみを深く味わつてゐた。

兵部卿の宮は今夜のお出かけにくかつたことをお考えになると、将来も不安におなりになつて、今さえそれでお胸がふさがれてしま

うようになるのであった。中宮の仰せられた話などをされて、

「変わりない愛を持っていながら来られない日が続いても疑いは持たないでください。仮にもおろそかにあなたを思っているのだったら、こんな苦心を払って今夜なども出て来られるはずはありません。それなのに私の愛を信じることがおできにならないで、煩悶はんもんしたりされるのが気の毒で、自分のことはどうともなれとまで思つて出かけて来たのですよ。始終これが続けられるとも思われませんか、あなたの住むのに都合のよい所をこしらえて私の近くへ移したく思いますよ」

宮はこれを真心からお言いになるのであったが、間の途絶えるであろうことを今からお言いになるのは、名高い多情な生活から、恨ませまいための予防の線をお張りになるのであると、心細さに馴ならされた女王にょおうは前途をも悲観せずにはおられなかった。夜明けに近い空模様を、横の妻戸を押しあけて宮は女王も誘つて出ておながめになるのであった。霧が深く立つて特色のある宇治の寂しい景色けしきの作られている中を、例の柴船しばふねのかすかに動いて通つて行くあとには、白い波が筋をなして漂つていた。珍しい景をかたわらにした家であると風流心みやびこころにおもしろく宮は思召した。東の山の上からほのめいてきた暁の微光に見る中の君の容姿は整いきつた美しさで、最上の所にかしずかれた内親王もこれにまさるまいとお思われになった。現在の帝みかどの皇子であるからという気持ちで自分のほうの思い上がっているのは誤りである、この人の持つよさを今以上によく見もし、知りもしたいと思召す心がいっぱいになり、その人を少し見ることがおできになってかえつてより多くがお望まれになった。河音かわねはうれしい響きではなかったし、宇治橋のただ古くて長いのが限界を去ら

ずにあつたりして、霧の晴れていった時には、荒涼たる感じの与えられる岸のあたりも悲しみになった。

「どうしてこんな土地に長い間いることができたのですか」

とお言いになり、宮の涙ぐんでおいでになるのを見て、女王は恥ずかしい気がした。そして今よく見る宮のお姿はきわめて艶えんであった。この世かぎりでない契りをおささやきになるのを聞いていて、思いがけず結ばれた人とはいえ、かえってあの冷静なふうの中納言を良人おととにしたよりはこの運命のほうが気安いと女王は思っているのであつた。あの人の熱愛している人は自分でなくもあつたし、澄みきつたような心の様子に現われて見える点でも親しまれないところがあつた、しかもこの宮をそのころの自分はどう思っていたであろう、まして遠い遠い所の存在としていた。短いお手紙に返事をするこゝとすら恥ずかしかった方であるのに、今の心はそうでない、久しくおいでにならぬことがあれば心細いであろうと思われるのも、われながら怪しく恥ずかしい変わりようであると中の君は心で思った。お供の人たちが次々に促しの声を立てるのを聞いておいでになって、京へはいつて人目を引くように明るくならぬようにと、宮はおいでになるうとする際も御自身の意志でない通路じの途絶えによつて、思い乱れることのないようにとかえすがえすもお言いになった。

「#ここから2字下げ」

中絶えんものならなくに橋姫の片敷そでく袖そでや夜半よはに濡ぬらさん

「#ここで字下げ終わり」

帰ろうとしてまた躊躇ちゅうちよをあそばされた宮がこの歌をささやかれた

のである。

「#ここから2字下げ」

絶えせじのわが頼みにや宇治橋のはるけき中を待ち渡るべき

「#ここで字下げ終わり」

などただ言い、言葉は少ないながらも女王の様子に別れの悲しみの見えるのをお知りになり、たぐいもない愛情を宮は覚えておいでになった。

若い女性の心に感動を与えぬはずのない宮の御朝姿を見送って、あとに残ったにおいななどの身にしむ人にいつか女王はなっていた。

お立ちのおそかった今朝けさになつてはじめて女房たちは宮をおのぞき見た。

「中納言様はなつかしい御気品のよさに特別なところがありません。今一段上の御身分という思いなしからでしょうか、はなやかな御一美貌びぼうは何と申し上げようもないくらいにお見えになりましたね」

こんなことを言ってほめそやした。

京への道すがら、別れにめいつたふうを見せた女王をお思い出しになつて、このままもう一度山荘へ引き返したいと、御自身ながら見苦しく思召すまで恋しくお思われになるのであつたが、世間の取り沙汰さたを恐れてお帰りになつて以来、容易にお通いになれずお手紙だけを日ごとに幾通もお送りになつた。誠意がないのではおありになるまいと思ひながらもお途絶えの日が積もつていくことで、姉の女王は思い悩んで、こんな結果を見て苦勞をすることがないように

と願っていたものを、自身が当事者である以上に苦しいことであると歎かれるのであったが、これを表面に見せてはいっそう中の君が気をめいらせることになるうと思ふ心から、気にせぬふうを装いながらも、自分だけでも結婚しての苦を味わうまいといよいよ薫の望むことに心の離れていく大姫君であった。

薫も兵部卿の宮の宇治へおいでになれない事情を知っていて、山荘の女王が待ち遠しく思うことであろうと、自身の責任であるように思い、宮にそれとなくお促しもし、宮の御近状にも注意を怠らなかつたが、宮が宇治の女王に愛情を傾倒しておいでになることは明らかになつたために、今の状態はこうでも不安がることはないとの君のために胸をなでおろす思いをした。

九月の十日で、野山の秋の色がだれにも思いやられる時である、空は暗い時雨しぐれをこぼし、恐ろしい気のする雲の出ている夕べであった、宮は平生以上に宇治の人がお思われになつて、何が起ころうとも行つてみようか、どうしたものかとお一人では決断がおできにならないで迷つておいでになるところへ、そのお思いを想像することのできた薫がお訪たずねして来た。

「山里のほうはどうでしょう」

中納言の言ったことはこれであつた。お喜びになつて、  
「では今からいっしょに出かけよう」

とお言いになつたため、匂宮におのみやのお車に薫中納言は御同車して京を出た。山路へかかってくるにしたがつて、山荘で物思ひをしている恋人を多く哀れにお思ひになる宮でありになつた。同車の人へもその点で御自身も苦しんでおいでになることばかりをお話しになつた。行く秋の黄昏時たそがれの心細さの覚えられる路みちへ、冷たい雨が降りそ

そいでいた。衣服を湿らせてしまったために、高い香はまして一つになつて散り広がるのが艶で、村人たちは高華な夢に行き違つたように思った。

毎日毎日婿君の情の薄さをかこつていた山荘の女房たちは、悦びを胸に満たせてお席を作つたりなどしていた。京のあちらこちらへ女房勤めに出ている娘とか姪とかをにわかにも手もとへ呼び寄せて、中の君のそば仕えをさせることにした女房も二、三人あつたのである。今まで輕蔑をしていた浮薄な人たちにとって、尊貴な婿君の出現は驚異に価することであつた。

大姫君はこの寂しい夜を訪ねたもうた宮をうれしく思うのであつたが、少し迷惑な人が添つて来たと思つてもないものの、慎重な、思いやりのある態度を恋にも忘れずにいてくれた人とその人を思う時、匂宮の御行為はそうでなかつたと比較がされ感謝の念は禁じられなかつた。中の君の婿君として宮に山荘相当な御一饗応を申し上げて、薫は主人がたの人として気安く扱いながらも、客室の座敷に据えられただけであるのを恨めしくその人は思つていた。

さすがに気の毒に思われて姫君は物越しで話すことにした。自分の心の弱さからつまずいて、またも初めに恋は返されたではないか、こんな状態を続けていくことはもう自分には不可能であると思ひ、薫は言葉を尽くして恋人に恨みを告げようとした。ようやくこの人の尊敬すべき気持ちも悟つた姫君であるが、中の君が結婚をしたために物思いに沈むことの多くなつたことによつて、いっそう恋愛というものをいとわしいものに思い込むようになり、これ以上の接近は許すまい、清い愛を今では感じている相手であるが、この人を恨むことが結婚すれば生じるに違いない、自身もこの人も変わらぬ友

情を続けていきたいとこう深く心に決めているためであった。宮に  
ついでの話になって、薫のほうから中の君の様子などを聞くと、少  
しずつ近ごろのことで、薫の想像していたようなことも姫君は語つ  
た。薫は気の毒になり、宮が深い愛着をお持ちになること、自分が  
探って知っている御自由のない近ごろの憂鬱うれしづめなお日送りなどを話し  
ていた。姫君は平生より機嫌きげんよく話したあとで、

「こんなふうな、新たな心配にとらわれておりますことも終わしま  
して、気の静まりましたところにまたよくお話を伺いましょう」

と言った。反感を起こさせるような冷淡さはなくて、しかも襖子からかみ  
は堅く閉ざされてあった。しいてその隔てを取り除こうとするのは  
甚だしく同情のないふるまいであると姫君の思っているのを知って  
いる薫は、この人に考えがあることであろう、軽々しく他人の妻に  
なってしまうようなことはない信じられる人であるからと、いつ  
もゆとりのある心のこの人は、恋に心を焦こがしながらもそれをおさえ  
ることはできた。

「あなたの御意志はどこまでも尊重しますが、こうして物越しでお  
話していることの不満感を救ってだけはください。先日のおよう  
に近くへまいってお話をさせていたただきたいのです」

と責めてみたが、

「このごろの私は平生よりも衰えていましてね、顔を御覧になって  
不愉快におなりになりはしないかと、どうしたのでしょうか、そんな  
ことの気になる心もあるのですよ」

と言い、ほのかに総角の姫君の笑った気配けはいなどに怪しいほどの魅  
力のあるのを薫は感じた。

「そんなつきも離れもせぬお心に引きずられてまいって、私はしま

いにどうなるのでしょうか」

こんなことを言い、男は歎息をしがちに夜を明かした。

兵部卿の宮は、薫が今も一人臥をするにすぎない宇治の夜とは想像もされないで、

「中納言が主人がたぶつて、寢室に長くいるのが恨めしい」

とお言いになるのを、不思議な言葉のように中の君はお聞きしていた。

無理をしておいでになっても、すぐにまたお帰りにならねばならぬ苦しさに宮も深い悲しみを覚えておいでになった。こうしたお心を知らない中の君は、どうなってしまうことか、世間の物笑いになることかと歎いているのであるから、恋愛というものはして苦しむほかのないことであると思われた。京でも多情な名は取っておいでになりながら、ひそかに通ってお行きになる所としてはさすがにない宮でありになった。六条院では左大臣が同じ邸内に住んでいて、匂宮の夫人に擬している六の君に何の興味もお持ちにならぬ宮をうらめしいようにも思っているらしかった。好色男性的な生活をしていられるとあって、容赦なく宮のことを御非難して帝にまでも不満な気持ちをお洩らし申し上げるふうであったから、八の宮の姫君という、だれにも意外な感を与える人を夫人としてお迎えになることはばかられるところが多かった。軽い恋愛相手にしておいでになる女性は、宮仕えの体裁で二条の院なり、六条院なりへお入れになることも自由にお計らいになることができ、かえってお気楽であった。そうした並み並みの情人とは少しも思っておいでにならないのであって、もし世の中が移り、帝と后のかねての御希望が実現される日になれば、だれよりも高い位置にこの人をすえたいと思うので

あるからと、現在の宮のお心は宇治の中の君に傾き尽くされていて、その人をいかにして幸福ならしめ常に相見る方法をいかにして得ようかとばかり考えておいでになった。中納言は火災後再築している三条の宮のでき上がり次第によい方法を講じて大姫君を迎えようと考えていた。やはり人臣の列にある人は気楽だといってよい。

これほど愛しておいでになりながら、結婚を秘密のことにしておありになるために、宮にも中の君にも煩悶はんもんの絶えないらしいことが気の毒で、このお二人の関係を自分から中宮ちゆうぐうに申し上げて御了解を得ることにしたい。当座はお騒がれになって、めんどろな目に宮はおあいになるかもしれぬが、中の君のほうのためを思えば、それは一時的なことであつて、直接苦痛になることもあるまい、こんなふうに夜も明かし果てずに帰つてお行きになる宮のお気持ちのつらさはさぞとお察しができて心苦しい、結婚が公然に認められるようになれば、中の君に十分な物質的援助をして、宮の夫人たるに恥のない扱いを兄代わりになつてしてみたい、とこう思うようになった薫は、しいて内密事とはせず、このごろも冬の衣がえの季節になつているが、自分のほかにだれがその仕度したくに力を貸すものがあるうと思いやつて、御帳みちやうの懸かけ絹かへしろ、壁代かへしろなどというものは、三条の宮の新築されて移転する準備に作らせてあつたから、それらを間に合わせに使用されたいというふうに伝えて宇治へ送つた。またいろいろな山荘の女房たちの着用するものも自身の乳母めのとなどに命じて公然にも製作させた薫であつた。

十月の一日ごろは網代あじろの漁も始まつていて、宇治へ遊ぶのに最も興味の多い時であることを申して中納言が宮をお誘いしたために、兵部卿の宮は紅葉見もみじみの宇治行きをお思い立ちになつた。宮にお付き

していて親しく思召おぼしめされる役人のほかに殿上役人の中で特に宮のお  
 愛しになる人たちだけを数にして微行のお遊びのつもりであったの  
 であるが、大きな勢いを負っておいでになる宮でおありになったか  
 ら、いつとなくたいそうな催しになっていき、予定の人数のほかに  
 左大臣家の宰相中將がお供申し上げた。高官としては源中納言だけ  
 が随したがいたてまつった。殿上役人の数は多かつた。

必ず女王にょおうたちの山荘へお寄りになることを信じている薫から、  
 「#ここから1字下げ」

宮のお供をして相当な数の客が来ることを考えてお置きください。  
 先年の春のお遊びに私と伺った人たちもまた参邸を望んで、不意に  
 お訪たずねしようとするかもしれません。

「#ここで字下げ終わり」

などとこまごま注意をしてきたために、御簾みすを掛け変えさせ、あ  
 ちこちの座敷の掃除そうじをさせ、庭の岩蔭いわかげにたまった紅葉もみぢの朽ち葉を見  
 苦しくない程度に払わせ、小流れの水草をかき取らせなど女王はさ  
 せた。薫のほうからは菓子かしのよいのなども持たせて来、また接待役  
 に出す若い人たちも来させてあつた。こんなにもする薫の世話を平  
 気で受けていることは気づらいことに姫君は思っていたが、たよる  
 ところはほかにないのであるから、こうした因縁いんげんと思ひあきらめて  
 好意を受けることにし、兵部卿の宮をお迎えする用意をととのえた。

遊びの一行は船で河かわを上り下りしながらおもしろい音楽を奏する  
 声も山荘へよく聞こえた。目にも見えないことではなかった。若い  
 女房らは河に面した座敷のほうから皆のぞいていた。宮がどこにお  
 いでになるのかはよくわからないのであるが、それらしく紅葉の枝

の厚く屋形に葺いた船があつて、よい吹奏樂はそこから水の上へ流れていた。河風がはなやかに誘っているのである。だれもが敬愛しておかしくさきしていることはこうした微行のお遊びの際にもいかめしくうかがわれる宮を、年に一度の歡会しかない七夕の彦星に似たまれな訪れよりも待ちえられないにしても、婿君と見ることは幸福に違いないと思われた。

宮は詩をお作りになる思召して文章博士などを随えておいでになるのである。夕方に船は皆岸へ寄せられて、奏樂は続いて行なわれたが、船中で詩の筵は開かれたのであつた。音楽をする人は紅葉の小枝の濃いうすの淡いうすのを冠に挿して海仙樂の合奏を始めた。だれもだれも楽しんでいる中で、宮だけは「いかなれば近江あふみの海ぞかかるてふ人を見るめの絶えてなければ」という歌の氣持ちを覚えておいでになって、遠方おちかた人の心こころ（七夕のあまのと渡ることよひさへ遠方人のつれなかるらん）はどうであろうとお思いになり、ただ一人一茫然ぼつぜんとしておいでになるのであつた。おりに合った題が出されて、詩の人は創作をするのに興奮していた。船中の人の動きの少し静まってくところを待つて山莊へ行こうと薰も思い、そのことを宮へお耳打ちしていたうちに、御所から中宮のお言葉を受けて宰相の兄の衛門督えもんのかみがはなばなしすいじんく隨身を引き連れ、正装姿でお使いにまいった。こうした御遊行はひそかになされたことであつても、自然に世間へ噂なわづらに伝わり、あとの例にもなることであるのに、重々しい高官の御随行のわずかなままでお出かけになったことがお耳にはいって、衛門督が派遣され、ほかにも殿上役人を多く伴わせて御一行に加えられたのである。こんなためにもまた騒がしくなつて、思う人を持つお二人は目的の所へ行かれぬ悲哀が苦痛にまでなつて、どんなこともお

もしろくは思われなくなつた。宮のお心などは知らずに酔い乱れて、だれも音楽などに夢中になつた姿で夜を明かした。それでも次の日になればという期待を宮は持つておいでになつたが、また朝になつてから中宮一<sup>だゆう</sup>大夫とまた多くの殿上役人が来た。宮は落ちいぬ心になつておいでになつて、このまま帰る気などにはおなりになれなかつた。

山荘の中の君の所へはお文<sup>ふみ</sup>が送られた。風流なことなどは言つておいでになる余裕がお心になく、ただまじめにこまごまとお心持ちをお伝えになつたものであつたが、人が多く侍している際であるからと思つて女王は返事をしてこなかつた。自身のような哀れな身の上の者が愛人となつているのに、不釣合<sup>ふつりあ</sup>いな方であると女は深く思つたに違いない。遠い道が間にある時は相見る日のまれなのも道理なことに思われ、こんな状態に置かれていても忘られてはいないのであるとみずから慰めることもできた中の君であつたが、近い所に来て派手<sup>はで</sup>なお遊びぶりを見せられただけで、立ち寄ろうとされない宮をお恨めしく思い、くちおしくも思つて悶<sup>もだ</sup>えずにはいられなかつた。

宮はまして憂鬱<sup>ゆううつ</sup>な気持ちにおなりになつて、恋しい人に逢<sup>あ</sup>われぬ不愉快さをどうしようもなく思召された。網代<sup>あじろ</sup>の氷魚<sup>ひよ</sup>の漁もことに多くて、きれいないろいろの紅葉にそれを混ぜて幾つとなく籠<sup>かご</sup>にしつらえるのに侍などは興じていた。上下とも遊山<sup>ゆざん</sup>の喜びに浸つている時に、宮だけは悲しみに胸を満たせて空のほうばかりを見ておいでになつた。そうするとお目につくのは女王の山荘の木立ちであつた。大木の常磐木<sup>ときわぎ</sup>へおもしろくかかつた薦紅葉<sup>つたもみじ</sup>の色さえも高雅さの現われのように見え、遠くからはすぐくさえ思われる一構えがそれ

であるのを、中納言も船にながめて、自分がたいそうに前触れをしておいたことがかえって物思いを深くさせる結果を見ることになったかと歎かわしく思った。

一 昨年きんだちの春薫に伴われて八の宮の山荘をお訪ねした公達は、その時の川への桜を思い出して、父宮を失われた女王たちがなおそこにおられることはどんなに心細いことであろうと同情し合っていた。一人を兵部卿の宮が隠れた愛人にしておいでになるという噂を聞いている人もあったであろうと思われる。事情を知らぬ人も多いのであるから、ただ孤女になられた女王のことを、こうした山里に隠れていても、若い麗人のことは自然に世間が知っているものであるから、

「非常な美人だということですよ。十三一絃げんの琴の名手だそうです。故人の宮様がそのほうの教育をよくされておいたために」  
などと口々に言っていた。宰相の中將が、

「#ここから2字下げ」

いつぞやも花の盛りに一目見し木の下もとさへや秋はさびしき

「#ここで字下げ終わり」

八の宮に縁故の深い人であるからと思つて薫にこう言った。その人、

「#ここから2字下げ」

桜こそ思ひ知らすれ咲きにほふ花も紅葉もみぢも常ならぬ世に

「#ここで字下げ終わり」

えもんのかみ  
衛門督、

「#ここから2字下げ」

いづこより秋は行きけん山里の紅葉の蔭は過ぎつきものを

「#ここで字下げ終わり」

中宮大夫、

「#ここから2字下げ」

見し人もなき山里の岩がきに心長くも這へる葛かな

「#ここで字下げ終わり」

だれよりも老人であるから泣いていた。八の宮がお若かったころのことを思い出しているであろう。兵部卿の宮が、

「#ここから2字下げ」

秋はてて寂しさまざる木の本を吹きな過ぐしそ嶺の松風

「#ここで字下げ終わり」

とお歌いになって、ひどく悲しそうに涙ぐんでおいでになるのを見て、秘密を知っている人は、評判どおりに宮はその人を深く愛しておいでになるらしい、こんな機会にさえそこへおいでになることがおできにならないのはお気の毒であると思っっているのであるが、そうした人たちだけをつれて山荘へおはいりになることも御実行の

できないことであつた。人々の作つた詩のおもしろい一節などを皆口ずさんだりして、歌のほうも平生とは違つた旅のことであるから相当に多くできていたが、酒酔いをした頭から出たものであるから、少しを採録したところで、佳作はなくつまらぬから省く。

山莊では宮の一行が宇治を立つて行かれた<sup>けはい</sup>気配を相当に遠ざかるまで聞こえた前駆の声で知り、うれしい気持ちはずなかつた。御歎待の仕度<sup>したく</sup>をしていた人たちは皆はなはだしく失望をした。大姫君はましてこの感を深く覚えていたのであつた。やはり噂されるように多情でわがままな恋の生活を事とされる宮様らしい、よそながら恋愛談を人のするのを聞いてみると、男というものは女に向かつて<sup>うそ</sup>嘘を上手<sup>うまい</sup>に言うものであるらしい、愛していない人を愛しているふう<sup>うそ</sup>に巧みな言葉を使うものであると、自分の家にいるつまらぬ女たちが身の上話にしているのを聞いていた時は、身分のない人たちの中にだけはそうしたふまじめな男もあるのであろう、貴族として立つている人は、世間の批評もはばかつて慎むところもあるのである。と思つていたのは、自分の認識が足りなかつたのである、多情な方のように父宮も聞いておいでになつて、交際はおさせになつたがこの家の婿になどとはお考えにならなかつたものらしかつたのに、不思議なほど熱心に求婚され、すでにもう縁は結ばれてしまい、それによつていつそう自分までが心の苦勞を多くし不幸さを加えることになつたのは歎かわしいことである。接近して愛の薄くおなりになつた宮のお相手の妹を、中納言は<sup>けいべつ</sup>軽蔑して考えないであろうか、りっぱな女房がいるのではないが、それでもその人たちがどう思うかも恥ずかしい。人笑われな運命になつたと<sup>はんもん</sup>煩悶することによつて姉女王は健康をさえもそこねるようになった。当の中の君はたまさか

にしかお逢いあしない良人おとこであるが、熱情的な愛をささやかかれていて、今眼前にどんなことがあるうともお心のまったく変わるようなことにはあるまい、常においでになることのできないのも余儀さむない障さわりがあるからに相違ないとのたのむところもあつた。ここしばらくおいでにならなかつたのであるから切なく思わぬはずもないのに、近くへお姿をお現まわしになつただけで行つておしまいになつたことでは恨めしく残念な思いをして気をめいらせているのが、総角あげまきの姫君には堪えられぬほど哀れに見えた。世間並みの姫君らしい宮殿にかしずかれていたならば、この邸やしきがこんな貧弱なものでなければ宮は素通りをなされなかつたはずであるのと思われるのである。自分もまだ生きているとすれば、こうした目にあわされるであろう、中納言がいろいな言葉で清い恋を求めるといふのも、自分をためそうとする心だけであつて、自分一人は友情以上に出まいとしていても、あの人の本心がそれでないのでは行くところは知れきつたことで、自分のしりぞけるのにも力の限度がある、家にいる女たちは媒介役の失敗に懲りもせず、今もどうかして中納言を自分の良人おとこにさせたいと望まない者もないのであるから、自分の気持ちは尊重されず、結果としては自分があの人の妻にされてしまうことになるのであるう、これが取りも直さず父君が、みずからをよく護まもつていくようにと仰せられたことに違いない、不幸な自分たちは母君をも早く失い、父宮にもお別れしてしまつたが、薄命な者であるからどうなつてもよいと自身を軽く扱つて、見苦しい捨てられた妻というものになり、お亡なくなりになつたあとの父君のお心までをお悩ましさせることになるのは悲しい。自分一人だけでもそうした物思いに沈まないで済む処女を保つたまままで病死をしてしまいたいと、こんな

ことを明け暮れ思い続ける大姫君は、心細い死の予感をさえ覚えて、中の君を見ても哀れで、自分にまで死に別れたあとではいつそう慰みどころのない人になるであろう、美しいこの人をながめることが自分の唯一の慰安で、どうかして幸福な女にさせたいとばかり願っていた、どんなに高貴な方を良人に持ったといつても、今度のような侮辱を受けながらなお尼にもならず妻として孤閨こけいを守っていくことは例もないほど恥ずかしいことに違いないと、それからそれへと思い続けていく大姫君は、自分ら姉妹きょうだいは現世で少しの慰めも得られないままに終わる運命を持つものらしいと心細くなるのであった。

兵部卿の宮は御帰京になったあとでまたすぐに微行で宇治へお行きになるうとしたのであったが、

「兵部卿の宮様は宇治の八の宮の姫君とひそかな関係を結んでおいでになりました、突然に時々近郊の御旅行と申すようなことをお思い立ちになるのでございます。御軽率けいそつすぎることでと世間でもよろしくはお噂うわさいたしません」

と左大臣の息子むすこの衛門督えもんのかみがそつと中宮へ申し上げたために、中宮も御心配をあそばし、帝みかども常から宮のお身持ちを気づかわしく思召していられたのであったから、これによっていつそう監視が厳重になり、兵部卿の宮を宮中から一步もお出しにならぬような計らいをあそばされた。そして左大臣の六女との結婚はお諾ゆゑしにならなかつた宮へ、強制的にその人を夫人になさしめたもうというようなこともお定めになった。中納言はそれを聞いて憂鬱ゆううつになっていた。自分  
があまりに人と変わり過ぎているのである、どんな宿命でか八の宮  
が姫君たちを気がかりに仰せられた言葉も忘られなかつたし、また  
その女王たちもすぐれた女性であることを発見してからは、世間に無

視されていることがあまりに不合理に惜しいことに思われ、人の幸福な夫人にさせたいことが念頭を去らなかつたし、ちようと兵部卿の宮も熱心に希望あそばされたことであつたために、自分の対象とする姫君は違つてゐるのに、今一人の女王を自分に娶らせようと当人がされるのをうれしくなく思うところから、宮との方とを結ばせてしまった。今思うとそれは軽率なことであつた。二人とも自分の妻にしても非難する人はなかつたはずである、今さら取り返されるものではないが、愚かしい行動をしたと煩悶はんもんをしているのである。

宮はまして宇治の女王にょおうがお心にかからぬ時とてもなかつた。恋しくお思いになり、知らぬまにどんなことになつてゐるかもしれぬという不安もお覚えになるのである。

「非常にお気に入つた人がおありになるのだつたら、私の女房の一人にしてここへ来させて、目だたない愛しようをしていれればいいでしょう。あなたは東宮様、二の宮さんに続いて特別なものとして未来の地位をお上かみはお考えになつていらつしやるのですから、軽率な恋愛問題などを起こして、人から指弾されるのはよろしくありませんからね」

こんなふうちゅうふうに中宮は始終御忠告をあそばされるのであつた。

はげしく時雨しぐれが降つて御所へまいる者も少ない日、兵部卿の宮は姉君の女にょいち一の宮の御殿へおいでになつた。お居間に侍している女房の数も多くなくて、姫君は今静かに絵などを御覧になつてゐるところであつた。几帳きちょうだけを隔てにしてお二方はお話しになつた。限りもない気品のある貴女きじよらしさとともに、なよなよとした柔らかさを備えたもうた姫宮を、この世にこれ以上の高華な美を持つ女性はな

かるうと、昔から兵部卿の宮は思つておいでになつて、これに近い人というのは冷泉院の内親王だけであろうと信じておいでになり、世間から受けておいでになる尊敬の度も、御容姿も、御一聰明さも人のお噂する言葉から想像されて、宮の覚えておいでになる院の宮への恋を、なんらお通じになる機会というものがなく、しかも忘れる時なく心に持つておいでになる兵部卿の宮なのであるが、あの宇治の山里の人の可憐で高い気品の備わつたところなどは、これらの最高の貴女に比べても劣らないであろうと、姉君のお姿からも中の君が聯想されて、恋しくてならず思召す心の慰めに、そこに置かれてあつたたくさんな絵を見ておいでになると、美しい彩色絵の中に、恋する男の住居などを描いたのがあつて、いろいろな姿の山里の風景も添つていた。恋人の宇治の山荘の景色に似たものへお目がとまつて、姫君の御了解を得てこの絵は中の君へ送つてやりたいと宮はお思ひになつた。伊勢物語を描いた絵もあつて、妹に琴を教へて、  
 「うら若みねよげに見ゆる若草を人の結ばんことをしぞ思ふ」と業平が言つてゐる絵をどんなふうにも御覧になるかと、お心を引く気におなりになり、少し近くへお寄りになつて、

「昔の人も同胞は隔てなく暮らしたものですよ。あなたは物足らないお扱いばかりをなさいますが」

とお言ひになつたのを、姫宮はどんな絵のことかと思召すふうであつたから、兵部卿の宮はそれを巻いて几帳の下から中へお押しやりになつた。下向きになつてその絵を御覧になる一品の宮のお髪が、なびいて外へもこぼれ出た片端に面影を想像して、この美しい人が兄弟でなかつたならという心持ちに匂宮はなつておいでになつた。おさえがたいそうした気分から、

「#ここから2字下げ」

若草のねみんものとは思はねど結ばほれたるここちこそすれ

「#ここで字下げ終わり」

こんなことを申された。姫宮に侍している女房たちは匂宮の前へ出るのをことに恥じて皆何かの後ろへはいつて隠れているのである。ことにもよるではないか、不快なことを言うものであると思召す姫宮は、何もお言いにならないのであった。この理由から「うらなく物の思はるるかな」と答えた妹の姫も蓮葉はすはな気があそばされて好感をお持ちになることができなかった。六条院の紫夫人が宮たちの中で特にこのお二人を手もとでおいつくしみしたのであったから、最も親しいものにして双方で愛しておいでのになった。姫宮を中宮は非常にお大事にあそばして、よきが上にもよくおかしすぎになるならわしから、侍女なども精選して付けておありになった。少しの欠点でもある女房は恥ずかしくお仕えができにくいのである。貴族の令嬢が多く女房になっていた。移りやすい心の兵部卿しゅうぶけいの宮は、そうした中に物新しい感じのされる人を情人にお持ちになりなどして、宇治の人をお忘れになるのではないながらも、逢あいに行こうとはされずに日がたった。

待つほうの人からいえば、これが長い時間に思われて、やはりこんなふうにして忘られてしまうのかと、心細く物思**い**ばかりがされた。そんなころにちょうど中納言たすが訪ねて来た。総角あけまきの姫君が病気になったと聞いて見舞いに来たのである。ちよつとしたことにもすぐ影響が現われてくるというほどの病体ではなかったが、姫君はそ

れに託して対談するのを断わった。

「おしらせを聞くとすぐに、驚いて遠い路みちを上がった私なのですから、ぜひ御病床の近くへお通してください」

と言つて、不安でこのままでは帰れぬふうを見せるために、女王の病室の御簾みすの前へ座が作られ、薫かおるはそこへ行つた。困つたことである。姫君は苦しがつていたが、そう冷ややかなふうは見せるのでもなかつた。頭を枕まくらから上げて返辞などをした。宮が御意志でもなくお寄りにならなかつた紅葉もみぢの船の日のことを薫は言い、

「気永きながに見ていてください。はらはらとお心をつかつてお恨みしたりなさらないように」

などと教えるようにも言う。

「私は格別愚痴をこぼしたりはいたしません、亡なくなられました宮様が、御教訓を残してお置きになりましたのは、こうしたことであらせまい思召しかと思ひまして、あの人がかわいそうでございます」

それに続いて大姫君の歎なげく気配けはいがした。心苦しくて、薫は自身すらも恥はづかしくなつて、

「人生というものは、何も皆思いどおりにいくものではありませんからね。そんなことには少しも経験をお持ちにならないあなたがたにとつては、恨めしくばかりお思われになることもあるでしょうが、まあしいてもそれを静めて時をお待ちなさい。決してこのまま悪くなつていく御縁ではないと私は信じています」

などと言いながらも、自身のことではなく他の人の恋でこの弁明はしているのであると思うと、奇妙な気がしないでもなかつた。夜になるときまつて苦しくなる病状であつたから、他人が病室の近くに

来ていることは中の君が迷惑することと思って、やはりいつもの客室のほうへ寢床をしつらえて人々が案内を申し出るのであったが、  
 「始終気がかりでならなく思われる方が、ましてこんなふうにお悪くなっておいでになるのを聞くと、すぐにも上がった私を、病室からお遠ざけになるのは無意味ですよ。こんな場合のお世話なんぞも、私以外のだれが行き届いてできますか」

などと、老女の弁に語って、始めさせる祈禱きとうについての計らいも薫はした。そんなことは恥ずかしい、死にたいとさえ思うほどの無価値な自分ではないかと大姫君は聞いていて思うのであったが、好意を持ってくれる人に対して、思いやりのないように思われるのも苦しくて、まあ生きていてもよいという気になったという、こんな、優しい感情もある女王なのであった。

次の朝になって、薫のほうから、

「少し御気分はおよろしいようですか。せめて昨日きのうほどにでもしてお話がしたい」

と、言つてやると、

「次第に悪くなっていくのでしょうか、今日はたいへん苦しゅうございます。それではこちらへ」

という挨拶あいさつがあつた。中納言は哀れにそれを聞いて、どんなふうにも苦しいのであろうと思ひ、以前よりも親しみを見せられるのも悪くなつていく前兆ではあるまいかと胸騒ぎがし、近く寄つて行きいろいろな話をした。

「今私は苦しくてお返辞ができません。少しよくなりましたらねえ」

こうかすかな声で言う哀れな恋人が心苦しくて、薫は歎息たんそくをして

いた。さすがにこうしてずっと今日もいることはできない人であったから、気がかりにしながらも帰京をしようとして、

「こういう所ではお病氣の際などに不便でしかたがない。家を変えてみる療法に託してしかるべき所へ私はお移ししようと思う」

などと言い置き、御寺の阿闍梨にも熱心に祈祷をするように告げさせて山莊を出た。

薫の従者でたびたびの訪問について来た男で山莊の若い女房と情人関係になった者があつた。二人の中の話に、兵部卿の宮には監視がきびしく付き、外出を禁じられておいでになることを言い、

「左大臣のお嬢さんと御結婚をおさせになることになっているのだが、大臣のほうでは年来の志望が達せられるので二つ返辞というもののだから、この年内に実現されることだろう。宮はその話に気がお進みにならないで、御所の中で放縦な生活をして楽しんでおいでになるから、お上や中宮様の御処置も当を得なかつたわけになるのだね。自家の殿様は決してそんなのじゃない、あまりまじめ過ぎる点で皆が困っているほどのだ。ここへこうたびたびおいでになることだけが驚くべき御執心を一人の方に持つておられると言つてだれも感心していることだ」

とも言つた。こんな話を聞きましたと、その女が他の女房たちの中で語っているのを中の君は聞いて、ふさがり続けた胸がまたその上にもふさがつて、もういよいよ自分から離れておしまいになる方と解釈しなければならぬ、りっぱな夫人をお得になるまでの仮の恋を自分へ運んでおいでになつたにすぎなかつたのであろう、さすがに中納言などへのはばかりで手紙だけは今でも情のあるようなことを書いておよこしになるのであろうと考えられるのであつたが、

恨めしいと人の思うよりも、恥ずかしい自身の置き場がない気がして、しおれて横になつていた。病女王はそれが耳にはいつた時から、いつそうこの世に長くいたいとは思われなくなった。つまりぬ女たちではあるが、その人たちもどんなにこの始末を嘲笑ちやうしやうして思っているかもしれぬと思われる苦しさから、聞こえぬふうをして寝ているのであつた。中の君は物思いをする人の姿態といわれる肱かひなを枕まくらにしたうたた寝をしているのであるが、その姿が可憐かれんで、髪が肩の横にたまつているところなどの美しいのを、病一女王ちやうめいはながめながら、親のいさめ（たらちねの親のいさめしうたた寝云々）の言葉というものがかえすがえす思い出されて悲しくなり、あの世の中でも罪の深い人の墮おちる所へ父君は行つておいではなるまい、たとえここにもせよおいでになる所へ自分を迎えてほしい、こんなに悲しい思**い**ばかりを見ている自分たちを捨ててお置きになつて、父君は夢にさえも現われてきてはくたさらないではないかと思ひ続けて、夕方の空の色がすこくなり、時雨しぐれが降り、木立ちの下を吹き払う風の音を寂しく聞きながら、過去のこと、のちの日のことをはかなんで病床にいる姿には、またもない品よさが備わり、白の衣服を着て、頭は梳すくこともしないのであるが、もつれたところもなくきれいに筋がそろつたまま横に投げやりになつている髪の色に少し青みのできたのも艶えんな趣を添えたと見える。目つき額つきの美しさはすぐれた女の顔というもののよくわかる人に見せたいようであつた。うたた寝していたほうの女王は、荒い風の音に驚かされて起き上がった。山吹やまぶきの色、淡紫つすむいなどの明るい取り合わせの着物は着ていたが顔はまたことさらに美しく、染めたように美しく、花々とした色で、物思いなどは少しも知らぬというようにも見えた。

「お父様を夢に見たのですよ。物思わしそうにして、ちょうどこの辺の所においでになりましたわ」

と言うのを聞いて病女王の心はいつそう悲しくなった。

「お亡かくれになってから、どうかして夢の中でもお逢あいしたいと私はいつも思っているのに少しも出ておいでにならないのですよ」

と言ったあとで、二人は非常に泣いた。このごろは明け暮れ自分が思っているのであるから、ふと出ておいでになることもあったのであるう、どうしても父君のおそばへ行きたい、人の妻にもならず、子なども持たない清い身を持ってあの世へ行きたい、と大姫君は来世のことまでも考えていた。支那しなの昔にあったという反魂香はんこんかうも、恋しい父君のためにほしいとあこがれていた。暗くなってしまったころに兵部卿の宮のお使いが来た。こうした一瞬間は二女王の物思っても休んだはずである。中の君はすぐに読もうともしなかった。

「やっぱりおとなしくおおような態度を見せてお返事を書いておあげなさい。私がこのまま亡くなれば、今以上にあなたは心細い境遇になって、どんな人の媒介役を女房が勤めようとするかもしれないのですからね。私はそれが気がかりで、心の残る気もしますよ。でもこの方が時々でも手紙を送っておいでになるくらいの関心をあなたに持っていらつしやる間は、そんな無茶なことをしようとする女もなかるうと思うと、恨めしいながらもなお頼みにされますよ」

と姫君が言うと、

「先に死ぬことなどをお思いになるのはひどいお姉様。悲しいではありませんか」

中の君はこう言って、いよいよ夜着の中へ深く顔を隠してしまつた。

「自分の命が自分の思うままにはならないのですからね。私はあの時すぐにお父様のあとを追って行きたかったのだけれど、まだこうして生きているのですからね。明日はもう自分と関係のない人生になるかもしれないのに、やはりあとのことで心を苦しめていますのも、だれのために私が尽くしたいと思うからでしょう」

と大姫君は灯を近くへ寄せさせて宮のお手紙を読んだ。いつものようにこまやかな心が書かれ、

「#ここから2字下げ」

ながむるは同じ雲井をいかなればおほづかなさを添ふる時雨ぞ

「#ここで字下げ終わり」

とある。袖を涙で濡らすというようなことがあの方にあるのである。ろつか、男のだれもが言う言葉ではないかと見ながらも怨めしさはまさつていくばかりであった。

世にもまれな美男でいらせられる方が、より多く人に愛されようと艶えんに作つておいでになるお姿に、若い心の惹ひかれていぬわけはない。隔たる日の遠くなればなるほど恋しく宮をお思いするのは中の君であつて、あれほどに、あれほどな誓言までしておいでになつたのであるから、どんなことがあつてもこのままよその人になつておしまいになることはあるまいと思いかえす心が常に横にあつた。お返事を今夜のうちにお届けせねばならぬと使いが急がし立てるために、女房が促すのに負けて、ただ一言だけを中の君は書いた。

「#ここから2字下げ」

あられ降る深山<sup>みやま</sup>の里は朝夕にながむる空もかきくらしつつ

「#ここで字下げ終わり」

それは十月の三十日のことであつた。

逢<sup>あ</sup>わぬ日が一月以上になるではないかと、宮は自責を感じておいでになりながら、今夜こそ今夜こそと期しておいでになつても、障<sup>さわ</sup>りが次から次へと多くてお出かけになることができないうちに、今年の五節<sup>ごせち</sup>は十一月にはいつてすぐになり、御所辺の空気ははなやかなものになつて、それに引かれておいでになるといふのでもなく、わざわざ宇治をお訪<sup>たず</sup>ねになろうとしないのでもなく、日が紛れてたつていく。

この間を宇治のほうではどんなに待ち遠に思ったかしのれない。かりそめの情人をお作りになつてもそんなことで慰められておいでになるわけではなく、宮の恋しく思召<sup>おもほ</sup>す人はただ一人の中の君であつた。左大臣家の姫君との縁組みについて、中宮<sup>ちゅうぐう</sup>も今では御讓歩をあそばして、

「あなたにとつて強大な後援者を結婚で得てお置きになつた上で、そのほかに愛している人があるなら、お迎えになつて重々しく夫人の一人としてお扱いになればよろしいではないか」

と仰せられるようになったが、  
「もうしばらくお待ちください。私に考えがあるのですから」

となおいなみ続けておいでになる兵部卿の宮であつた。かりそめの恋人は作つても、勢いのある正妻などを持つてあの人に苦しい思いはさせたくないと思つておいでになることなどは、宇治へわからぬことであつたから、月日に添えて物思いが加わるばかりであ

る。

薫も宮を自分の観察していたよりも軽薄なお心であった、世間で  
見ているような方ではないとお信じ申して、宇治の女王たちへ  
取りなしていたのが恥ずかしくなり、女のほうを心からかわいそう  
に思つて、あまり宮へ近づいてまいらないようになった。そして山  
莊のほうへは病む女王の容体を聞きにやることを怠らなかつた。

十一月になつて少しよいという報告を薫は得ていて、それがちよ  
うど公私の用の繁多な時であつたため、五、六日見舞いの使いを出  
さずにいたことを急に思い出して、まだいろいろな用のあつたのも  
捨てておいて自身で出かけて行つた。祈禱は恢復するまでとこの人  
から命じてあつたのであつたのに、少し快いようになったからとい  
つて阿闍梨も寺へ歸してあつた。それで山莊のうちはいつそう寂寞  
たるものになつていた。例の弁が出て来て病女王のことを報告した。

「どこがお痛いといつところもございませぬような、御大病とは思  
えぬ御容体でありになりながら、物を少しも召し上がらないので  
ございますよ。だいたい御體質が繊弱でいらつしやいますところへ、  
兵部卿の宮様のことが起こつてまいりましてからは、ひどく物思  
をばかりなさいます方におなりになりました、ちよつとしたお菓子  
をさえも召し上がるうとはなさらなかつたおせいでございますよ、  
御衰弱がひどうございましてね、頼み少ないふうになつておしま  
になりました。私は情けない長命をいたしまして、悲しい目にあ  
いますより前に死にたいと念じているのでございます」

と言ひ終えることもできぬように泣くのが道理に思われた。

「なぜそれをどなたもどなたも私へ知らせてくださらなかつたので

すか。冷泉院れいぜいのほうにも御所のほうにもむやみに御用の多い幾日だったものですから、私のほうの使いも出しかねていた間に、ずいぶん御心配していたのです」

と言つて、この前の病室にすぐ隣った所へはいつて行つた。枕まくらに近い所に坐ざして薫はものを言うのであつたが、声もなくなつたよう  
で姫君の返辞を聞くことができない。

「こんなに重くおなりになるまで、どなたもおしらせくださらなかつたのが恨めしい。私がどんなに御心配しているかが、皆さんに通じなかつたのですか」

と言い、まず御寺みでらの阿闍梨あじやり、それから祈祷きとうに効験のあると言われ  
る僧たちを皆山莊へ薫は招いた。祈祷と読経よみぎことを翌日から始めさせて、  
手つだいの殿上役人、自家の侍たちが多く呼び寄せられ、上下の人  
が集まつて来たので、前日までの心細げな山莊の光景は跡もなく、  
頼もしく見られる家となつた。日が暮れると例の客室へ席を移すこ  
とを女房たちは望み、湯漬ゆじけなどのもてなしをしようとしたのであ  
るが、来ることのおくれた自分は、今はせめて近い所にいて看病が  
したいと薫は言い、南の縁付きの室まは僧の室へやになつていたので、東  
側の部屋へやで、それよりも病床に密接している所に屏風びよぶなどを立てさ  
せてはいつた。これを中の君は迷惑に思つたのであるが、薫と姫君  
との間柄に友情以上のものが結ばれていることと信じている女房た  
ちは、他人としては扱わないのであつた。

初夜から始めさせた法華経ほけきやうを続けて読ませていた。尊い声を持つ  
た僧の十二人のそれを勤めているのが感じよく思われた。灯ひは僧た  
ちのいる南の室まにあつて、内側の暗くなつている病室へ薫はすべり  
入るように行つて、病んだ恋人を見た。老いた女房の二、三人

が付いていた。中の君はそつと物蔭ものかげへ隠れてしまったのであったから、ただ一人床上に横たわっている総角あけまきの病女王のそばへ寄って薫は、

「どうしてあなたは声だけでも聞かせてくださらないのですか」と言つて、手を取つた。

「心ではあなたのおいでになつたことがわかつていながら、ものを言うのが苦しいものですから失礼いたしました。しばらくおいでにならないものですから、もうお目にかかれなまままで死んで行くのかと思つていました」

息よりも低い声で病者はこう言つた。

「あなたにさえ待たれるほど長く出て来ませんでしたね、私は」  
しゃくり上げて薫は泣いた。この人の頬ほおに触れる髪の毛が熱で少し熱くなつていた。

「あなたはなんとという罪な性格を持つておいでになつて、人をお悲しませになつたのでしよう。その最後にこんな病氣におなりになつた」

耳に口を押し当てていろいろと薫が言つと、姫君はうるさくも恥ずかしくも思つて、袖そでで顔をふさいでしまった。平生よりもなおなよなよとした姿になつて横たわつているのを見ながら、この人を死なせたらどんな気持ちができるであろうと胸も押しつぶされたように薫はなつていた。

「毎日の御一介抱かいほうが、御心配といつしよになつてたいへんだつたでしょう。今夜だけでもゆつくりとお休みなさい。私がお付きしますから」

見えぬ蔭にいる中の君に薫がこう言つと、不安心には思いながら

も、何か直接に話したいことがあるのであろうと思つて、若い女王にょおうは少し遠くへ行つた。真向まっこううへ顔を持つてくるのでなくても、近く寄り添つて来る薫に、大姫君は羞恥しゆうぢを覚えるのであつたが、これだけの宿縁はあつたのであろうと思ひ、危険な線は踏み越えようとしなかつた同情の深さを、今一人の男性に比べて思うと、一種の愛はわく姫君であつた。死んだあとの思い出にも気強く、思いやりのない女には思われまいとして、かたわらの人を押しやろうとはしなかつた。

一夜じゆうかたわらにいて、時々は湯なども薫は勧めるのであつたが、少しもそれは聞き入れなかつた。悲しいことである、この命をどうして引きとめることができるであらうと薫は思い悩むのであつた。不断経を読む僧が夜明けごろに人の代わる時しばらく前の人と同音に唱える経声が尊く聞こえた。阿闍梨あじゃりも夜居よいの護持僧を勤めていて、少し居眠りをしたあとでさめて、陀羅尼だらにを読み出したのが、老いたしわがれ声ではあつたが老巧者らしく頼もしく聞かれた。

「今夜の御様子はいかがでございますか」  
などと阿闍梨は薫に問うたついでに、

「宮様はどんな所においてになりました。必ずもう清浄な世界においてになると私は思つていのですが、先日せんじつの夢にお見上げすることができまして、それはまだ俗のお姿をしていられまして、人生を深くいとわしい所と信じていたから、執着の残ることは何もなかつたのだが、少し心配に思われる点があつて、今しばらくの間志す所へも行きつかずにいるのが残念だ。こうした私の気持ちを救うような方法を講じてくれとはつきりと仰せられたのですが、そうした場合に速く何をしてよろしいか私にはよい考えが出ないものですか

ら、ともかくもできますことと思ひまして、修行の弟子五、六人にある念仏を続けさせております。それからまた気づきまして常不輕の行ないに弟子を歩かせております」

こんなことを言うのを聞いて薫は非常に泣いた。父君の成仏の道の妨げをさえしているかと病女王もそれを聞いて、そのまま息も絶えんばかりに悲しんだ。ぜひとも父君がまだ冥府の道をさまよつておいでになるうちに自分も行つて、同じ所へまいりたいと思うのであつた。阿闍梨は多く語らずに座を立てて行つた。

この常不輕の行はこの辺の村々をはじめとして、京の町々にまでもまわつて家々の門に額を突く行であつて、寒い夜明けの風を避けるために、師の阿闍梨のまいっている山荘へはいり、中門の所へすわつて回向の言葉を述べているその末段に言われることが、故人の遺族の身にしみじみとしむのであつた。客である中納言も仏に帰依する人であつたから、これも泣きながら聞いていた。

中の君が姉君を気づかわしく思うあまりに病床に近く来て、奥のほうの几帳の蔭に来てゐる気配を薫は知り、居すまいを正して、「不輕の声をどうお聞きになりましたか、おごそかな宗派のほうではしないことですが尊いものですね」

と言ひ、また、

「#ここから2字下げ」

霜さゆる汀の千鳥うちわびて鳴く音悲しき朝ぼらけかな

「#ここで字下げ終わり」

これをただ言葉のようにして言つた。

恨めしい恋人に似たところのある人とは思うが返辞の声は出しかねて、弁に代わらせた。

「#ここから2字下げ」

あかつきの霜うち払ひ鳴く千鳥もの思ふ人の心をや知る

「#ここで字下げ終わり」

あまりに似合わしくない代わり役であったが、つたなくもない声づかいで弁はこの役を勤めた。こうした言葉の贈答にも、遠慮深くはありながらなつかしい才気のおいの覚えられるこの女王とも、姉女王を死が奪ったあとではよそよそになってしまわねばならぬではないか、何もかも失うことになればどんな気がするであろうと薫は恐ろしいことのようにさえ思った。阿闍梨の夢に八の宮が現われておいでになったことを思っても、このいたましい二人の女王があの世からお気がかりにお見えになることかもしれぬと思われる薫は、山の御寺へも誦經の使いを出し、そのほかの所々へも誦經をさせる使いをすぐに立てた。宮廷のほうへも、私邸のほうへもお暇を乞い、神々への祭り、祓までも隙なくさせて姫君の快癒のみ待つ薫であったが、見えぬ罪により得ている病ではないのであったから、効験は現われてこなかった。病者自身が、生かしてほしいと仏に願っておればともかくであるが、女王にすれば、病になったのを幸いとして死にたいと念じていることであるから、祈祷の効目もないわけである。死ぬほうがよい、中納言がこうしてつききりになっていて介抱をされるのでは、癒ったあとの自分はその妻になるよりほかの道はない、そうかといって、今見る熱愛とのちの日の愛情とが変わり、

自分も恨むことになり、煩悶はんもんが絶えなくなるのはいとわしい。もしこの病で死ぬことができなかった場合には、病身であることに託して尼になろう、そうしてこそ互いの愛は永久に保たれることになるのであるから、ぜひそうしなければならぬと姫君は深く思うようになって、死ぬにしても、生きるにしても出家のことはぜひ実行したいと考えるのであるが、そんな賢げに聞こえることは薫に言い出されなくて、中の君に、

「私の病気は癒るのでないような気がしますからね、仏のお弟子でしになることによつて、命の助かる例もあると言いますから、あなたからそのことを阿闍梨に頼んでください」

こう言つてみた。皆が泣いて、

「とんでもない仰せでございます。あんなに御心配をしていらつしやいます中納言様がどれほど御落胆あそばすかしれません」

だれもこんなことを言つて、唯一の庇護者ひごしゃである薫かおるにこの望みを取り次ごうとしないのを病女王は残念に思つていた。

女王の病のために薫が宇治に滞在していることを、それからそれへと話に聞き、慰問にわざわざ来る人もあつた。深く愛している様子を察している部下の人、家職の人たちはいろいろの祈祷を依頼しにまわるのに狂奔きんぱんしていた。

今日は五節ごせちの当日であると薫は京を思いやつていた。風がひどくなり、雪もあわただしく降り荒れていた。京の中の天気はこんなでもあるまいかと切実に心細さを感じていた薫は、この人と夫婦になれずに終わるのであるうかと考えられる点に、運命の恨めしさはあつたが、そんなことは今さら思うべきでない、なつかしい可憐かれんなふうで、ただしばらくでも以前のように思うことの言い合える時があ

ればいいのであるがと物思わしくしていた。明るくならないままで日が暮れた。

「#ここから2字下げ」

かきくもり日かげも見えぬ奥山に心をくらすところにもあるかな

「#ここで字下げ終わり」

薫の歌である。この人のいてくれるのをだれも力に頼んでいた。

いつもの近い席に薫がいる時に、几帳きちようなどを風が乱暴に吹き上げるため中の君は向こうのほうへはいった。老いた女房などもきまり悪がつて隠れてしまった間に、近々と病床へ薫は寄つて、

「どんな御気分ですか、私が精神を集中して快くおなりになるのを祈かっているのに、その効かいがなくて、もう声すら聞かせていただけなくなつたのは悲しいことじゃありませんか。私をあとに残して行つておしまいになつたらどんなに恨めしいでしょう」

泣く泣くこう言った。もう意識もおぼろになつたようでありながら女王は薫のけはいを知つて袖そでで顔をよく隠かくしていた。

「少しでもよろしい間があれば、あなたにお話し申したいこともありますが、何をしようとしても消えていくようにばかりなさるのは悲しゅうございます」

薫を深く憐あわれむふうのあるのを知つて、いよいよ男の涙はとめどなく流れるのであるが、周囲で頼み少なく思つていとは知らせたくないと思つて慎つつしもうとしても、泣く声の立つのをどうしようもなかった。自分とはどんな宿命で、心の限り愛していながら、恨めしい思いを多く味わわせられるだけでこの人と別れねばならぬのである

う、少し悪い感じでも与えられれば、それによってせめても失う者の苦しみをなだめることになるであろう、と思つて見つめる薫であったが、いよいよ可憐で、美しい点ばかりが見いだされる。腕なども細く細く細くなって影のようにはかなくは見えながらも色合いが変わらず、白く美しくなよなよとして、白い服の柔らかなのを身につけ夜着は少し下へ押しやってある。それはちょうど中に胴というもののない雛人形を寝かせたようなのである。髪は多すぎるとは思われぬほどの量で床の上にあつた。枕から下がったあたりがつやつやと美しいのを見ても、この人がどうなつてしまふのであるう、助かりそうも見えぬではないかと限りなく惜しまれた。長く病臥していて何のつくろいもしていない人が、盛装して氣どつた美人というものよりはるかにすぐれていて、見ているうちに魂も、この人と合致するために自分を離れて行くように思われた。

「あなたがいよいよ私を捨ててお行きになることになったら、私も生きていませんよ。けれど、人の命は思うようになるものでなく、生きていねばならぬことになりましたら、私は深い山へはいつてしまおうと思います。ただその際にお妹様を心細い状態であとへお残しするだけが苦痛に思われます」

中納言は少しでもものを言わせたいために、病者が最も関心を持つはずの人のことを言つてみると、姫君は顔を隠していた袖を少し引き直して、

「私はこうして短命で終わる予感があつたものですから、あなたの御好意を解しないように思われますのが苦しくて、残つていく人を私の代わりと思つてくださるようとそう願つていたのですが、あなたがそのとおりにしてくださいましたら、どんなに安心だったか

と思ひましてね、それだけが心残りで死なれない氣もいたします」と言つた。

「こんなふうに悲しい思ひばかりをしなければならぬのが私の宿命だつたのでしよう。私はあなた以外のだれとも夫婦になる氣は持つてなかつたものですから、あなたの好意にもそむいたわけなのです。今さら残念であの方がお氣の毒でなりません。しかし御心配をなさることはありませんよ。あの方のことは」

などともなだめていた薫は、姫君が苦しそうなふうであるのを見て、修法の僧などを近くへ呼び入れさせ、効験をよく現わす人々に加持をさせた。そして自身でも念じ入っていた。人生をことさらいとわしくなっている薫でないために、道へ深く入れようとされる仏などが、今こうした大きな悲しみをさせるのではなかるうか。見ているうちに何かの植物が枯れていくように総角あげまきの姫君の死んだのは悲しいことであつた。引きとめることもできず、足摺あしずりしたいほどに薫は思ひ、人が何と想うともはばかる氣はなくなつていた。臨終と見て中の君が自分もともに死にたいとはげしい悲嘆にくれたのも道理である。涙におぼれている女王を、例の忠告好きの女房たちは、こんな場合に肉親がそばで歎くのはよろしくないことになつていると言つて、無理に他の室へ伴つて行つた。

源中納言は死んだのを見ていても、これは事実でないであろう、夢ではないかと思つて、台の灯ひを高く掲げて近くへ寄せ、恋人をながめるのであつたが、少し袖そでで隠している顔もただ眠っているようで、変わったと思われるところもなく美しく横たわつている姫君を、このままにして乾燥した玉虫の骸からのように永久に自分から離さずに置く方法があればよいと、こんなことも思つた。遺骸いがいとして始末す

るために人が髪を直した時に、さつと芳香が立った。それはなつかしい生きていた日のままのにおいであった。どの点でこの人に欠点があるとしてのけにくい執着を除けばいいのであるう、あまりにも完全な女性であった。この人の死が自分を信仰へ導こうとする仏の方便であるならば、恐怖もされるような、悲しみも忘れられるほど変相を見せられたいと仏を念じているのであるが、悲しみはますます深まるばかりであったから、せめて早く煙にすることをしようと思ひ、葬送の儀式のことなどを命じてさせるのもまた苦しいことであつた。空を歩くような気持ちを覚えて薫は葬場へ行つたのであるが、火葬の煙さえも多くは立たなかつたのにはかなさをさらに感じて山莊へ歸つた。

忌籠りきこもする僧の数も多くて、心細さは少し慰むはずであつたが、中の君はだれにもだれにも先立たれた不幸な女として人から見られるのすら恥ずかしいと思ひ沈んでいて、この人も生きた姫君とは思われないほどであつた。兵部卿ひょうぶけいの宮からも御慰問の品々が贈られたのであるが、恨めしいと思ひ込んだ姉君の気持ちを、ついに緩和させずじまいになされた方だと思つと、中の君はお受けしてうれしいとは思わなかつた。

中納言は人生の悲しみを切実に味わつた今度のことを機会に、出家したいと思う心はあるのであるが、三条の母宮の思召しもはばかられ、それとこの中の君の境遇の心細さは見捨てられないものと思われて煩悶はんもんをしながら、故一女王いちにおうの言つたとおりに、短命で死ぬ人の代わりに中の君を娶めとるのもよかつた、自分の身を分けた同じものに思えと言われても、恋の相手を変える氣にその当時の自分はなれなかつた、こんな孤独の人にして物思いをさせるのであつたなら、

故人を忍ぶ相手として二人で語り合う身になっておればよかつたのであるとも思った。かりそめにも京へ出ることをせず、物思いをしてこもっていることを知って、世間の人も故人を薫が深く愛していたことを知り、宮中をはじめとして諸方面からの慰問の使いが山荘を多く訪れた。

女王の歿後の日はずんずんとたつていく。七日七日の法要にも尊いことを多くして志の深い弔いを故人のために怠らぬ源中納言も、妻を失った良人でないため喪服は着けることのできないため、ことに大姫君を尊敬して仕えた女房らの濃い墨染めの袖を見ても、

「#ここから2字下げ」

くれなゐに落つる涙もかひなきはかたみの色を染めぬなりけり

「#ここで字下げ終わり」

こんなことがつぶやかれ、浅い紅の下の単衣の袖を涙に濡らしているこの人は、あくまで艶できれいであつた。女房たちがのぞきながら、

「姫君のお亡れになつた悲しみは別として、この殿様がこちらにずっとおいでくださいますことに私たちはもう馴らされていて、忌が済んでお帰りになることを思うと、お別れが惜しくて悲しいではありませんか。なんという宿命でしょう。こんなに真心の深い方を二方とも御冷淡になすつて、御縁をお結びにならなかつたとはね」とも言つて泣き合っていた。

「こちらの姫君をあの方のお形見とみなして、今後はいろいろ昔の話を申し上げ、また承りもしたいと思うのです。他人のように思召

さないでください」

と薫は中の君へ言わせたが、すべての点で自分は薄命な女であると思う心から恥じられて、中の君はまだ話し合おうとはしなかった。この女王のほうはあざやかな美人で、娘らしいところと、けだか気高いところは多分に持っていたが、なつかしい柔らかなじやうじやう嫺々たる美というものはは故人に劣っていると事に触れて薫は思った。

雪の暗く降り暮らした日、終日物思いをしていた薫は、世人が愛しにくいものに言う十二月の月の冴さえてかかった空を、みす御簾を巻き上げてながめていると、みでら御寺の鐘の音が今日も暮れたとかすかに響いてきた。

「#ここから2字下げ」

おくれじと空行く月を慕ふかな終つひひにすむべきこの世ならねば

「#ここで字下げ終わり」

風がはげしくなったので、揚げ戸を皆おろさせるのであったが、四辺の山影をうつした宇治川の汀みぎわの氷に宿っている月が美しく見えた。京の家の作りみがいだ庭にもこんな趣きは見がたいものであるがと薫は思った。病体にもせよあの人が生きていてくれたならば、こんな景色けしきも共にながめて語ることができたであろうと思うと、悲しみが胸から外へあふれ出すような気がした。

「#ここから2字下げ」

恋ひわびて死ぬる薬のゆかしきに雪の山には跡けを消なまし

「#ここで字下げ終わり」

死を求めぬ雪山童子が鬼に教えられた偈の文も得たい、それを唱えてこの川へ身を投げ、亡き人に逢おうと薫が思ったというのは、あまりに未練な求道者というべきである。

中納言は女房たちを皆そばへ呼び集めて、話などをさせて聞いていた。様子のりっぱであることと、親切な性情を知っている女たちであるから、その中の若い人らは身にしむほどの思いで好意を持った。老いた人たちは薫を見ることによっても故人が惜しまれてならなかった。

「御病気の重くなりましたのも、兵部卿の宮様のお態度に失望をなさいまして、世間体も恥ずかしいとお思ひになりますのを、さすがに中の君様には、それほどにまで思召すとはお隠しになりました、ただお一人心中でだけ世の中を悲観し続けていらっしやいますうちに、お食欲などもまるでなくなっておしまいになりました、御衰弱に御衰弱が重なってまいったようでございます。表面には物思いをあそばすふうをお見せにならずに、深く胸の中で悩んでいらっしたのでございます。それに中の君様に結婚をおさせになりましたことは父宮様の御遺戒にもそむいたことであつたと、いつもそれをお心の苦になさいましたのでございますよ」

こんなことを言つて、いつの時、いつかこうお言ひになつたことがあるなどと大姫君のことを語つて、だれもだれも際限なく泣いた。自分の計らいが原因して苦しい物思いを故人にさせたと、あやまちを取り返しうるものなら取り返したく思つて薫は聞いたのであつて、恋人の死そのものだけでなく、すべての人生が恨めしく、念誦を哀れなふうにしていて、眠りについたかと思うとまたすぐに目ざめて

いた。

この早朝の雪の気の寒い時に、人声が多く聞こえてきて、馬の脚音さえもした。こうした未明に雪を分けてだれも山荘へ近づかずがないと僧たちもそれを聞いて思っていると、それは目だため狩衣姿で兵部卿の宮が訪ねておいでになったのであった。ひどく衣服を濡らしてはいつておいでになった。妻戸をおたたきになる音に、宮でおありになるうことを想像した薫は、蔭になったほうの室へひそかにはいつていた。まだ女王の忌の日が残っているのであるが、心ばかりに堪えぬように思召して、一晚じゅう雪に吹き迷わされになりながらここへ宮はお着きになったのである。こんな悪天候をもともあそばさなかった御訪問であつたから、恨めしさも紛らされていつてもいいのであろうが、中の君は違つてお話をする気にはなれなかつた。宮の御誠意のなさに姉を煩悶させ続けていたころの恥ずかしかつたこと、その気持ち直させることもしていただけなかつたのであるから今になつて真心をつくしてくださることになつても、もうおそい、かいがないと深く中の君は思うのであつて、女房のだれもが道理を説いて勧めた結果、ようやく物越しでお逢いすることになり、宮は今までの怠りのお言いわけをあそばすのであるが、ただじつと聞き入っているばかりの中の君で、この人さえも、あるかないかのような心細い命の人と思われ、続いてどうかなるのではあるまいかと思われる気配も見えるのを、宮はお悲しみになつて、今日は何事も犠牲にしてよいという気におなりになりお帰りにならないことになつた。物越しなどでなく、直接に逢いたいと宮はいろいろお訴えになるのであつたが、

「もう少し人ごこちがするようになっていたのでしたら」

と言い、女王はいなみ続けていた。

このことを薫も聞いて、中の君へ取り次がすのに都合のよい女房を呼んで、

「こちらの真心に対してあさはかにも見える態度を、初めもその後もおとりになった宮を不快にお思いになるのはもつとですが、今少し情状を酌量しやくりょうになって、反感をお起こしにならぬ程度にお扱いになるがよろしい。今まで御経験のなかつたためにお苦しいでしょうが」

などと忠告をさせた。それを聞いた中の君は薫の思うことも恥ずかしくて、いよいよ宮のお話にお答えを申し上げる気になれなくなつた。

「あなたはどうしてもこんなに気が強いのでしょうか。前にあんなに私の心持ちも、周囲の事情もお話ししておいたではありませんか。それを皆お忘れになつたのですか」

とお言いになり、宮は一日をお歎き暮らしになつた。夜になるといつそう天气が悪くなり、ますます吹きつゝのる風の音を聞きながら、寂しい旅寝の床に歎き続けておいでになるのもさすがにおいたましく思われて、女王はまた物越しでお話を聞くことにした。無数の神を証あかしに立てて、今からの変わりない愛をお語りになるのを、女王は、どうしてこんなに女へお言いになることに馴なれておいでになるのであろうといやな気もするのであるが、遠く離れていてうとましく思うのとは違つて、すぐれた御容姿の方が、自分のために悲しんでおいでになるのを見ては、心も動かすにはいないのであつた。ただ聞くばかりであつたが、

「#ここから2字下げ」

きしかたを思ひいづるもはかなきを行く末かけて何頼むらん

「#ここで字下げ終わり」

と、はじめてほのかな声で言った。なお飽き足らず思召す宮であった。

「#ここから1字下げ」

「行く末を短きものと思ひなば目の前にだにそむかざらなん

「#ここで字下げ終わり」

すべてはかない人生にいて、人をお憎みになるような罪はお作りにならないがいいでしょう」

ともお言いになり、いろいろとおなだめになったが、

「私は気分もよろしくないのをごさいますから」

中の君はこう言つて奥へはいつてしまった。人目も恥ずかしいように思召し、そのまま歎息を続けて宮は夜をお明かしになった。女の恨むのも道理なほどの途絶えを作つたのは自分であるが、あまりに無情な扱い方であると恨めしい涙の落ちてきた時に、ましてそのころの彼女はどれほどに煩悶して涙の寒さを感じたことであろうと、お思われになつて、これが過去をお願みさせることになった。

中納言が主人がたの座敷に住んでいて、どの女房をも気安いふう呼び使い、みずから指図をしながら宮へ朝食を差し上げたりさせるのを御覧になつて、恋人を失つたあとのこの人の生活を気の毒にもお思いになり、趣のあることとも御覧になつた。顔色もひどく青

白くなり、瘦せてぼんやりとしたところも見えるほど物思いにやつれているふうも心苦しく宮は思召して、真心から御慰問の言葉をお告げになった。恋人の死の前後の悲しい心の動揺を今さら言いたしなくても効のないことではあるが、だれよりもこの方に聞いていただきたい自分であることを薫は知りながら、言いだせば自分の弱さがあるらわになり、一つのことを思いつめる頑固男とお思われることがはばかられて、言葉少なにしていた。日々泣き暮らしている人であったから、顔変わりがしたのも見苦しくはなくて、いよいよ清楚で艶なのを宮は御覧になり、女であれば、たとえ中の君などでも必ずこの人に心が移るであろうと、御自身の多情なお心からそんな想像もされるようになった宮は、なんとなくその点がお気がかりになり、どうかしてはるかな途を通い歩くという譏りも避け、中の君の恨みを除かせもするために京へ移したいとお思いになるようになった。

こんなふう恋人の心は容易に打ち解けるとは見えないし、今日をここにすることは御所でも悪く思召すことであろうこともお心に上るのであったから、宮はお帰りになろうとした。

真心を尽くして恋人の心を動かそうと宮はお努めになったのであるが、相手の冷淡であることは苦しいものであると、この一点をお思い知らせようとして、この朝も何の言葉も送らずに中の君は宮をお帰ししたのであった。

年末になればこうした山里でなくても晴れる日は少ないのであるから、まして宇治は荒れ日和でない日もなく雪が降り積もる中に、物思いをしながらも暮らしている薫は、いつまでも続く夢を見ているようであった。総角の姫君の四十九日の法会も盛んに薫の手で行なわれた。

このまま新年までも閉じこもっていることはできぬ、御母宮を初めとして自分を長くお待ちになつてゐる所々があるのであるからと思ひ、いよいよ引き上げようとする薫はまた新たな深い悲しみを覚えた。ずっとこの人が来て住んでいたために、出入りする人の多かつた忌中に続いた生活が跡かたもなく消えていくことを寂しがる人々は、姫君の死の当時にもまさつて悲しがつた。以前間をおいて訪ねて来たころの交情にもまさり、長く居ついていた忌中に仕え馴れた薫の情味の深さ、精神的なことから物質的なことにまで及ぶ思いやりの多いこの人を今日かぎりに送り出すのかと女房たちは歎きにおぼれていた。

兵部卿の宮からは、

「#ここから1字下げ」

お話したように、そちらへ出向くことにいろいろ困難なことがあるため、私は心を苦しめておりましたが、ようやくあなたを近日京へ迎える方法が見つかりました。

「#ここで字下げ終わり」

というお手紙が中の君へあつた。

中宮が宇治の女王との関係をお知りになつて、その姉君であつた恋人を失つた中納言もあれほどの悲しみを見せていることを思うと、並み並みの情人としてはだれも思われなすぐれた女性なのである。兵部卿の宮のお心持ちに御同情をあそばして、二条の院の西の対へ迎えて時々通うようにとそつと仰せがあつたのである。女一の宮に高貴な侍女をお付けになりたいと思召す心から、それに擬しておいでになるのではあるまいかと兵部卿の宮はお思ひになりながらも、近くへその人を置いて、常にお逢いになることのできるの

うれしいことであると思召して、この話を薫にもあそばされた。三条の宮を落成させて大姫君を迎えようとしていた自分であるが、その人の形見にせめてわが家の人にしておきたかった中の君であったと、このことでまた心細くなる気もする薫であった。宮の疑っておいでになるような感情はまったく捨てて、その人の保護者は自分のほかにないと、兄めいた義務感を持っているのであった。

底本：「全訳源氏物語 下巻」角川文庫、角川書店

1972（昭和47）年2月25日改版初版発行

1995（平成7）年5月30日40版発行

このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月10日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2004年5月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

早蕨

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）早蕨さわらびの

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）日の光—林藪やぶし

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」早蕨さわらびの歌を法師す君に似ずよき言葉を

「#地から3字上げ」ば知らぬめでたさ （晶子）

「日の光—林藪やぶしわかねばいそのかみ古ふるりにし里も花は咲きけり」  
と言われる春であったから、山荘のほとりのおいやかになった光  
を見ても、宇治の中の君は、どうして自分は今まで生きていられた  
のであろうと、現在を夢のようにばかり思われた。四季時々の花の

色も鳥の声も、明け暮れ共に見、共に聞き、それによって歌を作りかわすことをし、人生の心細さも苦しさも話し合うことで慰めを得ていた。それ以外に何の楽しみが自分にあつたであろう、美しいとすることも、身にしむことも語って自身の感情を解してくれる姉君を、そのかたわらから死に奪われた人であつたから、暗い気持ちをどうすることもできず、父宮のお亡れになつた時の悲しみにやまざつた悲しさ恋しさに、日のたつのも悟らぬほど歎き続けているが、命数には定まつたものがあつて、死にたくても死なれぬのも人生の悲哀の一つであると見られた。

御寺みでらの阿闍梨あじやりの所から、

「#ここから1字下げ」

年が変わりましてのちどんな御様子でおいでになりますか。御仏みほとけへのお祈りは始終いたしております。今になりましたはあなた様お一方のために幸福であれと念じ続けるばかりです。

「#ここで字下げ終わり」

などという手紙を添え、藤わらびや土筆つくしを風流な籠かごに入れ、その説明としては、

「#ここから1字下げ」

これは童子どもが山に捜して御仏にささげたものです、初物です。

「#ここで字下げ終わり」

とも書かれてあつた。悪筆で次の歌などは大形おおぎように一字ずつ離して書いてある。

「#ここから2字下げ」

君にとてあまたの年をつみしかば常を忘れぬ初藤なり

「#ここから1字下げ」

女王様に読んでお聞かせ申してください。

「#ここで字下げ終わり」

と女房あてにしてあつた。一所懸命に考え出した歌であろうと想像されて、つたない中に言つてある心を身にしむように中の君は思い、筆任せに、それほど深くお思いにならぬことであろうと思われ、筆任せに、多くの美しい言葉で飾つてお送りになる方の文よりもこのほうに心の引かれる気がして、涙さえこぼれてきたために、返事を自身で書いた。

「#ここから2字下げ」

この春はたれにか見せんなき人のかたみに摘める峰のさわらび

「#ここで字下げ終わり」

使いには纏頭が出された。

盛りの美しさを備えた人が、いろいろな物思いのために少し面瘦せのしたのもかえつて貴女らしい艶な趣の添つたように見え、総角の姫君にもよく似ていた。いっしょにいたころはどちらにも特殊な美しさがあつて、似ているように見えなかつたのであるが、今ではうかとしておれば大姫君であるという錯覚が起こるのを、遺憾だけでも永くとどめてながめていられるものだったならばと、朝夕に恋しがつていた源中納言の夫人になつておいでになればよかつたものを、運命のそれを許さなかつたのが惜しいと思ひ、女房たちは残念があつていた。薫の家のほうから始終出て来る人があつてそちらのこ

ともこちらの様子も双方でよく知っていた。まだ総角の姫君に死別した悲しみに茫然ぼうぜんとなっていて、涙目の人になっていると中納言のことの言われているのを聞いて中の君は、中納言の姉君に持っていた愛は浅薄なものではなかったと、いつそう今になって身にしむようにその人の恋が思われるのであった。

兵部卿ひょうぶぎょうの宮は宇治へお通いになることが近ごろになっていつそう困難になり、不可能にさえなつたために、中の君を京へ迎えようと決心をあそばした。

御所の内宴などがあつて騒がしいころを過ごしてから薫は、心一つに納めかねるような愁うれいも、その他のだれに話すことができようと思い、匂宮におみやの御殿をお訪たずねした。しめやかな早春の夕べの空の見える所に宮は出ておいでになつた。十三一絃げんをお弾ひきになりながら、例のお好きな梅の香を愛してもいられたのである。薫はその梅の花の下の枝を少し折つて、手に持ちながらはいつて来た。艶えんな感じが覚えられることであつた。宮はこの早春の夕べにふさわしい客をうれしくお思いになり、

「#ここから2字下げ」

折る人のところに通ふ花なれや色にはいはず下にはほへる

「#ここで字下げ終わり」

とお言いになると、

「#ここから1字下げ」

「見る人にかごと寄せける花の枝を心してこそ折るべかりけれ

「#ここで字下げ終わり」

私が困ります」

薫も冗談じょうだんにしてこんなことを申し上げた。並べて見るに最もよく似合った若い貴人と見えた。しんみりとした話になっていつて、どうしているかと宇治のことをまず宮はお聞きになった。薫も恋人に死なれた悲しみを言い、初めから今までのその人に関する物思いの連続を、そのおりあのおりと、身にしむようにも、美しくも泣きながら、笑いながらというように話し出したのを、聞いておいでになって、繊細な感情に富んでおいでになり、涙もろい癖の宮は、他人のことながらも、袖そでを絞るほどの涙をお流しになって、熱心な受け答えをあそばされるのであった。天もまた哀愁の人に同情するかのように、空を霞かすみがぼんやりこめて、夜になってからは烈はげしく風も吹き出し、まだ冬らしい寒さが寄よってきて灯ひも消えた。「春の夜の闇やみはあやなし」というようなたよりなさではあったが、話す人、聞く人もそれを障さわりにしてそのままにやむ話ではなかった。どんなに語っても中納言は心の晴れることを覚えないままで深更になった。世の中にまたたぐいもないような精神的愛に止まったという薫の話を、必ずしも終わりまでそうではなかったであろうと宮のお思いになるのも、御自身から割り出してお考えになるからであろう。そうではあるが他の点では御想像が穎敏えいびんで、薫の気持ちをよく理解され、悲しみも慰めるに足るほどな言葉をお出しになった。一つは御容姿のお美しさが心をよく賺すかして、結ばれの解けぬ歎きを少しづつ語っていかれるのは非常に気の楽になることのように薫に思われたのである。

宮も近日に中の君を京へお迎えになろうとすることで中納言へ御相談をあそばされると、

「非常にけつこうなことでございます。あのままになりましたは私の責任になりますことと苦しく思っております。昔の人の名残なごりの家も、あの女王があなた様のものではあれば、今では私のお訪ねたずして行く名目に困っていたのでした。しかしただのお世話は十分に私がせねばならぬ方だと思っておりますが、そのことで御感情を害するようないことはしないでしょうか」

と薫は言い、なお故人が以前に、自分と同じものと思えと言い、中の君と自分の結婚を望んだことも少しお話ししたが、あの中なかの君と兄妹きょうだいのような心で語っていた寢室ねむりの一夜のことには触れなかった。心の中では、こんなにも悲しまれる日の心の慰めとして妻に得ておくべきであって、宮がなされようとするがごとく京へその人を迎えることもできたのであったと、残念な気持ちがよく深くなっていくのである。今はもう思っても何の効かいもないことを、しかも始終それを思いつめておれば、なしてならぬことをなしたい心も出てくるであろう、それは宮の御ため、中の君、自分のためにも人笑われなことに違ちがいがないところこの人は反省した。それにしても中の君が京へ移ることになったの仕度したくその他について、自分のほかにだれも力になる人はないのであると薫は思い、手もとでいろいろな品の新調などをさせていた。

宇治でもきれいな若女房、童女などを捜して雇い入れ、女房たちは幸福感に浸っているのであるが、いよいよ父宮の遺愛の宇治の山莊を離れて行くことになるのかと中の君は心細くて歎かればかりする、そうかといって寂しさに堪えてここに独居する決心もできそう

になかった。宮から熱愛はしていながらもこのままでは自然に遠い仲になっていくかもしれぬのをどう思っているかと恨んでおよこしになるのも少しお道理に思われるところもあつたので、どうすればよいかとばかり煩悶する中の君であつた。二月になつたらすぐということであつたから、近づくにしたがい咲く花の蕾も大きくふくらんでくるのを見ては、春の花のすべてを見ずに行くことが心残りに思われ、帰雁のように霞の山を捨てて行く先は、自身の家でもないことが不安で、宮の愛が永久に変わらぬものと見なされぬ心から寂しい未来も考えられてひそかに思い悩んでいるのであつた。

姉の服喪の期間は三月であつて、除服の禊を行なうことになつているのも飽き足らぬことに中の君は思った。母夫人とは顔も知らぬほどの縁であつたから、恋しいとは思ひようもなかつたが、そのかわりとして子の服喪を姉のためにしたい心であつたが、これは定まつたことであつてにはならなかつた。禊の日の女王の車、前駆を勤める人々、守刀などが薫のほうから送られた。

「#ここから2字下げ」

はかなしや霞のころもたちしまに花の紐とく折も来にけり

「#ここで字下げ終わり」

添えられたこの歌のように、春の花のいろいろに似た衣服も贈られたのであつた。京へ移って行った日に入り用な纏頭に使う品、それらもあまり大形には見せずこまごまと気をつけてそろえて届けられたのである。何かのおりには親身な志を見せる薫を喜んで、女房たちは、

「こんなにまでは御兄弟だつてなさるものではございませんよ」

などと中の君に教えるのであった。こうした老いた女の心には物質的の補助ほどありがたいものはないと深く思われるので、自然これを女王にょおうに知らせようと努めるのである。若い女房たちは時々来る薫かおるに親しみを持っていて、

「いよいよ姫君がほかの方の所へ行っておしまひになつては、どんなにあの方様が恋しく思召おぼしめすことでしょう」

と同情していた。

薫かおる自身は山荘の人の京へ立つのが明日という日の早朝たすに訪ねて来た。例の客室にはいつていて、月日が自然に恋人と自分を近づけていき、妻とした大姫君を、今度の中の君のようにして京へ迎えることを、自分のほうが先に期していたのであったと思い、大姫君の生きていたころの様子、話した心を思い出して、絶対に自分を避けようとはせず、もつてのほかなどと自分をとがめるようなことはなかつたのに、自分の気弱さからついに友情以上のものをあの人にいかせずに終わったと考えると、胸が痛くさえなるほどに残念であった。父宮の喪中にここから仏間にいるのをのぞいて見た北の襖からかみ子の穴も恋しく思い出されて、寄つて行つて見たが、中の室へやは戸が皆おろしてあつて暗いために何も見えない。女房も薫の来たことによつて昔を思い出して泣いていた。中の君はましてとめどもなく流れる涙のために茫ぼうとなつて横たわっていた。

「何うこのできませんでした間に、何をどうしたということはありませんが、絶えぬ思いの続きました一端でもお話をいたして心の慰めにさせていたただきたいと思ひます。例のように他人らしくお扱あつかいにならないでください。いよいよ今と昔の相違を深く覚えること

になつて悲しいでしょうから」

と薫から中の君へ取り次がせてきた。

「失礼だとは思われたくはないけれど、私は今気分も普通でなくて、何だか苦しいのだから、いつそうそんなことでわからぬお返辞を申し上げたりすることになつてはならないと御遠慮がされる」

と言ひ、中の君は気の進まぬふうであつたが、御好意に対してそれではと女房らに諫められて、中の襖子の口の所で物越しの対談をすることにした。気品よく艶で、今度はまた以前よりもひときわまさつたと女房たちの目も驚くほど美しさがあつて、だれにもない清楚な身のとりなしの備わつてゐる薫は、これ以上の男がこの世にはあるまいと見えた。中の君はこの人に亡き姉君のことをさえまた恋しく思われ、身に沁んで薫を見ていた。

「取り返しがたい方のことも、今日は縁起を祝わねばなりませんからお話をさし控えたほうがよろしいでしょう」

と中納言は言ひ、ややしばらくして、また、

「今度おいでになるお邸の近い所へ、私の家もまたすぐに移転することになつていますから、夜中でも暁でもと能弁家がよく言いますように、何事がありましても私へ御用をお言いくださいましたなら生きておりますうちはどんなにもしてあなた様のために尽くそうと私は思つてゐるのですが、あなたはどう思つてくださいますか、御迷惑にはお感じになりませんか。出すぎたお世話はいけないかもしれぬのですから、自分の考えをよいこととばかり信じても行なえませんから、お尋ねするのです」

こう言つと、

「この家を永久に離れたくないように思われます私は、近くへ来る

などとおっしゃるのを承っていますだけでも心が乱れまして、何とお返辞を申し上げてよろしいかもわかりません」

所々は言おうとする言葉も消して、非常に物悲しく思っている様子が見えるところなどもよく大姫君に似ているのを知って、自身の心からこの人を他へやることになったとくちおしく思われてならぬ薫であったが、効かひのないことであつたから、あの以前のある夜のころなどは話題にせず、そんなことは忘れてしまったのかと思われれるほど平静なふうを見せていた。近い庭の紅梅の色も香もすぐれた木は、驚つぐいすも見すごしがたいように啼ないて通るのは、まして「月やあらぬ春や昔の春ならぬ」という歎きをしている人たちの心を打つことであろうと思われた。さつと御簾みすを透かして吹く風に、花の香と客の貴人のおいの混じって立つのも花橘はなたちばなではないが昔恋しい心を誘った。つれづれな生活の慰めにも人生の悲しみを紛らわすためにも、紅梅の花は姉君の愛したものであつたと思ふことが心からあふれて、

「#ここから2字下げ」

見る人もあらしにまよふ山里に昔覚ゆる花の香ぞする

「#ここで字下げ終わり」

と言うともなくほのかに絶え絶えに言うのを、薫はなつかしそうに自身の口にのせてから、

「#ここから2字下げ」

袖そでふれし梅は変はらぬにほひにてねごめうつるふ宿やことなる

「#ここで字下げ終わり」

と自作を告げた。絶えない涙をぬぐい隠して、あまり多くは言わぬ薫であつた。

「またこんなふうにして何のお話も申し上げようと思います」と最後に言つて立つて行つた。

薫は中の君の出京について心得ておくことを女房たちに言い、山荘の留守居にあの髭男の侍などが残るであろうことを思つて、ここに近い領地の支配をする者を呼び寄せて、今後もここへそれらの人の生活に不足せぬほどの物を届けさせる用も命じた。

弁は中の君の移る二条の院へ従つて行こうとも思わず、さまざまのことにあつて自身の長生きするのを恨めしい気がするし、人が見ても無気味な老女と思うであろうから、もう自分は存在しないものと思われようにと言つて、尼になつていた。そして引きこもつていた部屋から薫はしいて呼び出して、哀れに変わった面影のその人を見た。いつものように大姫君の話は薫はして、

「ここへは今後も時々私は来るつもりなのですが、知つた人がいなくなつては心細いのに、あなたがあとへ残つてくれるのは非常にうれしい」

など皆も言うことができず泣いてしまった。

「世の中をいといえばいとうほど延びてまいります命も恨めしゅうございますし、また私をどうなれとお思いになつて、捨ててお死になつたのかと女王様も恨めしゅうございまして、人生に対して片意地になつておりますのも罪の深いことと思われましてね」

と、尼になるまでの気持ちと弁の訴えるのも老いた女らしく一徹

に聞こえるのであったが、薫はよく言い慰めていた。非常に年は取っているが、昔の日に美しかった名残なごりの髪を切り捨て後する梳すきの尼額にがくになったために、かえって少し若く見え雅味があるようにも思われた。故人の恋しさに堪えない心から、なぜあの人の望みどおりに尼にさせなかったのであろう、そしてたならあるいは命が助かっていたかもしれないか、そして二人して御仏みほとけに仕え、ますますこまやかな交情を作っていくたかった、とこんなことさえ思われる薫には、弁の尼姿さえうらやまれてきて、身体からだを隠すようにしている几帳きちょうを少し横へ引きやって、親しみ深くいろいろな話をした。見た所はぼけたようではあるが、ものを言う気配けはいなどに洗練された跡が見え、美しい若い日を持っていたことが想像される。

「#ここから2字下げ」

さきに立つ涙の川に身を投げば人におくれぬ命ならまし

「#ここで字下げ終わり」

悲しそうな表情で弁の尼は言った。

「それも罪の深いことになるのですよ、そんな死に方をしては極楽へ行けることがまれで、そして暗ちゆう中有ちゆうに長ながくいなければならなくなるのもつまりませんよ、いつさい空くうとあきらめるのがいちばんいいですよ」

とも薫は教えた。

「#ここから1字下げ」

「身を投げん涙の川に沈みても恋しき瀬々に忘れしもせじ

「#ここで字下げ終わり」

どんな時が来れば少しでも心の慰むことが発見されるのだろう」と薫は言い、終わりもない哀愁をいだかせられる気持ちがあった。帰って行く気もせず物思いを続けているうちに日も暮れたが、このまま泊まっていくことは人の疑いを招くことになりやすいからと思ひ帰京した。

源中納言の悲しんでいた様子を中の君に語って、弁はいっそう慰めがたいふうになっていた。他の女房たちは楽しいふうで、明日の用意に物を縫うのに夢中になっていたり、老いて醜くなった顔に化粧をして座敷の中を歩き歩いていたりしている一方で弁は、いよいよ世捨て人らしいふうを見せて、

「#ここから2字下げ」

人は皆いそぎ立つめる袖のうらに一人もしほをたるるあまかな

「#ここで字下げ終わり」

と中の君へ訴えた。

「#ここから1字下げ」

「しほたるるあまの衣に異なれやうきたる波に濡るる我が袖

「#ここで字下げ終わり」

世間へ出て人並みな幸福な生活が続けていけるとは思われないのだから、ことによってはここをまた最後の隠れ家として私は帰って

来るつもりだから、そうなればまたあなたに逢うこともできますが、しばらくでも別れ別れになって、寂しいあなたの残るのを捨てていくかと思うと、私の進まない心はいっそう進まなくなります。あなたのような姿になった人だっても、絶対に人づきあいをしないものではないようなのですからね、そうした人と同じ気持ちになって、時々私の所へも来てください」

などと女王はなつかしいふうに話していた。大姫君の使っていて、なお用に立つような手道具類は皆この人へのこしておくことに中の君はした。

「だれよりも深くお姉様を悲しんでいてくれるあなたを見ると、深い縁が前生からあったのではなかるうかと、こんなことも思われて特別なものにあなたが見えます」

こんなことを言われて、いよいよ弁の尼は子供が母を恋しがって泣くように泣く。自身の気持ちをおさえる力も今はないように見えた。

山荘の中はきれいに片づき、荷物はできて、中の君の乗用車、その他の車が廊に寄せられた。前駆を勤める人の中に四位や五位が多かった。兵部卿ひょうぶきやうの宮御自身でも非常に迎えにおいでになりたかったのであるが、たいそうになってはかえって悪いであろうと、微行の形で新婦をお迎えになることを計らわれたのであって、心配には思召しめされた。源中納言のほうからも前駆を多人数よこしてあった。だいたいのことだけは兵部卿の宮が手落ちなくお計りになったのであるが、こまごまとした入り用の物、費用などは皆一薫かおるが贈ったのであった。

出立が早くできないでは日が暮れると女房らも言い、迎えの人た

ちも促すために、中の君はあわただしくて、今から行く所がどんな所かと思うことで不安な落ち着かぬ悲しい気持ちを抱きながら車上の人になった。大輔たゆうという女房が、

「#ここから2字下げ」

ありふればうれしき瀬にも逢あひけるを身を宇治川に投げてましかば

「#ここで字下げ終わり」

と言って、笑顔えがおをしているのを見ては、弁の尼の心境とはあまりにも相違したものであると中の君はうとましく思った。もう一人の女房、

「#ここから2字下げ」

過ぎにしが恋しきことも忘れねど今日はた先まづも行く心かな

「#ここで字下げ終わり」

この二人はどちらも長くいた年寄りの女房で、皆大姫君付きになるのを希望した者であったが、利己的に主人を変えて、今日は縁起のよいことより言ってはならぬと言葉を慎んでいるのもいやな世の中であると思う中の君はものも言われなかった。道の長くてけわしい山路であるのをはじめて知り、恨めしくばかり思った宮の通い路の途絶えも無理のない点もあるように思うことができた。白く出た七日の月の霞かすんだのを見て、遠い路みちに馴なれぬ女王にょおうは苦しさに歎息たんそくしながら、

「#ここから2字下げ」

ながむれば山より出でて行く月も世に住みわびて山にこそ入れ

「#ここで字下げ終わり」

と口ずさまれるのであった。変わった境遇へこうして移って行ってそのあとはどうなるであろうとばかり危ぶまれる思いに比べてみれば、今までのことは煩悶の数のうちでもなかったように思われ、昨日の世に帰りたくも思われた。

十時少し過ぎごろに二条の院へ着いた。まぶしい見も知らぬ宮殿の幾つともなく棟の別れた中門の中へ車は引き入れられ、そのころもう時を計って宮は待っておいでになったのであったから、車の所へ御自身でお寄りになり、夫人をお抱きおろしになった。夫人の居間の装飾の輝くばかりであったことは言うまでもないが、女房の部屋部屋にまで宮の御注意の行き届いた跡が見え、理想的な新婦の住居が中の君を待っていたのである。

宮がどの程度に愛しておいでになるのか、妾としてか、情人としての御待遇があるかと世間で見っていた八の宮の姫君はこうしてにわかには兵部卿親王の夫人に定まってしまうたのを見て、深くお愛しになつてに違いないと世間も中の君をりっぱな女性として認め、かつ驚いた。

源中納言はこの二十日ごろに三条の宮へ移ることにしたいと思い、このごろは毎日そこへ来ていろいろな指図をしていたのであるが、二条の院に近接した所であったから、中の君の着く夜の気配をよそながら知りたく思い、その日は夜がふけるまで、まだ人の住まぬ新築したばかりの家にとどまっているうちに、迎えに出した前駆の人

たちが帰って来て、いろいろ報告した。兵部卿の宮が御満足なふうで新婦を御大切にお扱いになる御様子であるということを知り、うれしい気のする一方ではさすがに、自身の心からではあつたが得べき人を他へ行かせてしまったことの後悔が苦しいほど胸につのつてきて、取り返し得ることはできぬものであるかと、こんなうめきに似た独言も口から出た。

「#ここから2字下げ」

しなてるやにほの湖に漕ぐ船の真帆ならねども相見しものを

「#ここで字下げ終わり」

とあの夜のこととでちよつと悪く言つてみたい気もした。

左大臣は六の君を兵部卿の宮に奉るのを、この二月にと思つていた所へ、こうした意外な人をそれより先にとつて夫人として堂々とお迎えになり、二条の院にばかりおいでになるようになったのを見て、不快がつているということをお聞きになつては、また氣の毒にお思われになる兵部卿の宮は手紙だけを時々六の君へ送つておいでになつた。装着の式の派手に行なわれることがすでに世間の噂にさえなつていたので、日を延ばすのも見苦しいことに思われて二十幾日にその式はしてしまつた。一家の内輪どうしの中の縁組みは感心できぬものであるが、薫の中納言だけは他家の婿に取らせることは惜しい、六の君を改めてその人に娶らせようか、長く秘密にしていた宇治の愛人を失つて憂鬱になつておられるからでもあるからと左大臣は思つて、ある人に薫の意向を聞かせてみたが、人生のはかなさを実証したことに最近一逢つた自分は、結婚のことなどを

思うことはできぬと相手にせぬ様子を聞き、どうして中納言までが懇切に自分のほうから言いだしたことに気のないような返辞をするのであろうと、一時は恨んだものの、兄弟ではあっても敬服せずにおられぬところの備わった薫に、しいて六の君を娶らせることは断念した。

陽春の花盛りになって、薫は近い二条の院の桜の梢を見やる時にも「あさぢ原主なき宿のさくら花心やすくや風に散るらん」と宇治の山荘が思いやられて恋しいままに、匂宮をお訪ねしに行った。宮はおおかたここにおいでになるようになって、貴人の夫人らしく中の君も住み馴れたのを見て、その人の幸福を喜びながらも怪しいあこがれの心はそれにも消されなかった。ますます中の君が恋しくなっていく。しかし本心は親切で、中の君を深く庇護しなければならぬことを忘れなかった。

宮と薫は何かとお話をし合っていたが、夕方に宮は御所へおいでになるうとして、車の仕度がなされ、前駆などが多く集まって来たりしたために、客殿を立て西の対の夫人の所へ薫はまわって行った。山荘の寂しい生活をしていた時に変わり、御簾の内のゆかしさが思われるような、落ち着いた高華な夫人の住居がここに営まれていた。美しい童女の透き影の見えるのに声をかけて、中の君へ消息を取り次がせると、褥が出され、宇治時代からの女房で薫を知ったふうの人が来て返辞を伝えた。薫は、

「始終お近い所に住んでおりながら、何と申す用がなくて伺いますことは、なれなれしすぎたことだとかえってお咎めを受けることになるかもしれないと御遠慮をしておりますうちに、世界も変わってしまいましたようになりました。お庭の木の梢も霞越しに見えてい

るのですから、身にしむ気のする時も多いのです」

と取り次がせた、物思わしそうにしている薫の姿の気の毒なのを中の君は見て、あの人が惜しむどおりに大姫君が生きていて、あの人の所に迎えられておれば、近い家のことで、始終消息ができ、花鳥につけても少し愉たのしい日送りができたであろうがなどと、姉君を思い出すと、忍耐そのものが生活であったような宇治の時のほうが、かえって悲しみも忍びよかったように思われ、故人の恋しさのつるばかりであった。女房たちも、

「世間の習いどおりに、うとうとしくあの方様をお扱いになつてはなりません。今こうおなりあそばしてからこそ、あの方様の御親切の並み並みでないことがおわかりになった御感謝の心をお見せあそばすべきでございます」

こう言つて勧めているのであつたが、にわか自身で話に出るようなことはなお恥はずかしくて中の君が躡たづ躡づをしている時に、お出かけになろうとする宮が、夫人に言葉をかけるためにこの西の対へおいでになつた。きれいなお身なりで、化粧も施され、見て見がいのある宮様であつた。薫のこちらに来ていたのを御覧になり、

「どうしてあんなによそよそしい席を与えていらつしやるのですか。あなたがたの所へはあまりにしすぎると思うほどの親切を見せていた人なのだからね。私のためには多少それは危険を感じべきことではあつても、あんなに冷遇すれば男はかえつて反発的なことを起こすものですよ。近くへお呼びになつて昔話でもしたらいいでしょう」

こんなことを夫人に言われたのであるが、また、

「しかしあまり気を許して話し合うことはどうだろう。疑わしい心

が下に見えますからね」

ともお言いになったので、どうすればよいかわからぬようなめんどうさを中の君は感じた。自分にもまれな好意の寄せられたのを知っているのであったから、今の身になったからといって、うとうとしくできるものでない、あの人も言うように、姉君の代わりと見て、感謝している自分の心をあの人に見せうる機会があればよいと願っているがと中の君は思うものの、さすがに言がとやかくと嫉妬しゅうたをあそばすのは苦しかった。

底本：「全訳源氏物語 下巻」角川文庫、角川書店

1972（昭和47）年2月25日改版初版発行

1995（平成7）年5月30日40版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月10日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2004年3月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。